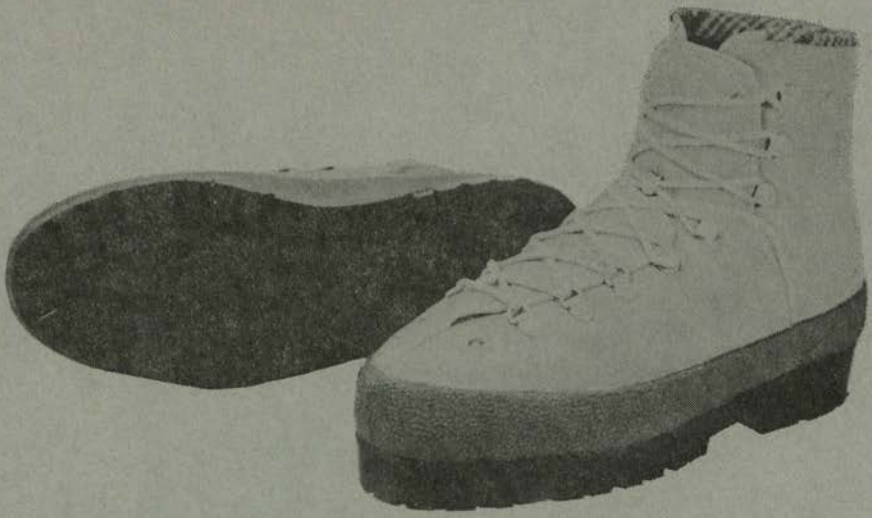
山岳

LXIV



きゃらばん
くらいま

サイズ　24.0～27.0cm
価格　¥3,400

クライミングの技術と用具は　相携えて共に進歩と発展をつづけ　かっては登攀不能と思われた岩壁も　次第にクライミングの練磨の場として親まれその範囲をひろめました。クライミング用の靴も　それに適応する特殊な性能を具備することを大切な条件として成長しました。

新発売の**クライミング・シューズ**は　**キャラバンシューズ**が革製登山靴に対し　実用性と簡易を特性として生れたように　斯界権威者の貴重な体験に基く助言を迎ぎ　現地試験による試作と改良を重ねてこの段階に到達しました。

底は　十分かたく　トウ　ステップを確実にし　足裏の面積に近い細型で**胛布**に選んだ厚織り綿布と　多彩なチェック柄の**裏布**との間には　**底のかたさ**を助成する側面芯ゴムを　又全面的にスポンヂを挿入して打撲や保温に備えました　何れも岩のぼりの適格なバランスを主眼とした　**設計**であります**布の色**は温雅なバハマ　ベイジュ　黒底と胛布を区切る巾27ミリの　**補強ベルト**はイエロー　オーカー(茶褐色)　これに**金具**や**紐**も同系色に調和して個性豊かな**クライミング・シューズ**が誕生しました。

昨今　登山靴も革製と　**キャラバン**と二足の時代だといわれます。現地試験でこの　**クライミング・シューズ**は　登り降りの坂路にも　藪歩きにも快適であることが認められました。無雪期には勿論　広範囲に活用下さらんことをを御願いし又御披露申し上げます。

キャラバン マット
カネカロン シュラフ

株式会社　山晴社

東京都千代田区神田駿河台２の１１　ＴＥＬ(291)４１２１～４
大阪市西区京町堀１の68　五月ビル内　ＴＥＬ(441)４４３１・５２０４

山岳

第六十四年

山岳　第六十四年　目次　（一九六九年度）

グリーンランド氷床の横断（一九六八年）……池田錦重…一
パタゴニア氷床横断（一九六八―九年）……阪上秀太郎…三
富士山と私……松方三郎…三五
回想の日高山脈……相川修…四四
ランガール登頂（一九六八年）……立花種則…六〇
イストル・オ・ナールとジロ山群
―トルコからヒマラヤへ―……佐藤京子…六九
シャー・イ・アンジュマン登頂（一九六八年）……高木泰夫…八〇
アルゼンチン中部アンデスの登山……川上隆…八八
コルディエラ・キムサクルスとイリマニ縦走
―ボリビア・アンデス―（一九六八）……阿部重男…一〇二
メルセダリオ南壁（一九六八年）……吉田三郎…一〇九
マーカス・ベーカー峰登頂（一九六八年）……青山学院大学体育会山岳部…一一七
パンジャブ・ヒマラヤ
―バランザール峰試登―（一九六八年）……吉野勲…一三

日印合同登山（一九六八年）……宮崎英子…一三
羅臼岳と硫黄山の原名について……早川禎治…一三
追悼
近藤茂吉氏（成瀬岩雄・田辺主計・山崎安治）、武山良次氏（編者）
山根雅男氏（川崎精雄）、太田清吉（耳動子）氏（川崎精雄）……一四九
稲田豊八氏（佐藤金一）
（山渓記・日本登山史・近代日本登山史・雪山・藪山・キンヤンキッシュ一九六五・遥かなるヒマラヤ・ヒマラヤ登攀史・パタゴニア探検記・"George Mallory"・"Mountaineering"・"The Hard Years"）……一五四
図書紹介
会務報告（一九六八年七月―一九六九年六月）……一五五
英文梗概……巻末一
イストル・オ・ナールの山座同定……田中栄蔵…巻末三
海外登山年表＝一九六八年＝……松田雄一・中島寛編…巻末三七

写真

グリーンランド氷床に関するもの六枚
パタゴニア氷床に関するもの四枚
ランガールに関するもの二枚
ジロ山群及びイストル・オ・ナールに関するもの六枚
シャー・イ・アンジュマンに関するもの三枚（内折込み一枚）
アルゼンチン中央アンデスに関するもの六枚
キムサクルス及びイリマニに関するもの六枚
メルセダリオに関するもの四枚
マーカス・ベーカーに関するもの二枚
バランザールに関するもの四枚
名誉会員　近藤茂吉氏、武山良次氏、山根雅男氏、太田清吉（耳動子）氏、稲田豊八氏
イストル・オ・ナール山座同定に関するもの六枚

地図

グリーンランド一九六八年横断隊ルート図、グリーンランド略図
エクスマウス川付近略図、リソ・パトロン付近略図
パタゴニア、リソ・パトロン付近略図
ウスコ氷河付近概念図、ウスコ氷河南岸の山のスケッチ、ウスコ氷河北岸の山のスケッチ
ジロ山群（トルコ）略図、イストル・オ・ナール概念図
シャー・イ・アンジュマン概念図
デアマンテ湖周囲の山々略図、セロ・ネグロ及びセロ・マルモレイホ略図
キムサクルス概念図
メルセダリオ附近の図
マーカス・ベーカー峰ルート図
知床日記に挿入された地図、東西蝦夷山川地理取調図における知床、
北海道庁地理課発行知床地図
イストル・オ・ナール山座同定に関する地図及びスケッチ六枚

表紙カット（つばめおもと）　山下一夫

グリーンランド氷床の横断（一九六八年）

池田錦重

はじめに

我々の極地の山々への関心は、初期の南極観測隊に参加した仲間の中で、早くから語られていた。しかし、世界の屋根と呼ばれ、地球上の高峰が集っているヒマラヤへの関心は、それ以上に我々の仲間の興味をとらえ、一九六二年には、桜門山岳会および日本大学山岳部の最初の計画として、登山隊をネパール・ヒマラヤに送った。その後、熱病のようにいくつかの計画が生れてはつぶれ、生れてはつぶれしていた。そして、これまでくすぶり続けていたものが本格的に火となり、燃え出した頃には、ヒマラヤの国々は複雑な政治事情のため、登山活動は困難となり、出来なくなった。このことは、それまでヒマラヤ一辺倒であった我々の視野を拡げ、良い意味で将来の海外登山についての認識を、新たにすることが出来たようである。それからしばらくの間、地球上の様々な未知の山岳を求めて、地図の上をさまよわねばならなかった。

結局、高さこそおとるが高緯度に位置する島、グリーンランド、バッフィン島、スピッツベルゲンなど、自然条件

の最も厳しい極地の山々が、格好の目標としてとりあげられ、中でも当時の『アルパイン・ジャーナル』などで、外国隊の活動が盛んに紹介されていたグリーンランドに注目した。この島は既に紹介されている通り(『山岳』第六十一年および第六十二年参照)、日本の約六倍の広さを持つ世界最大の島で、その面積の八割は厚い氷床におおわれ、その中央部は標高三二〇〇メートルにもおよぶ巨大な氷床である。露岩地帯は、わずか島の東西南北の沿岸部にあり、この地帯は内陸の氷を押えるように山岳帯となり、聳えている。また、この沿岸部は大きな半島、散在する大小さまざまの島、内陸に深く切れ込んだフィョルドなどの地形と、北極海から流れ出した流氷により、一年中接近の困難な場所が多く、遠征隊の活動をさまたげ、まだ多くの未知な山岳や未踏の氷床が残されていた。

我々のこの島に対する最初の計画は、東海岸の未踏の氷床の横断行から未知な山岳を探り、登山するということであった。しかし、まだグリーンランドの地理について十分な知識もない我々は、たまたま地図上で拾い上げたグリーンランド第二の山フォーレル峰(三三六〇メートル)が、一九六三年にスコットランドの大学隊により試みられ失敗したことを知り、なにはともあれ、この地域に目標を絞ってみることにした。

一九六五年は最終的にこの山岳帯の踏査と、この最北端にあるフォーレル峰を初めとする山々の登山となった。そして最後まで心配された日本からグリーンランドまでの交通機関も、この年ソ連のシベリヤ鉄道が一般のツーリストに解放され、このルートで一度コペンハーゲンに出て、そこから船でグリーンランドに向った。グリーンランドでは、フォーレル峰山塊までの旅行に使う現地の犬橇が雇えず、我々だけでフォーレル峰に向ったが、この不案内な氷河の旅は予想以上に長引き、また連日危険なクレバスや軟雪、悪天候に悩まされ苦しい旅となり、我々が奥地での登山にかけた情熱と意欲とは、すべて殺ぎとられるところとなった。奥地では二回にわたり行ったフォーレル峰の登攀も失敗に終り、迎える冬に追われるように帰途についた。試登のさいフォーレル峰の一角から眺めた内陸氷床の未知の拡がりは、我々の横断計画に強い印象を与えた。

いままで我々が馴れ親しんできた日本の山や、氷河にけずられた急峻なアルプスの山、ヒマラヤの重量感あふれた山々が動的で安定感にあふれたものであったのにくらべ、この島の中央部に向い、ゆるやかに盛上っていく巨大な氷床の印象は、かつて想像したこともない巨大な山岳にも思えたし、子供の頃海辺にたって、水平線のかなたに消えゆく船を、羨望と不安の入り交った気持で眺めた海にも似ていたし、白い大きな雪原のうねりは、酷寒の砂漠をも連想させ、静的な不安定の要素を多くもっていた。

翌一九六六年は前年と同じ計画で隊を派遣した。フォーレル峰山麓までの行程は知った道とはいえ、やはり苦しさの点では昨年経験した以上のものがあった。しかし、それはあくまで肉体的なもので、未知の世界から来る圧迫感ではなかった。奥地でのフォーレル峰を初めとした登山と、内陸氷床の境にそった旅行は、天候に恵まれ成功裡に終って帰国した。

一九六七年は、内陸氷床の横断計画が会の正式な計画としてとりあげられ、準備が進められた。その間、二名の仲間を北半球最北の氷島スピッツベルゲンに送った。我々にとり、この一年間にわたる氷床横断のための準備期間は、長すぎるということはなかった。この氷床で行われた探検記録の整理、内陸氷床の気象、橇の帆走方法、フィヨルドを下るゴムボートのテスト、地文、天文航法の準備など、新らたに色々とやらねばならぬことが多すぎた。

計画の第一の目的は、東グリーンランドのアンマサリックからフォーレル峰を経由し、西海岸のヤコプスハウンまで一〇〇〇キロメートルを橇とスキーで横断することにあった。この徒歩による横断は、一八八八年にノルウェーのナンセンが初めて横断して以来、一九六五年に英国のシンプソン夫妻が、幅六〇〇キロメートルの距離を横断し、今度で三度目である。

第二の目的は、支援隊がフォーレル峰山麓までサポートしたあと、一九六六年に初めて歩いた山岳地域と、そのさらに東に横たわる未踏の山岳を探り、登山と共に一九三三年に作られた現在の地図に対し、正しい地形の確認をする

ことにあった。この第二の目的を遂行するために、計画はさらに大きくなり、今後の極地での活動も考え、東海岸山岳帯の輸送の一部に、現地の犬を使うことにした。春には三名の先発隊を現地に派遣して、エスキモー犬の調達と訓練、さらに山岳帯へ容易に入れるルートを見つけ、山岳帯の中にできるかぎりの燃料と、犬の食糧のデポを作ることにした。準備は一九六五年と六六年の隊員を中心に進められ、それに新しい仲間を加えて構成した。

隊長　池田錦重　ナビゲーション
五月女次男　カメラ
菅原省司　気象・雪氷
副隊長　小栗孝康　測量
長島宏　装備
三好勝彦　食糧
小島一男　犬橇
嵯峨野宏　装備・衛生
多和田忠　気象・ナビゲーション
中村進　食糧

春の犬橇旅行　五月女次男

五月一三日、五月女、三好、小島の三人は、久し振りに晴れ上がったコペンハーゲンをあとにした。しかし、コペンハーゲンでの春の犬橇旅行についての、全ての準備が終ったわけではなかった。この時期をのがしたら、東海岸の氷は融け、犬橇旅行は不可能になり、多くの準備が水の泡になるからである。一四日には早くも、東グリーンランド

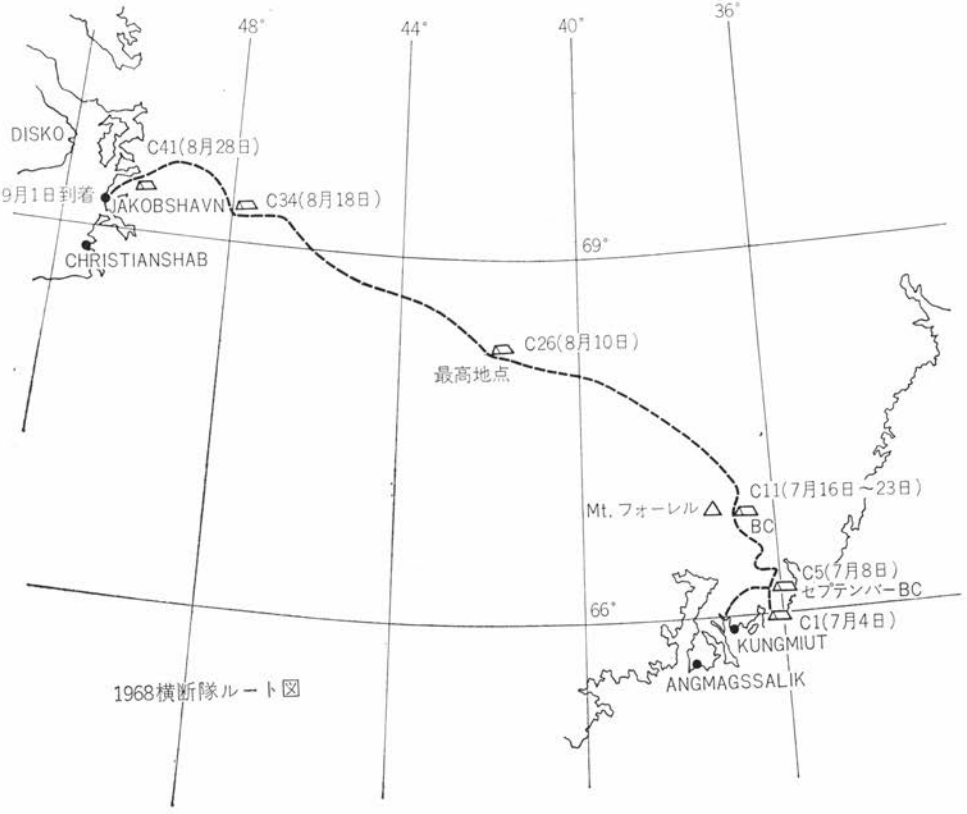
唯一の飛行場クルスークに降りたった。この地での我々の目的は、橇犬の調達と訓練、さらに横断に使う燃料を山岳地帯にデポし、海岸から山岳地帯に入る簡単なルートを見つけることにあった。しかし、現地についてみると、我々の日本で得た犬と犬橇に関する知識は、いってみれば単なる知識でしかなかった。重要なのは、カナダでもアラスカでもない、東グリーンランドの犬橇の方法を学ぶことであった。

我々は、この飛行場から九〇頭の犬の大編成隊で、東グリーンランド随一の町アンマサリックに向った。そこからさらに三組の犬橇に分乗し、我々の横断準備を整えるクンミュートの部落に行った。

五月二三日、デンマーク人の学校の先生と、病気でねているグリーンランダーから一組ずつの犬橇チームを借り、初めて犬橇操作の練習を兼ね、山岳地帯の奥へ荷物のデポをするために出発した。隊の先頭には、若いグリーンランダーのヨスバを雇い、二台目は隊員小島の操作で二五〇キログラムの荷物を積みこんだ。天気はこのところ非常に悪く、橇は軟雪の中を一九六五、六六年と同じルートをとり、最後はスイス隊が以前に使ったコル・デ・ファントムを越え、セプテンバー氷河に降り、荷物をモレーンの上にデポした。そして、すぐ引返し、犬は走り続け、翌日の夕方クンミュートに帰着した。この旅行から帰えってからの十日間は、フィョルドの氷を融かす悪い雨天が続いた。

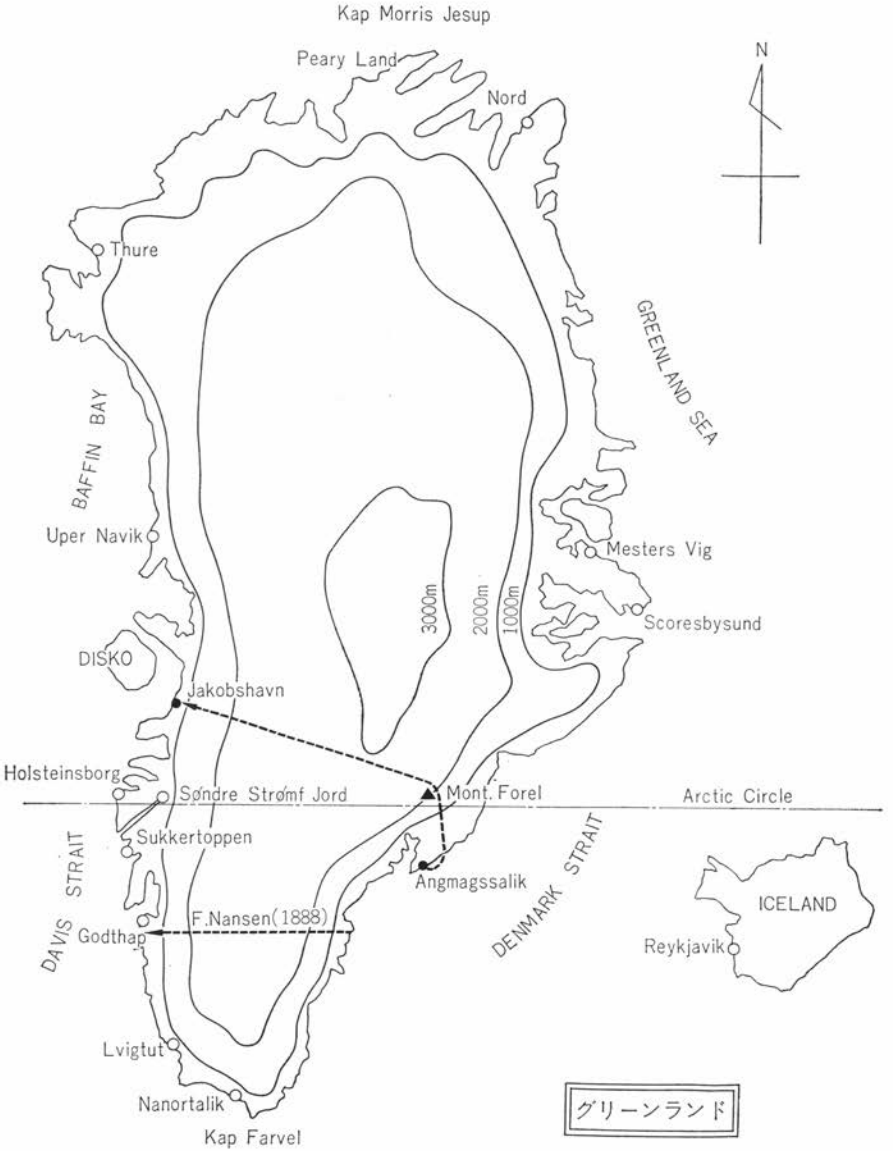
六月に入ると夏がはじまり、早急に十頭のエスキモー犬を購入し、さらにムチの練習や食糧の与え方を学び、犬の締具なども作った。もう、犬橇でフィョルドの上を走ることは危険で出来なくなり、氷の融けるのを待ち、ボートで上陸地点まで行く方法しかなかった。

六月一六日、長い雨も止んだ。翌日氷の融けたフィョルドをグリーンランダーのボートで出発した。今度は我々だけで、新しく調達したばかりの一組の犬橇チームを使い、デポを補強するために向った。氷河上の雪は軟らかく、犬達は初めてチームを組んだばかりで歩調があわず、前進に非常な苦労を強いられた。しかし天気には恵まれ、新しい上陸地点からステファン氷河、クヌード・ラスムセン氷河を経て、一九日にはセプテンバー氷河につき、燃料と犬の



1968横断隊ルート図

グリーンランド氷床の横断 (1968 年)



食糧をデポし、二一日にはセルミリガックの部落を経由して、クンミュートに帰えって来た。これによって犬の食糧など二百キログラムのデポを完了し、本隊のための新ルートを開拓し、犬橇の利用が可能となった。

東海岸山岳の縦断

六月一日、ソ連経由で日本を出発した我々後発の七名は、一九日に早くもコペンハーゲンからジェット機で北大西洋を飛び、西グリーンランドのサンドレ・ストロームフィョールに着いた。翌日ここで小型飛行機に乗りかえ、内陸氷床を飛びこえ、東グリーンランドのクルスークに飛来した。飛行場にはグリーンランダーが迎えに来てくれ、すぐ彼のボートで、出発の準備をするクンミュートの部落に行った。先発隊の五月女達は犬橇で山岳地帯に出かけていなかったが、二一日やっと二度目の犬橇旅行を終えて部落に帰って来た。ここで初めて全員が顔をそろえることになった。コペンハーゲンから別送で送った荷物は、船が沿岸の流氷の状態が悪くて遅れ、二九日やっとアンマサリックに到着し、この日着いたばかりのパーラ、ダンから早速荷物を受けとりクンミュートに帰えり、ここで出発の準備をした。

七月三日正午まで橇の組立や、荷物の整理に過したあと、夕方二隻のボートに分乗し、ここから五〇キロ程北にあるセルミリガックの奥の上陸地点に向った。早朝フィョルドにまだ霧が深いなかを、我々十名と新しい仲間となった十匹のエスキモー犬と荷物とが、無人の砂浜に上陸した。すぐ海岸からツメ跡も生々しい、後退した氷河のモレーンの上を三十分ほどたどり、別のフィョルドに落ちている氷河の上に出た。四回におよぶ荷上げのあと、この氷河上にキャンプして、氷河の行進が可能となる夕方まで仮眠をとった。

日が谷におちると三台の橇で出発した。一台の犬橇と二台の人曳き橇である。明け方この無名の氷河を遡ぼり、峠のつめは荷を背負って越え、次の氷河に下ったところでキャンプした。この日早くも橇犬の足を荒れた氷河の表面で

痛め、用意した靴をはかせた。

翌日さらに別の氷河をつめ、二つの小さな峠を越えたあと、ステファン氷河を下る。三好の話だと、春はこの氷河を流れるモレーンに沿って下ったというが、いまはだいぶ大きなクレバスが口を開け、氷河中央部の低めを下る。クヌード・ラスムセン氷河の手前でルートをあやまりクレバス帯に突込み、おまけに太陽が高くなり軟雪になったので、キャンプした。犬橇隊は別行動で昨日一緒に運べなかった荷物をとりに行き、あとから追ってきたが、やはり途中で軟雪となり、クレバスに突込んだところで荷を置いて空橇で到着した。

七日は人曳き橇で昨日犬橇が残した荷物をとりに行き、すべての荷を三台の橇にのせ荒廃したクヌード・ラスムセン氷河におりた。ここで三本のモレーンと川にぶつかり荷を背負って渡り、この氷河を遡行し、十五キロメートルほど進んだところでキャンプした。朝食後、われわれの隊で初めて三〇代になった菅原の誕生祝いをしたあと、菅原が氷の結晶をクレバスのなかから採集したということで、全員で氷漬けにしてやる。翌日この氷河の源流を進み、新雪でおおわれたセプテンバー氷河のデポに着いた。ここで一日の休養をとり、奥地に向う荷物の整理をする。

七月九日、軟雪のためスキーをつけ六時間ほどこの氷河を遡ったあと、ハーベシ氷河に入り、この氷河をつめて、一三五〇メートルの峠でキャンプした。毎日すばらしい天気に恵まれ、早いスピードで進んでいるが、このところ犬に疲れが見えはじめ、さらに最初の日に痛めた足がさらに悪くなり、帆布で作った靴も一日歩くと破れて使えなくなり、このキャンプでも食糧を入れたキャンバス・バッグをつぶして、新しいものを二〇個ほど作ってやったが、修理用の糸も手持が少なくなり、行く先き心細いかぎりである。

翌日この峠を左手にトラバースして、新しい氷河に入り、この沿岸山岳のルート上で一番高い峠、エスキモー・パス（一四一〇メートル）に達したあと、ミドガードの氷河があまりにも後退と荒廃がはげしいのでさけ、直接フランス氷河に降りるルートをとることにした。峠の直下は氷瀑になっており、橇の滑走部に纏シールをかけ、一台ずつ降ろ

す。最近の我々は峠の近くでばかりキャンプし、本当にうまい水にありついていないので、今日はフランス氷河に出る手前の池のところでキャンプした。翌日フランス氷河に降り、この氷河をさかのぼり、ちょうどミドガード氷河がぶつかるところで、クレバス帯を抜けキャンプした。

七月一二日、久しぶりに天気が崩れたが、ミドガード氷河の方に晴間が見えだしたので、出発の準備をする。フェムステルネンに入るころから雪も堅くなった。今年は雨がまだ少ないので、雪が多く残って歩きやすい。二、三メートルの小川を五本ほど渡り、パドル帯を抜けたあと、大きな川にぶつかり行詰ったところでキャンプした。翌日川を渡り、いままで我々が「雪の道」と呼んでいたルートは荒れはてて使えず、パリ氷河から流れてきたモレーンにそって、ケルビン山麓まで進み、ここからパリ氷河に入り込んだ。一時回復したかに見えた天気もまた崩れ、スキーをつけてもヒドン・クレバスが危なくて進めず、竹ざおでゾンディーレンしたあとキャンプした。翌日は雪で停滞となったが、一日中犬の靴作りでいそがしく、とうとう糸がなくなり、ナイロンロープをほどいて使った。

七月一五日、雲は多いが天気は回復にむかい、パリ氷河を遡ぼり、フォーレル山塊にぶつかったところで右に曲り、テーブル・マウンテンの裏手の氷河上にキャンプした。上陸地点から十三日目であった。ここで我々は横断に向うための休養と最終的な隊員の決定、さらに前回の登山で登れなかったアバンガーデン最高峰（一三二四メートル）の登山をするため、一週間ほど滞在した。犬もだいぶ疲れており、なかの一匹は行動中疲労が激しく曳けなくなり、橇の上に乗せてキャンプ地まで来たが、もう食事は受けつけず夜の冷え込みで凍死した。他の犬達も疲労が激しく、足が相当傷ついているので赤チンをつけたり、薬を与えてやる。我々のつれて来た犬達は五歳から七歳までの老犬ばかりで、すでに盛りを過ぎ、曳く力は決して強いものではなかったが、一日二〇〇グラムという少ない乾魚で毎日動いた。そのため日一日と痩せてゆき、彼らのした大便まで残さず食べていた犬もあり、その生活力の強さは驚くほかなかったが、我々がここでこの犬達にしてやりたいことは、早く食糧の沢山ある海岸のデポまでもどり、こうした状態

から解放してやりたいことであった。

アバンガーデン山塊での登山

一日の休養のあと、長島、三好、嵯峨野の三名がアバンガーデン山塊の最高峰を北側から偵察する。小栗、菅原、中村は、この山塊の一番東にある無名のヌナタックに登り帰えってきた。

翌一八日は池田、小栗、長島、三好、嵯峨野の五名で、前日の最高峰を登攀することにした。午前一時に起き天気を見るが、曇っているので出発を延期した。三時頃いくらか晴間が見えてきたので天幕をあとにした。北面の岩稜の下でスキーをデポしたあと、急な雪の斜面を登りコルに出る。この後しばらく岩稜を思いおもいの格好で登り、岩稜が急となり、氷の出てきたところでアイゼンをつけ、ロープを結ぶ。小栗、嵯峨野の組が先頭で、池田、長島、三好の組がそのあとに続く。地図では、この山の頂は稜線の一番南にあるが、昨日の多和田の測量では一番北よりの雪のピーク、すなわち岩稜を登りきったところから少し雪稜をたどった雪のピークである。途中から氷のきつい斜面となり、アイスハーケンを打ち込みスタカットで登り、このあと数ピッチ岩場を登ると岩峰の上に出た。これから少し平らな岩稜をたどったあと雪稜となったので、岩場にリックサックを残し嵯峨野が先頭で登る。頂上には丁度午後三時三十分に着いた。やはり測量の通り、この雪のピークが一番高かったのでほっとする。頂からの眺めはすばらしいが、頂は雪庇となり、全員集まって休めるような所ではないので、周囲の写真をとったあと岩峰にもどって休む。下降はいくどか懸垂をくりかえしながら下り、十九時間ぶりにキャンプに帰えってきた。

休む暇もなく今度は菅原、小島、多和田、中村の四名が、昨年に続き再度フォーレル峰を登ることになり出発の準備をする。一九日午前一時三十分天幕を出るが、フォーレル峰南面から稜線につきあげたところで天気が崩れ、引き返してくる。翌日は天気も回復したので午後四時に出発し、二一日朝フォーレル峰頂上に四名でたち、二九時間の行

動のあとキャンプに帰えって来た。また、この日この地域を測量するため小栗、長島でパーフェクトに登り、池田、三好、嵯峨野は横断に使う食糧を、フォーレル峰東面の下まで橇で運んだ。

ここで予てから考えていた通り、西海岸に向い氷床を横断する隊と、犬橇を使いフォーレル山塊の東に広く横たわる、未知の山岳と氷河を踏査する隊の隊員を最終的に決定し、この山麓の生活を打ち切ることにした。

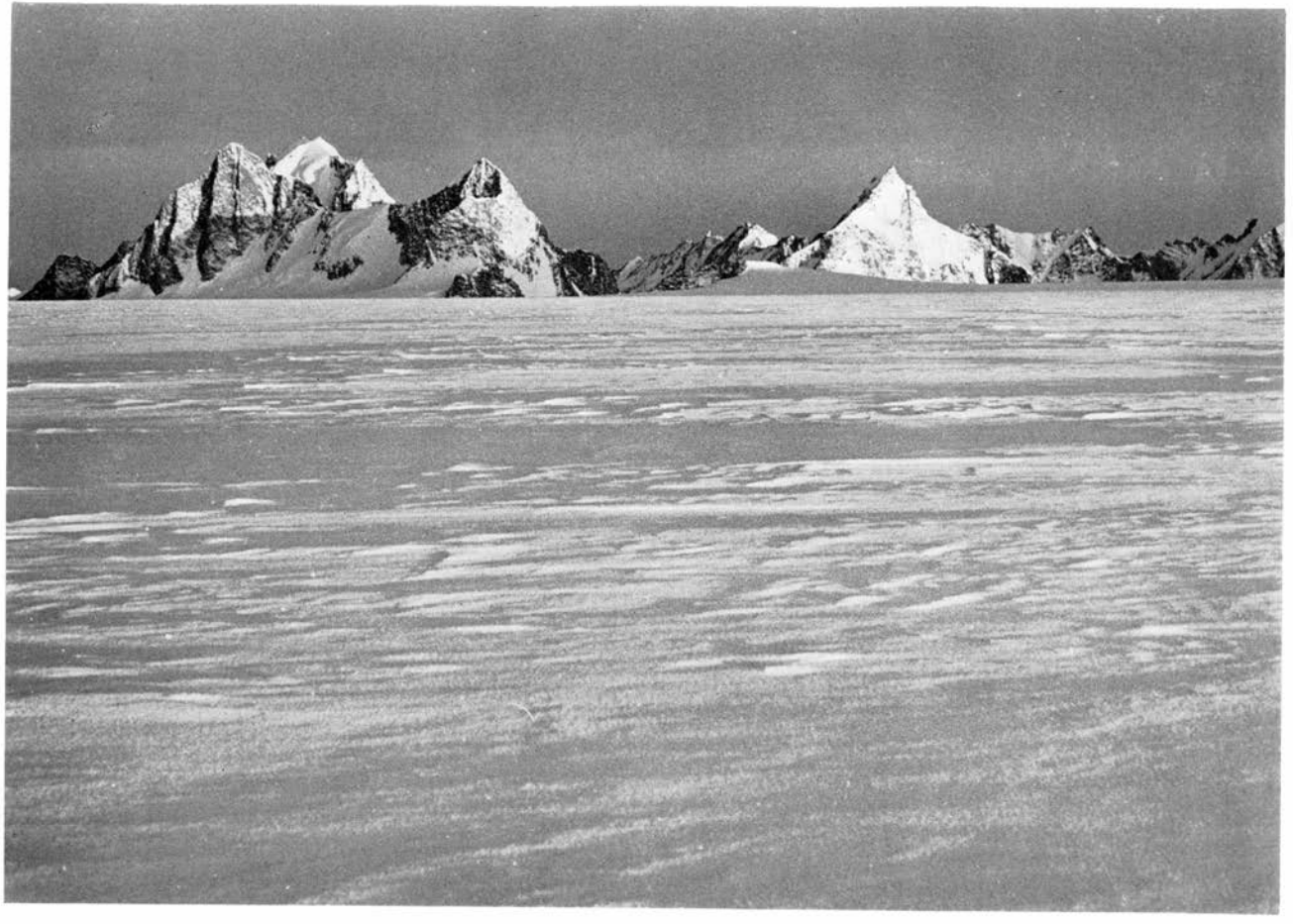
横断隊　隊長＝池田錦重、五月女次男、三好勝彦、嵯峨野宏、多和田忠。

犬橇隊　隊長＝小栗孝康、菅原省司、長島宏、小島一男、中村進。

氷床の横断へ

七月二二日、いよいよこの山麓を後にすることになったが、天気はこのところ悪く、今日も小雪がぱらついて気温も高いので出発は延期する。翌二三日午後九時、天気もいくらか回復して、谷間は日が影りだしたので出発することにした。雪面は昨日の降雪で軟らかく、スキーをはいて橇を曳く。ここ何日も停滞していたことと、氷床に出る最後の急斜面のため腰が定まらず非常に苦労する。犬橇隊は氷床の境まで一緒に行動したあと別れることにした。一昨日食糧をデポしたところで、二号橇に一五〇キログラムの荷物をのせ池田と多和田で曳く。フォーレル峰東面に回りこんだところで、また谷に層雲がわき雪となる。一九六六年に登ったシドベルグをすぎるころから風雪となり、パーフェクトとヨムフルーエンの間で風はさらに強まり、ちょうど十キロメートルほど進んだところでキャンプすることにした。風があまりに強いので、犬達には風よけ穴を掘ってやる。足の踵が化膿していた五月女は、今日の行動でいよいよ悪くなり、このキャンプではメスもないので、カミソリを焼き三センチほど切開し、膿を出した。このあと軟膏をつけアクロマイシンを与える。これからの行動が心配である。

七月二五日、どうやら雪もやんだが、まだ霧が深い。食事前に橇と犬達を掘り起して、お茶とビスケットの軽食で



氷床からアバンガーデン山塊の最高峰（3240m）（左）を見る
Avantgarden massif seen from the ice sheet. The highest point is the snow peak at left hand. (Greenland).

氷床のキャンプ
Our camp on the ice sheet.

氷床を行く、左背後はフォーレル峰
Going on the ice sheet, Mt. Forel in the left background.
(Greenland)

ヤコプスハウンへ最後の氷河を下る
Going down the last glacier of west coast for Jakobshavn

クヌード・ラスムセン氷河上のキャンプ
Our camp on the Knud Rasmussens Glacier.

ステファン氷河を行く犬橇
Going on the Stephans Glacier of the east coast, Greenland.

出発する。スキーをはき二時間ほど登りっぱなしで五キロメートルほど進み、ヨムフルーエン（二八五〇メートル）の脇の高台に出る。前方はセルミリック・フィョルドの方から南北に幅の広い浅い谷が入って来ており、この辺から地図もあてにならなくなり、この谷も出ていない。これから少し下りとなるが、休んでいるうちに、この谷に沿って層雲がはいのぼって来ると同時に風雪になった。濃霧のなかを下り出すが、少し下ると斜面は谷に切れおちている様子なので、高台に引き返しキャンプすることにした。天気はこのところ毎日悪い。内陸氷床での事故で、東海岸に引き返すときに使う非常食を、この附近のヌナタックにデポする予定でいたが、この調子では横断に日数がかかりそうなので持って行くことにする。そのかわり犬橇隊がセプテンバー氷河のデポに、五人・四日分の食糧を残して行くことになった。翌二六日、天気はいぜん風雪で動けないので停滞する。午後、雪が小降りになったので、嵯峨野と二人で谷に降るルートを調べ、そのあとヨムフルーエン（二八五〇メートル）に南東稜から登った。

七月二七日、曇り空であるが良くなってきたので朝五時に出発し、昨日見ておいた急斜面を下り、六キロメートルほど北に進んだ谷の中央で、犬橇隊と別れることにした。互の食糧・装備・行動予定・連絡方法など打ち合せを行ない、我々は北西、犬橇隊は北東の方向に直角に別れる。いくらか登りぎみの大きな起伏のある雪原を、午後二時頃まで進み、犬橇隊が見えなくなったところでキャンプした。翌日〇時三〇分に起き出発準備するが、外は息もつけないようなブリザードとなり、天幕の周囲にブロックを高く積み一日中寝ている。

七月二九日、小雪まじりの風が東から西にかけて吹いているが、天気は少し回復したので、初めて一号橇に帆を張り二台連結させて曳くことにする。背後にフォーレル峰の頭が少し見えかくれするほか、目標物が全然ないので、ただ磁石を見ながら北西に進路をとり、距離計は既に毀れて使えないので、時間を決めて歩き、三〇キロメートルほど歩いたところでキャンプする。二メートルの雪塚を建てたあと、晴間が見えてきたので多和田が第一回の天測をやる。

七月三〇日、今日はめずらしい快晴で、まだ日が高いのに気温はマイナス二〇度にもさがり、セーターの上にヤッ

ケを着て一生懸命に歩くが暖かくならない。靴は二重であるが一日中ちんちんしている。犬橇隊と別れて氷床に入った日から、一日なんじゅっぺんもあの不気味な雪面の割れるような、雪面全体が陥没するような音を聞いての行動で、そのたびにぞうっと背筋が寒くなる。九時ごろになると暖かくなり、マイナス五度まで昇り、スキーの裏に雪がつき、橇が重くなったのでキャンプする。まだフォーレル山塊が一日中見えている。朝方、フォーレルの上に蜃気楼が出ていた。

七月三一日、天気が崩れ、途中から風雪に変ったので一号橇に帆を張り、二号橇には天幕を帆に仕立て、強風を利用して進む。毎時六キロメートル位の速度で進む。一号橇の方は帆が大きいため、二度ほど帆の支柱を折られる。針路は北西にとるが、なかなか定まらず、三好を五〇メートルほど橇の先を歩かせる。しかし、いくら磁石を見て歩いても曲っていってしまうので、嵯峨野の発案で風の方向が一定なのを利用し、ビニール袋に空気を入れ、細長いひもをつけてとばし、それを目印にして歩く。今日は風雪で気温が高いので歩きやすい。朝九時頃になると雪も軟らかくなったので天幕を張り、炊事の仕度をしていると鳥の鳴き声がする。出てみると白い海鳥が降りてきた。しばらく羽根を休めるため天幕の周辺で遊んだあと、東海岸目指して飛んでいった。なんのためにここまで飛んできたのか不思議である。

八月一日、今日も期待に反して天気が悪い。少しでも先に進みたいため、午前一時、風雪のなかを出発するが、気温はマイナス九度と暖かく、橇のランナーが凍りついて滑らない。途中、五月女と三好のスキーのワイヤーが切れたし、二時間ほどで一キロメートルほどしか進まず、効率が悪いので天幕を張る。天気は眠るころから良くなり、多和田が天測をする。まだフォーレルの山塊から一〇〇キロメートル位しか離れていないらしい。夕方まで睡眠をとったあと、午後八時に食事をし、九時半に荷をまとめて出発する。風は全然ないが気温はすでにマイナス二二度に下り、雪質は良いのだが、今朝までの雪でラッセルがあり、スキーでも歩きにくい。五月女が雪原の落日をカメラにおさめ

ている。まもなく南東の水平線上に雲が出てきて、しばらくすると頭上まで高層雲が拡がり、風が出てきたので帆を張るが、そのうち風雪となる。朝方には気温がまた昇り、雪が深くラッセルとなる。我々は二時間の行動のあと十五分休み、橇の緩んだ紐を締めなおし、帆の調整をして、スキーの締具をなおしたりして、小便をすると出発である。その間気象係は温度や気圧を計っている。皆たいへん辛そうであるが、この天気で予定がだいぶ遅れているので、休むわけにはいかない。この後も連日悪天候のなかを行動する。息もつけないブリザードの日は停滞とした。あまり毎日の行動距離が伸びないので、食事は一日三食を二食に食い伸ばして行動するようにした。

一〇日、我々の日本で考えていたルート上の最高地点北緯六八度一五分、西経四二度に達しキャンプした。ここで西海岸に向う最後の判断を下した。食糧は、西海岸に出るための分もだいぶ食い込んではいるが、さらに食い伸ばせばどうにかなることと、全員の健康状態がたいへん良いので、西海岸に向うことにした。早速、薄日のなかで天測したあと、磁石の偏差を調べ、大きな雪のケルンを積んだあと、全員で記念撮影をした。今日までの行動は、よほどの悪天候でないかぎり、一日一〇キロメートルから二〇キロメートルの距離を進んだ。ここから橇の荷も一五〇キログラムと一〇〇キログラムに軽くなり、又ここから一日五〇メートルから一〇〇メートルの高度で下りとなるので、橇曳きも楽になると考えると、今後の天気はわからぬが、今日までの苛立った気持がおちついてくる。最高地点をあとにしてから天気も安定してきて、毎日背後からの順風を受け、連日七時間の行動で三〇から三五キロメートルと調子よく進んだ。橇の帆は風をとらえ、すばらしいスピードで帆走する。

一三日、この氷床に入って初めてNHKの日本語放送を聞いたが、皆ただだまって聞いていた。我々にとりいま一番の心配事は、この天気が長く続いてくれることであった。この日初めて西グリーンランドの地域に足を踏み入れた。

一六日、天測のあと正中時を出し、磁石の方向をチェックすると、真北から西に四五度も傾いていた。また今日はじめて我々の上空をジェット機が飛んでいるのを見つけ、全員天幕の外に飛びだして喜んだ。

一七日、朝の行動中から雪質がどうも海岸近くのものと似ていると思っていると、まもなく、先頭を歩いていた三好が、急に大声をあげてクレバスが見えるという。注意して我々の進んでいる先を見ると、斜面は西に向いて傾き、浅い谷と尾根とが交互に大きなうねりの起伏となって続いており、その尾根の背に幾本ものクレバスが走っていた。まだ海岸まで二〇〇キロメートルもあるのに、この様子ではヤコプスハウン・フィョルドは予想外に大きく、近日中には大きなクレバス帯にぶつかると心配する。天気は完全に良くなり、南東からやってくる雲は、我々の頭上で消えてしまう。多分、この雲はアイスランドの近くで発達した低気圧が、グリーンランドに向かって東進するが、標高の高い内陸氷床にぶつかって方向をかえ、北に進み、薄い雲だけがわずかに乗り越えて来るが、これも途中で雪を降らして消えてしまうらしい。そのため氷床の中央部は、東にかたよって高くなっている。

八月一八日、快晴、風が強いので二台の橇を継ぎ、先の一台に帆をはり全員橇に曳っぱられながら進んだ。朝四時三〇分ころ前方左手の斜面に、黒っぽい凹みが現われたので、注意して見ると湖であった。まだ太陽は昇らず寒いのでやり過す。三時間近く続けて帆走したあと、今度はさらに大きな湖が現われたので、その岸辺に寄る。夏は氷が融けているこの湖も、すでに厚く凍結していた。冬が始まっていた。このあとさらに進むと、次々と小さな池や小川が現われ、そしてさらに大きな川にぶつかった。遠くからはたいして大きく見えなかった川も、近づいて見ると予想外に大きく、幅一〇〇メートル以上もあった。幸い、この川もすでに厚く氷結しており、簡単に渡ることができた。もはや、この地域の川や湖との出合は、いままで歩いてきた氷床と異なり、海岸に近い氷床の端に到着したので喜ぶ。しかし、今日の行動中羽毛服を通して体に入ってくる寒さや、湖の凍結は、これからの季節がさらに天候が悪くなり、気温が下り、急に冬の状態に入っていくのを示すもので、我々は帰途をいそがねばならなかった。いくつかのパドル地帯を過ぎると、小さなクレバス帯に初めてぶつかる。そこからさらに一時間ほど進むと、大きなクレバス帯にぶつかった。多分これはヤコプスハウン・フィョルドの落口の最上部のクレバスであろう。今日一日で六〇キロメ

ートルほど直線で進んだ。この日どうしても正確なキャンプの位置を決める必要があったので、時間をおいて三回の天測をやる。我々の位置は北緯六九度一九分、西経四八度一〇分で、まさにヤコプスハウン氷河の上部に着いたことになる。しかし、数日前から我々は、この落口の北よりに着くよう方向をとっていたので、ここであらためて磁北の位置をチェックすると、なんと真北は磁北から八二度も東によっていたのでおどろく。また明日からのクレバス帯突入を考え、橇の曳き綱の古いものは新しいものにとりかえ、ロープ類も全部チェックする。しかしまだ、我々のもっている西海岸の地図は使えない。

八月一九日、朝おきると天気が悪く、さらに隊員の嵯峨野が強い腹痛をうったえる。今日からクレバス帯に入る可能性が大きく、天気が悪く視界の十分きかない時の行動は危険なので停滞とする。嵯峨野の腹痛は初め下腹部全体、次に左下腹部に移り、微熱があり、はき気はないが、なまあくびがあり、小便は澄んでいるので抗生物質と普通の腹痛薬を併用して与える。しかし正午になっても痛みはおさまらないので、膀胱炎関係にきく薬を抗生物質とともに与えると、夕方から痛みはひいた。

八月二〇日、朝おきるとヤコプスハウン・フィョルドの上に雲があるほか快晴であり、嵯峨野の熱も下り痛みも止ったので、一緒に行動するようにした。ルートは西に寄りすぎたので針路を北々西にとり、クレバス帯をさける。途中からまた天候が悪くなりだしたので、大きな氷河湖の畔りにキャンプする。この夜から嵯峨野の病気がまた再発する。今日歩いたのが悪かったらしい。熱はないが腹痛をうったえ、小便にタンパク質が交り、さらに血も交るようになった。幸い翌日と翌々日は悪天候なので停滞とし、暖かいかっこうで休養させる。

八月二三日、曇り空で視界は十分きく、嵯峨野は動かせないので、寝袋ぐるみ橇の上にのせて行動する。翌日は風雪で、この日も同様嵯峨野を橇の上にのせて進む。途中大きな川にぶつかるが、これもすでに凍結しており簡単に渡る。これが夏のことであったらたいへんなことである。

八月二五日、晴、嵯峨野の病気は良くなったが、さらに大事をとって橇に乗せて進む。大きな幾本もの凍結した川を渡る。途中から斜面全体が大きなうねりと共に旧い氷となり、凹凸が激しく表面が荒れだした。風が強く二、三度橇をひっくりかえされたので、帆をおろし、スキーをぬぎ徒歩で橇をひく。この日、朝八時ころ初めて海岸の陸地が見えた。アイスキャップにおおわれたディスコ島とスクサック半島の山々だ。しかし、我々のめざす山々はまだ高度が高いため見えなかった。この日はクレバスはあったが、氷床の盛り上った丘にキャンプした。ここでやっと我々の目標とした山々が見えてきた。さっそく天測をし、キャンプの位置を出したあと、六分儀でめざす山を見つけた。

八月二六日、嵯峨野の病気も良くなったので、歩かせることにする。今日も幾度か凍結した川を渡る。しかし高度が低くなり、気温も高く、氷は薄く、危険が多いので、なるたけ川の渡渉はさけるようにする。皆な途中凍結したばかりの、新雪におおわれた小さな池に幾度となくおちこむ。表面は相変らず堅い氷で凹凸は激しいが、昨日までの降雪で窪みは新雪で吹きだまりができ、橇をいためないで滑らすことが出来、具合がよい。今日のキャンプは、氷床の大きなうねりの窪みのなかで視界がきかず、位置が決められないので最後の天測をやる。キャンプの位置は予定より北に寄っていたが、これから目的の氷河に下るには、一〇キロメートルほど危険なクレバス帯を抜けなければならないので、このまま航空写真をたよりに、目の前の氷河を下ることにする。食事の仕度をしていると、西海岸から初めてツンドラ帯の使者としてユキホオジロが飛んできた。何回か我々のキャンプの上を飛び回ったあと、また海岸の方に帰えっていった。夕方嵯峨野の小便を調べると全然異常はないので、明日も注意して歩かせることにする。

八月二八日、降雪のなかを下るが途中から雨となる。氷河の表面は凹凸が激しく、我々の姿をすっぽりかくすほどの窪みとなり、幾度かクレバス帯にぶつかり、逃げる。凹凸はさらに激しくなったので、いよいよ橇の行進をあきらめ、橇から荷をはずし背負うことにする。一人四〇キログラムほどの荷物となり、初めはこの氷河にそって下り、途中から大きなクレバス帯を横切り、大きなサイドモレーンの上に出て、さらに小さな尾根をのり越え、隣りの氷河に

逃げる。ここから氷河のサイドモレーンにそって末端まで下り、末端は氷河湖となっているため、氷河から離れ、古いモレーンの上をしばらく歩いたあと、見晴しのきくモレーンの上にキャンプした。初めて踏む土の感触だった。すでにこの古いモレーンの上をおおったツンドラは、赤や黄の葉で色どられ、植物という植物はすべて実を結び冬の準備をしていた。しかし、このキャンプはそれだけで、十分我々の渇ききった気持をいやしてくれるものがあった。

ヤコプスハウンの町へ

八月二八日、小鳥の声で目を覚す。昨日来の雨もやみ、雲の間に晴間が見える。今日は海岸まで出る日である。ゆっくりと仕度を整えたあと、初めてツンドラでおおわれたモレーンの丘を越え、さらに小さなモレーンの上を歩き、昨日来の雨で水嵩が増し、氷河末端の河口の渡渉は危険となったので、最後の氷河舌端を横切って対岸に渡ったあと、河原におりる。河原を三時間ほど歩いたあと、最後のモレーンのツンドラ丘を越えるとフィョルドに出た。我々の最後のキャンプは、ツンドラ帯のなかをフィョルドに流れでる小川の畔りであった。

ここで全員一日の休養をとったあと、池田と元気になった嵯峨野の二人は、さらに八〇キロメートルほど離れたヤコプスハウンの町に、ボートをチャーターのためにでかける。いくつかの大きな氷河から流れでた河を横切り、海に突きでた岬をこえ、六〇〇メートル前後のツンドラの丘陵を越えたあと、グリーンランダーのスレッジ・ルートに出て、そこから海岸ぞいに九月一日ヤコプスハウンに出た。我々は内陸氷床で、それほど人の住むところを恋しいとは思わなかった。しかし、やはり西海岸の山波が近づくと、我々は我々の旅の終りがどのような結末をもって終るか、興味をもって考えてみた。途中のツンドラでグリーンランダーに会うのか、デンマーク人と会うのが先なのか、またフィョルドで釣りをしているグリーンランダーと会うのか、人よりもヤコプスハウンの町を見るのが先なのか。とにかく、それが我々の長かった旅の終りなのだから……。

ヤコプスハウンへの道で、ツンドラ丘を歩いている時でも、なにかそこに人間の残した形跡はないものかと、目をみはりながら歩いた。ツンドラ丘を越え、初めてグリーンランダーのスレッジ・ルートに出て、彼らの残した空缶や橇の破れた板きれを見つけたとき、それを手にとって子供のように喜んだ。さらにロード・ベイ近くでは、目前のフィョルドにグリーンランダーのボートを見つけ、呼んでみたい気持にかられたが、明日が我々横断隊の行動予定の終了日であったし、我々のことを心配してくれているヤコプスハウンの無線局に、早く我々が無事内陸氷床を離れたことを知らせねばならなかったし、またここで東海岸の犬橇隊の無事下山の知らせを受けとりたかったので、しばらく眺めたあとそのまま先を急いだ。

九月一日、朝やっとヤコプスハウンの町の見えるところにつき、さらに小さなフィョルドを大きく回りこんだあと雨の中を昼ごろ町の中に入った。ちょうどクンミュートをたって六〇日目であった。ここで東海岸の犬橇隊から、八月二七日無事クンミュートに帰着した電報を受けとった。このあと天候の回復を待って、九月三日パキソトック・フィョルドの奥で待っている五月女達を、ボートで迎えにいった。

犬橇隊の帰路

小栗孝康

横断隊と別れてから天気はさらに荒れ出し、行動は全然できず、視界も悪いため測量もできなかった。

七月二七日、我々に必要な予備日数は、食糧を一日二食に減らしても、なおかつ一日を残すのみとなった。この連日の悪天候と食糧不足のため、九頭の犬もかなり弱わり、一頭の白犬が歩行不能となり、橇に乗せて行動し、北東八キロほど進んだ地点で測量のため天幕を設営した。翌日も我々の期待に反し、一晩中風雪に見舞われ、天幕が埋められる。我々はここからさらに東に進み、一昨年の隊が初めて踏み込んだ山岳群まで行き、それからなお誰も近づいたことのないクリスチャン氷河に入り、無名の山岳に接し、フェムステルネンに出る予定でいたが、この悪天候のため

奥地の旅行を断念せざるをえなくなった。それで最後にガスの中を小さな無名のヌナタックに登り、パリ氷河に下った。この日も更に一頭の犬が疲労で倒れる。

三一日、フェムステルネンの食糧デポで食糧の補給をした後、更に海岸に向い先を急いだ。この日も歩けなくなった犬を一頭乗せる。

八月三日、昨日からの雨で橇の上の犬が二頭死んだ。翌日出発後まもなく、不覚にも五頭の犬をクレバスで失う。三時間にわたる救出作業をしたが、クレバスは深く、狭く、如何ともしがたかった。食糧も後わずかしかないため作業を断念し、これからは犬なしで先を急いだ。

五日、やっとエスキモー・パスの下に着く。峠の登りは連日の降雪で、膝迄の深雪の中を背負って運ぶ。

六日、一食分の食糧を残してセプテンバー氷河のデポに帰えってきた。ここで十三日間、全員の休養と附近の山岳の登山に日を送り、七つの無名峰に登り、コル・デ・ファントムを越え、カイラス氷河からタシサック・フィョルドに下り、八月七日、グリーンランダーのボートをフィョルドに見つけ、クンミュートの部落に帰着した。

パタゴニア氷床横断（一九六八―九年）

阪上秀太郎

目標の選定と準備

われわれが海外登山を検討し始めた一九六七年という時点では、ネパール・ヒマラヤは除外せざるを得なかった。そしてピーク・ハントというオーソドックスな目標を固執すれば、われわれとしてもヒマラヤ以外の何処かの六千乃至七千メートル峰を選んだであろう。しかし、私自身として以前から、このパタゴニアに惹かれるものがあった。というのは、そこに未知の氷床（従来 Ice-cap と呼んでいるが、最近の説に従い Ice-sset―氷床―と呼ぶ）があることを知ったからである。南緯四七度附近から南へ延々六〇〇キロ、南米大陸のアンデス南端附近を、チリとアルゼンチンにまたがって横たわるこの氷床は、一九一四年に発見されて以来、その地域の酷烈な気象条件のために、まだ未知として残された部分が多い。それは南緯四八度附近のバケル峡湾によって南北に分けられるが、先年神戸大学がチリと合同で行なったアレナレス登山（『山岳』第五十三年参照）は、その北部に属する。氷床は南部の方がより広大である。一九五五年英国のティルマンが南緯五〇度附近を初めて横断したが、一九六一～二年に同じくシプトンがバケル湾より上陸、脊梁山

脈の東側をウプサラ氷河まで縦断している。その後、チリ隊が六二年、六三年の二回、南緯四八度のラウタロ峰の南北をそれぞれ横断したのが、その完全横断のすべてである。氷床上に連なるピークは三千メートル級で高峰とは云えないが、その周囲を未知の氷床によって隔てられ、その殆んどは未登である。パタゴニアの歴史は、これから開かれようとしている感が深い。私はこの未知の氷床と、その氷床の中に眠る未登のピークに魅せられた。

六甲学院山岳会の委員会でパタゴニアを目標とすることは容易に決定した。資料を検討の結果、右のラウタロの東にある未登峰ピラミデ（三三八〇メートル）を選んだ。問題はそのアプローチであった。計画の当初チリ側からの接近はまず無理であった。チリ側の気象条件がより悪いということよりも、無人地帯に等しいチリ・パタゴニアは、氷河侵蝕によるフィョルドが錯綜して複雑な地形を持ち、それらフィョルド自体が未知のものも多い。そして山へ入るには、このフィョルドへ船で進入しなければならない。その船とパイロットをどうして入手するか。それで、われわれはまずアルゼンチン側からのアプローチを考えた。ところが、かねて連絡しておいたチリのイエズス会（わが会の母校六甲学院の経営団体で、世界各国に学校を経営しており、チリにも姉妹校がある）から返信が届き、丁度われわれが目標としているピラミデのほぼ西方、太平洋側にあるウェリントン島のプエルト・エデンという処で、ここ十年来原住民の布教に当っている同会のバエレマエケル神父から、この地域の詳しい事情、そしてエデンにはチリ空軍の無線仲継所があること、などを知らせてきた。そのうえ神父は布教用の船を持っているが、それをわれわれのために用立てられること。そして、いまその船を新しい船に替えたいので、できれば日本で探してほしいとのことである。われわれは踊り上る程喜んだ。チリ側からのアプローチの途が開かれたのである。早速神父の要求に見合うボート（約一トンのグラスファイバー製、一二〇馬力）を探し、最終的にそれをヤマハに発注することになったのである。われわれは、このボートを持ってチリへ渡ることになった。

右の理由から計画に大修正が加えられ、結論として、プエルト・エデンを基地とし、エイレ峡湾を経てピオ十一世

氷河に上陸、氷床横断についでピラミデ登頂。その後コースを南に戻し、未踏地域であるマリアノ・モレノ山脈西側の氷床を南下、リソ・パトロンとの間のコルをアルゼンチン側へ越え、ウプサラ氷河に出てシプトンのコースに合するという、氷床完全横断の計画となった。当初の極地法を取止め、橇による横断である。従って装備・食糧の徹底的な軽量化がすべてに優先した。われわれはシプトンの "*Land of Tempest*" を熟読した。橇はスノーボート式ではなく本式の橇を採用、そして日大グリーンランド隊の設計を、そのまま頂戴して使用させて貰うことにする。テントはシプトンの意見を採用してピラミッド型とするが、より徹底した軽量化と、防水性と通気性とを兼ねる苦心の設計をほどこした。雨具もパタゴニアでは重要であるが、これもナイロンの特殊コーティングの布をみつけ、デザインの工夫で何とか使えるものを作った。これらは、すべて一九六八年春の立山でテストを行なったのである。

そして同年六月隊員の決定をみた。

隊長　阪上秀太郎　43歳　(渉外・記録) 教諭
隊員　井川　勲　27歳　(装備) スポーツ店経営
　　松永公雄　27歳　(医療) ドクター
　　岩田修二　22歳　(食糧) 明大生
　　前川弘幸　21歳　(会計) 京大生

ついで食糧計画であるが、一日一人一キロ (包装材を含む) 以内とし、上陸後六〇日分を計画し、大部分を価格・通関の関係からチリで購入することとし、若干の日本食のみ内地から携行するに止めた。

サンチアゴからプエルト・エデンへ

一年有余の準備なって装備を神戸から船で発送、ついで全員五名空路出発、十一月十四日サンチアゴに到着した。

そしてわれわれは、バエレマエケル神父と初対面の挨拶を交わしたのである。神父とはすでに十数通に上る手紙の交換であった。神父は、はじめわれわれと横断の行を共にする予定であったが、たまたま京大の調査隊が時を同じくしてエデン附近に入ることとなり、神父は山よりもむしろ手馴れた海で同隊を手伝うことになり、すでに神父・京大・われわれの三者間で了解が成立していた。勿論われわれの上陸は手伝って貰える。更に神父はわれわれのチリ滞在中、何から何まで世話をみて下さった。ビザ延長、通関、食糧購入、そして宿舎にいたるまで至れり尽くせりで、何とお礼を云ってよいか、全く頭の下がる想いであった。

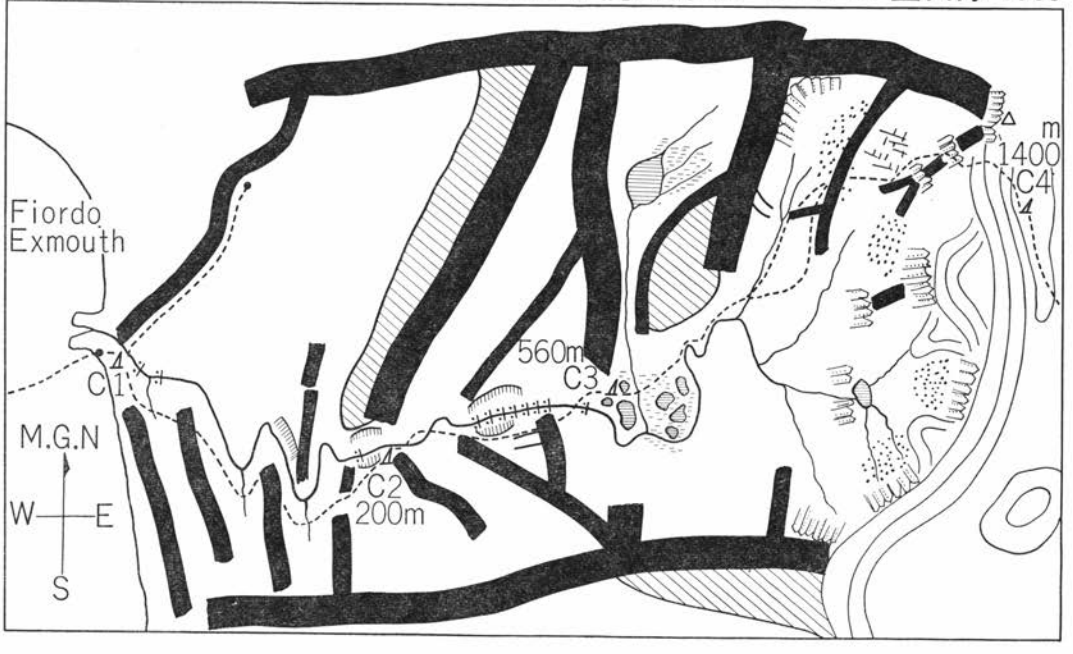
サンチアゴ滞在中、私はチリ大学を訪問し、曽てシプトンと行を共にしたマランヴニク氏に会い、ついで同じくガルシア氏にも会った。氏はまた一九五八年の神大隊とも一緒であったパタゴニアのヴェテランである。二人の意見を綜合すると、ピオ十一世氷河は登路としては困難である。二人とも一九六三年にその上陸を試みたが、氷河が予想外に海上に押出していて、上陸を諦めたとのことである。ガルシアは、その南のフィョルド・エクスマウスの利用を強調した。結局われわれも、その意見を用いることになった。更に氏はピラミデは大分低いと考え、リソ・パトロンに興味を見せており、われわれに先を越されたと口惜しがっていた。われわれは氏と別れてから日程を再検討し、ピラミデを放棄して全力をリソ・パトロン登頂と、横断にそそぐ方がよいとの結論に達した。なおサンチアゴでは、陸軍地理局で同地域の航空写真を購入できて、地図の不備を補うのにたいへん役立った。

十一月末にバルパライソに入った荷物をトラックでプエルト・モンへ、ついでチリ海軍のアギラ号でエデンへ輸送したが、ボートはエンジン取附に手間どり、それを神父に任せて、われわれは十二月二十二日にエデンに集結した。そしてボートの到着まで、二週間をそこで過したのである。すでに京大隊も来ている。空軍の人々には大変お世話になった。幸い年末は晴天に恵まれ、われわれは島のピークの試登や、ボートで対岸大陸側へ渡ってピークから大氷床を望見したり、仲々愉快であった。この辺りのピークは千メートルと少しの高さで、氷河を持っている。すべて未登

Exmouth川付近略図

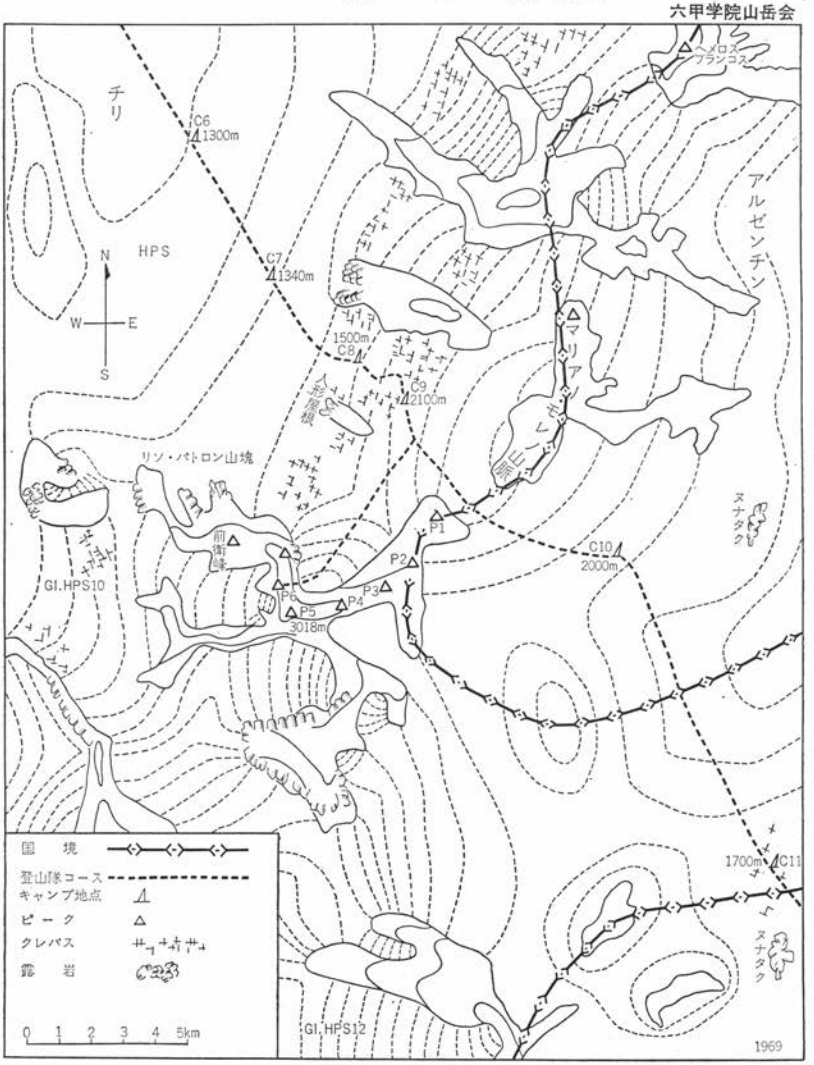
氷　床　　台地
クレバス　　湿地
ガ　レ
(モレーン)　　ゴルジュ
登山隊コース------- キャンプ地

（上陸点より氷床まで）1月6日～1月26日
六甲学院山岳会 パタゴニア登山隊 1969

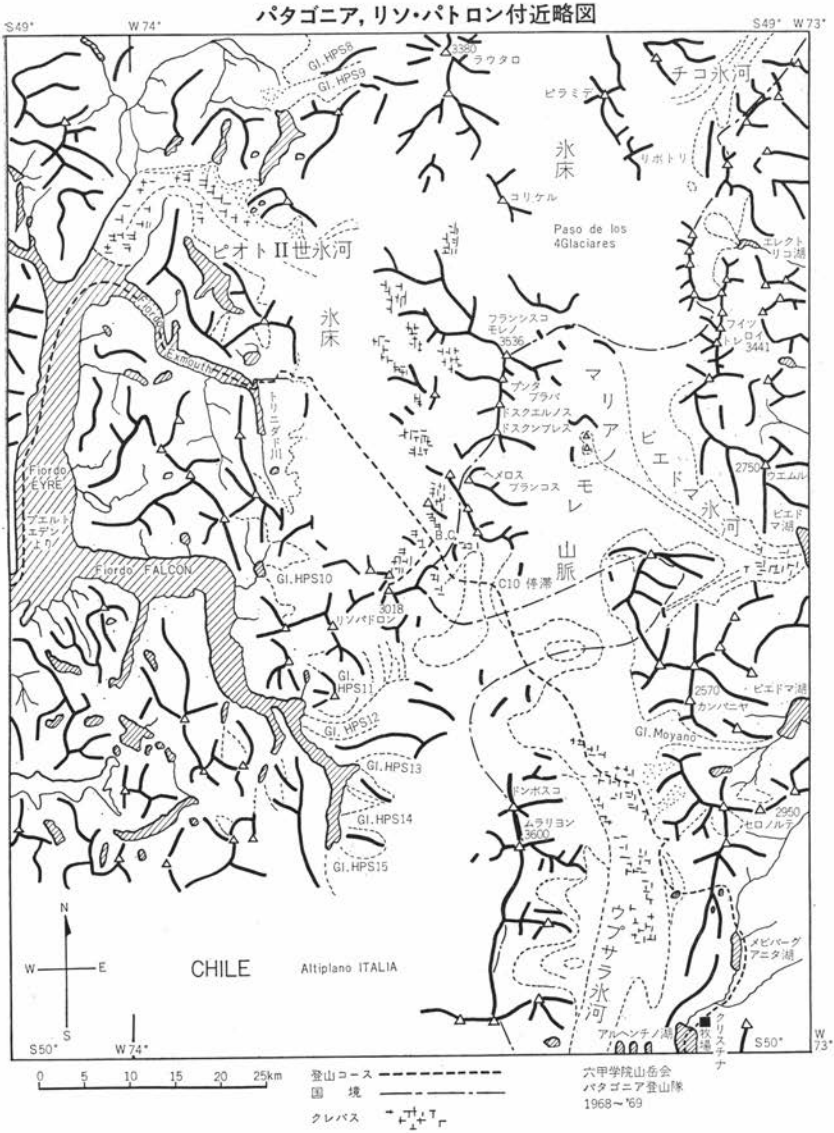


リソ・パトロン付近略図

六甲学院山岳会



パタゴニア，リソ・パトロン付近略図



プンタ・ブラバ（右）とラウタロ（左遠方）
Punta Brava (right) and Lautaro (3380m) (left distant), Patagonia.

リソ・パトロン山塊、最高峰と見えるのは前衛峰で主峰は見えていない
Riso Patron massif—the main peak (3018m) is out of sight, Patagonia.

左よりの尖った2ピークはヘメロス・ブランコス
Gemeros Blancos (two sharp-pointed peaks at the left).

プンタ・ブラバ（左）、ドス・クンブレス（中、双頭）、ヘメロス・ブランコスの一峰（右）
Punta Brava (left), Dos Cumbres (center, twins) and one peak of Gemeros Blancos (right).

で、しかもその山容はどういうわけか、パイネやフィツ・ロイに似た針峰が多い。そしてこの偵察行で、われわれはリソ・パトロンを見ることができた。

上陸より氷床まで

年を越した一月五日、神父とボートが到着、翌六日から七日にかけての二日間、神父は六〇〇キロ余の荷物とわれら五人を、エクスマウスまで片途八時間の距離を、ピストン運転で運んでくれた。狭いカナルと呼ばれる海にはオットセイが多い。ボートの前後によく顔を出す。そしてボートがエレイ峡湾に入ると、あのピオ十一世氷河が前面いっぱいにひろがっているのが見え始めた。まさに息をのむ光景である。そしてガルシア氏の話よりも更に前進している。近い将来エクスマウスの入口を塞ぐだろう。一九四五年撮影の航空写真の位置から考えて、この二十三年間に約八キロは前進している。

上陸にさき立って、われわれは神父と打合せをした。われわれの前進が不可能となり、上陸点へ引返した場合の収容についてであるが、一月下旬、二月上旬、二月下旬の三回、神父がパトロールにきてくれることで互いに了解した。雨の中を神父と名残りを惜しむ。

一月八日は氷床へのルート偵察を行なうが、幸い一日でルートを発見できた。C1より距離五キロ、高差約一四〇〇メートルとみた。その間、川に沿うて上るが下半分はブッシュ帯で、下はずくずくの湿地である。傾斜もかなりある。そのあと圏谷に出るが、真正面に高距五〇〇メートル程の岩壁をめぐらし、その上に氷床縁辺の氷が危なげにのしかかって、間断なく氷塊を落している。九日から五人でボッカ、連日雨の中をデポとテントを交互に出し、二十四日にC4を氷床上に出す。ここで初めて大氷床の全貌を眼の辺りにした。幸い曇天ながら、海のような氷床の彼方にラウタロ、マリアノモレノ、リソ・パトロンが連なって見える。エデンから望見した、コル直下の黒い人字型尾根

も、よい目標を提供している。二十六日に全部の荷物をC4に荷上げ完了する。

氷床横断開始よりコルまで

一月二十八日からは機による氷床の横断を始める。五〇〇余キロの荷物を、二回に分けて運ぶので、デポとテントを交互に出すため、行程ははかどらない。しかも連日みぞれ又は雪。何も見えない。コンパスのみで歩く。三十一日には何もかもぐしょぐしょになってしまった。しかし二月一日から二日、三日とすばらしい快晴となり、よく緊まった雪に橇も軽い。二日には氷床の西辺に蜃気楼も見えた。しかし、これも三日まで、そのあとは再び雪。それでも二月五日には上り傾斜が出始め、コルにさしかかったことを知る。そしてコルの下にC8を設営した。ところが、この日から天気は一段と悪化し、向い風でデポの回収がはかどらず、またコルへのルートの確保がむずかしく、悪戦苦闘テントの埋没を防ぐのがやっとであったが、二月十五日になって漸やくコルにC9（二〇〇〇メートル）を推進できた。しかもその午後から晴れ始めたので、C9からリソ・パトロン主峰へのアタック可能と考え、午後四時頃からルート偵察と、デポからの登攀具の荷上げを急ぐ。明日を逃せば登頂のチャンスは去るであろう。歯を喰いしばってボッカのピストンをやり、登頂態勢を整える。

リソ・パトロンの一峰へ登頂

二月十六日午前七時四五分、松永・前川二名の登頂隊員がテントを出発。その直後トランシーバーが破損し連絡不能となる。今日は晴れている。頂上附近に少しガスがある程度であるから、まず大丈夫であろう。C9より上は幅三キロ程のプラトーでコルになっている。そこを二人はスキーで南西へ行進。ピークは六ツあるが、氷床上からはどれが主峰か、前衛峰の蔭になって判別が困難だった。昨日の偵察で、進行方向最奥のP6を主峰と考えて二人はスキー

を進め、一一時三〇分に第一回昼食、一三時三〇分Ｐ４の下でスキーをデポし、ワカンに代える。傾斜が 20° 位になる。途中更にアイゼンに代えて 30°～40° の斜面を登る。アイゼンのツァッケも立たぬ氷の上に、三〇～四〇センチの雪が乗っている悪条件であった。一五時三五分、遂に頂上に立つ。ところが隣のＰ５の方が少し高い。残念。しかし登り直すには時間切れ、また天気も持つまい。写真撮影と記念のプレートを埋めて二人は下山の途についた。二一時一〇分テント帰着。われわれは結局リソ・パトロンの一峰に登頂したのである。恐らく三千メートルを少し割るだろう。

アルゼンチン側へ下降、ウプサラ氷河

二月十七日は一面のガス。その中をデポ回収と下降準備を行なう。そして十八日下降の予定が猛吹雪となった。ここではじめてパタゴニア風と見参。風速は完全に二五メートルを越えている。テントも荷物も固い氷の下になる。

二月十九日、風もやや衰えたようなので撤収を始めたが、氷の下からテントや荷物を出すのに時間を喰い、午頃に下りにかかる。この時テントのポールを折損、テント一張を棄てたのでテントは一ツになる。しかし、荷物はもう橇一台分になった。吹雪の中をコンパスを頼りにプラトーを横切り、下りにかかると、橇が滑って前へ出るのを必死に支えながら下る。下るにつれて風は再び激しさを増す。視界は零に近い。午後三時頃、前面に黒い岩影をみる。ルートが変だ。おまけにヒドン・クレバスも出始める。遂いに前進を諦めてその場にＣ10を張る。このような嵐の中ではピラミッド・テントは威力を発揮する。傘を開くように開いて、張綱をピッケルとザイルで止めれば終りである。四人用テントに五人が入ったので少し窮屈だ。

ところがこの日から十日間、われわれは一歩も動けなくなった。連日の猛吹雪、パタゴニアはその底力を遺憾なく示した。二十二日午前中は少しゆるんで、航空写真によって現在地点を確認できたが、そのあとはまた元通りの嵐。

二十四日朝テントは完全に埋没した。ラジウスに点火しないので困る。一日中かかって入口の雪を除け、その上にツエルトを張ると、すぐに雪が積もってトンネルができた。そうしておいて二十五日、雪の下でテントを抜出してたたむ。その跡を雪洞とする。この二晩、膝をかかえたままで過したので、横になれるのは有難い。しかし衣服もシュラーフもぐしょぬれである。そして毎日息もつけぬ吹雪の中で、橇を掘出そうと努力したが、雪の積もる方が早い。われわれは橇を放棄することにした。リュックで下りよう。一人二〇キロに抑えて、テント・ピッケル・ザイル・食糧のみを携行することにする。一体この吹雪、いつ晴れるのか。今までの経験ではパタゴニアの荒天週期は、大体七～一〇日である。今月末には好転するだろう。一日二食に減食して、その回復を待った。二十八日、食糧は余すところ七日分となる。ここからクリスチナ牧場まで、地図上の計算で七日はかかると思われる。どうあろうとも明日は脱出と決めた。ただ隊員一名が痔を出しているのが気懸りである。

三月一日、すでに三メートルを越える雪の下から、這い出す。外は依然として吹雪いてはいるが、幾分弱まったようである。三メートル下の雪穴から荷を出すのに案外時間がかかる。一〇時過ぎ四〇メートルのザイルにつながって、コンパス一二〇度の方向に突進する。歩きながら食事しようというので、腰に二食分のビスケットを袋に入れてぶら下げている。午過ぎ、空が明るくなり始め、午後は晴天となった。助かった。周りはアルゼンチン側の大氷床、北にフィツ・ロイのピークが黒くみえる。ヴィエドマ氷河とウプサラ氷河の分岐点にわれわれは居た。南ウプサラをめざして進む。ところが危惧した隊員の痔が悪化して、行進速度はぐっとにぶり、止むなく午後七時C11を張る。高度約一七〇〇メートル。二日はウプサラ氷河に入った。間もなく縦横にクレバスが現れ、行程がはかどらぬ。病人を抱えるようにして下る。一日中クレバスの迷路。翌三日はクレバス帯を抜け出した。そこは氷河の上に水がたまっており、河となって流れ、クレバスの中に消えている。そして夕方近く、氷河を渡り切って左岸に達した。四十日ぶりに踏む黒い大地である。対岸にはムラリョンもみえる。もうシプトンのルートに合した筈だ。未踏地域はここに終っ

た。ここでキャンプ跡を発見、缶詰もあって食糧一食分が助かった。四日は休養する。

五日、もう一度氷河上に降り、南下を続けるが、この辺りから下流のクレバスは物凄く、スケールが大きい。ステップを切っては乗越える。際限もなく怒涛のように連なる氷の壁である。夕刻にやっと氷河縁辺にカール状の池を発見、C14を設営する。左岸岩尾根もここで低くなり、切れているので、ここをクリスチナへの降り口と判断した。

クリスチナ到着

三月六日、今日中にクリスチナに着けると考え、テントをそのまま放棄して、まず正面東側の岩尾根に偵察を出した。越えられそうだ。約三〇〇程の登りであった。尾根上に立った時、眼の中に飛込んできた光景は、本当に涙の出るほどすばらしいものであった。今までと打って変って緑の森、ゆるやかな草のスロープ、そして谷いっぱいに拡がるアニタ湖。だがそこへの下降は大変であった。約四〇〇メートル近い岩壁である。ハーケン類を棄ててきたわれわれは、ルートを探しながら慎重に下る。ここで半日を費してしまった。最後はザイル一重いっぱいのアブザイレンで草原に降立つ。これでザイルも奪われてしまった。アニタ湖めざして進み、河をひとつ徒渉して湖畔に出る。西岸は絶壁が迫り通過不可能とみえたので、東岸の岩棚状の方へルートをとる。夕暮れ近くまた河に出逢う。今度のは深い。ビバークを考えて衣服をぬらさぬように、吹きさらしの中で裸になり河を渡る。水深は臍まできた。幅約一五メートル、氷河から出たばかりの水は冷たかった。本当に命がけであった。そのあと、すぐに日没となり、湖畔の岩蔭にビバーク。ぐしょ濡れのシュラーフに入る。

三月七日、朝食で食糧はなくなった。しかし、いくら何でも今日中にはクリスチナに着けると分っていたので、悲壮感はない。岩棚をトラバースして南へ向う。岩棚が尽きると草原へ出た。否、それは牧場であった。やがてアルゼンチン湖が見え始め、ついで赤い屋根の建物が見える。クリスチナだ。午後三時過ぎ、われわれはクリスチナに到着

した。マスターズ父子に快よく迎えられ、六一日に及ぶパタゴニア氷床横断の旅は終った。

遭難のニュースについて

われわれが行方不明というニュースを知ったのは、それから六日後、再びチリ側に入り国境のセロ・カスチリヨに着いた時であった。急ぎプエルト・モンに戻り、神父に再会して事情を聞くと、次のようなことであった。神父は約束通りに一・二回の上陸点パトロールを行なったが、そのあと二月八日にわれわれがアルゼンチンへ出たという誤報があった。その誤報を真に受けた神父は、三回目のパトロールを止めてモンへ引揚げてしまったが、いつまでたっても六甲隊が現われないので、調べたところ誤報と分り、それで心配した神父はパトロールをエデンの空軍の人々に依頼し、マゼラン県知事にも手配を頼んだのが、公のニュースとなって伝わったというのである。すべてはチリの人々の好意から起ったことである。

富士山と私

松方三郎

「富士山と私」という題をいただき、お断りする理由もないので、ありのままのお話をしようと思います。夏の夜のことですから、のんびりときいていただきたいと思います。

富士山との付合い、というと大きいが、こちらの年齢が違い、また境遇が変わってくると、富士山と自分との関係も、そのたびに動いていって、自然にその時代々々、違った色合いを持つことになる。そうした関係を持ちながら、何十年か来たのでありますが、その移り変りというか、そんなことをお話しようかと思います。

はじめて富士山に行ったのが、私が中学二年の時ですから、一九一三年でありますが、そうすると五十何年前ということになりますか。中学生ですから山登りというほどのものではなくて、いわば子供の遠足の延長で、富士山に登って降りて五湖めぐりをして帰った、といったものでした。

考えてみたら、山岳会に入って満五十年になることを、今日発見したのでありますが、北アルプス辺りに入って一、二年して、お前も山岳会に入ったらどうだといわれて、入ったわけです。まだ中学を出た位の年で、その時分には、登山の対象としては富士山など、てんで頭においてはいなかった。山登りといえば、槍か剣か穂高だと思っていたのです。スキーで北アルプスに入ることは考えても、富士山に冬行こうなどとは、考えたこともなかったのです。

学校を出てから外国に四年ばかり居ましたが、その頃はロンドンに浦松佐美太郎がいたり槇さんが現れたり、また宮様がこ

られたりしてた時代です。そして一人の人間が生涯のうち、あんなに山を思う存分味わう機会は、あんまりないのではないかと思うくらい、思う存分に非常に楽しい山登りを、アルプスでやったわけです。一九二六年のシーズンのあと、秋であったろうと思うのですが、ロンドンに槇さんがおられて、何かというと佐美太郎と三人でとぐろを巻いて山の話をしたり、佐美太郎も私も留学というのは表て向きの話で、もっぱら「学をとどめ」て山に行っていたという結構な境遇でした。ご承知のように槇さんは大変なヘビー・スモーカーで、朝からストーブの前でパイプをくわえている。部屋は煙でもうもうです。しかし、このおかげで槇さんはマナスルへ行かれたのです。つまりふだんから地球の普通の人間の半分位の空気で、生きていく修行を積んでいたのです。あとの半分は煙だったわけです。六千メートルに行くと酸素は半分になるのですが、槇さんはびくともしない。悠々とヒマラヤを歩いてこられた。とにかくそんなわけで、槇さんの部屋に入ると、まず窓を開ける。これが論争のきっかけになって、その一日の会話が始まる。まあそういったようなロンドンでのある日のこと、日本に帰ったらどういう山に登りたいか、という話になって、誰いうとなく富士山は日本の山として面白いのではないか、高さからいっても日本一だし、おそらく余り人も行かないし、冬は氷もあるのではないか、日本に帰ったら登ってみようじゃないか、ということになったのです。そして翌年は帰国するというので、富士山用の重たい大ぶりのピッケルを、ベントに作ってもらった。今いるベントの親父であります。私は今もそのピッケルを大事に持っていますが、ちよっと普通のピッケルより頭の大きなものです。

アルプスの小屋には、どこでもピッケルとザイルがおいてありますが、クリスチャン・シェンクの若い頃作ったすごいピッケルが、グレックシュタインの小屋においてある。これは頭の非常に大きな大ぶりの奴で、刀で言ったら村正とでもいうか、ちょっと持っただけで、何かやらずにはいられないといった風のものでした。シェンクの晩年の作は、カーヴがきれいでエレガントになっているけれども、若い頃のはウイリッシのピッケルを思わせるような、あるいはもっとすごみのあるものでした。そのピッケルを思い出して、多少大振りのものを作ってもらったのです。もうひとつの動機は、その夏、浦松、エミール・シュトイリ、ブラバンドと四人で、メンヒの北側のノルレンという氷が頭からかぶさっているような尾根を登った。この尾根は非常に急な斜面を持った氷の尾根で、ブラバンドが氷に向って振るのに丁度具合のよい長さの、柄が短く、頭が大きく、ちょうどつるはしのようなピッケルを作らせて、足場を切るとき使った。われわれはそれをメンヒ・ピッケルと名付けましたが、ピッケルは道具なのですから、目的によっていろいろな型があってよいのだ、ということを身に泌みて知ったわけで

す。このメンヒ・ピッケルは、その後どうなったかわかりませんが、当時の写真にエミールが背負って写っています。

ピッケルの話をするときりがないのですが、重いピッケルで大きな氷をばっさり切るのも豪壮で立派だけれども、ヨッシーなんていう有名な山案内人、フリッツ・アマッテルのおかみさんの親父ですが、彼は軽いピッケルで実にきれいな足場を作ったそうです。お客さんの持っているようなピッケルを使いながら、ほうきではいた階段のようにきれいなステップを、切っていたといわれています。つまりピッケルは、時と場合によっていろいろあった方が都合がよく、近頃エクスペディションなんかでも、山によって道具を考えて作りますが、それが当然のことだと思います。

そこで富士山用の大ぶりのピッケルを作って、一九二八年二月はじめに、シベリヤを通って帰ってきたのでありますが、みんなそれぞれ就職したりしていて、なかなか使う機会がない。やっとその秋それを担いで登ることになった。そのころは東京でも、秋になれば富士山がよく見えて、ひとつあのピッケルを振り廻してみたいと思ったわけです。相棒は、今日もここにいる、今は禿げてしまったけれど当時は美少年の佐藤久ちゃんで、二人で出かけていった。九月だからどうせ寒くたって、砂の上でゴロ寝で露営すりゃいいと、御殿場口からのんびり登っていったのです。雪ぐらいあるかと思ってるのに、どこまで行っても雪がない。本場のアルプスで、冬だ夏だと相当に歩いてきたつもりだったのですが、一日秋の太陽にカンカン照らされ、しかも前の晩は五合目あたりの小屋のわきでゴロ寝して、そのまま登っているのですから、すっかり参ってしまって二人共生た顔色ではない。御殿場口の頂上、浅間神社のところへ、這うようにしてあがって、さて剣ヶ峰へ行こうとしても、もう物みな黄色く足が出ない。一応昼寝した上で出直す有様です。三千七百メートルの高さはウェッターホルンより高いのですから、ヨーロッパならもちろん氷河がついてる山だ。氷河はないけれども高さというものは正直なもので、身体がなまっていると、ひどい目に会うのだということを思い知ったわけです。

それから富士山という山は、なめてかかるわけにはいかないということになって、あらためて願をたてて、毎月行ってみようということになりました。しかし勤めているからうまくいかない。その次は十一月になって槙さん、久ちゃん、私の三人で須走りから入り、途中刈安の小屋跡で一晩泊って登っていきました。

東京は前の晩ひどい土砂降りで、この分では富士山はおそらく雪だろう、しかも相当深いんじゃないかと考えて行きました。ところが須走りの二合五勺あたりから、森林帯をぬけて出てみると、雪はなくてコチンコチンに凍っている。これは勝手が違うというので慌てたのですが、もう及ばない。シュタイク

アイゼンはなし、綱はなし、足場を切ろうと思うと傾斜が非常になるいから、身体の方がへとへとになってしまう。そうこうやっている内に時間はどんどんたってしまって、七合までも行けなくて六合ぐらいと思いますが、上はあきらめて下ろうということになったが、さて下ろうとしたら、例のツルッとした氷だから、スタコラ下りるわけにはいかない。仕方がないから、夏道に張ってある針金をはずしてザイルがわりに使い、やっと東京に帰ってきたのです。どうも考えたより大分手ごわい山だとまた思いました。われわれが想像するよりも、行ってみるといつも違った条件があるということを、つくずく知ったわけです。富士山という山は取組んでみると、容易ではない、いろいろ工夫して登らなければならない山だとわかったわけです。

翌年の二月にまた富士山に行く機会があって、今度は現役も加えた大勢の隊で行きました。本郷(常幸)だとか死んだ青木だとか、伊集院のトラさん、早川の種さんもいて、大挙して押しかけた。その時分は今と違って食物もきわめて簡単で、気のきいた奴は大船で鯛飯か何か買ってきて、みんなが昼飯に握り飯を食ってる時、箸なんか使って鯛飯を食ってる。そうするとみんなが、こんちくしょうって顔して見ている。食い物の恨みはおそろしいもので、その後も時々そのときのことを根にもって、恨んだりしている。私は今でも山へ行く時は、よく駅弁をしょって行くのですが、なかなかあれはいいもんです。百五十円出せば堂々たるもんです。その時は刈安で屋根をとばされた小屋跡に露営しました。二月ですが、この前の十一月とちがって状態もよかったし、シュタイクアイゼンも綱も持っているから、二つの隊にわかれて、極めて楽しく登って行ったのであります。ところが七合から上で今度は風が出て来た。頂上の鳥居も見えるのに風で動けない。風をよけて平らべったくなってる時間の方が、歩いている時間より長くて、いつまでたっても進まない。もう午後で時間はどんどん経つ。そのうち風に足をとられて、トラさんが足首をちょっと捻挫した。オレはもう先へ行けん、というのです。それ以来トラ足という言葉ができたんですが、あれはトラの奴、上へ行きたくないものだから、足が痛いと云ったんだろう。その証拠に帰って来たらピンピンしてた。今でもあれはウソだったんだろうと思います。結局その時もまた九合までで、頂上に行きそこなった。富士山の頂上へ行くことが、ことに冬では、チャンスが極めて少ないということを思い知ったわけです。

その次には三月に、ヨーロッパ・アルプスで知り合った友人M君が、たまたま日本へ来たので、槙さんと佐美さんとの四人連れで富士山へ出かけ、この時はじめて頂上へたどり着いて、ようやく宿望をとげました。アイゼンがちゃんととまる程度の、とてもいい雪の状態で、その上三月でありますから日は長いし、いいコンディションでした。

さていよいよ頂上から須走りへ下る時、先頭はM君、いちばん最後に槙さんという順序で綱をつけようとした。これは山の常道であります。つまり登る時は先輩がトップ、下る時は最後、そして初心者というか不慣れなものは、下る時は先におろしてもらう。見たところは猿廻しみたいですが、当り前であります。そこでM君に「さあ、綱をつけろ」というと、彼は下を見てイヤだという。浅間神社の鳥居から下を見ると相当な傾斜で、見下ろした感じが、駿河湾まで一枚の雪の斜面のような錯覚をおこしてしまう。ヨーロッパ・アルプスをさんざん荒して来た手合でも、はじめてあそこからまっすぐ下を見ると、足が出ないのです。どうしてもイヤだというから、何をいうんだ、人の国に来てそんな勝手なことをいうもんじゃない、といってもだめだ。綱のうしろならいいというから、そんならよし来たっていうんで、ザイルを半分に切って、私が前になって彼と組み、佐美さんと槙さんが組んでまっすぐかけおりたわけです。五合目の石室まで来たら、もう彼はすっかり膝がガクガクになってしまって歩けないということになった。ここまで下れば、おっ放したって生命に別条はない、じゃあ、僕達は先に下るからゆっくりおりて来たまえと、三人は先に帰ってしまった。二日ぐらいたって帝国ホテルへ行ってみたら、M君は二日ばかり須走りで寝て来たといって、とにかく帰ってきていた。こわくて足が出なかったんだ、と白状すればいいのに、何の彼のというもので、こんなことになったわけです。彼はチューリッヒのアカデミーで、メキシコからスイスに留学していたのだから、国では相当な家柄だろうと思うのでありますが、果してあとできくと、なかなかの金持ちの家なんだそうで、そうと知っていれば、もっと仲よくしておけばよかったんだなんて、後で話したことでした。

それからも毎年行きました。ことに十一月の明治節は天気がいいことになっているので、この日にはよく行きました。ある年の二月には、加藤泰安や彼の同級生の肥田なんかを槙さんといっしょにいって、八合目から大沢の斜面を、綱をつけて「まっすぐ歩け」なんて云ったもので、それ以来泰安は恨み骨髄で今だに恨んでいるようです。

とにかく、これで大体見当はついた。日本の山の中で、いわばピッケルを持って行くのに値する本当の山だ。富士山はやっぱりいい山だ、と思ったわけです。

冬だけでなく、夏もなかなか楽しい山登りの思い出があります。死んだ田中菅雄や、藤島(敏男)などといっしょに行った時のことです。富士山は水がないから水を飲むと金をとる。これは大体けしからんじゃないか、ということになって、水をうんとしょってあがることにした。白玉を井戸で冷やす時使う、あのカンカラに水をいっぱい入れて、藤島がぶらさげる。田中は西瓜をしょって行く。水は飲み放題というわけで、こうなると

小屋の奴は呼びとめもしない。西瓜を喰い、水を飲みながら、およそ楽しくのんびり登ったわけです。田中菅雄はその後戦争で死んだのですが、彼と登った最後の山も富士山で、その時の日誌をたまたま見たら、富士山を往復した費用が汽車賃も全部入れて、一人八円三十銭と書いてありました。吉田の刑部(おさかべ)に泊って一泊一円五十銭でした。

ある時は三田(幸夫)だとか槙さん、田中菅雄とお中道を歩いたこともあります。小御岳のお宮に泊って、あそこの鉄のマサカリの揚げっこをしたりして、お中道をお助け小屋に行って、のんびり大沢を渡ったのですが、三田はお助け小屋でお神酒をのんだら、すっかり腹をこわしてフラフラになってしまった。その上、大宮の五合から宝永山の底に下って、御殿場側のざくざくの斜面を登り出したら風が出て来た。三田はフラフラなのに、風が吹いたらまずカンカン帽子を大事に押えたりしています。そんな帽子は捨てちまえと、皆んなでそそのかしたのですが、手でおさえて離さないのです。欲はやっぱりあるものですね。

戦後吉田の火祭りが復活したのは、いつ頃のことでしょう。燃料事情がよくなってからのことでしょうが、戦後私が割合富士山に行くようになったのは、一九五五、六年ころかと思います。私設富士山学校と称して、うちの連中とか子供の友達を引連れて行ったのが起りで、そのまま今日まで続いているのです。いつか新聞にちょっとこのことを書いたら、知らない人から電話で、入学できるかと問い合わせがありました。私設で私立ですから、この学校は入学も退学も自由であります。火祭りは八月二十六日でありますから、二十五日に富士山に登り二十六日に下ってきて吉田で火祭りを見る。浅間神社のお社から例の赤い富士山のおみこしが出て、吉田の町を練り歩く。おかぐらもある。何となく毎年この日にはでかけるのでありますが、その日にきまって集ってくる仲間も何人かいて、八合の小屋に桜井(信雄)が来ていたり、頂上に行くと久ちゃんがいたり、富士山中知った連中が、あっちにもこっちにもいて、それが何となくいい時分に、頂上で落ち合うことになっているのです。時には外国からの友達が加わっていたり、かと思うと、思いがけなく友達でもない異人さんを途中で拾っていっちゃったり、なかなか面白い話がいくらもあるのです。

ある年のことですが、吉田口の七合から八合に登って本八合に向っていたら、下から真っしろな頭のおばあさんがスカートをはいて、よく見るとボストンバッグを背中に荒縄でしばりつけて、あがってくる。八月二十五日で、そう人はいないから目立つのですが、足つきは案外しっかりしている。上で待っていてきいてみると、実は一昨日日本に来て日光に行き、今日富士山へ来たんだという。日本語は「ありがとう」と、もうひとつ何かを知ってるだけだ。上に行っても、そんなに泊るところは

ないから、いっしょに今夜は八合に泊って、明日登ろうということになって、いろいろ話をしていると、英国のレディス・アルパイン・クラブのメンバーだという。英国のアルパイン・クラブはやかましくて、女のメンバーを入れませんから、女の連中だけ別にクラブを作っていて、なかなかそうそうたるメンバーもいるのですが、彼女は英国の有名な農事試験所の技師でドクターだというのです。お前は何だというから、私も日本山岳会のメンバーで、アルパイン・クラブのメンバーでもあるというと喜んだ。とにかくボストンバッグはひどいから、荒縄をといて息子が背負い、本八合の小屋へ泊った。翌日いっしょに登ったのですが、困ったことに植物学者だから、岩を見るとすぐナイフを出して採収がはじまる。ファンガスだとかライケンだとか、そういうものばかり気になって仕方がない。これは是非ブリティッシュ・ミュージアムに送るんだなどといって紙に包んでいる。とにかく剣ヶ峰までお供して吉田へ下った。吉田の宿で風呂に入って、ボストンバッグに入ってた洋服に着換えて出て来たら、見違えるように立派なおばあちゃんになってしまった。とにかく火祭りを見せて河口まで送った。あとできくとDr Gという、英国でなかなか有名な学者なんだそうです。日本に来る前にインドや豪州などを歩いてきたのですが、名前をいうと研究所で世話した連中が方々にいてうるさいから、一人で歩いてるというのです。しかし四国の善通寺の研究所にはよく知っている学者がいるので、そこだけは訪ねると云っていました。山にシロウトではないから、ある程度の心構えは持っているには違いないけれども、全然知らない国に来て、三日目に富士山にやってきて、金鋼杖一本にボストンバッグを荒縄でしばってしょって登って行く、などというお婆さんは、やっぱり相当なものじゃないでしょうか。

山で会った人、いつか会報に書きましたが、やはりソマヴェル夫妻のことが忘れられません。ソマヴェルは一九二二年、一九二四年の二回、エレベストに行っている。二四年の時は非常に高いところまで行って、その記録はかなり長い間残っていたのであります。当時彼はケンブリッジに籍があったのですが、インドを横断している間にインドのみじめさ、貧乏、不衛生といったものが身にこたえて、一生インドのために働こうと決心しました。そこで学校を出て外科医になるとインドへ行き、ミッショナリー・ドクターとして七十歳まで働いた。そしていよいよ退職して帰るというので、世界を廻る途中日本に立ち寄ったわけです。

日本に来て、日本の典型的な山を登りたいというので、それではやっぱり富士山がいいだろう、それからもうひとつ森林のいい山へ行ってみようじゃないかというので、藤島と二人で軽井沢から夫妻をひっぱり出し、まず八ヶ岳の白駒の池へ行った。それから八ツを越して大月へ出、富士山へ行きました。そ

の時は交野君や交野君のお嬢さんもいっしょだった。ソマヴェルは小学生が背負うようなルックサックしか持ってないから、その他にスーツケースを持ってきたのですが、これをひったくって、こちらのしょい子につけるのが大変なのです。人に背負わせるのがいやなんですね。すきを見てさっと取りあげて、しばりつけてしまわないと、なかなか持たせない。奥さんも相当なサムライで、例のネパーリーの使ってる肩から下げるバッグをしょっていて、これまたなかなかはなさない。

八ツでも富士山でも、腰を下ろすとすぐスケッチブックを出して、写生を始める。奥さんが弁当を出して食おうといっても「人はパンのみにて生きるものにあらず」とかいって、絵を描いてる。富士山の八合の小屋の羽目板に、彼は北面から見たエベレストを描いています。夜、寝ようというとき見ていると、小屋のカイコ棚の隅でランプの下で、二人でバイブルを読んでいる。何十年かやってることなんでしょうが、こんなところにも彼等の人柄がうかがえるわけです。

帰ってから富士山はどうだったときいたら、実に楽しかった、いろんな人の中に入って歩いたこと、新しい風景が一歩一歩展開するのが本当によかった、と言っていました。そして、実はインドを出るとき友達が「日本へ行ったら富士山だけには行くな。富士山ははじめから終りまで砂利だけで木陰もないし、あんなバカな山は世界中にない」といわれてきたんだ、と白状しました。東京で別れる時に、絵をくれるという。折角ならエベレストの絵がほしいなと云ったら、一年くらい経ってから人に托して送ってくれました。エベレストの一九二四年の報告を見ると、ソマヴェルのスケッチが色彩で挿し絵に入っています。あれは、われわれがはじめて色で見たエベレストであります。当時はカラー写真がないから、色でチベットの風景を見せてくれたのは、ソマヴェルとヘディンだけなのです。彼の絵によってはじめて、イエローバンドの色や、実に冷たそうな氷の陰、それからキンキンたたけば音をたてそうに晴れた空、そういったものを知ったのです。

おしまいにもうひとつ、風変りな青年の話をしましょう。私はよく時間のある時は、小御岳流しから白山岳に上ります。これは私の好きなルートのひとつで、富士山がどんなに混んでいても、ここで人に会うことはなく、ほとんどまちがいなく一人で一日歩けるので、大事にしているルートなのであります。ある年そこをあがっていたら、思いがけなく一人の青年が登っている。こんな所で人に会うのははじめてなので声をかけたら、「この道行ってもいいんですか」という「実ははじめてきたので、どこをあがっていいかわからない」というのです。白山岳の上で話をしたり写真をとってくれたりして別れたのですが、彼は山が大変好きで、埼玉の白岡にいるという。絵が好きだというから、その後ロダン展やシャガール展などの切符がある

と、こっちから送る。そうすると彼は埼玉から出て来て上野で絵を見て、非常に楽しかったと手紙をよこす。もちろん手紙だけで、会うことはないのです。ところがある年、またこのルートを行ったら、今度は二人連れが先を登っている。珍らしいこともあるものだと思いながら、白山岳にあがってみると、頂上の方向指示盤の上に紙が石で押えてあって「会長さん、がんばって下さい。私たちはお庭に下りますから先に失礼します」と書いてある。彼だったわけですね。何か、デブが登ってくるので、私に違いないと思ったのでしょう。あとにも先にも顔を合わせたことは一度きりなのに、お互に季節々々には消息を交わす、そんな間柄がここ何年も続いて、今日に至っているのです。

私は外国から来た友人には、富士山に是非行ってみたらよかろう、とすすめることにしています。外国人は京都、奈良、東京と廻るけれども、あれだけ日本の各地方の庶民と肩をすりあわせて歩いたり、同宿したりする場所はほかに考えられない。われわれにしても、東京でそういう生活はあまりないわけです。それに富士山で会う人間は、剣や穂高で会うお山の大家連とは違うのです。みんな三千三百メートルぐらいで少し顔色がヘンになって、気持が悪いとかなんか云って、とても大きなことなどは云っちゃいられない状態にある。つまりきわめてナイーブで謙遜で、人間としていちばん素直な連中なのです。私はそんな意味で、外国から来た人も、ほんとうの日本を知るのには、富士登山は大いに役に立つと思っているのです。

何故富士山が面白いのかと、よく人から云われるのでありますが、私は富士山は自分の好きな時期に、自分の境遇や身体や気持にあった山登りができる。そんな点でちょっと類のない、非常にありがたい山だと思っています。人間ですから、年をとってくれば若い時とは体力が違う。しかしそういう場合には、それをカバーしながら、つまり人の倍時間をかけて歩けばいいわけで、夜でも昼でもとにかく正直に歩いていきさえすれば、まちがいなく頂上に着く。自分のペースを守って、無理しないで楽しく登れるから、富士山は私にとってかけがえのない山になっているのです。実にさまざまのルートがあって、やさしい富士山にも、むずかしい富士山にも登れるのであります。富士山にもいろいろな問題があって、自動車路ができるの、やれモグラ式のケーブルを作るだのと、何ともうるさいこと、困ったこともあるけれども、そういうもの全部を勘定に入れても、私はやはり堂々たる値打を持ったいい山だと思っています。

そんなわけで大きくいえば五十何年、ちぢめていっても外国から帰って以来三十四年から四十年の自分の登山のなかで、富士山はかなり大きな場所を占めている。本当に富士山は日本のお宝だという感じを持っているわけであります。

（編者付記）本稿は昭和四十二年八月十六日に行なわれた第二三三回小集会での講演の内容をまとめたものである。

回想の日高山脈

相川修

登山という近代スポーツの洗礼を受けはじめた頃の日高山脈は、いかにも新鮮であり、深窓育ちの情趣があった。その奥行の広さがあった。そして原始の侭の姿であった。

話は四十年前に遡って始められることになるのだが、札幌に産れ育ち、札幌西郊の山々、大雪山中央高地、蝦夷富士、駒ヶ岳、その他には北海道に山はないものと、視野の狭かった私にとって、日高山脈を経験したことは大きな驚きであった。

原始の密林を縫う広濶な河川、奔流の渦巻く中流の沢、懸屹の上流の滝の連続、そして太古の侭の山頂。とは言え、そのいくつかの要所々々には陸地測量部の僅かな石標が遺されていたし、その仕事に携わった旧土民の案内に導かれて、我々も漸く日高の山々に入っていた時代であった。

真夏、清冽透冷の川水に浸って歩む沢漕ぎ、函の側壁に足場を求めながら、深潭の碧青の水を渡る徒渉、これらは実に新しい経験であり、大きな冒険であり、又探検でもあった。当時このような原生自然の姿の世界が、この世にもあったのかと、思わず喚声をあげたことでもあり、その魅力の擒(とりこ)となり、機会ある毎に未開に近い連嶺を訪れることになったのだが、今にして思えば、まだまだ登り足りない思いに臍を噛む感がないでもない。

そもそもその最初の指導者がよかった。身近の先輩の教えもさることながら、当時案内人の水本文太郎の歩きぶりに心を打たれたものだった。滑りやすい丸い転石を、飛ぶように渡る足元の確かさ、水澪(みお)の変化を見て渡渉場所を撰択する敏捷さ、快適な野営場を決める勘のよさ、更に最も感心したのは急傾斜の雪渓の登り方であった。我々が四本爪の鉄樏(かなかんじき)を履いてようや

く登るのに、彼は草鞋穿きのまま、スタスタと登って行くではないか。考えてみると、旧土民は昔から熊狩りをするのにも、鉄樏を使用する知恵を持ち合せていなかったのであろう。しかし、熊ですら自然環境の順応性で、樏に相応する鋭い爪を有しているのだから、その熊を猟ることを生涯の仕事としている彼等にとって、その自然の形を採りいれる才覚のなかったことが日進月歩に遅れることになった所以かもしれない。ともあれ彼等は、その弱点を鍛錬によって補ったことになる。一旦滑落した場合、停止することの不可能に近い急斜面の夏の雪渓を、途中で伐って作った杖一本を頼りに、着実に攀って行く姿は現実離れしていた。しかし彼に言わせると、急斜面といえども、日照で融けた表面は鱗状に波打っていて、その舌端はめくり上るように斜度が緩い。そこに草鞋穿きの裏足先四分の一程を掛けると、絶対に滑らない。身体の平衡を保ちながら、精神の緊張を解くことなく歩高を繰り返せば、一キロも二キロもの距離は確実に行けるということだ。こんな理屈を彼は一ことでいってのけたものだった。

「訳はないよ。こうやって歩けば絶対大夫丈だよ」と。

その上、附近どこでも採ることのできる細身で丈夫な生木の杖は、ピッケル程にも役に立つ。邪魔なT字型もなくて軽く、握りも恰好で疲れない。石突は鉈ですっぱり切ってあるから、ピッケルの尖端部にも等しい。気を抜いた僅かのスリップ位には、有効に働くことであり、又それが着実な歩みを生みだす支えとなるのだ。

当時の水本文太郎は五十歳を過ぎていた筈だが、我々の天幕に入って寝ようともせず、焚火の傍で薄い毛布を被って夜を過していたが、二年後に再び彼に案内させて出掛けた神威岳の時には、大分老耗していた。荷物も余り背負えなくなっていたし、偃松漕ぎにも力がなかった。老化現象の早いのにも驚いたが、山登りそのものが強烈であったことも原因している。

× × × ×

徒渉の初歩を教わりながらの戸蔦別川(トタベツ)は、楽しい美しい沢であった。(註1)固い古生層を刳り抜いた、余り困難でない函の連続とか、急奔の岸辺のトラバースに新しい草鞋の感触を喜んだ。続いて、その名の通り美しい沢ピリカペタンを通って、札内岳の頂上に到着した時であった。文太郎は周囲を見廻すや否や、急いで背の荷物をおろして次の瘤目指して偃松をこぎだすのだ。

(注1) 昭和三年七月七日～十六日。同行者、山県浩、山口健児、名取忠夫、案内人、水本文太郎。戸蔦別川―ピリカペタン沢―札内岳―札内川上流―八の沢―カムイエクウチカウシ山往復―札内川を下る。

「どうしたんだ、水本」

「クマが居るゾ」

「なにイ」

よく見ると、大きな熊が二頭の小熊を連れて百メートル程離れた尾根の瘤の上にいるではないか。山刀一丁を腰に帯びただけで、文太郎が頂上を駈け降りる間もなく、熊は当方の気配に気付いて、親熊から北方の沢頭へと遁走すれば、それに続いて小熊達もあわてて姿を消してしまった。我々はホッと胸をなでおろしたが、文太郎はガッカリしたと帰って来た。さすがに狩人は年をとっても豪胆なものよと、これには感心させられたことであった。

熊の騒ぎも収って漸く四囲の景色を見廻すと、はじめての日高山脈とはいいながら、その眺めの素晴しさに、驚嘆の眼を見張らない訳にはゆかなかった。それ迄に経験した北海道の山々にありがちな円やかな尾根、平の多い峯を見慣れた我々にとって、このようにも鋭い尾根の連続があったのかと啓蒙され、又エサオマントッタペツ岳の圏谷の優美なこと、南方には国境尾根が重畳延々と連なり、夫々に小さな圏谷を懐いている形のよさ、その盟主一九七九・四メートル峰（後になってカムイエクウチカウシ山と名付けられた）の壮大さに感激するのであった。それらは今迄写真などにより憧れていたアルプスの山々、また我国の信州・飛騨の山脈に相似た姿をもっているものであった。その札内岳は十勝側に派生した尾根上にあるだけに、誠に良き展望台であり、日高山脈の典型的な相貌を余す所なく我我に展開してくれるのであった。

しかし、それからの隊の行動は熊に機先を制せられてか、日勝国境尾根に続く尾根筋の偃松の密林に阻まれたことに由ってか、一行は尾根縦走を取止めて、札内川上流へと下って行くのであった。しばらくして八の沢の合流迄来ると、野営跡があって焚火の灰が未だ暖かい。慶応の山岳部の連中が日高に入ると聞いていたが、一歩先を越されたのであった。熊に驚かされ萎縮さえせずに尾根筋を直行すれば、国境尾根はお花畠で歩き易くなるのだから、今宵はカムイエクウチカウシの頂上近くまで行けたのではなかったろうか。果して八の沢を溯って右股の急屹の雪渓を登りきると、カムイエクウチカウシ山の北の鞍部に再び新しい野営跡があった。正に一日の遅れで一九七九・四メートル峰カムイエクウチカウシ山は、慶応の斎藤長寿郎氏などの一行により登頂されていたのだ。

それでも尚、山はお花畠で美しく粧っている。天候は素晴しい。カムイエクウチカウシ山の頂上は悠然としていた。

札内川の八の沢の雪渓は、ピリカペタン沢の雪渓など問題にならない程に急斜度をもっていた。それをも文太郎は草鞋穿きの侭、先頭をきってさっさと登って行くのであった。またしても、このような急斜面を鉄樏もなしに攀りきる彼の足達者さに、再び感銘させられ教示されたことが、その後の私の山登りの生涯にとって、大きく影響してきたとも言えよう。

カムイエクウチカウシ山の頂上附近は美しいお花畠であっ

た。ここから眺めやる幌尻岳は、日高山脈の大御所にふさわしく、その名の示す如く大らかにどっしりと、七ツ沼の圏谷に残雪を鎌めて構えている。その左側にイドンナップ岳が、日高の山奥深く密林の中に収っている。南の方に連なる国境の峯々は、鋭い尾根筋を重なり合せて連なり、国境より分岐している一八三九メートル峰は、ヤオロマップ岳の右に続いて、鋭角を画いて素晴しく立派に見える。そんな感じとり方は誰しも同じとみえて、その前日に登頂した慶応の斎藤氏も、これらに魅せられ、再びイドンナップ岳、一八三九メートル峰を目指して出かけ、何れも私の先鞭をつけていたことが後になって知らされた。私のそれらの登頂は、後述することになるであろう。

私は第一回目の日高山脈の登山で、この山脈の奥知れぬ魅力を感じとったと申しても過言ではないのだ。

即ち翌昭和四年、一八三九メートル峰（現在迄無名峰）を登ることにした。勿論、未だ登山に未熟な年代であるから、先輩に懇願して計画したに違いないが、それも日高路から十勝側へと、高嶺を横断する山旅を計画し旅立ったのであった。現今のように交通が発達せず、林道も開発されていない時代に、アプローチの長い日高側から出発するのは、非常識に近かったであろう。しかも、旧土民すら川奥迄行ったことのないシピチャリ川の函の連続を越えて、前年にカムイエクウチカウシ山の頂きから眺めて恋情を懐いた、無名の一八三九メートル峰を目指したのであった。(註2)

（注2）昭和四年七月八日～二十二日。同行者、福西幸次郎、徳水正雄。人夫、幌村佐助。日高三石村歌笛―鳧舞川―メナシベツ川―コイカクシュシピチャリ川―一八二三メートル峰―カムイエクウチカウシ山―八の沢―札内川本流を降る。

日高側の旧土民は、早くから狩猟を離れたもの多く、和人なみの農耕民と化していた。その一人を山人夫として同行したのだが、彼は前山のピリカイ山を越えて、イペツ沢へ乗越す場所すら知らなかった。それでも山歩きの祖先の血は残っていることは当然で、沢歩き、簔漕ぎには達者で、頑張ってくれたのはさすがであった。川の中の悪場の連続の処、殆んど川岸の藪を漕がなければならない遡行は、小雨続きの天候と相俟って、一日数キロも進めない。そんな苦しい函川の遡行であるが、険しくも美しい函の瀞には、鱒が碧青の水中を悠々と游いでいたことが、鮮明に印象に残っている。

そのように静内川（シピチャリ）の本流へ、山越えで入り込んだ時には、その河原の広いのに驚いたが、半日も歩かない中に懸崖が迫り、河中を通過することは殆んど不可能に近い函の連続となり、その凄さに恐怖すら覚えたのであった。函を辺（へぢ）摺る簔漕ぎ、函と函の間の腰迄届く急湍の渡渉の数日の間に、五万分の一地図との不一致に禍いされて、一八三九メートル峰へと入る沢の合流を函の中で見落としてしまい、確かにそれと思いこんで遡った

沢は、一八二三メートル峰とカムイエクウチカウシ山との中間に達するコイポクシュシピチャリ沢であったのだ。その時は、そうとは判別されないままに右尾根に取付いて登ったのだが、遂に国境尾根に出た所は、目標の一八三九メートル峰の遥か北側の、一八二三メートル峰（コイポクサツナイ岳）の北鞍部に近かった。その場所から国境の尾根を歩くとすれば、更に往復二日を必要とするであろう。十数日の前人未踏の沢歩きの苦闘の結果が、この態なので一時は情なく感じたが、止むを得ないとコイポクサツナイ岳を往復するにとどめ、カムイエクウチカウシ山へと目指したのであったが、鞍部への深い偃松潜ぎに終日を費しても、一向に距離はかせげない。漸く偃松も小さくなり、お花畠の点綴が続くようになった時、カムイエクウチカウシ山の南鞍部の手前の岩瘤に着いて、不図見ると西側の雪渓に親子熊が、東側の圏谷底（カールボーデン）には一頭の巨熊がいるではないか。

四人は岩蔭に身をひそめ、僅かに顔だけを出して様子を見守っていたが、一向に動き去る気配もない。それはそうであろう。彼等にとって唯一の安全な憩場であり、高山植物の根の御馳走のある食卓でもあるわけで、人間共の侵入に邪魔されることなど、意識外であるのは当然と云わなければならない。併しそのままでは我々は行動できない。恐る恐る岩瘤の上に上半身を出し、半分逃げ腰にヤッホー、ヤッホーを繰返す。熊の方では、姿もはっきりしない異様な天の声に安穏を妨げられ、暫らく左見右見して鼻を上にあげて情勢を伺っていたが、未知の不安にかられてか、身の安全を保つ本能から、一散に籔中を走り去った。唯余程不可思議に思ったのであろう。時々立止っては振り返り、又一散に走り下って行くのであった。その圏谷底にその夜の宿を設けたのだが、我々も何となく不安で、まんじりともしなかった。同行の旧土民の佐助は、最初の中は天幕外で毛布にくるまって寝ていたが、熊の襲来するという妄想にうなされてか、遂に我々の天幕の中に入りこんで来て「淋しい、淋しい」と繰り返すのであった。

翌日、カムイエクウチカウシ山への途上の尾根上から眺めた四人用の天幕の大きさと熊の姿の記憶が同等に思えたこと、熊の走り去った跡に偃松や榛の木の一握りもある枝が、へし折られていることなどを見ては、今更ながら身震いをするのであった。しかし、一方では「里熊は悪魔で怖（こわ）いが、山の熊は神（カムイ）で人に危害を与えない」との譬を多少信用したことも事実である。

前年に続いて訪れたカムイエクウチカウシ山の頂上は晴れていて、そこからの景観は誠に素晴しいものであった。国境尾根迄の十数日間は、快晴の日が殆んど無かったのに、何と恵まれたことだろう。たとえ目標の一八三九メートル峰には登れなかったにせよ、同行の友等にとって初めての山頂であるのだから、充分の満足感で重畳とした連嶺を眺め尽すのであった。

愈々明日は勝手知った札内川を下って帰途に着くのだ。長い

間の沢歩きと、雨のために予定より遅れた行程に、食糧を節約していた我々は、その夜、腹一杯の飯を摂ることにした。副食物は昆布の佃煮と四人に一本の鰊のくん製、それにわかめの味噌汁だけだったが、皆充分に満腹の喜びを味わっていた。又その翌日の八の沢の降りには、日高側で僅かしか獲られなかった岩魚にも、充分に恵まれたのであった。

× × × ×

苦しく辛かった登攀も、頂上の眺望に恵まれる時、途上の労苦は忘れ去られて、唯それだけが強い印象として残り、甘美な憶い出につながるものだ。そして翌年（昭和五年）も亦難渋の山旅にのぼることになったのは、余程山の魅力の擒（とりこ）となったからであろう。

即ち未登の神威岳（註3）。先輩も慶応の連中も登り果せなかった奥殿堂、日高山脈中最も奥深い頂上を目標に出かけるのであった。最初から難儀な山と覚悟していた故か、上流の函の高捲きも、熊も通らぬ深い偃松の尾根も、鳥の巣のような崖縁の幕営地も、考える程苦にならなかったが、豪雨の中の待望の頂上は初登という感激に湧き立たなかった。それよりも、晴間に眺めたピリカヌプリ、トカチヌプリの姿は、小さいながら群を抜き、如何にも登高欲をそそるものであり、後年、坂本直行、中野征紀両君と共にそれらの山旅にのぼり、アポイヌプリ登山も含めて楽しい旅行を試みたのも、その時の印象が強かったことによるものであった。

（注3）昭和五年七月十二日～二十日。同行者、有岡隆。案内人、水本文太郎。ヌビナイ川―ソエマツ岳（一六四六メートル峰）―中の川上流―神威岳―往路を下る。

神威岳の紀行は『北大山岳部々報』第三号に記載してあるので、ここでは詳記しないことにする。

× × × ×

昭和三・四年頃から、漸く積雪期の日高山脈が目指されるようになったが、本格的な冬山登山には、事前から周到な準備を行わなければならない。又三月中旬以降の春山登山は、林道が開発されていなかった当時では、増水のため渡渉出来る径路は殆んどないと言ってもよい。どうやって日高山脈に足を踏み入れようか。中野征紀と二人は、四月であれば溯る川が小さく、積雪で埋っているであろうと、芽室岳からの縦走を計画したのであった（註4）。どこまで行けることか、エサオマントッタペツ岳まで行けるとすれば、札内岳、十勝ポロシリ岳と側稜を通ることができ、増水の渡渉は避けられると考えた。また急峻の尾根が多いのだから、ゾンメルシーは使用しないで、輪樏とアイゼンの併用を試みることにした。これは実行してみると、最初の登りの軟雪と、上部での降雪のために、予想以上の労力を強いられる結果となった。その上不幸にして、芽室岳を越えて南側の

鞍部に達した時に、吹雪に見舞われ終日停滞した折、晴間に行なった焚火の煙を天幕内に入れて暖を採ろうとし、不完全燃焼を起させて、軽い一酸化炭素中毒症状にかかって体力を消耗し、遂に前進を断念しなければならなかった。そのため、それから先の肝心の尾根上での歩行の効果は、体験されないでしまったのは残念至極である。

（注4）昭和六年四月六日～十日。同行者、中野征紀。人夫、水本新吉。芽室川―芽室岳―一四〇〇メートル国境鞍部―芽室岳―往路を引返す。

その後、中野は昭和十二年五月中旬スキーを利用して美生岳迄縦走して、その目的を果したのだが、それは私にとって羨望の限りと言わなければならない。

× × × ×

夏が再び訪れると、その春に目的を果さなかった山脈の北部を訪れることにした我々は、春にも伴った新吉（前述の文太郎の息子）を連れて、戸蔦別川を溯行していた。(注5)

（注5）昭和六年七月十六日～二十六日。同行者、徳永正雄、伊藤紀克、石橋正夫。人夫、水本新吉。戸蔦別川―エサオマントッタペツ川―エサオマントッタペツ岳―新冠川上流―幌尻岳―戸蔦別岳―美生岳―美生川

戸蔦別川は四年前にくらべて、造材もオピリネップ沢まで入り、合流点に飯場が出来て楽になっていた。オピリネップ沢合流よりピリカペタン沢迄は、美しい岩場もあり実に楽しい渡渉であった。現今では、更に上流迄林道が出来ているのだから便利であるが、沢歩きの楽しさとその妙味が損われてしまったことは、後世にとって気の毒としか言いようがない。そのピリカペタン沢合流から上流は、大きい転石で歩き難く、二ヶ所の滝と小さな函などもあったが、中流程快適ではなかった。やがて二股に到達するのだが、左側がエサオマントッタペツ沢である。これも合流から一キロ程に、一寸した滝があり、その後二、三の滝はあったが、何程のこともなく、又水量も少なく楽な沢登りであった。写真でみると、残雪が二段構えの美しい姿をもった圏谷から落ちる滝の下の雪渓から、アイゼンを穿いて直登したのだが、その年は残雪が多く、その日天候は思わしくなかったが、快適なアイゼンワークであったことを記憶している。特に最後の圏谷壁の登りは傾斜が強く、ステップをきらねばならぬ程であった。その経験があってか、学校卒業後の昭和十一年五月、奥穂高の単独行を試みた時、涸沢の一番右寄りの北穂高に近い沢頭を登った時、最後の登りのアイスカッティングに、自信をもって登りきれたことであった。

エサオマントッタペツ岳の頂上も、霧の中で頂上を踏んだというだけで、新冠川上流へと下ることになった。というのは国境尾根の偃松の密生が甚だしく、とても重荷を背負って通過出来そうもない。これは今迄の数回の日勝国境尾根で、痛切に知

らされていたものだ。むしろ沢を下って登り直すに越したことはない。但し、その沢の状態はどうであろうか。この山脈では最後の一〇〇〇メートルが屹立して、沢も滝の連続となっているのが通例であるのだが、新冠川のその上流は、心配していた程悪くはなかった。幌尻岳への二股で再び登攀にかかったが、こちらの方は殆んど沢全体が一枚岩の急湍、滝の連続といってもよく、幸にして水量は少ないので、宛も膝から下を水しぶきの中に浸した侭での岩登りに等しかった。その急登の終る所は、突如緩やかな圏谷底となり、お花畠の中を清らかな雪融水の細流が、迂曲する奥殿であった。ここが後年七ツ沼のカールと称せられる、圏谷の入口であった。

この日、幌尻岳は霧の中に沈潜していた。キャンプ地から小一時間で頂上に達し、二時間余も晴を待つ我々に微笑を与えてくれなかった。霧の摸糊の中を歩き、摸糊の中を登る、そんな数日を繰り返して、一行は戸蔦別岳を越えて北上した。その国境尾根の宿泊の最後の日の夕刻濃霧が急に薄れて、下界に雲海を造り、カムイの殿堂が展開されてゆく。

日高山脈はもとより、遠く北方に十勝岳連峯、大雪山彙、西に芦別、夕張山脈、その遠くに後方羊蹄山、東方には阿寒、知床の残照が見渡され、山登りの醍醐味を満喫するのであった。

その翌日、美生岳を越えて美生川の源流に懸る雪渓は、急嵓な下降であった。我々は楽な尾根歩きから、急斜面の雪渓へと移行するのに、身体の平衡感を失っていた。特に、初めてこの山行に参加した部員を引き連れていると云うのに、ザイルを持参していなかった。ザイル無しで細引などによる縦の確保より、横の確保が新人に安心であろうかと試みた、横列下降は脆ろかった。腰を引かれた一人の滑落を止める術がない。五人は一団となり、次いで二人宛と新吉一人に別れ離れになり、ずるずると滑降しだし、次第に速力を増す。体を平らにせよ、何とかアイゼン穿けた足で引かかりをつくれよ、弾んだらお仕舞だぞ。出掛ける時、駅頭でI君のお母さんに、初めての山歩きですから呉々も宜しくと頼まれたっけ、彼は一人ッ子だったな、下には滝が開いているだろうな。そんな瞬時の考えの中で、漸くアイゼンの歯止めが効いて速力が落ちてくる。しめたと咄嗟の間に立ち上り、斜面を数歩踏鞴を踏んでから、一緒の友を押し止める。他は未だ滑落して行く、霧の中である。下には滝の口が開いているらしく、丁東の河声が響いてくる。腹這いになれよ、飛ばされるなよと声を掛けてやるが、友等は霧の中に薄れるように消えて行く。失敗したな、滝壷に落ちなければよいが、やはり駄目かなと思っていると、下から微かにオーイ、オーイと呼声がする。助かったかと走り下ると、幸いに二人は無事であった。

ただ新吉の姿は見えない。沢の傾斜も稍々緩くなっているし、斜面に対するバランスも取戻したことにて、急ぎ降って行く

と、新吉はうまい工合に滝口の方へ行かずに、傍の潅木の斜面に突込んでいた。但し胸背部腹部を打撲でやられている。肋骨骨折は無さそうだが、痛みが強いらしくうんうん唸っている。やれやれと人夫の分迄背負う帰途の荷の重さ。しかし悪いけど友でなくてよかったとつくづく思う。それらの友だちには、その後益々山が好きになって、特にI君は地質専攻で数授になるほど、山に情熱をそそぐことになった後日譚がある。

× × × ×

その冬は、冬季合宿と中央高地の登山に費やされ、日高山脈迄には及ばなかった。漸く春になって積雪期の神威岳、ペテガリ岳を目指して中の川溯行を試みたのだが、暖冬のため函の融水が早く通過困難であり、それに続く大雪のために目的は果されないでしまった。(註6)

(注6) 昭和七年三月十八日～二十日。同行者、坂本直行。中の川途中迄で溯行不能。

野崎牧場で数日を通す中に、楽古岳を登ろうということになり、直行氏と二人朝早く馬橇を駈る。早春の凍路を馬橇は快適に走り、山麓の札楽古の部落に二時間程にて到着し、それより長駆深雪を踏んで頂上に立ったのは、午後二時であった(昭和七年三月二十六日のこと)。冬季としては勿論初登頂であったのだ。その時の苦労が今でも夢の中に現れて来る。それも真白いピラミッドを果しなく登るという夢なのだ。眺望は恵まれなかったが帰りの滑降はまずまずであった。だがその後がいけない。平地の雪融けが甚しくて馬橇は滑らず、牧場に帰り着いたのは真夜中近くであった。それにしても、野崎牧場から日帰りで楽古岳を往復するなどということは前代未聞で、今に到る迄若い連中を不思議がらせ、語り草となっている。

日高山脈の登山も、その頃から愈々旺んになって、北大山岳部員により一通り登られたことになり、所謂バリエーション・ルートが計画されることになったのだが、我々もその一つとして、日高国最奥の千呂露村(現在の穂別町)から、額平川を溯って幌尻岳へ、次いで新冠川を下ってイドンナップ岳へ、更に春別川へ降り、私にとって三度目のカムイエクウチカウシ山へと登る、山谿放浪の旅に上ったのであった。(註7)

(注7) 昭和七年七月二十五日～八月三日。同行者、中野征紀。千呂露川—額平川—幌尻岳—新冠川上流—イドンナップ岳—春別川上流—カムイエクウチカウシ山—札内川。

詳細は『北大山岳部々報』第四号に記載されてあるが、気の置けない山友と二人で天候に恵まれ、山に恵まれ、未知に憧れ、艱難危険を克服しての山旅程、後々迄に憶い出されるものはない。額平川の函の中の渡渉、源流の急湍に足を掬われて危うく滝壺へ叩き落されようとした驚怖、滝の連続の小沢から、突然に圏谷底の大らかな原始の桃源境に躍り出た時の感激、そして前年に果たせなかった幌尻岳からの雄大な眺望、前人未踏

の新冠川の上流――これは現在ではイドンナップ直下にダムが出来、ダムサイトから一両日で幌尻岳往復が可能になっていると聞く――その上流の函の通過の可否に対する危惧と、地図の不正確のための位置不明からくる不安など。又イドンナップ岳初登の感激（後年記録の調査で慶応の斎藤氏一行が、昭和三年カムイエクウチカウシ山と共に初登の由）、カムイエクウチカウシ山への尾根の猛烈な潅木（ブッシュ）の密林の籔漕ぎと、密生した偃松、頂上直下の快適な岩尾根登り、そして快晴のカムイエクウチカウシ山頂、など数え上げると記憶の走馬灯は、次々と廻っていく。

その山旅の帰途、野崎牧場を訪れた二人は再び坂本直行、徳永正雄の両君を加えて、日高山脈十勝岳（トカチヌプリ）（一四五七・二メートル）（注8）へと楽古川を溯るのであった。先年神威岳から眺めて、登高欲をそそられた待望の頂上であったが、天候に恵まれずに、特に印象に残る景観は得られなかったし、日高側に降るメナシュンペツ川への降りは、沢頭が悪るく籔漕ぎで、滝下まで下ると沢は荒廃していた。けれども、続いて出掛けたアポイヌプリは快晴に恵まれて、低いながらお花畠の良さと相俟って、極めて快過な山行であったし、また襟裳岬での漁家の一泊も亦捨て難い趣があった。

（注8）昭和七年八月七日～十六日。同行者、坂本直行、中野征紀、徳永正雄。豊似村野崎牧場―楽古川―トカチヌプリ岳―メナシュンペツ川―浦河―アポイ岳―襟裳岬―豊似村。

その年（昭和七年）の秋も過ぎ、やがて冬が訪れると日勝路への恋慕が募って来る。山旅の規模は、連嶺に慣れると共に大仰になって行き、今度は一月の戸蔦別川上流に入る計画（注9）が出来上ってしまうのであった。昭和四年冬季に先輩達が行なった幌尻岳登頂の経験を基礎とし、その時の根拠地の組立小屋を利用して、戸蔦別岳、幌尻岳、エサオマントッタペツ岳、美生岳（ピパイオ）、札内岳を、放射状に登ろうという欲張ったものだった。十勝岳のスキー合宿では、初年班のリーダーをやらされて、六日間ゲレンデを登ったり滑降したりの繰返しで、仲間が楽しそうに周囲の山々の登頂を終えて帰ってくるのを、羨ましく横目で眺めて張り切っていたのだが、如何せん天候に恵まれず、それ迄の好天続きのために積雪量が少ない上に、行動中はドカ雪が降り続いて、所期の目的は果せず仕舞いであった。

（注9）昭和七年十二月三十日～昭和八年一月十日。同行者、坂本直行、金光正次、伊藤紀克、佐藤刀之助、照井孝太郎。戸蔦別川―上流仮小屋―戸蔦別岳―仮小屋―天候悪化のため、その他の登山計画を中止する。

僅かに戸蔦別岳の頂上のみを踏んだに過ぎなかったが、その十日余の山暮らしは、心楽しいものであった。オピリネップ沢合流の造材小屋は、大晦日であったので、我々にも密柑箱一つ宛の正月用の餅、みかん、御馳走と一本の酒を饗応されて、大

喜びであったり、その酒の方は柚夫達に提供して感激され、話に唄に弾んだ一夜を過したことも思い出される。

戸蔦別川は積雪が少なく雪橋が不充分で、川を渡るのに散々苦労し、遂に函の入口の渡渉で、私は薄い氷を踏み抜いて、気温零下十数度の川の中で水浴びをして、止むをえず停滞して半日を無駄にしたり、その翌日からの大雪のためラッセルに苦労し、先頭二人は空身で踏みつけをして、再び荷を取りに戻るという頑張りをやったりして、やっと根拠地の小屋に到達してみると、利用することなく、四年間の年月を経た無人小屋は荒れ果て、僅かに柱と屋根半分が残っているという有様。漸く応急修理と天幕併用で旬日の寝場所を作り、薪も伐り出されて雪の中に暖炉も燃えて来た時の楽しさは、何といっても若者の独壇場であったのだ。冷たさも寒さも超越して、労苦を歓びに変える力が湧き出るのだった。そして、それが四十年を経た現在の甘美な憶い出につながっている。その後の登行も恵まれなかった。鉈で伐り開かなければ、通過出来ない倭小木の密林もあった。寒気の厳しいわりに重い深雪に、登りにも滑降にも悩まされた。濃霧の中の頂上も沢に下れば晴れて、アーベントロートに映えているという不運もあった。

結局は目的の山々の何れも、登る途中迄のラッセルの往復にのみ、費やされたような数日ではあったのだが、それをしも悲哀と感じない山歩きであるのだから、余程お人好しに出来てるのであろう。苦労は全て忘却の彼方に押しやって、零下十数度の中の豪勢な焚火に顔をほてらせ、何事か語り、笑い、そして歌うという原始への復帰が、得難い喜びでもあったのだろう。こんなことは滅多に経験できるものではない。特に現代のように何をやってもいけません、これも駄目ですというのでは、若者の自然性を発揮する場が無いであろう。その点、昔は良かったものだ。当然なすべき規律は自立性に委ねて、大らかに抱擁しておいてくれたから、一見天衣無縫に振舞ってなお、後に悔いを残すことが無かったということだろう。

閑話休題、この山行で知り得たことは、日高山脈のスキーゲレンデも、尾根の取付きは悪いが、それより圏谷底に達する尾根、また圏谷壁のスキーデポー迄は、絶好のものであるということだった。このような大斜面の痛快な滑降を、後年再び経験することになった（『北大山岳部々報』第四号―一月の戸蔦別川―金光記参照）。

その夏は試験勉強に追われたのか、連嶺を訪れていない。

× × × ×

再び訪れたのは一月の札内川上流の山々であった[注10]（拙稿「一月の日高山脈」―『山岳』第二十九年第三号所収及び照井記『北大山岳部々報』第五号所収「一月の札内川上流」）。

（注10）昭和八年十二月二十八日～昭和九年一月十五日。同行者、坂本直行、照井孝太郎。札内川―コイボクサッナイ川―コイボ

クサツナイ岳―ヤオロマップ岳―コイボクサツナイ川―札内川上流仮小屋―カムイエクウチカウシ山―札内川本流下降。

山の中の十六日間の生活に必要な重荷を背負って、南札内の小学校男沢先生の家から、トムラウシ沢合流の造材飯場迄の道程は遠く、相当の労働であった。その荷物も、前年の戸蔦別川上流の野営の欠陥を補うために、股迄のゴム長靴や、小屋の整備のための釘、カスガイ、建築紙、それに玄能、鉞まで持込むのだから大したものだった。

行程の前半は五日分の食糧、天幕、装備を担ってコイボクサツナイ沢に入った。積雪は未だ充分とは云えないが、沢は殆んど凍結して雪橋も堅固にでき上っていて、比較的歩き易かった。唯途中の函は開いているので、捲くのに多少手間取った位であった。

二股でのキャンプは、針葉樹の枝葉の厚いクッションも出来上り、太い古損木の焚火で豪勢であったが、夜半より大雪が降り天幕は半ば埋め去られ、翌朝にかけては大暴風雪となり、新雪は一メートル近くも積もり、国境尾根は轟々と山鳴りが甚だしく、沢の中は逆捲く雪煙に、うず高い吹溜りができていく。その名残りは更に翌朝迄続き、その上気温は著しく低下していった。恐らく零下三十度を越していたことであろう。

晴間を利用して登路を求めるのだが、結局は左股を遡って行くことになった。雪に埋もれた滝を通り過ぎ、沢が懸崖のため函をつくり、狭まる辺りから再び滝壺の水面が所々開き、通過できそうにもない。止むを得ず、左側の急斜面の小尾根を、スキーを脱ぎ輪樏で登るのだが、深い新雪と密生したブッシュの急斜面のため、殆んど溝を開鑿するようなラッセルに苦労するのであった。しかし無理をして、沢通した登路を求めないのが良策であった。漠然と、沢頭の真白い樹木の少ない急斜面に不安を感じたのと、新雪の降った直後の危険を考慮して、一見過酷なラッセルの労働を求めたのであったが、数年後になって後輩の有馬洋君一行が、積雪の状況の良い侭に直登して、遂に雪崩に遭遇する悲惨事を惹き起すことに相成ったのだ。

未だ北海道の積雪期の登山暦は日浅く、厳冬の雪崩に対して、明確な認識が得られなかった当時にせよ、その前年に十勝岳の上ホロカメットク山への登路で、さほどに急斜面でない所で、十二月合宿中に雪崩事故に遭っているのだから、我々も漠然とした不安感でそこを避けたなどと表現せずに、明確に雪崩の危険を感得して、それを後輩に啓示すべきであったと悔まれてならない。

その過酷なまでのラッセルに、側稜の三分の二も登らないで一日は終ってしまった。そして翌日は空は晴れているものの、山頂附近は強風のため雪煙を巻き上げ、吹雪に暴れている。寒気は益々きびしく到底登頂を試みる状態ではなかった。だが、悪天候も三日間も経てば好転するもので、漸く局所低気圧も通

過したのであろう。その夜は谿間の空に星が輝き、ヤオロマップ岳の白い尾根の肩に半月がかかっていた。

夜の明けやらぬ中に、今日こそ一八三九メートル峰へと張り切って用意を備え、早朝六時という薄暗い中を出発した。先日のラッセルの跡は、連日の寒気に再結晶して、固まっているので歩き易く、アイゼンと輪樏の併用で、能率をあげることができたが、ラッセル跡がなくなって新雪に入ると、再び悪戦苦闘が始まるのであって、腰まで雪に埋まり、ブッシュにつかまり、身体を這いずり上げるようにして登ること四時間余、漸く郡境尾根に取付いたが、予想に反してここも軟雪の斜面に悩まされるのであった。このような悪条件のために、行程は予定通り進まず、国境尾根からの堅雪にピッチを上げるが、日高側から吹きつける烈風は収っていないし、快晴ではあるが超低温のために、体温はグングン奪われていく。ヤオロマップ岳迄頑張ったが、時既に午近くなってしまった。

しかしながら、その間に国境尾根から眺めやる四囲の景観は、全く申し分なかった。白一色に凝結した重畳延々の国境連嶺は、鋭角に空を截っている。登頂を予定していた一八三九メートル峰は、間近く屹然としている。その先にルベツネ岳が、ペテガリ岳が頭角を顕わし、更に続いて遠く遥かに数々の峯々が——その南の彼方、山脈の尽きる所に襟裳の海が、黄金緑に逆光に輝いている。北の方にはコイポクサツナイ岳を前座に据えて、カムイエクウチカウシ山が厳めしく我々を見下しており、幌尻岳は相変らずどっしりと、エサオマントッタベツ岳を従えている。その遠くには夕張山脈が、芦別岳が、そして札幌近郊の山々、蝦夷富士までが眺め渡されるのであった。

予想外の登りのラッセルに時間を費やされ、ヤオロマップ岳に到った時は、更に長駆して一八三九メートル峰を往復するには、時間の余裕がなかった。またしても我々は、一八三九メートル峰を諦めて、帰途につかねばならなかった。しかし、午後になると烈風も次第に収まり、コイポクサツナイ岳に寄り道した頃は全く静かになった。我々は直ちに沢に下ることが惜しまれて、雪の上にどっかりと腰を下して写真を撮ったり、スケッチをしたりして、遂に夕暗が迫り山々が火熠のような夕焼に包まれるまで、四囲の眺めを恣にしてから、名残惜し気に急嵓の下降へと就くのであった。

その後は札内川の本流に引き返して、合流に残して来た荷物を加えて、更に上流に向ったのであったが、その間の種々のできごとが今になっても事細かに憶い出されてくる。氷結の函の入口の渡渉に役立てようと、遥々と背負ってきたゴム長靴にピッケルを引っかけて穴をあけてしまい、酷寒のためゴムノリが効かず修理に手間取ったこと、数日来のドカ雪と重荷のラッセルに閉口垂れて、前年戸蔦別川の時試みたように、空身のラッセルと後戻りしての重荷の行進をする二重手間を、三人が交互

に行う苦労や、骨組しか残っていない十二平方メートル程の小屋を、持参の修理品を用いて快適な小屋に仕立て、その中で少し煙いのが難であったが、悠々と焚火にあたって、登高後の休養を充分に得たこと、八の沢の合流から眺めたカムイエクウチカウシ山頂の燃えるような真紅の朝焼の、類のない美しさに我を忘れたこと、又その山頂附近から眺めた山々の夕焼の豪壮さに見ほれて立ち尽し、暗くなり初めてから帰途に就き、遂に暗中の下降の数時間を持たねばならなかったこと。前日登頂できなかったカムイエクウチカウシ山へ、翌日再び出かけて、登りに三時間余を要した圏谷底とその壁の大斜面を、僅か十数分の大ボーゲンを画いて滑降した痛快な感激、等々が今だに脳裏に新しい記憶として留められている。

その思い出つきない仮小屋生活の間も、続いての天候不順のために行程が捗らず、遂にその他の山々には登頂できなかったが、僅か三人でなお、零下三十度以下に及ぶ極寒の山奥の原始生活の経験は得難く、貴重な一生の一齣であった。そして、その仮小屋は三月に再び山の仲間達によって利用され、大いにその効を発揮し、数々の登山の成果を獲たことでもあった。

× × × ×

七年間に亙る学生々活も、愈々残り少なくなり、やがて掉尾の夏休が到来した。日高山脈なくしては登山を考えられなくなっている私は、再び中野と共々に、冬季に果たし得なかったコイポクサツナイ岳より国境を南下して、ペテガリ岳を経て中の岳に至る長駆を試みることになった。(注11) これが完成すれば日高山脈も芽室岳から楽古岳、いな襟裳岬までの要点を踏破したことになるのだ。

(注11) 昭和九年七月三日～七月十五日。同行者、中野征紀。コイポクサツナイ川―コイポクサツナイ岳―ヤオロマップ岳―一八三九メートル峰―ルベツネ岳―ペテガリ岳―中の川下降。

今にして思えば、その山旅も余り天候に恵まれない十数日ではあったが、よく所期の目標を歩き通しえたのは、頑張り屋では人後に落ちない、中野との二人連れであったからに外ならない。

その年の夏、山岳部の連中は期せずしてペテガリ岳を中心に、集中登山の形態を採ったことになる。現今のように特に予め会合を開いて、計算的に検討したのでもないのだが、各々の班のリーダーの計画を集めてみると、そうなっていたのだ。そんなことも、昔の連中の呑気さの中に気の合った様子がうかがわれる。山の好きな同志が相集って、意気の合った仲間で山を歩き廻るか、さもなければ初心者を募って、その先導者は山に行ってみたいと希望する人達を保護し、指導し、安全に登山を全うさせることに、喜びと意義を見出すのが常だった。

先輩などと思い上ったり、後輩を荷担ぎ人夫代りにして山に行こうなんて、さもしい根性など一片も持ち合わせていなかった。それだけに、どんな悪条件にも閉口垂れないし、負けもし

ない、むしろ悪条件になればなる程、我ながら驚く程の余力が出て、淡々喜々として、それを受け入れて行ったとも言えよう。

この山行も、ヤオロマップ岳と久恋の一八三九メートル峰は稍々晴れたのは幸であったが、間もなく暗雲が低迷して、折角の壮大な連嶺の眺望は得られることなく、唯密生した偃松の尾根の往復に苦労したのが、印象に残っている。又その後がいけなかった。暗雲は更に拡がり、遂に雨となって、ヤオロマップ岳直下の野営は、雪渓まで水を汲みに行くこともできず、みじめなものであった。翌日も濃霧と小雨の中の行動で、全身ずぶ濡れになりながら歩き通した。その夜も水場はなく雪渓も見当らず、再び飲料水に乏しい乾パン食生活。二日前にヤオロマップ岳より眺めた、ルベツネ岳の小さな雪渓を目当てに、濃霧の中の数漕ぎ数時間、漸くルベツネ岳の肩まで頑張って、雪渓に辿りついて炊いた昼食のうまかったこと、ましてや霧は次第に晴れ上ってきた。これだから苦労がやめられないと、喜んだのも束の間で、翌朝のペテガリ岳の素晴らしい眺めを期待して、ルベツネ岳の南側の肩に泊ったのだが、天候は我々に味方してくれなかった。夜になってから風雨が強まり、二日間びっしり降り込められてしまい、再び雨の中での飲料水に不自由な生活を、強いられなければならなかった。漸く飯盒に受けた雨水と乾パンの二日間で、その上、北海道では珍らしく山蛭の訪問をうける仕末であった。

その後僅かの晴間をみて登ったペテガリ岳も濃霧の中で、長年の憧れの頂上も、既に慶応の連中の残したと覚しいチョコレートの銀紙の残渣に、幻滅の悲哀をかこつばかりであった。模糊の中を下降する尾根は、行方さえ定かではなく、一度はヤオロマップ川の上流へと迷い込み、再び引返して降れば、やがて河音の遠く轟くのに気が付く。地図を按ずれば、今度は深く日高側の源流にと落ち込んでいるのであった。そんなこんなで、その瘠尾根の一部に鳥の巣のような野営で、三度目の水の無い一夜を過すことになった。翌日は幸に晴れたので地形を見直すと、成程間違える訳だ。ペテガリ岳の頂上から主山稜は、圏谷状の地形を左右に抱いて、その中に小尾根となってヤオロマップ川上流に急落し、国境尾根はその途中から分岐しているのであった。とても五万分の一図幅に示されているような、広尾根などどこにもありはしない。

水に渇えて二人は、直ちに中の川源頭の急峻な雪渓に水を求めて降ったのであったが、水こそ充分に得られはしたものの、更に降って雪渓が尽きる所は滝の連続であり、かろうじて数ケ所の滝を捲いて降りた所は大瓮穴を成して、周囲から落ちる滝は七、八十メートルの落差をもって一つの滝壺に集まり、轟々の水煙をあげている物凄さであった。二人は暫らくその落口に立って、茫然とその壮観に見とれていたが、現実に戻ると、それは下降不可能ということなのだ。疲れた身体に鞭打つよう

に、再び登りなおす国境尾根までの遠いこと、奈落から浮び上って、天界にも達するごとき思いがしたことが脳裏に浮んでくる。しかし夜は久々に晴れ上り、見渡す山々の壮観は、飽かぬ眺めを提供してくれたことだった。

先に懲りて、今度は中の川の上二股尾根を降ったのであるが優松も根曲り笹も下降のこととて、さほど苦にならず、樹林帯に入れば下草は疎らで歩き易かった。不図下方で人声がする。段々に近付いてみると、石橋(恭一郎)の一行であった。矢張り天候不順のため行程が遅れていたのだ。

上二股からの中の川は、小さな函が点綴した綺麗な沢であり、楽しい渡渉を持つことが出来た。特に函の出口の急湍を一〇〇メートル程も游ぎ下ったことは、他では一寸類のない試みでもあった。尾根上ではあれ程雨と濃霧に悩まされたのに、沢に下れば何んと天気の好かったことか。最後の夜は河原の豊富な流木の豪華な焚火に暮れてゆき、それが我が日高山脈遍歴の最後を飾ってくれたのであった。

今も憶う。黝々の夜空に、星が渓間の空合に点滅し、せせらぎの傍の燠火が次第に消え細ってゆくのを。

再び訪れようとの望みも、その後の人生の移り、世の変りと共に果たす機会もなく、既に三十年余を経てしまったのだ。交通が便となり、林道が開発されたと言ってもなお、日高山脈は秘奥の世界であり、若者の修験場として残されており、過去の人の憶い出にのみ生きているところでもあるのだ。

(一九六九年九月三〇日記)

ランガール登頂（一九六八年）

立花種則

チトラル、一九六八年七月――この西パキスタンの北辺の小さな町の名前も、われわれ日本人にとってはヒンズー・クシュおよびヒンズー・ラジ山群への出発点として、聞き馴れたものとなっていた。

私たち早稲田大学岳友会に属する三人も、七月七日、連絡将校として私たちのパーティに配属されたパキスタン陸軍のナシーブ大尉と共に、ペシャワルから空路チトラルへやって来たのだったが、入山に関する事務手続きや荷物の輸送の問題で予定外の時間を費やし、先発の二名（鈴木理已、野口勝志）はカラチに到着してから二十三日目、後発の私は九日目に、やっとこの地を踏むことができた状態であった。

しかしながら、私たちは更にもうひとつの失敗をくり返し、チトラルを出発するまでに更に十三日間の滞在を余儀なくされた。それはペシャワルからチトラルへの荷物の輸送の問題で、私たちは大尉の提言もあり、全て空輸の手配をしたのだが、私たちの乗ってきた便を最後に、天候の悪化により定期便が運航を停止し、約九〇〇キログラムの荷物がペシャワル空港にストップしてしまい、結局野口と大尉がロワライ峠越えで、陸路ペシャワルまで荷物を引取りに戻るという事態になったためである。

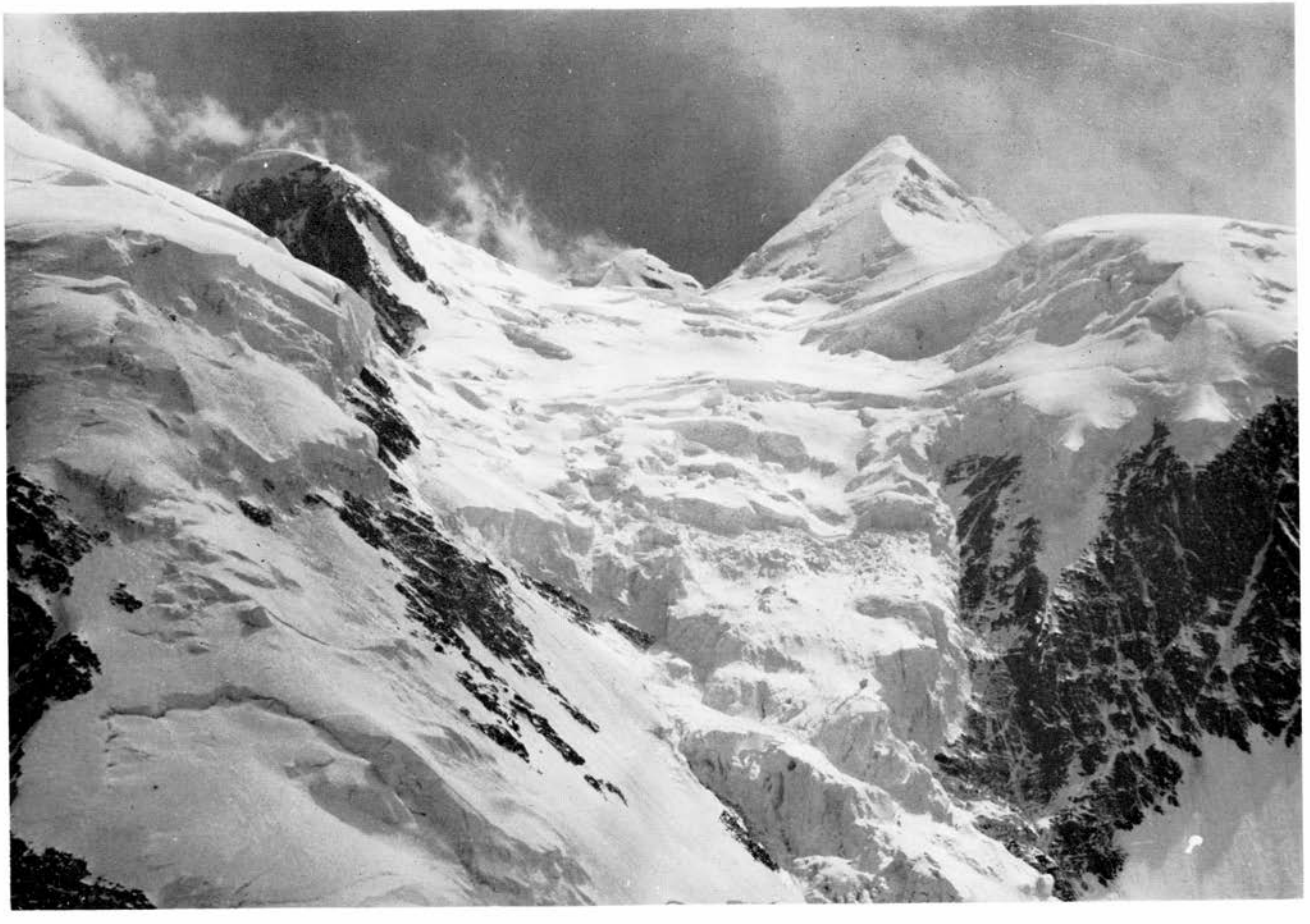
このことはチトラルに到着した翌日、同じ便に同乗していた大使館の原書記官に同行して、現地のPA（ポリティカル・エイジェント）のアブドル・カユン氏を訪問した際にも指摘されたが、残念ながら既に手遅れであった。

この間、チトラルは年に一回のお祭りで、多くの人たちが奥地から集って来ていた。

計画から出発まで

私たちがこのヒンズー・クシュ山群での登山を考えたのは、一九六五年の井田隊（ペルー・アンデスのネバド・ランラパルカとネバド・オクシャパルカに登頂―『山岳』第六十一年参照）の成功のニュースが日本に届いた頃であった。もっとも、この時点ではつぎの隊は三年後一九六八年、目標とする山域はヒマラヤかアンデスのいずれか、という程度であった。しかし、参加を希望する会員が定期的に集って、各自の案を持ち寄って、少しずつ

ランガール主峰の頂上直下で、左後方にウルゲントが見える
Just below the summit of Langar Main Peak. Urgent (7016m) seen at the left behind.



ランガールの主峰とウシュコ氷河の上部アイスフォール
Langar Main Peak (7060m) (seen at the center) and upper Ice-fall of the Ushko Glacier.

計画を進めていった。

当時ネパール・ヒマラヤおよびカラコルム地域に登山を目的として入ることは禁止されており、この状態がいつまで続くかも皆目見当がつかない状態であったので、第一目標をヒンズー・クシュ山群の六〇〇〇メートル以上の、できれば未登峯とし、とりあえずパキスタン政府への入山申請を行なった。これが一九六七年の六月末であった。

その後、私たちの準備の方は着々と進んだが、許可の方はいつまで経っても音沙汰無しであった。いらいらするうちに、先発のタイム・リミットである五月を迎えてしまった。止むを得ず、荷物と共に鈴木、野口の二名を五月十四日、横浜港から出発させ、私と参加を予定していた千葉の出発する六月二十八日までに、許可がおりない時は現地で交渉することとしたが、その数日前に許可がおり、千葉の参加取消しというあわただしい中を、やっとの思いで出発することができた。

キャラバン

七月十九日、ロバ九頭に約六〇〇キログラムの荷物を背負わせて先発させ、私たちは翌二十日、ホテルの若いマネジャーや法政大学の人達に見送られて、チトラルをジープで出発した。

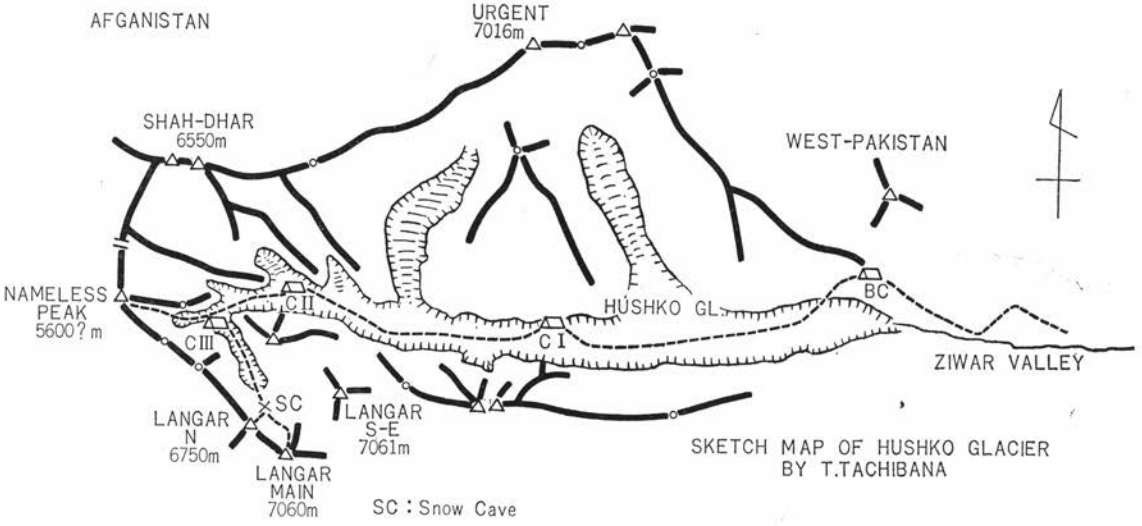
バレニスの手前でジープを下り、その日はバレニスに泊り、ついでクラー、イスタールとキャラバンを進め、四日目にシャグラムに到着する。ここでポーター二十二名とコック一名を雇い、二十五日ジワール谷に入り、ジワール谷最後の村ドック・シャールを経て、ジワール・ウツに泊り、二十六日グラム・シャール高原、二十七日ウスコ氷河末端の左岸台地、約四〇〇〇メートルの地点に到着、ここをベースキャンプ（BC）とし、七日間にわたるキャラバンを終了した。途中、砂漠の中でロバ達とはぐれて路に迷ったり、ポーター達の賃上げストライキにあったりしたが、どうやら東京を出てから一ヶ月目に、先発の二人は二ヶ月半目にBCを建設することができた。

ポーター達が山を下り、BCが大尉とコックのミルスワート、そして私たち日本人三名の計五人だけになると、山は急に静かになり、いよいよやって来たのだという気持ちが強まって来た。テントの前には雪溶け水が流れており、下は砂地で絶好のキャンプサイトであったが、くぼ地のため、ここからはウスコ氷河も、目指す山々も未だ見ることができなかった。

荷上げ

パキスタン政府から借用の二十五万分の一の地図と、ポーランド隊のスケッチ、そしてBCの前方の丘の上の眺めとから、行動予定を立て、七月二十九日、ウスコ氷河への第一歩を踏み出した。

私たちはみな海外の山が始めてで、氷河を見るのも、その上



SKETCH MAP OF HUSHKO GLACIER
BY T.TACHIBANA

を歩くのも、もちろん始めてであった。氷河というものは、もう少しきれいなものかと思っていたが、今ここに見るこのウスコ氷河は、はるか上流に到るまで堆石に覆われており、私たちのイメージとは大分違っていた。それでも、幅約一・五キロメートル、長さ約二十キロメートルの氷河の周囲に、二〇〇〇メートル近い標高差をもってそびえる雪と岩の山々は、日本で見ることのできない、ヒマラヤの山、そのものであった。

ウスコ氷河の中流、BCから約十キロメートル上流の左岸寄りに第一キャンプ（CI）を設け、私たち三人で四日間の荷上げを行ない、八月二日、大尉とコックをBCに残して、私たちはCIへ移った。

毎日快晴が続き、このCIから見る周囲の眺めは、まことにすばらしかった。氷河上流には五〇〇〇メートルから七〇〇〇メートル級の国境の山々が連なり、左に目を転ずれば、ひときわ高くそびえるランガール南東峯（七〇六一メートル）反対側には同じく七〇〇〇メートル級のウルゲントを始めとする山々が、威容をほこっていた。そして、氷河下流は一段と開けた眺めとなっており、遠くにはヒンズー・ラジ、スワトの山々があった。

氷河の上には、到るところ雪溶け水が流れており、氷河中央部にこれらの水が集って、氷河の上に小川をつくっていた。この小川は、BCとCIの中間辺りで、はげしい水音と共に氷河の底深く流れこんでいた。

八月三日、氷河上流部の偵察を行ない、第二キャンプ（CII）を氷河最奥地点の石の丘の上に建設することとし、二日間の荷上げの後に、私たちは約四五〇〇メートルの氷河の上にテントを張った。

二十五万分の一の地図は極めて不正確で、私たちはポーランド隊のスケッチによって、周囲の山々を位置づけてみたが、これもまた正確とは言い難いものであった。氷河の最奥、すなわち西側は大きなコルとなっており、その左には台形の山が、右側には六〇〇〇メートルを越えると思われる大きな山稜があった。そしてテントの正面、すなわち南側には台形の山から通じる稜線が崩れ落ちて、大きな雪田によるプラトーと、それから発する巨大なアイスフォールが氷河に落ちこんでいた。そして、そのプラトーの右側には台形の山に通じるアイスフォールが、左側にはランガールに通じるアイスフォールが、それぞれこのプラトーに落ちこんでいるのを望むことができた。

北側の稜線の右側、すなわち東北にはウルゲント（七〇一六メートル）と思われる山頂から押し出された長大なアイスフォールが、荒々しくウスコ氷河に注ぎこんでいた。ポーランド隊のスケッチによれば、台形の山はP二四一と呼ばれる無名峯で、右側の山稜に私たちの第一目標であるダール（六五五〇メートル）があるはずだった。

CIIに移った日から天候が崩れ始め、夜半より雨となり、翌

日は停滞となった。四五〇〇メートルでの雨は予想外であったが、久しぶりの停滞に、話題はもっぱら食べ物の話に集中した。私たちはキャラバンの時から日本食を主体としてきたが、それでも朝は即席ラーメンかモチ、昼はビスケット、夜はアルファ米の主食に乾燥野菜とコンビーフの定食が続くと、新鮮な日本食が恋しくなり、ワカメの酢のものやヒジキの煮たものが売れるようになってきた。

八月七日、天候は未だ完全に回復していなかったが、正面のアイスフォールの偵察を行なう。高度差約六〇〇メートル、幅約五〇〇メートルのこのアイスフォールは、平均斜角約四十度で、下部に取付くと上部は全く見えなかった。

第一日目は三分の一程登って、大体の感じを掴み、翌八日と九日の二日間かけて、上部雪田へのルートの開拓を行なった。上部に行く程、アイスフォールの崩壊の程度は大きくなり、ルートの選択には非常に骨が折れた。途中で一個所、どうしても上部へ進めない地点があり、苦しまぎれに巨大なブロックに開いた洞穴をくぐり抜けたところ、上部へ通じるルートを見つけることが出来たという一幕もあった。ロープを五ヶ所、延二五〇メートル程固定して、上部雪田へのルートを確保してから、八月十日、十一日の二日間でCⅢへの荷上げを行なった。

高度約五一〇〇メートル、ここからのウスコ氷河北側の山々の眺めはすばらしく、ダール、ウルゲント、シャヨウツ、アケズキヨ、コー・イ・テーズなどを一望のうちに見ることができた。鈴木、野口の二名が、一週間分の食糧と共にCⅢに入った。最後に狙うピークは氷河から見た台形の山、そしてコルを越えてダール、つぎにCⅢの左側のアイスフォールと山稜を越えてランガール、小雨のちらつく中で、CⅢの夜は静かにふけていった。

五六〇〇メートル無名峯

八月十二日の朝はガスが低くたちこめていた。ここで野口の手記を借りよう。

午前五時四十五分、天気は悪いがCⅢを出発する。雪田を台形の山に通ずる右上部アイスフォールに向って横切る。下から見た感じだと、ルートは三〇〇メートルほどの、このアイスフォールを越え、続く上部の雪原を国境稜線までつめ、あとは稜線づたいに台形の山を越えて、コルを下り、更に登ればダールまで行けるようであった。

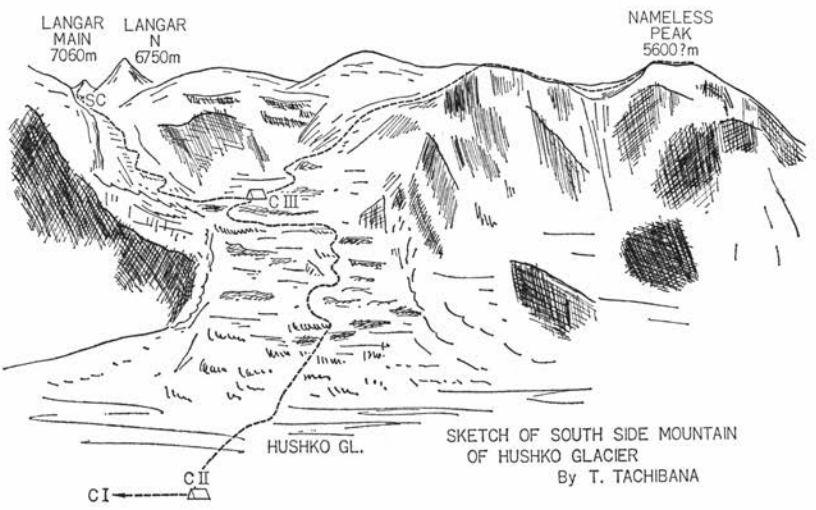
アイスフォールは比較的容易に越えることができ、七時半に上部の雪原に出る。ここから台形の山までは間近かで、ラクダのコブみたいなピークが浮んで見えた。しかし、やや高度の影響が出て来たようで、ゆるい雪原の上でも呼吸がはげしくみだれた。

八時、稜線に出る。アフガニスタン側は急峻な尾根と谷が、すべり落ちるように続いており、その末端、すぐ近くには村があるような感じを受けた。台形の山に近づいてみると、大きなコブは更にいくつかの小さなコブにわかれていて、右側は五メートル程の雪庇がはり出し、左側はアフガニスタンの谷へ、雪壁となって落ちこんでいた。

十時、真中の一番高いコブに到着する。この頃からガスは一層濃くなり、雪もちらつき始める。正面のダールはガスに隠れて全く見えない。一時間程待機するガスの晴れ間に、大きくダールのバットレスが間近かに迫ってくる。

コブからコルを見下ろしてみる。とたんにドキッとする。下からの眺めでは想像もつかないような、ものすごいギャップが足元に落ち込んでいた。余りのすごさに、二人共声も出ない。高度順化の不完全な体では、とても無理であると判断する。また、それが完全であっても、こちらからのルートは氷と岩に武装された壁の連続で、時間の浪費こそあれ、三人という少人数では不可能に近かった。またあまりにも危険が多すぎた。CⅡに残っているリーダーとの交信で、その旨を伝える。とりあえず戻れとのことであった。

CⅡに下りていた私は、彼等が台形の山の雪面を下りる姿を双眼鏡で見つめながら、このままダールを目指すか、それと



も、どうせ登られていることがわかった現在、狙うならば七〇〇〇メートル級のランガールにするかについて考えていた。

その日の夜の交信で、私たちは七〇六〇メートルのランガール主峯を目標とすることにきめた。雨が続いたせいか、雪崩の音が夜も続いた。

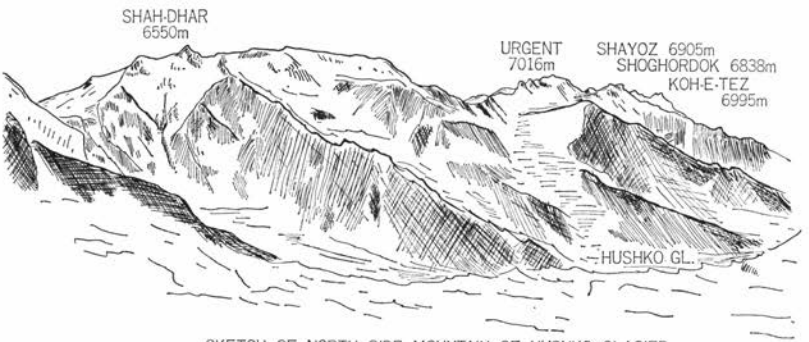
ランガール主峯

八月十三日と十四日は雨や雪が降りCⅡもCⅢも停滞となった。

八月十五日、久しぶりに晴れる。CⅢの二人は、CⅢのあるプラトーの左側のアイスフォールの上部、約五九〇〇メートルの地点に荷上げをする。CⅡの私はCⅠまで食糧の補給に往復する。

八月十六日、昨夜は猛烈に冷えこみ、今日はすばらしい快晴だった。CⅢとの交信で、彼等がランガールへ出発した事を確認する。ここで鈴木の手記を借りよう。

八月十六日、六時CⅢ出発。昨日のトレースをたどり、順調にピッチをあげるが、高度の影響はどうしても出てきて、呼吸がみだれ、注意力が鈍る。午後二時、予定より大分遅れて昨日のデポ地点に着く。背中の荷にデポの荷を加えて、広大な雪原を進む。山稜上にこんな広い雪原があるとは、考えていなかっ



SKETCH OF NORTH SIDE MOUNTAIN OF HUSHKO GLACIER
By T. TACHIBANA

ただけに、一歩一歩が実に苦しい。午後三時二十分、雪原上部（実は未だ続いていたのであったが）に、二時間かけて雪洞を掘り、アタック第一夜を過す。高度約六二〇〇メートル。寒くて殆んど眠れない。CⅡとは既に連絡が取れなくなっていた。

八月十七日、快晴だが、昨日急に上げた一〇〇〇メートルの高度の影響か、一日中吐き気と頭痛に悩まされ、憎い程の青空を眺めながら停滞とする。

八月十八日、吐き気も頭痛もおさまり、六時雪洞を出る。昨日雪原の終りと思っていたこの地点の上には、更に雪の大海原が続いていた。ランガール主峯の取付きまで約三キロメートル、そこから鋭い雪稜が頂上まで延びていた。雪原を約四時間、雪稜を三時間と考えて進むが、その目算の甘いことがすぐ判った。高度の影響も手伝ってか、そのスケールの大きさは、全然予測がつかなかった。

十二時、ようやく雪原を終え、頂上へ続く雪稜の基部にたどりつく。左側にはランガール南東峯が同じようにそびえている。高度約六五〇〇メートル、あと五〇〇メートル。小気味よく青空を押し分けてのびるこの雪稜を、気だるい体にムチ打って登る。十歩進んでは深く息をつき、じっと休む。いつしか太陽は西の空に傾き、夕暗がせまりつつあった。誰かがまわりでうるさくしゃべっている錯覚にとらわれる。

ふと頂上を仰ぐと、野口が頂上直下のナイフ・エッジに身を踊らせていた。トップを交替しつつ、午後六時五分、やっとの思いで頂上に立つ。七〇六〇メートルの頂は、今足元にあった。しゃがみこんで手を握る。

記念の写真を撮ったのち、六時十五分、二度と来ることのないであろうピークを、ふりかえる余裕も無く、雪稜を下る。

雪原についてからは、まるで病人のように、十歩あるいては倒れるようにしゃがみこんで息をつき、登頂の感激も涌かぬまま昨夜の雪洞にたどりつく。空には無数の星が輝き、まるで星屑の中に夜空があるようだった。午後九時四十分、雪洞到着。

八月十九日、CⅡの私は、交信のとだえた二人を心配しながらCⅢに上って来た。そして待つことしばし、午後六時半に野口が、そして八時過ぎには鈴木が、精魂使い果したという足どりでテントに戻って来た。残り少ない食糧で夕食を作り、食後はホットケーキを焼いて、ささやかな私たちの成功を祝った。

撤収

翌八月二十日、私たちは背負えるだけの荷物を背中に、CⅢを後にした。天候は快晴。

この日の朝早く、アタックの二人が下りて来た左側のアイスフォールの上部の雪壁が崩れ落ち、すさまじい地響きと共に、その下のアイスフォールをひとなめにして、雪煙はプラトーに

広がり、CⅢの小さなテントを烈しくゆさぶった。

二人の戻って来るのが半日遅れれば、大変なことになる所であった。斜面のある所、必ず雪崩が起ると云う鉄則を、見せつけられた思いであった。

私たちは順次テントを撤収し、八月二十四日、BCに戻って来た。大尉もコックのミルスワートも、私たちの成功を心から喜んでくれ、その夜の夕食は大尉が腕をふるったパキスタン料理となった。BC周辺には高山植物が咲きみだれ、短い夏の終りが、すぐ近くまで来ているようであった。

そして八月二十七日、BCを撤収し、グラムシャールでポーター達と会い、再び六日間の暑い日射しの中をキャラバンして、九月二日、全員無事にチトラルに戻って来た。

後記

パーティの編成はつぎの通りである。

リーダー立花種則(31)　古河特殊金属工業(株)勤務

メンバー鈴木理己(24)　早稲田大学院学生

〃　野口勝志(24)　無職

連絡将校ナシーブ・ウラ・カーン(28)　パキスタン陸軍大尉

イストル・オ・ナールとジロ山群

＝トルコからヒマラヤへ＝

佐藤京子

はじめに

私たちの隊は、名称を「日本婦人西アジア親善隊」といい、女性登山者の同人組織である「ユングフラウ」の四人の隊員で構成されていた。「ユングフラウ」というのは、種々の山岳団体に属する女性登山者の横のつながりと、いま一歩たち遅れている女性登山の向上とを目的として作られた組織であり、一九六五年九月、京都において発足した。

一九六八年の第一回遠征計画は、トルコ及びイランの、四〇〇〇、五〇〇〇メートル級の山々に登りながら、回教国での女性の生活と、教育の現状を観察しようという着想からスタートした。しかし、計画の途中から、五〇〇〇メートルの山だけでは物足りなく感じはじめ「いずれ近い将来、八〇〇〇メートル峰を狙うために、もっと高い山を経験しておきたい」という野望に駆られて、ヒンズー・クシュで七〇〇〇メートル峰に登ることにまで発展した。

思うに、世界の登山界を見渡してみても、八〇〇〇メートルラインを越えた女性は、まだ誰もいないのである。八〇〇〇メートルは死のラインとも言われる。生理学的にも酸素の補給なしには、数日として生きていることの不可能な世界である。それでも登山家の勇気と叡智は、一九五〇年のアンナプルナを皮切りに、この十数年間に次々と八〇〇〇メートル峰を全部おとしてしまった。ところが、その輝かしい記録の中に残る女性の足跡は、コガン夫人等国際女性隊のチョー・オユーへの挑戦のみである。それも残念なことに七六〇〇か七七〇〇メートル附近で遭難して終っている。そしてこれが現在、女性の最高到達高度となっているのである。最高登頂記録は、中国の袁揚等のコングールⅠ峰（七五九五メートル）である。我国では、関田美智子等のワイナ・ポトシ（六〇九四メートル）、向晶子のチャチャコマニ（六〇七四メートル）、細川沙汰子等のデオ・ティバ（六〇〇三メートル）と、いずれも六〇〇〇メートル級であった。「山、高きが故に尊からず」ではあるが「高きが故の困難」には挑戦してみたいものである。

それにしても、なぜ、今までに女性が八〇〇〇メートルに登っていないのだろうか。体力的にも、生理学的にも不可能なので

あろうか。登山は陸上競技や水泳のように、同時にタイムを競う性質のものではないから、登り方を工夫すれば、登れないことはない筈である。しかしまた、登山は前記のような単純なスポーツと違って、ただ体力のトレーニングだけ積み重ねれば向上する、という性質のものでもない。特に、八〇〇〇メートル峰への大遠征登山ともなれば、なおさら複雑な要素がからんでくる。そんな複雑な要素を的確に解析し、処理してゆける知性と判断力、又、多くの人を動かし統率してゆける組織力など、手と足で登る力以上のものが必要になってくる。そのような力は、長い歴史を通じて、女性には不必要なものとされてきた。

女性の能力を開発しようという努力は、女性自身にも欠けていたが、男性側にはもっと欠けていたのである。女性の登山を遅れさせている主な原因は、こういうところにあるのではないか。それならば、新しい社会に育った若い女性は、新しい環境の中で、自からの力を開発して行けるのである。八〇〇〇メートル峰への遠征は、いつまでも不可能なままではないだろう。

こういう思惑のもとに、八〇〇〇メートルへ一歩でも近づくために、七〇〇〇メートル峰を登山の対象に加えたのであった。

隊員は次のとおりである。

隊長　佐藤京子（29歳）（京都山岳会　京都工芸繊維大学山岳部OG）
副隊長　渡部節子（28歳）（オカリナ山岳会）
芦谷洋子（24歳）（京都山岳会　愛知学院大学山岳部OG）
泉久恵（26歳）京都教育大学山岳部OG

このうち、泉隊員は、当初より、トルコとイランでの行動にのみ参加することになっていたので、ヒンズー・クシュには同行していない。

行動概要

一九六八年三月六日、バイカル号にて横浜を出る。ナホトカからハバロフスクを経てモスクワまで九日間汽車に乗る。シベリヤ鉄道で雪の大陸を横断したわけである。モスクワからテヘランへもまた汽車。こうして全装備と、トルコでの登山用食糧を、隊員と共に運び込んだ。これが最も安い方法だからである。

テヘランから後は、トルコ、イラン、アフガニスタン、パキスタンと、全て土地の路線バスを利用した。

三月二十二日、トルコに入国。第一目標のアララットを目前に仰いだ。前日の吹雪で化粧しなおした端麗な姿は、ノアの方舟の神話にふさわしい美しさがあった。実際この山に登ったのは、四月十八日から二十二日になった。その間、首都アンカラ、イスタンブール等トルコ国内を旅行した。アンカラでは日本大使館のお世話で、陸軍省二〇万分の一地図を買う。トルコ山岳会々長チュクギル氏に会い、トルコの山のスライドを見せて貰う。またアララット登山のために、ガイド、郡長、土地の陸軍大佐等への紹介状を貰う。イスタンブールでは、イギリス

人登山家ノーウィル氏よりジロ山群、サト山群の様子を聞く。

四月二十一日、全員アララット（五一六五メートル）登頂。これまで、この山に関して、最も早い季節の登頂として、トルコ中のニュースになる。

四月三十日～五月十日、ジロ山群に入山。北西面のアバスピ谷から、最高峰のレシュコに迫ったが、ルート発見できず、南東面に廻って既登ルートをたどったが、天候悪く登頂できなかった。

五月十八日、イラン再入国。二十五日～三十日、デマベント（五六〇一メートル）に入山。五月二十八日、全員登頂。

六月九日、アフガニスタン入国。

六月十三日、隊長のみパキスタン入国、カラチにてヒンズー・クシュ用荷物受取る。領事館、大使館に挨拶。

六月二十三日、ヒンズー・クシュ隊全員、ペシャワールに集結。二十六日、東海大学隊と共にチトラルに入る。

六月二十九日、チトラルよりキャラバン開始。

七月六日、イストル・オ・ナール南面、ティリチ氷河上四四〇〇メートルにベースキャンプを設営する。

七月二十九日、イストル・オ・ナール（西峰七二〇〇メートル）登頂。

八月二日、ベースキャンプ撤収。七日、チトラル帰着。解散。

八月二十一日、芦谷洋子は独標登高会の岡本竜行氏に同行して、シャー・フラディ（五一四〇メートル）に登頂した。

ジロ山群・最高峰レシュコ

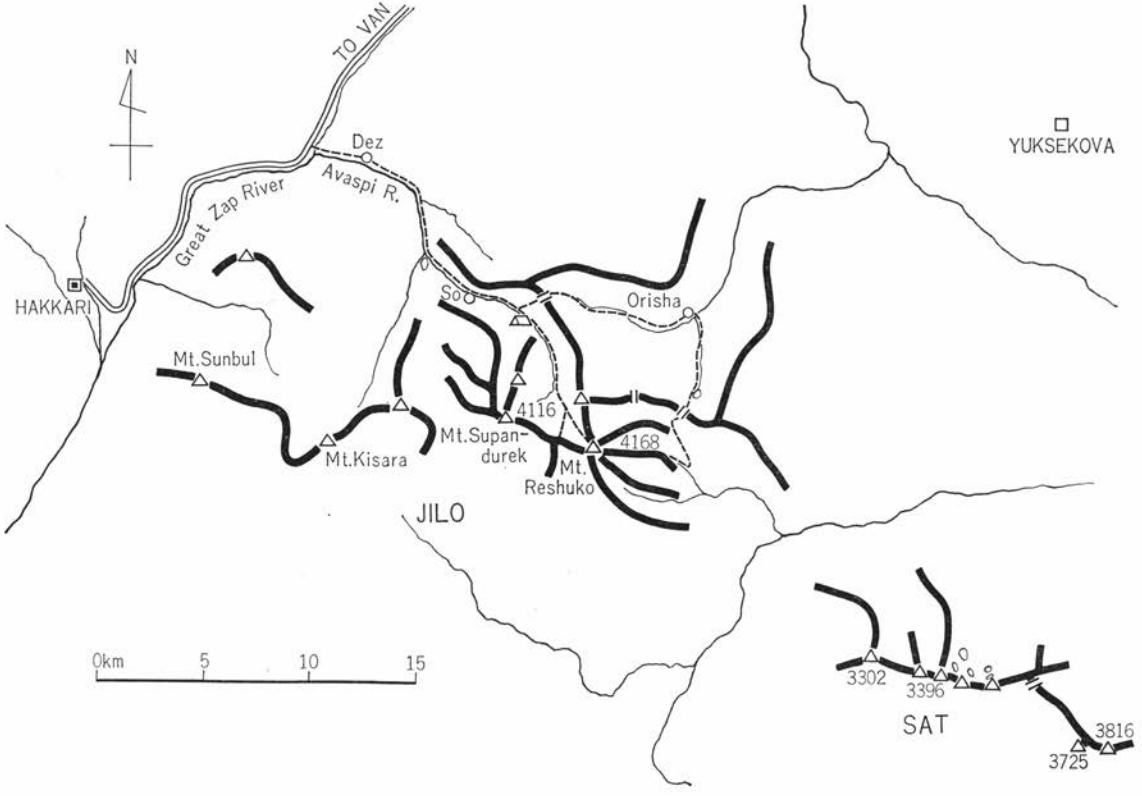
トルコの山について調べているうちに、どうしても行ってみたい山域が出てきた。入山が困難だと言われると、益々行きたくなる。そして、なんとかしてでも行こうと決意を固める。そんな対象が、トルコ東南部の角、クルド族の居住地であるハッキアリ地方の山であった。

深田久弥氏が『ヒマラヤの高峰』の中で紹介されていたD.C. Hills の *My Travels in Turkey* と、一九六五年、六六年の二度にわたってジロ、サト山群を訪れた、イギリス人登山家 Nowill の記録を *Alpine Journal* で読んでから、このクルドの土の臭いのする秘境を、ぜひ訪れてみたいと思いたったわけである。

在トルコ日本大使館に問い合わせると、アララットは登ってよいが、ハッキアリ地方は治安状態が悪いから入山しないようにとの、トルコ内務省からの勧告を伝えてきた。つまりイラン、イラク、トルコの三国にまたがって遊牧・移動するクルドが、自分達の国を持つために、いつ反乱を起こすかもわからないと、恐れているためである。イラクではクルドの独立運動が盛んで、政府を手こずらせているという。

しかし、実際に行ってみると、首都アンカラでは「ハッキア

MAP OF JILO-MOUNTAIN TURKEY



リへ行くのは良くない」とは言うが「絶対行ってはいけない」とは誰も言わない。当のハッキアリに入ってみると、トルコ領土内に定着しているクルドは、トルコに十分同化していて、恐れられるような面は見られなかった。それどころか、トルコ人と同様、親切で人なつこい、愛すべき田舎者であった。

危険といえば、この地に入った外国人が、度々馬賊に襲われ身ぐるみ剝がれていることと、熊が非常に多いことである。私たちの場合は、峠に雪のある五月上旬に入ったので、イラクから侵入してくるという馬賊には、幸いにして会わなかったが、熊五郎とハチ会わせする危険には、絶えずさらされていた。トルコ軍は、ジャンダルマという軍警察を、この嶮しい谷から谷へ見廻りに送っているので、彼等の目の届く限り、私たちの身の安全も護ってくれる。

私たちは、ハッキアリ県知事宛の紹介状を持っていたが、加えて、折しもアララット登頂成功のニュースが、トルコ全土に放送された直後だけに、軍から軍へ、警察から警察へと指令がとび、ちょっとオーバーな表現をすれば、さながら御旅行の御予定が明らかにされた皇族並みに、どの町でも歓迎された。

アウルからバン湖を経て、ハッキアリへはバスで二日行程である。バンとホシャップの古城を見物してから、三〇〇〇メートルの雪の残る峠を越えた。まさに山岳重畳。バシュカレという盆地の町で昼食をして、さらに奥地へ向かおうとしたとき、バスの窓から鈍く光る山群を見つけた。ジロにちがいない。山ひだの陰影の強さが、きびしさを思わせる。心踊る一瞬であった。バスがユクセコバという町に入って折り返す間、ジロの雪山は手にとるように見えた。ユクセコバとは高いバケツの意。その名のとおり水の豊富な盆地である。バスは再びグレイト・ザップの濁流を左下にして、恐ろしい断崖をへつって行く。折しもサーッと来た夕立が上がると、スンブールという三四六七メートルの岩山の、高距一五〇〇メートルもある絶壁が、悪魔のような笑みを見せる。乗客の一人が「チョク・ユクセク（とても高い）」と見なれぬ外人に説明してくれるのだが、こちらはガードレールもない狭いガタガタ道を、いつタイヤがはずれるかと気が気でない。突然急停止した。運転手と助手がかけ出した。それはケキリキという鳥を追いかけるためであった。そんな道くさをしているうちに、羊の大群が行く手をふさいでいた。とっぷりと日が暮れてから、山あいの台地に発達した小さな町、ハッキアリに着いた。二年前にはじめてできたという一軒のホテルに落ち着き、知事、警察署長、ガイド等と入山の打ち合わせをする。

既にこの地を訪れた探検家や登山家は二、三いるが、日本人としては、私たちがはじめてである。それだけに一ヶ月くらいゆっくり滞在したいところだが、あとの日程が詰っているので、最高峰のレシュコ（四一六八メートル・別名ゲルヤシン）だけ

を目標にして十日間入山することにする。

登山ルートは、ユクセコバから東南面を登る道が一般的で、既に登られているが、今は雪解けシーズンで、橋が流れたままで渡渉は首までつかるという。そこで北西面のアバスピ谷に入ることにする。レシュコ北西面は絶壁であるが、ここも既にオーストリアのクライマーが直登を試みにやってきたという。

四月三十日、農業技師長アズミ氏、新聞記者兼ガイドのトユルファン、軍から派遣された通訳君の三名が、善意で随行する。ハッキアリからグレイト・ザップをジープで遡ること三〇分、そこから、私たちは一〇日分、一人三五キロの荷を背負って吊橋を渡り、ザップの赤茶けた激流に清い流れをそそぐアバスピの谷に入った。ケショウヤナギの新緑と小梨の花が美しい。きり立った両岸の岩山がつくるV字型の窓から、キサラ（三七五二メートル）の秀峰がのぞく。ドキリとするほど迫力のある雪と岩の針峰である。

入口から四キロ遡ったところにデズという村がある。ここで馬を探したが、遊んでいる馬なし。最奥のソー村の人が、荷物は翌日馬で取りに来てあげようというので、やれありがたやとサブザックで、さらに一五キロ遡ってソーへ行った。村では折よく、一人の少女の婚約を祝うダンスが行なわれていた。村の女性こぞって、泥の家の屋根の上で腕を組んで踊っている。アララットの麓のクルドも、ここのクルドも、女性はまだあざやかな赤や緑の美しいドレスを着て、首の廻りにはコインやガラス玉のネックレスを幾重にも飾っている。男性はトルコ人同様、シャツや背広姿に変わったが、白地に茶色のストライプの入った布地で、日本の着物様の上着とダブダブのズボンをはいて、頭にターバンを巻いているのもかなりいる。この衣装の方がずっと精悍に見える。その夜は村長の家で泊った。泥の家である。

五月一日、早朝から荷を取りに行ってくれたので、一〇時に出発した。二時間遡ったところにテントを張った。標高二四〇〇メートルのメルガンというヤイラ（夏期放牧村）の少し下流である。この季節の雪線で、水清く四囲はすばらしい岩峰。昼になると、雪崩が滝のように壁を縫って落ちる。壮観である。

五月二日、折しも底雪崩のシーズンなので、四時にテントを出た。十五分も歩くと、右岸からのものすごいデブリがある。六時半には谷がなくなるところへ来た。つまり、前方および両岸を絶壁で囲まれたのである。三一五〇メートルの底から四一六八メートルの頂きまで、高距一〇〇〇メートルの岩壁である。ただもう「スゴイ、スゴイ」と連発するだけで、コップの中の蟻同様、首が痛くなるほど上ばかり眺めていた。トルコ陸軍省発行の二〇万分の一地図と、観光省発行の三二万分の一地図とを眺めても、いったんカールの底に入ってしまうと、どれが最高峰なのかわからない。谷の東奥にある顕著な岩峰が、頂

上近くまですっきりとしたクラックを走らせているので、偵察に出かけた。しかし持っている四、五本のハーケンだけで登れる相手ではない。八時になるとボツボツ落石が激しくなってきたので、翌日西奥を探ることにして、雪崩の来ぬ間に逃げ帰った。帰途、大きな熊の足跡を見つけ気味悪くなった。

五月三日、早朝より西奥のルンゼを登った。三六〇〇メートル附近は、立山のようになだらかな丘陵になっていた。そこから三八〇〇メートルの稜線まで出たが、頂上へ続く岩稜はとても厳しい。そもそもロッククライミングの目的で来なければ、レシュコ北西面は手が出せない。あまりに眺めが良いのと、帰るチャンスを逃がしたためビバークして、レシュコを十分眺めた。地図にはピークの北東にコルがあり、ルートが記されているが、この季節では雪崩が激しく、急峻で通れそうもない。

四日、テントに帰り、対策をねる。もう一つの四〇〇〇メートル峰スパンドレイク（四一一六メートル）に変更しようかとも思ったが、やはりレシュコの南東面に廻ってみることにした。

五日、ユクセコバ側のオリサ村へと、五日間のアタック態勢で旅立った。峠から見るアバスピ谷上部の山々はすばらしかった。東面はなだらかな雪稜で、熊の足跡が縦横に走っていた。軟かでよくもぐる雪の中を村へ下った。

六日、オリサから川に沿って登った。谷が狭くなった頃、一〇〇〇メートル上の岩蔭に熊を発見「ウワー、熊だ!!」とビックリ仰天して大声をあげたら、熊五郎君の方がもっと仰天したらしく、クルリと向きを変えて逃げて行ってくれた。入山以来晴天続きだったのに、昨日あたりから雲が多くなり、視界が悪くなっているから心配だ。池の上部で、今度は激しい雷に出会った。ピッケルに感電して、あわてて逃げるほどだった。二つ目の池のほとりでテントを張る。雷鳴やまず。

七日、視界ゼロの中、複雑な地形を判断しながら谷に下る。レシュコ東稜から銀ネズミ色の懸垂氷河がかかっているのが、時折り霧の上がったときに見えた。ついに雨になった。全身びしょ濡れ。また雷が鳴り出した。すばやくピッケル、アイゼンを捨て、ツェルトをかぶる。雷が弱まったとき、南東稜の取付（二五〇〇メートル）まで下り、草地で雨待ちとする。野生の馬の群れが雪どけを待ちかねて上がっていた。

八日、天候は益々悪い。レシュコをあきらめ帰途につく。ずぶぬれのまま日暮の羊路をたどっていると、オリサ村の灯りがポツンと見えた。灯りが近づいてくる。「レシュコ・ダーヤ・チカマス（レシュコに登れたか）」「ハユル（いいえ）」迎えに来てくれた男の体から、羊の匂いがプーンとする。連れて行かれた家で濡れた衣服を干せと、薪をくべて暖かくしてくれる。その夜は彼等の最上の布団を貸してくれた。濡れたまま眠るのは気がひけるほどきれいな布団だった。

登頂することはできなかったが、トルコの片隅に、こんな素

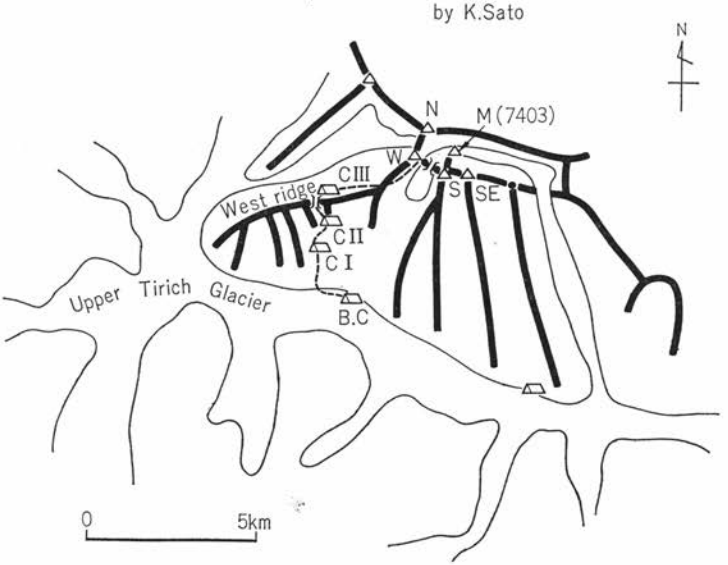
晴らしい山があることを、日本の岳人に紹介できることはうれしいことである。

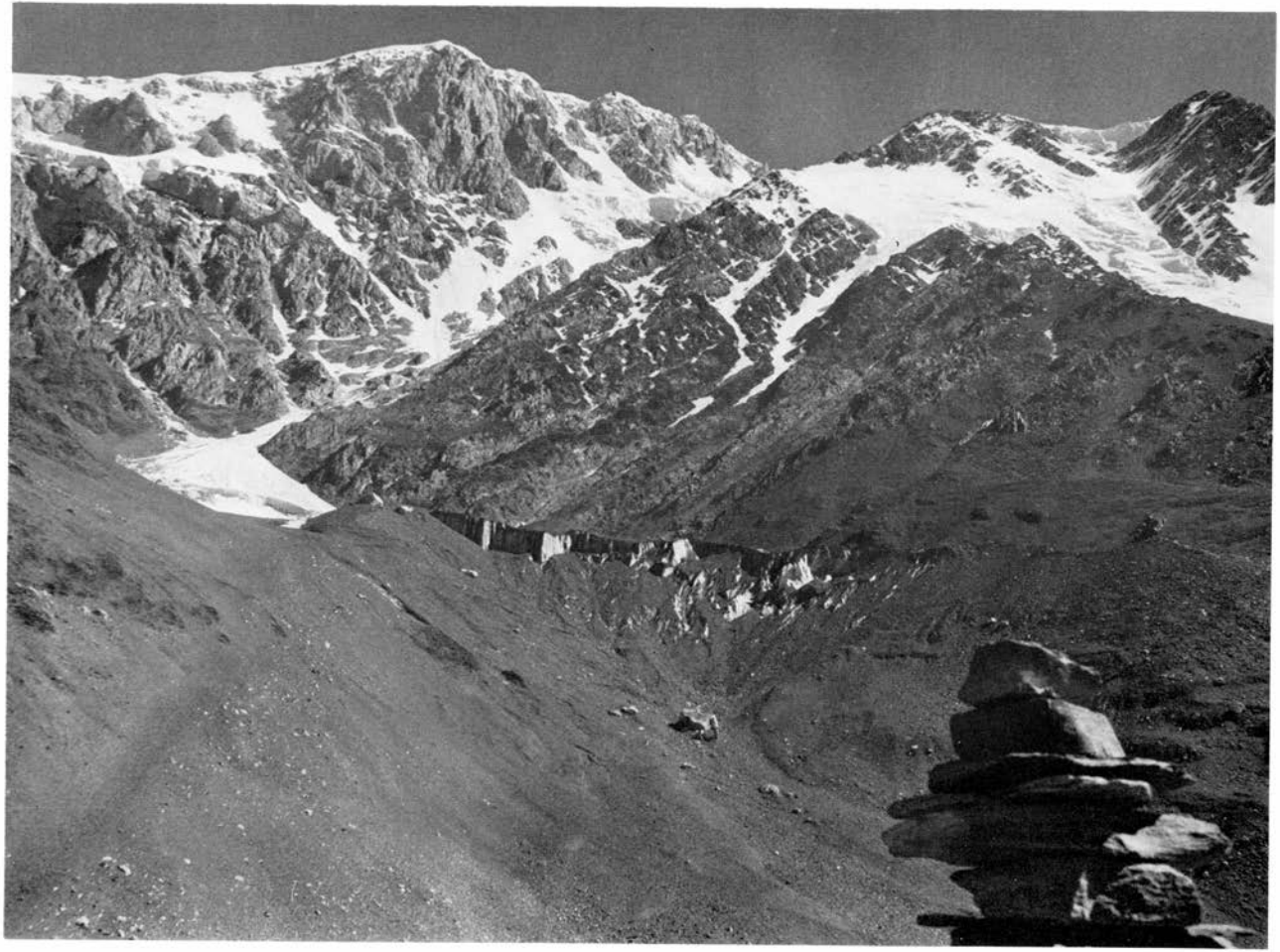
イストル・オ・ナール

イストル・オ・ナールを、この山旅の最後につけ加えることに決めたのは、出発の五ヶ月前であった。天候の安定したヒンズー・クシュの七〇〇〇メートル級で、三人でも登れそうな対象として、この山を選んだわけは、一九五五年のアメリカ、プリンストン山岳会の二人が登った記録があるからである。彼等は日本での兵役が終ったあと、就職・結婚という束縛のはじまる前の短かい青春を、この山にかけ、割に簡単に登っている。

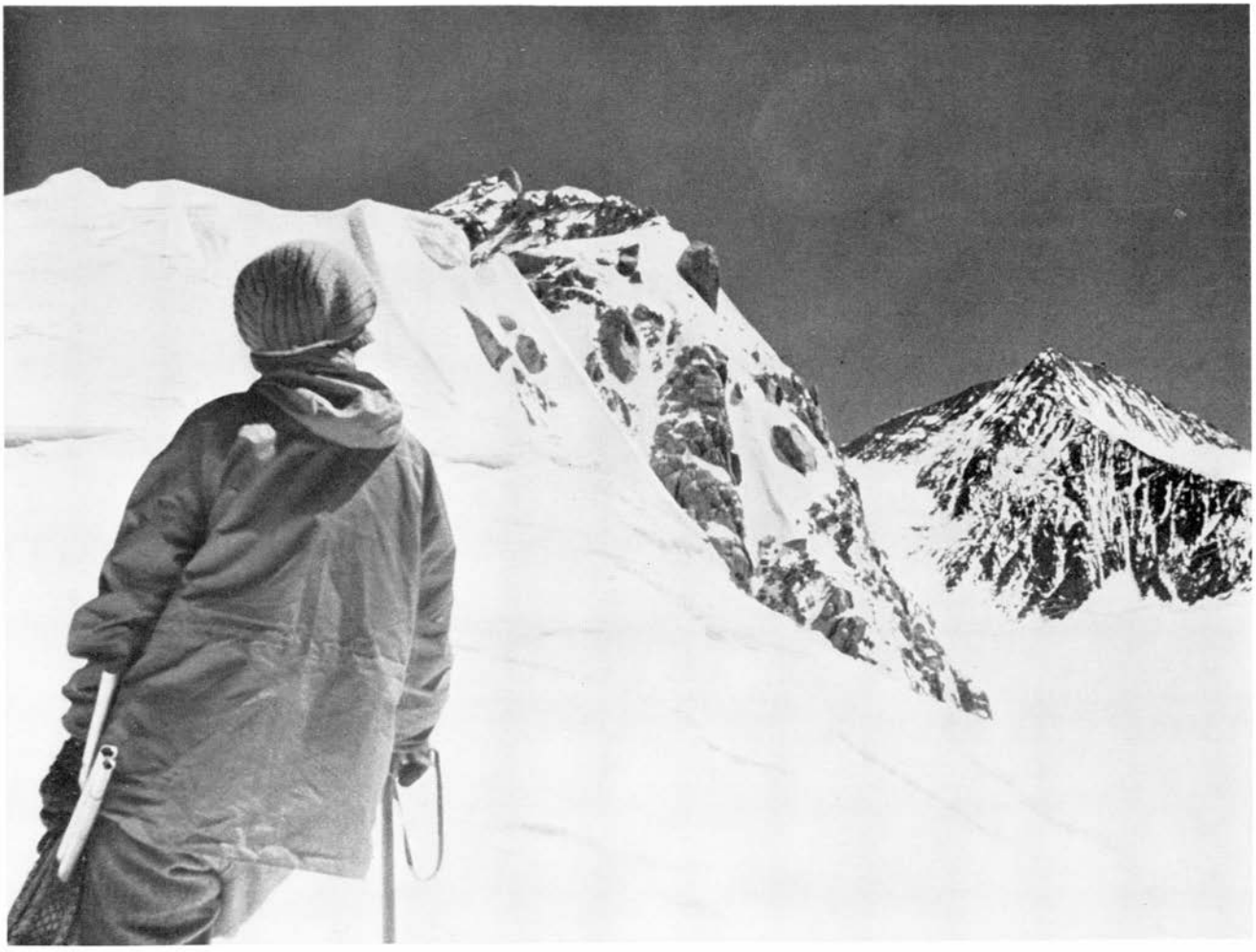
それまでにも一九二九年、一九三五年に、イギリス人が、いずれも少数で出かけている。これらの隊は悪天などの原因で登頂していない。しかし *Alpine Journal* にのっていたこの山の写真は、だらりとして魅力的ではなかったが、七〇〇〇メートル級のテストケースとしては、実力相応だと思った。(最近この山に関する情報から判断すると、この写真は西尾根だけを撮ったもので、この写真の中に主峰は含まれていないことになる。当時の私たちは、この西尾根の中の最高点が主峰だと信じていたので、西尾根が北に向きを変えても、なお最高点を求めて歩き続け、明らかに尾根が下り始める点に、日の丸を立てたというわけである。)

Sketch map of Istor-o-Nal
by K.Sato



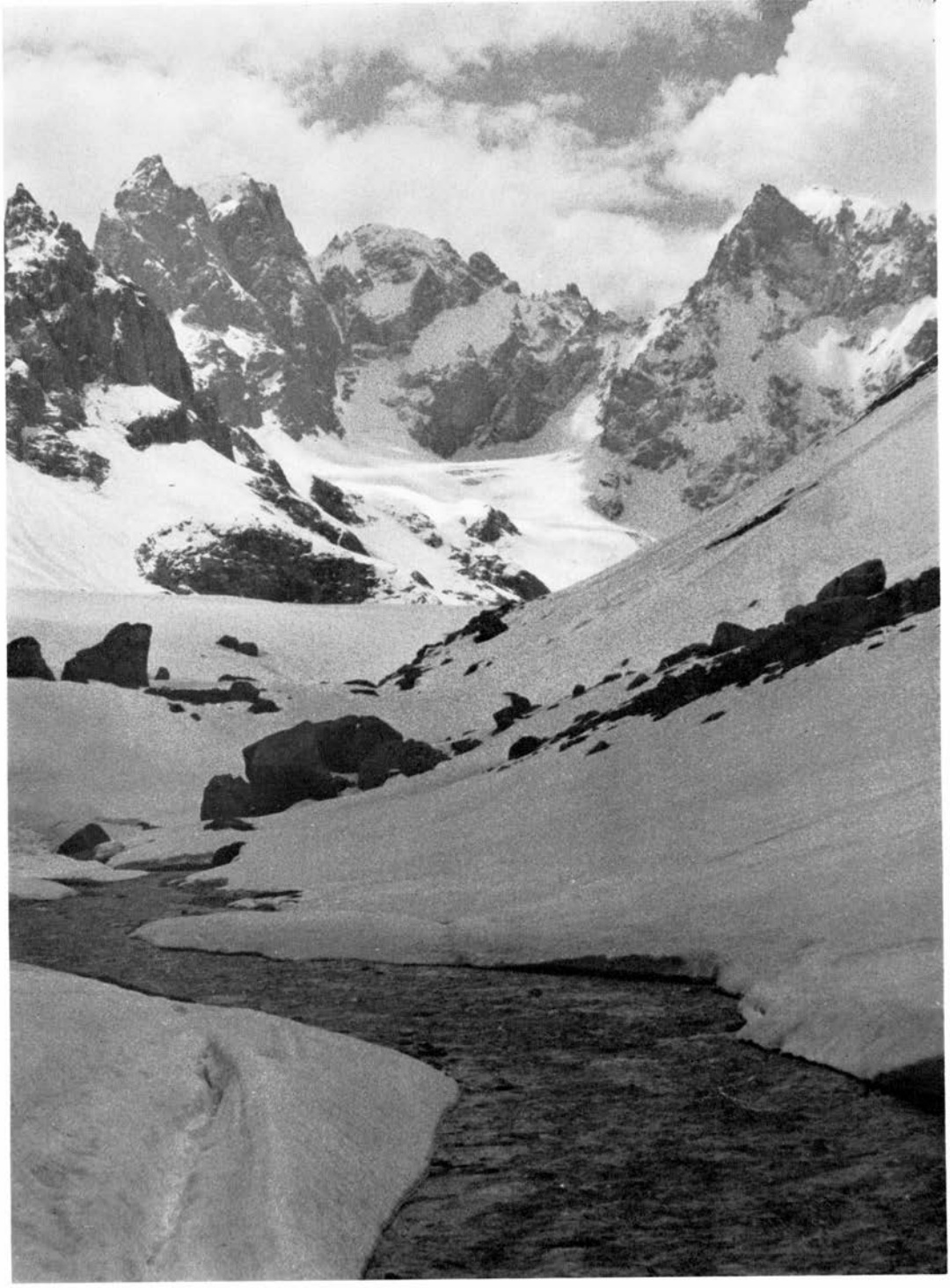


ベースキャンプから見たイストル・オ・ナール
Istor-o-Nal seen from the base camp (4400m).
Left is the west ridge. The main peak is just behind the right peak
(by S. Watanabe).



イストル・オ・ナール西峰（7200m）（左）と同南峰（7303m）（右）
Istor-o-Nal west peak (7200m) (left) and south peak (7303m) (right) seen from the first illusive paak on the west ridge.

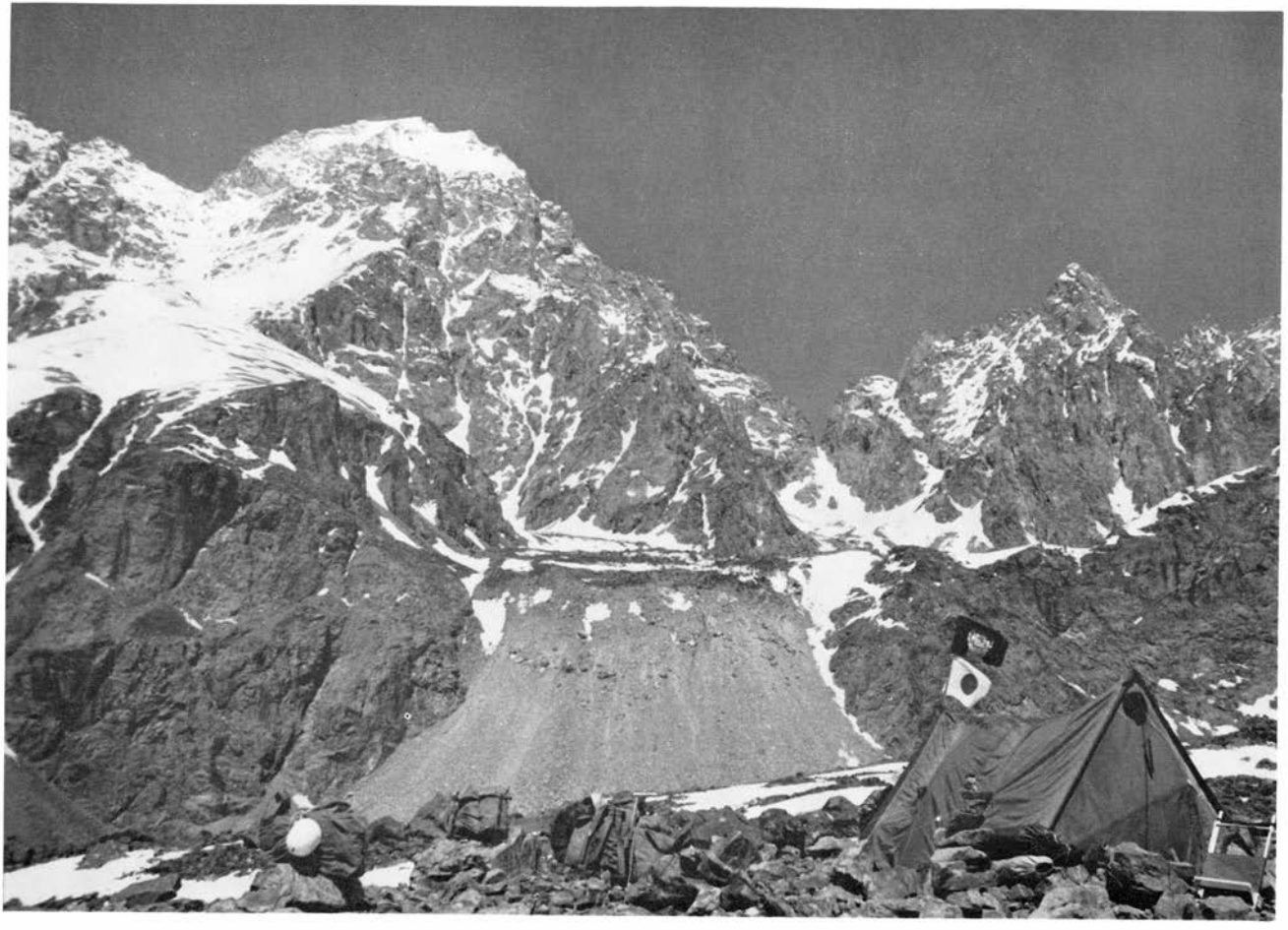
イストル・オ・ナール西尾根の末端近くで（7200m）
Istor-o-Nal—Near the end of the west ridge-7200m (by S. Watanabe).



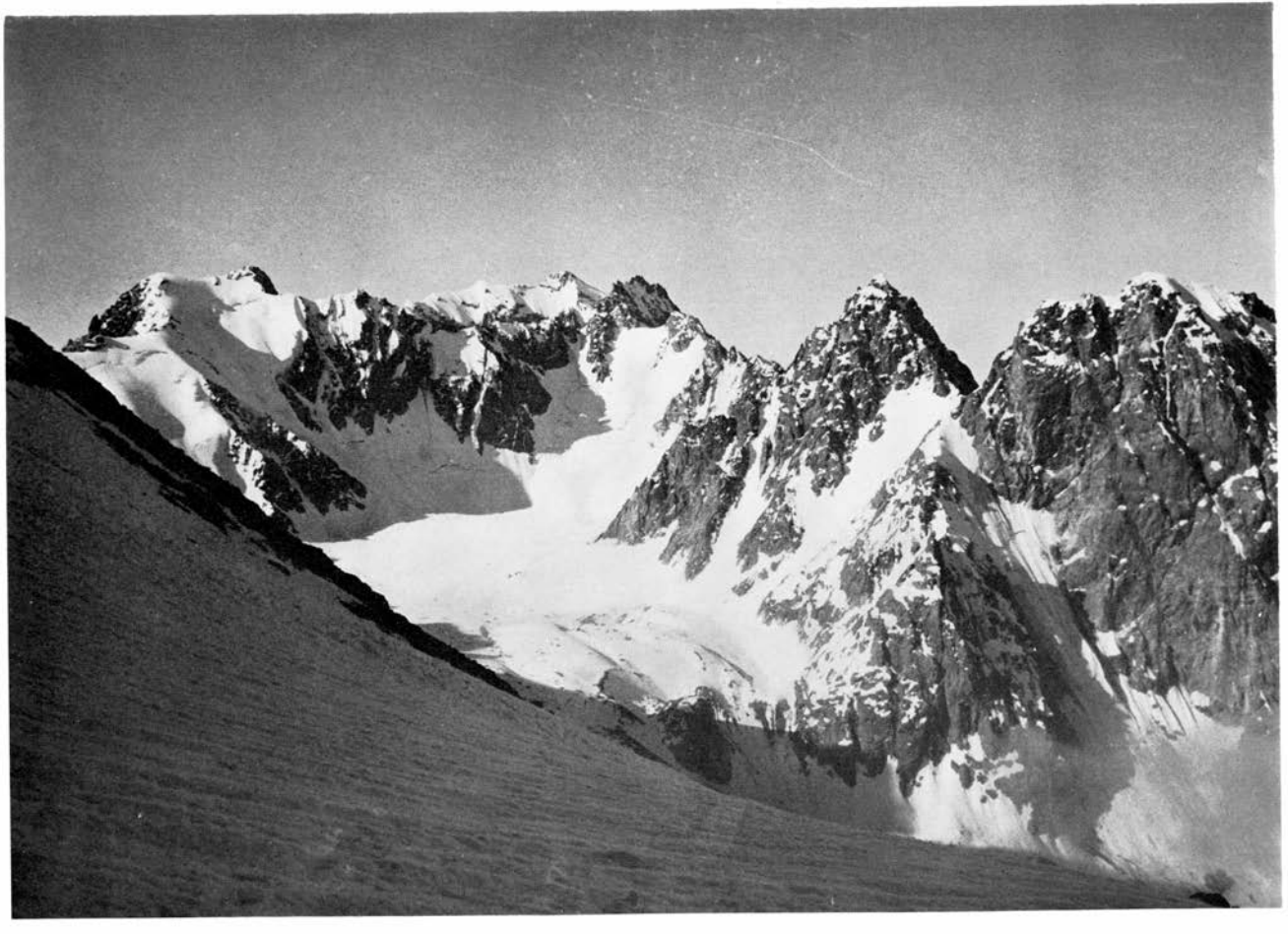
アヴァスピ谷上部からジロ山群を望む
A view of the upper Avaspi valley—Jilo mountains in south-east Turkey (by Y. Ashitani).

アヴァスピ谷上部の西側からレシュコ（4168m）を望む（ジロ山群）
Reshuko (4168m) in Jilo mountains seen from the west side of the upper Avaspi valley (by K. Sato).

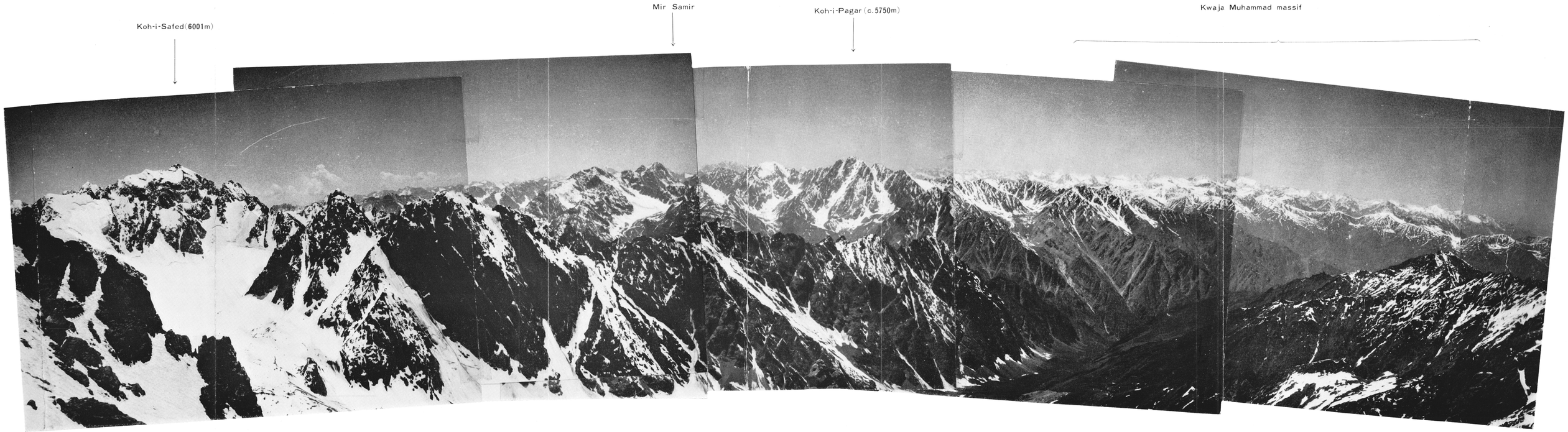
レシュコ（4168m）の西方バットレス、壁の高さ約1000m
Reshuko (4168m) West Buttress, the height of the wall is about 1000m. (by K. Sato)



偵察キャンプからシャー・イ・アンジュマン（6026m）と5461m峰を望む
Shah-i-Anjuman（6026m）and the 5461-meter Peak seen from Sare Tund Valley.（by O. Sakuma）.



ノゴルガイ氷河内院の山とコー・イ・サフェド（6001m）
Inner sanctuary of the Nogorgai Glacier and Koh-i-Safed (6001m) seen from the point of 5200m on the west ridge. (by O. Sakuma)



中央ヒンズー・クシュ山脈

A panoramic view of the Central Hindu Kush Range seen from the point of 5200 meters on the west ridge of Shah-i-Anjuman.

六月三十日、チトラルを出発した。マロイまでジープで行く。マロイで通訳兼ガイドの通称バブーという便利な男を雇い、ロバ三頭、馬一頭のキャラバンが始まった。レシュン、ウトルへと歩を進める。毎日からりと晴れ上るキャラバンの道は楽しい。麦秋の村々を過ぎる道に、アンズを手渡す女あり。小花を摘んできて、はずかしそうに差し出す少女も可愛いい。

七月三日、ザニ峠（三九〇〇メートル）に立つ。はじめてイストル・オ・ナールにお目にかかる。馬蹄山という名の通り、五つか六つのピークからなる大きな山塊である。同じくらいの高さのピークが並んでいるので、どれが主峰だかさっぱりわからないが、バブーの話では左から二つ目だという。

峠を下ったところに最奥の村シャグラムがある。この村でバブー達を帰し、クーリー一二名を雇う。シャグラムから夏の放牧村アタクを経て、ティリチ氷河の末端シャニヤックに至る道は、花と緑の豊かなすばらしいプロムナードである。

氷河の上を歩くこと二日で、四四〇〇メートルにベースキャンプを設けた。七月六日である。一足先きに偵察に入っていた立教大OBの山野井、西川両氏の隣りにテントを張る。

日本を出てから丁度四ヶ月たっていた。長い旅だった。やっと最後の最大の目標を目前にしたのだが、ここまで来れば、外界のわずらわしさと没交渉でいられる。その安堵感からか、隊長は熱を出した。あとの二人もなんとなく元気がない。いつものような、山を前にしたときの涌き上がるような感動もない。ファイトが涌かない、というのが本当のところであった。立教隊が雇っているコックやハイポーターが、一斗缶を叩いて七月の満月に唄う声が、うつろに響くのだった。

七月九日、渡部と芦谷で、イストル・オ・ナール西尾根末端方面へ偵察に出かける。

十日から第一キャンプへの荷上げ活動を開始した。ベースキャンプからティリチ氷河の左岸沿いに二五分程進み、そこでイストル・オ・ナール側の開けた谷に入る。雪の消えた谷は、鋭い角を持ったスレート状の黒い石で埋まり、すこぶる歩きにくい。谷の上部は雪原になっている。第一キャンプはその一角の大きなテーブル石の横に置いた。高度約五二〇〇メートル。

七月十四日、第一キャンプに入る荷上げは一人一回二〇キロにおさえたが、疲れた体には辛いアルバイトであった。佐藤の調子は相変らず良くない。若い芦谷でさえ、顔の片方が膨れて、三日寝込む。渡部が一番元気だったが、やはり下痢と呕吐の苦しみを経験した。

十八日から第二キャンプへの偵察をはじめた。西尾根には二つのガリーが上がっている。下の方は短いが登り切ってから、西尾根上で岩峰を一つ越えることになるから不利である。上のガリーの入口は、アイスフォールで塞がっているように見えたが、東側が登れる。

二十二日、第二キャンプをガリーの中程に設けた。急な斜面の中にいくらか緩い個所を探し、三人用のアタック・テントを張れるだけ、氷を削る。

二十五日、第三キャンプへの荷上げ、ガリー上部の平均四五度くらいの急斜面は、氷の上にニェヴェ・ペニテンテが不安定に集り、落着いて休憩することもできなかった。第三キャンプはコルから少し上の、大きな岩に囲まれた恰好の場所に置くことにした。以前の隊も利用したらしい跡がある。高度六四〇〇メートル。

二十六日、第二キャンプのテントを第三キャンプへ移す。第三キャンプ上部の約一〇〇メートルの岩壁にザイルをフィックスする。下部三〇メートルは堅い花崗岩の溝で、上部六〇メートルの溝には雪と氷が詰っていた。

二十八日、一泊のビバークを予定して頂上に向う。荷上げ期間中は、お天気の方もぐずついていたが、二、三日前から良い方の周期に入ったらしい。ずいぶん日数をかけてきたので全員快調。

六時二十分出発。岩場には陽が当らず、寒々としている。昨日のルート工作のおかげで、難なく岩場を登り切ると、太陽が目にとび込んできた。その先きは、雪のナイフ・エッジが続いていた。しばらくは北西側へ雪庇が発達しているので、南東側の急斜面をトラバースする。次に稜線の馬の背の上に足を置く。狭いところは足の幅もない痩尾根で、全く長い緊張の連続だった。その緊張が、呼吸の苦しさも時間のたつのも感じさせない。気がつくと十一時だった。見える限りの尾根の先端まで、あいかわらず痩せている。また次のコブまでナイフ・エッジである。三人とも立ち止って肩で息する回数がだんだん多くなってきた。十三時近くなって、やっと尾根が広くなり出した。それとともに雪はぐんと軟かくなり、アイゼンの下でダンゴになる。緊張から解放された安堵感と、この足の重みとで、歩みはぐんとのろくなった。

尾根はさらに広く緩くなり、その先端は白いピークになって、紺碧の空に吸い込まれている。三人の足は申しあわせたように進まなくなり、あれが頂上だろうときめこんで、その頂きの一〇〇メートルほど下にビバークした。

翌二十九日、のんびりと陽に当りながら仕度して、頂きに迫ると、それは単なる雪庇の大きな塊であることがわかった。尾根は引続きわずかに上昇しながら、向きを北東から北へ変えていた。こうなると、この尾根が明らかに下りはじめる地点まで、歩き続けるだけである。天気は上々、歩け歩けと、気合いを入れなおして十二時頃から出発した。

果てしない痩尾根をたどる。稜線上はかなり岩の部分が多くなった。何度か、あれこそ頂上かと迷わされるコブがあった。六時頃、稜線の真中に岩が現れた。ここは東側の急斜面をトラ

バースして越えた。それを越えると雪稜の彼方に顕著な岩塔が見えた。あれこそ頂上にちがいない。思わず足が早くなった。その岩塔の向うには、さらに雪稜があり、一〇〇メートルほど続いて下っていた。

七月二十九日、午後七時、私たちは、この雪稜の一番高いところに、持ってきた日の丸をテントのポールに結んで雪の中に立てた。長い夏の陽も、すでにアフガニスタン側の山の端に沈もうとしていた。

尾根はそこから下りになり、深い切れこみを持ち北峰へと登っていた。更に東側には黒々とした三角形を連ねて、七〇〇〇メートル級と思われるピークが並んでいた。(最近の情報は、この山塊の中にイストル・オ・ナールの主峰七四〇三メートルがあり、私達の最終到達点は西峰七二〇〇メートルらしい。)

陽が沈むと急に風が冷たくなり、頂きでの感激にひたっている余裕もなしに下り始め、ビバーク地を探した。顕著な岩塔の西側に風をさけて、ビバークした。ツェルトがあるだけで、羽毛服もない着のみ着のままのビバークだが、乾燥した寒さは意外にしのぎやすい。高度順応がうまくできていたので、息苦しさも頭痛も感じない。

三十日、早々に出発する。二回にわたるビバークで疲労している筈だからと、実に慎重な下りとなる。危険な箇所は全部着実に確保し合う。フィックスを張った岩場を下る頃、細い糸のような三日月が、ティリチ氷河の上に輝きはじめた。

三十一日、クーリーの迎えに来る日が迫っているので、休養をとる間もなく、第一キャンプへ下る。ヒドン・クレバスが発達していた。八月一日、ベースへ戻る。二日からキャラバン開始、帰りを急ぐ隊員のために、まるで休養をとれない強行軍で七日チトラルに帰りついた。

あとがき

一九六九年十月七日付で、吉沢一郎氏に宛てられたスペインのアングラダ氏からの手紙によると、彼等は一九六九年夏、イストル・オ・ナール主峰、東南峰(七三六五メートル)、南峰(七三〇三メートル)の登頂に成功したらしい。その時、今までの隊が主峰だと思っていたピークは、七二〇〇メートルであったこと、それは私たちが撮った顕著な岩のピナクルの向うの雪稜に当たり、アルミニウムのポールが立っていたことを指摘している。彼等はこの地点から東へ下って、七一〇〇メートルのコルから、東の長いリッジを登り、前記三峰の処女峰に到達したという。

同じく六九年の夏一番に取り付いたチェコ隊も、この七二〇〇メートル地点までだったとも書いている。チェコ隊の次に取り付いた日本の関西学院大隊は、アルミニュウムのポールがあったことを、確認していないようだから、この地点までも達していないと思われる。

シャー・イ・アンジュマン登頂（一九六八年）

高木泰夫

まえがき

一九六八年、大垣市ヒマラヤ委員会（会長大垣市長）は市制五十周年を記念して、アフガニスタン王国中部ヒンズー・クシュの未登峰ピークX（六〇二六メートル）に遠征隊を派遣することに決定した。

計画の当初、目標を定める前提として、

一、多少でも地図の空白部を埋める仕事をしてみたい。すなわち処女峯を求めたい。

二、身分相応の計画でなければならない。そして次の遠征への経験蓄積としたい。

三、前記のように公共団体の特別事業として行なわれる以上、正式の許可を取得できる地域であること。

このような条件をふまえて検討を重ねたが、ネパール・ヒマラヤ、カラコルムは登山解禁の見込みがなく、アラスカ、アンデス、アフリカには目ぼしい処女峯が見当らず、東部ヒンズー・クシュへの正式入域には、大変な努力と時間が必要といった八方ふさがりの状況下で、中部ヒンズー・クシュに地域をしぼったのは一九六七年初頭であり、更にピークXをはっきりと目標に定めたのは、同年十一月、在西ドイツのW・フレイ氏の情報を得た結果である。

他方、ヒマラヤ委員会は基本計画ならびに予算の検討と、隊員候補の選考を進め、大要を次の如く決定した。

計画の概要

名称　市制五十周年記念大垣ヒンズー・クシュ・ヒマラヤ遠征隊

目的　ピークXの登頂

日本・アフガニスタン両国の親善

中部ヒンズー・クシュの動植物・地質調査

高所医学の研究

隊長　武藤嘉彦（41歳）

副隊長　高木碕男（45歳）

隊員　高木泰夫（38歳）　マネージャー

林　正陽（34歳）　装備係

佐久間　修（31歳）　記録係

犬飼　進（24歳）　食糧係

川合延雄（22歳）庶務係
瀬川昂生（29歳）医師
安藤好男（43歳）岐阜日日新聞記者

安藤好男を除いてすべて大垣山岳協会員である。

総費用　八〇五万円

公式の報告書として一九六九年七月『シャー・イ・アンジュマン登頂』（四二〇頁）を公刊した。

キャラバン出発まで

旅程及び荷物輸送の方法については検討を重ねたが、最終的に一切を航空機によることとした。五月十二日、一・三屯の隊荷を発送（カーブルで全品目の通関を終了したのは、六月十二日。この点、航空荷物といえども意外と日数を要する）。同月二十日、先発隊の高本（碕）、佐久間が出発。アリアナ・ホテルに投宿し本隊受け入れの準備を進めた。武藤以下本隊七名は六月十一日羽田を立ち、十三日カーブルで先発隊と合流した。通関、通訳の雇用および現地調達品の購入等は、先発隊が済ませていたので、本隊到着時に残っていた業務は国内旅行許可の取得、地図の入手、そして日・ア両国の親善に努めることであった。幸いカーブル市庁舎のホールを借用出来ることとなり、日本から持参した写真、ポスター、登山用具の展示会を開催した。開会式にはカーブル市長他多数の要人に出席頂き、この国における初の日本展として好評を呼んだ。地図については、軍事機密ということで最後まで難行したが、国境地帯を除く中部ヒンズー・クシュ全域にわたって、五万分の一図を八四枚入手した。旅行許可の取得は、キャラバン・ルートが国境線から遠く離れているので、特に問題はなかった。

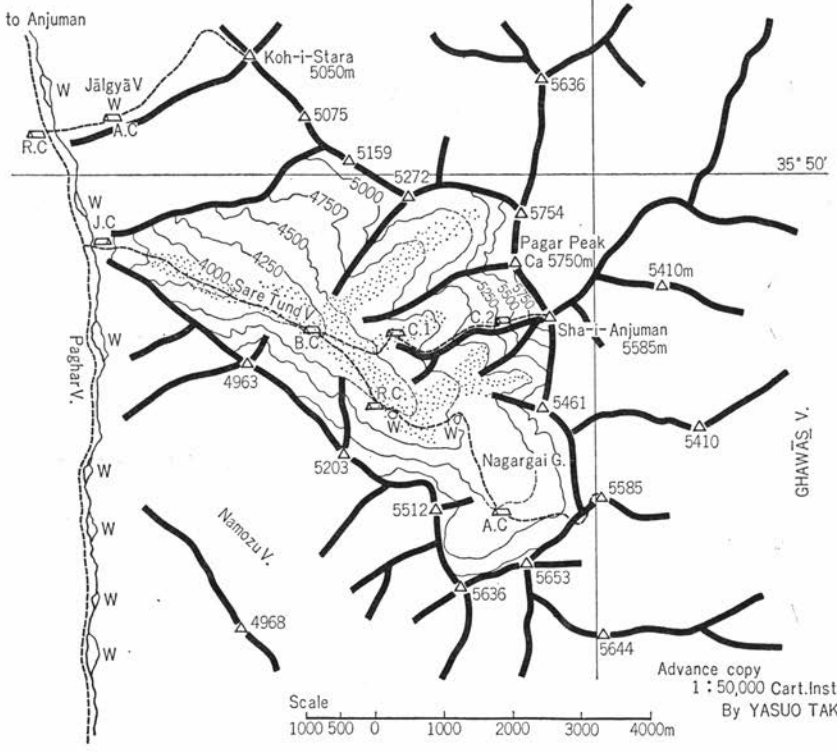
短時日ではあるが、隊員の精力的な活動と現地大使館及び在留邦人の親身のお世話によって、予定通り六月二十日にキャラバンを出発させることが出来た。

キャラバン

チャーター・バスは隊員と隊荷を満載してパンシール川沿いに走る。途中ルハでガバナーにトラベル・パーミットを提示すると、兵隊一人を護衛につけてくれた。陽が沈み川風が肌にしみる頃、グンジュに到着。翌日にも出発したかったが、馬が集まらないということで明後日にする。

六月二十二日、早朝から馬が集まり、軽そうな荷の奪い合いで喧噪を極めたが二五頭に配分し、更に三頭をエクストラ・ホースとして、隊員が交互に乗って行くことにする。この地の馬は去勢されていないのに意外と温和しく、素人でも安心して乗ることが出来るが、それにくらべて悪いのは人間である。雲助根性まる出しの賃上げストには、往路帰路ともずいぶん悩まされたものであった。

Sketch Map of Sha-i-Anjuman
(Ogaki-Hindu-kush Expedition 1968)



ミール・サミールの岩峯を右に、パンシール谷を遡る。炎熱下のキャラバンは、この地の強い日射になれないものにはつらい。その上、乾燥がはげしいので体力の消耗が著るしい。それ故か、馬方たちも意外と厚着で、中にはオーバーを着込んでいるものさえあるが、むしろその方が風土に適応しているといえるだろう。

六月二十五日早朝、アンジュマン峠（四二二五メートル）を越す。アンジュマン谷の川底へおりた所でストライキ。その上、馬が脚を折るという椿事もあって、アンジュマン村到着は翌二十六日になった。

ここアンジュマン村はコクチャ谷の支流、アンジュマン谷最奥の部落で戸数約百戸、川原石と泥で固められた家と、まわりに散在する貧弱な麦畑といった寒村である。ただ下流はるかに、バンダカーの秀峰を望むことの出来るのが唯一の慰めであった。村の裏手にある芝の広場にテントを張り仮基地とする。

日本出発前には、下流のガウォス谷（ボロクロン谷）から登頂路を求める予定であったが、ここで馬をかえないと、またまたトラブルの原因を作ることになるので、アンジュマンの馬を集める間にパガール谷からの可能性を探り、隊長はケロンのガバナーにトラベル・パーミットの提示に出かけることとする。

偵察活動

翌日、キャラバンの疲れは残っていたが、高木(泰)、林の二名が土地の猟師の案内で偵察に出る。ところがカーブルで入手した地図の地名記載に誤りがあり、目的のジルトン谷（上部をノゴルガイ谷という）より一本手前の谷(ジャルギヤ谷)に入ってしまい、ピークXは発見出来なかった。しかし、地形が類似しているので、更に第二次偵察隊を上部へ入れることとする。

六月二十八日、高木(碕)以下七名がポーターとともに出発。パガール谷とジャルギヤ谷の出合に偵察キャンプを設営し、高木（碕）以下四名が入り、またジャルギヤ谷四〇六〇メートル地点へ前進キャンプを出して、佐久間、犬飼、川合が入る。二十九日には偵察キャンプの高木(泰)、林、瀬川の三人がパガール谷をつめて、右岸に合流するジルトン谷に入りピークXを発見し、登頂の可能性を探った。他方、前進キャンプの三人はジャルギヤ谷右俣をつめて稜線に出、五〇五〇メートル峯（後日コー・イ・スターラ〔星の峯〕と命名）の登頂に成功したが、ピークXは発見出来なかった。しかし、一応その成果を得、登路のメドもついたので、前進キャンプを撤収しアンジュマン村に集結した。

ケロンに出向いていた隊長の帰着を待って、スケッチ、ポラロイド写真によって登路を検討した結果、充分成算あるものとしてガウォス谷から入る必要なしと結論した。また、キャラバンと偵察行動中の疲れを癒し、荷物の再梱包をするため、二日

間休養をとることにする。

登山活動

七月三日、ベース・キャンプ建設に出発。パガール谷は広く明るいU字谷がゆるい傾斜で続き、谷奥にはワルマノの峯々が白銀に輝く。小湖と瀬が交互に現われてくる中で、淀みにはマスが遊び、群青の空を流れる旅雲が、時折り影をおとすといった牧歌的な風景が続く。川原のトウダイグサやハクサンチドリの群落を踏んで馬を進める。

このパガール谷とジルトン谷の出合に、通訳のナスラとケロンから来た兵隊を滞留させるテントを設置する。ここからはすべて人の肩をかりなければならない。高木（泰）以下五名は、ポーターをつれてジルトン谷に入る。谷の入口は狭く、とてもこの奥にそんな大きい谷があるとは考えられない。ゴルジュをすぎるとモレーンの末端である。高度差四〇〇メートル、二段になっていて、その下に立つと巨大なロックフィル・ダムのような感じがする。不安定な転石が積み重なっており、下手すると岩ナダレも起こしかねないので、一人ずつ距離をとって登る。上部に出て、モレーンの波頭をいくつもこえて進むと右岸に水場があり、ここに仮のベース・キャンプ（高度三九〇〇メートル）を設け、ポーターを帰す。ジルトン谷の右岸は、岩屑が積み重なった傾斜のゆるい山なみが続き、左岸はいずれも切り立った岩峯で、幾筋も懸垂氷河がかかっている。翌四日はノゴルガイ氷河の末端、四四〇〇メートル地点に偵察用前進キャンプを設営。当初から偵察と建設を併行して行なうことにしているので、荷は自然に重くなり、まだ順化していない身体には相当こたえた。前進キャンプは正面にピークXがドーム状の山容で迫り、ノゴルガイ氷河内院を取り巻く山も指呼の間に望まれるといった、偵察には恰好の場所である。

七月六日、三パーティーに分かれて偵察を開始する。林、川合組はピークXと五四〇一メートル峯のコル（サウス・コル）へのルンゼをつめて、ガウォス谷側からの登路を偵察する。コルに達した彼らはヤジュン峯（六〇二四メートル）とダライ・アビ（五九五四メートル）を望見したが、サウス・コルからの登路は、岩壁に阻まれて絶望的であることを知った。また、佐久間、犬飼組は西尾根の右側壁にとりついて尾根上に出た後、忠実にこれをたどって西面する岩壁に登路を探った。高木（泰）は単独で氷河の内院に入り、これを取り巻く山々を偵察した。

七日には武藤隊長以下四名がポーターを使って、ベース・キャンプを四一〇〇メートルにある池の端まで上げ、十日ぶりに全員が揃った。ここで更に登路を検討し、第一キャンプを西尾根の末端四四〇〇メートルにおき、尾根上五二〇〇メートル（中央岩壁の基部）に第二キャンプを設置して、ここから登頂隊を出発させることとした。

早速、翌日から偵察用前進キャンプの撤収と、第一、第二キャンプの建設にかかる。途中サクラソウの咲きこぼれる四三〇〇メートル地点には、前年パガール・ピークに失敗したイギリス隊のキャンプ跡を発見した。彼等が Moraine Dump と呼んだ場所である。ここから西尾根の末端までは巨岩が重なり、登降にはいつも緊張させられたものであった。それの上に出た所に第一キャンプを建設し、佐久間、犬飼、川合が入り、他はベース・キャンプに戻る。

七月九日は上部の三人が第二キャンプの建設に向かい、他は第一キャンプへの荷上げ。西尾根は下から見るより傾斜が強く喘登が続く。高度を上げるにつれてジルトン谷左岸の山は低くなり、南にコー・イ・サフェド（六〇〇一メートル）の雪峰、西南はるかにはミール・サミール、間近く長大な懸垂氷河をかけたコー・イ・パガール、更にクワジャ・ムハマッド山群の山々がほぼ一八〇度のパノラマで展開する。さすが五二〇〇メートルまで上がると吹く風も肌に冷たいが、日射が強いせいか気温は高い。氷を削って第二キャンプを建設した後、第一キャンプに戻って高木(泰)、林、瀬川と合流する。十日は林、佐久間、犬飼、川合が第二キャンプに入り、高木(泰)、瀬川がサポートする。

七月十一日、林以下四名が二隊に分かれて上部の偵察を開始する。佐久間、犬飼組は中央岩壁のルート偵察を行なうが、正面部分はオーバーハングが連続して登攀不能。右方のルンゼにのみ許された箇所があるように思われ、これさえ抜ければ上部は長い雪の斜面で、後は体力だけの問題となる。他方、林、川合組は本峯右側壁のクーロアールに登頂の可能性を探ったが、平均斜度四〇度、上部は更に傾斜が強い。したがって午前はともかく午後にはスタンスの崩壊が予想され、帰路の疲労を合わせ考えると問題点が多い。もっとも、この地の雪は急斜面であれば必ずニエベ・ペニテンテが発達し、程度の差こそあれ階段状を呈しているので、登降の苦労はピッケルと十二本爪アイゼンのコンビネーションによって、著るしく軽減される利点はある。しかし、安全度からいえば、危険距離の短い前者をとるべきであろう。かくして登頂ルートが一応明確になったので、十二日はベース・キャンプに下って休養し、十三日に第二キャンプに戻って中央岩壁右ルンゼにルート工作と、更に上部の偵察を行うこととする。

十四日は早朝から行動を開始する。犬飼、川合の二人はルンゼの岩壁部に、林、佐久間は下部のクーロアールをトラバースする部分に、全長三四〇メートルのフィックスド・ロープを取りつけた。この地の岩はすべて広大な変成作用を受けており、フリクションは良く効くが、リスが浅くまた狭いので薄葉ハーケンを多用する。これでほぼ登頂の見込みはついた。十五日は全員第一キャンプに集まり、最終的な打合せを行ない、登頂隊

に犬飼、川合、サポート隊に高木(泰)、林、佐久間、瀬川を選定。十六日には登頂隊、サポート隊が第二キャンプに入る。夕刻から雲が湧き上がり、雪さえちらつきはじめる。昨日から気圧がドロップし続けているのも気懸りだ。

シャー・イ・アンジュマン登頂

起床三時十五分、本峯こそガスが切れているが、パガール・ピークには渦巻き雲が湧き、五〇〇〇メートル以下は雲海に閉されて天候はいつになく悪い。隊長をトランシーバーで呼び出し指示を仰ぐ。「しばらく天候の推移を見よ」ということで待機。四時三十分「天候回復の兆しあり、出発せよ」の指令が入り、サポート隊とひきつづいて登頂隊が出発。七時三十分、登頂隊はルンゼ基地に到着しサポート隊と分かれる。林、佐久間は第二キャンプに残って待機。高木(泰)、瀬川は全体を見通すことの出来る五〇〇〇メートル地点まで下って、武藤隊長らと合流し各隊に指示を出す。九時五十分、登頂隊は快調なピッチでルンゼを登りきって上部の雪の大斜面に出る。この頃から天候が再び悪化して降雪が続くため、その後の行動を続けるか否かを問い合わせてきたが、隊長は意を決して続登を指示。雪混りの風が横なぐりに吹きつけてくる中を進んだ。この斜面が終わるところから雪壁が八十メートルほど続くが、アイゼンの出っ歯をたたきこみ、ピッケルをホールドにして左稜線に出る。吊り気味の尾根を激しい息切れと頭痛、倦怠感と闘いながら登攀を続ける。

そして十二時五十分、ついに頂上に立つことが出来た。生憎の天候で、期待のバンダカーもティリチ・ミールも見えないが、日・ア両国旗をピッケルに結わえて登頂を祝し、記念に隊員の氏名を記した紙片と用意した市章を、岩の間に埋めて帰途についた。

登頂隊は疲れていたが第一キャンプまで下って、全員が集まり夜は大コンパ。何回も何回も乾杯して、こみ上げてくる喜びを分かちあったものである。かくして登頂に成功した後、W・フレイ氏が仮称したピークXを正式にシャー・イ・アンジュマン(アンジュマンの王)と命名した。この名前はカーブル出発前にアフガニスタン・オリンピック委員会セラジ委員長と協議して、用意して行なったものである。

コー・イ・オーガキ登頂

その後、隣接するパガール・ピーク(五七五〇メートル)を試みることも考えたが、隊員の疲労と石油の不足を勘案して、ノゴルガイ氷河内院の山に目標を変更し、十八、十九日の両日で上部のキャンプを撤収する。

七月二十一日、高木(泰)以下若手六人が、ノゴルガイ氷河最奥部にある五五八五メートル峯をめざして出発。右岸寄りをモ

レーン堤に沿って歩き氷河末端の池に出る。正面の懸垂氷河をつめて圏谷に達し、氷河の真中に前進キャンプを設営。氷河上でも午後になると、融雪水が流れ出すので炊事は楽だ。

七月二十二日、朝から雲がとび天候不安定。広い雪原を横切って五六五三メートル峯と五五八五メートル峯のコルへ向かって登高を開始する。気温が低いので雪が硬く、すこぶる快調である。コルの直前で左から入ってくる雪のつまったルンゼに入る。ここは更に傾斜が強く四〇度をこえているが、高度順化のすんでいる故か嘘のように楽である。ルンゼを抜け、広い雪の斜面をまわりこむようにして頂上に向かう。ルンゼの中ではあんなに固かった雪が、ここでは何故か腐っていた。頂上直下まで続く雪壁を登り、六人が交互に頂上に立つ。ガウォス谷側は五〇〇メートルの垂壁になっていて、身体が宙に浮いているような感じである。厚い雲がすべての頂を閉ざし、雪が舞いはじめ、下山にかかる頃には猛烈な吹雪となった。降りつづく雪がトレースを消し、アイゼンが団子になるのを気にしながら前進キャンプに下る。軽食後、撤収。山の終りの万歳が圏谷一杯に谺する。五五八五メートル峰は遠征隊を送り出した大垣市を記念して、コー・イ・オーガキと命名した。

かくして中部ヒンズー・クシュ最後の六〇〇〇メートル峯他二峯の初登頂に成功し、新雪の来た山々に別れを告げて、パガール谷を下ったのは七月二十六日であった。

帰路キャラバン

アンジュマンの馬を使ってコクチャ谷を下り、四日目にラピスラズリー鉱山から四十キロメートル程下流の道路工事現場に出る。そこのトラックを使ってスピジュメを経てジュルムへ。更に乗合バス、トラック、チャーターバスを乗りついで、カーブルに帰着したのは八月五日午前二時のことであった。

〔訂正〕八二ページの地図中 Shai-i-Anjuman 5585 m とあるのを、Shah-i-Anjuman 6026 m と訂正する。

アルゼンチン中部アンデスの登山

川上　隆

われわれの第一目標としたトヌジャン川（Rio Tonuyan）流域の山々は、南米アンデス山脈の北側、南緯三三度三〇分にあり、アルゼンチン領メンドサ（Mendoza）州とチリとの国境線周辺、アンデスの主脈線上に位置している。

トヌジャン川の源流にはツプンガート（Tupungato）六八〇〇メートルを主峰とし、トヌジャン川の右岸西側のアンデス主脈国境線上にそって、セロ・サンファン（Cerro San Juan）（六一一メートル）に連なる六〇〇〇メートルの山々があり、いったんピューケネス峠（Port de Piuquenes）（四〇四五メートル）まで高度を下げ再びマルモレイホ（Marmolejo）（六〇〇〇メートル）へと続いている。左岸の山では、トヌジャン氷河の東側にそびえているセロ・ネグロ主峰（Cerro Negro）（六一五二メートル）の山群がある。

われわれが目標とした第一次登山の対象の山々は、セロ・ネグロ主峰、東峰（六一四〇メートル）、マルモレイホ東峰（五九二〇メートル）の未登峰である。トヌジャン川の雪線は三八〇〇メートルであるが、トヌジャン氷河は上部でツプンガート氷河と連なり、氷河末端からツプンガートの源頭までは標高差二〇〇〇メートル、氷河の長さ約一八キロである。

セロ・ネグロは主峰、東峰と六〇〇〇メートル以上のピークを二つもち、過去何回か、アルゼンチン陸軍山岳部隊のバキャーノ（Baquiano）―軍隊の山案内人で山の専門家―や民間登山家及びオランダの登山隊によって試登されたが、それぞれ山群の東側、北側からのルートを選び失敗している。ネグロの西面、北面は標高差約二〇〇〇メートルの岩壁で、特に西面はガラガラした岩くずの壁になっている。東南面は急峻な懸垂氷河が東峰につきあげており、南面は主峰と東峰の間に山麓氷河を形成している。ルートとしては、東南面、及び南面からが考えられたが、アプローチが長いことを除けば、南面が最も容易であることから、南面の谷から南面の山麓氷河に達し、氷河の中央部西側のコルから主峰及び東峰をねらうこととした。

マルモレイホ東峰はセロス・パロマレス（Cerros Palomares）―マルモレイホ主峰（六〇〇〇メートル）の北東尾根の最高点で双頭峰からなり、その東面は標高差約二〇〇〇メートルの岩壁、

南面は主峰との間に横断状の大氷河をかかげている。マルモレイホ主峰は、チリ側又はアルゼンチン側から何回か登られているが東峰は未登峰であり、しかもセロス・パロマレス（北東尾根）と主峰北側の主脈線の間にかかる北面氷河（谷氷河）からは、いまだ何人もはいったことがないということで、これをルートとして東峰を登ることを考えた。トヌジャン川から分岐する、パロマレス川源頭に位置する北面氷河からの東峰は、技術的にはネグロよりむずかしいことが予想された。

第二目標としては、ツプンガート（六八〇〇メートル）の北東約四〇キロに位置するプラタ（Plata）山群の北々東、ツプンガート川の右岸からプラタ側にはいりこんでいるフェア（Fea＝悪いの意）谷源流の山々―エナノス（Enanos）山群を決定。この地域には五七〇〇メートル前後の未登峰が数座あり、アルゼンチン中部アンデスで数少ない未踏査地域である。結果的には、ツプンガート氷河の増水が予想以上にひどく、結局涙をのんでフェアの谷を目の前にして、退却せざるをえなかった。すぐ目標を変更、南緯三四度一五分に位置するデアマンテ湖（Laguna Diamante）周辺の山々、ボルカン・マイプー（Volcán Maipú）（五三五〇メートル）、セロ・エル・ゴロー西峰（Cerro El Gorro）（四九六〇メートル未登峰）、ゴロー東峰（四九四四メートル未登峰）、セロ・アマリィジョ（Cerro Amarillo）（四五六〇メートル）、セロ・ラグーナー北峰（Cerro Laguna）（五一〇〇メートル未登峰）、ラグーナー南峰（五〇三四メートル）の登山を決定した。

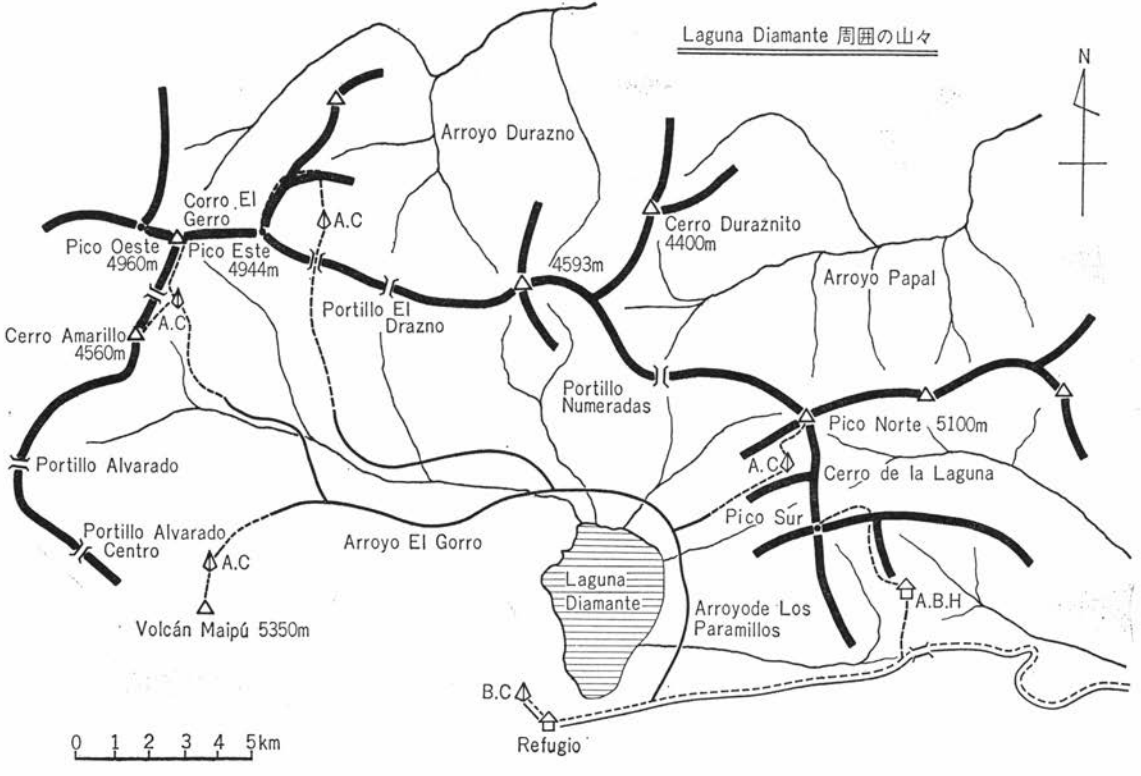
気候面から見た、アルゼンチン中部アンデス地域（南緯三〇度から三五度にまたがるアンデス山脈の東側）にふれてみると、気候的には一部温帯に属するが、殆んど乾燥気候（ステップ）で、南緯三五度周辺では、偏西風帯の風下地域としての特性をもっている。降水量は少なく、山岳地帯（氷雪気候区）を除いては、標高四〇〇〇メートル以下がステップ気候となっている。夏季における気圧配置は、西に南太平洋高気圧、東に南大西洋高気圧があり、大陸内部は低圧部となっているため、気圧配置としては安定している。予想される悪天としては、雷雨・地形性降水などの局地的現象、及び低気圧がアンデス山脈の西側（チリ側）にあった場合で、気圧降下の続く時は、雪又は風雪もありうる。標高約三五〇〇メートル以下では雨となる。盛夏期（一月・二月）異常乾燥の続いたあと、メンドサ州では雷雨をともなった大雨となり、アンデス山脈の東側約三八〇〇メートル以上は風雪となる。

(1) **気温**　南緯三三度付近での平均気温

四〇〇〇メートル　〇度C

五〇〇〇メートル　マイナス七度C

六〇〇〇メートル　マイナス一三度C


Laguna Diamante 周囲の山々
N
Arroyo Durazno
Corro El Gerro
A.C
Pico Oeste 4960m
Pico Este 4944m
4593m
Cerro Duraznito 4400m
Arroyo Papal
Portillo El Drazno
Cerro Amarillo 4560m
A.C
Portillo Numeradas
Pico Norte 5100m
Portillo Alvarado
A.C
Cerro de la Laguna
Pico Sur
Portillo Alvarado Centro
A.C
Arroyo El Gorro
Laguna Diamante
Arroyode Los Paramillos
A.B.H
Volcán Maipú 5350m
B.C
Refugio
0 1 2 3 4 5km

月	場所	平均	最高	最低
六	東京	二一・一度	二五・二度	一七・八度
一二	メンドサ	二二・五	三二・〇	一四・〇
七	東京	二四・四	二九・三	二二・〇
一	メンドサ	二三・五	三二・〇	一六・〇
八	東京	二四・一	三〇・七	二三・二
二	メンドサ	二二・一	三一・〇	一六・〇
九	東京	二二・二	二六・九	一九・五
三	メンドサ	一九・三	三一・〇	一三・〇

最高の極は東京八月三八・四度、メンドサ一月四四度である。最低の極はメンドサ一二月二度、一月五度、二月五度、三月マイナス一度である。日較差が非常に大きいことがわかる。

(2) **降水量** メンドサの十二月二一ミリメートル、一月二四ミリメートル、二月三二ミリメートル、三月二八ミリメートルと非常に少なく、東京の五分の一である。降水日数は一～二月それぞれ五日位である。一般的に二月下旬からの降雪は不安定である。

(3) **風** 夏季の風について考察すると、四〇〇〇～六〇〇〇メートル地点で、風向は西風が卓越、強風の割合は二〇メートル以上が、四〇〇〇メートルで〇・六%、六〇〇〇メートルで六・六%である。(アコンカグアでは最大風速二五〇キロメートル以上の風あり)無風状態は、アルゼンチン側に多い。西風の卓越は偏西風の影響によると思われるが、偏西風帯は南緯四〇度以南であるので、パタゴニアのような悪い気象とはならない。

南緯四〇度以南は偏西風帯にはいるため、風上側では降水量多く—パタゴニア、風下側は降水量少ない—乾燥パンパ、パタゴニア台地。しかし中緯度帯では、ペルー海流の影響大きく、太平洋斜面も乾燥し、北米カリフォルニアと近似した気候及び地形を形成している。トヌジャン川周辺はその中間に位置し、しかも主脈の東側であるため、気象的には恵まれているということが出来る。

(4) **湿度** メンドサにおいては平均五五%以下で、東京の冬に近く、かなり乾燥している。

(5) **その他** 雲量、メンドサにおいては、平均十分の三で好天日が多い。しかし雷雨は東京より多く、メンドサ5日/月、東京3.5日/月となっている。

登山隊の編成

日本側

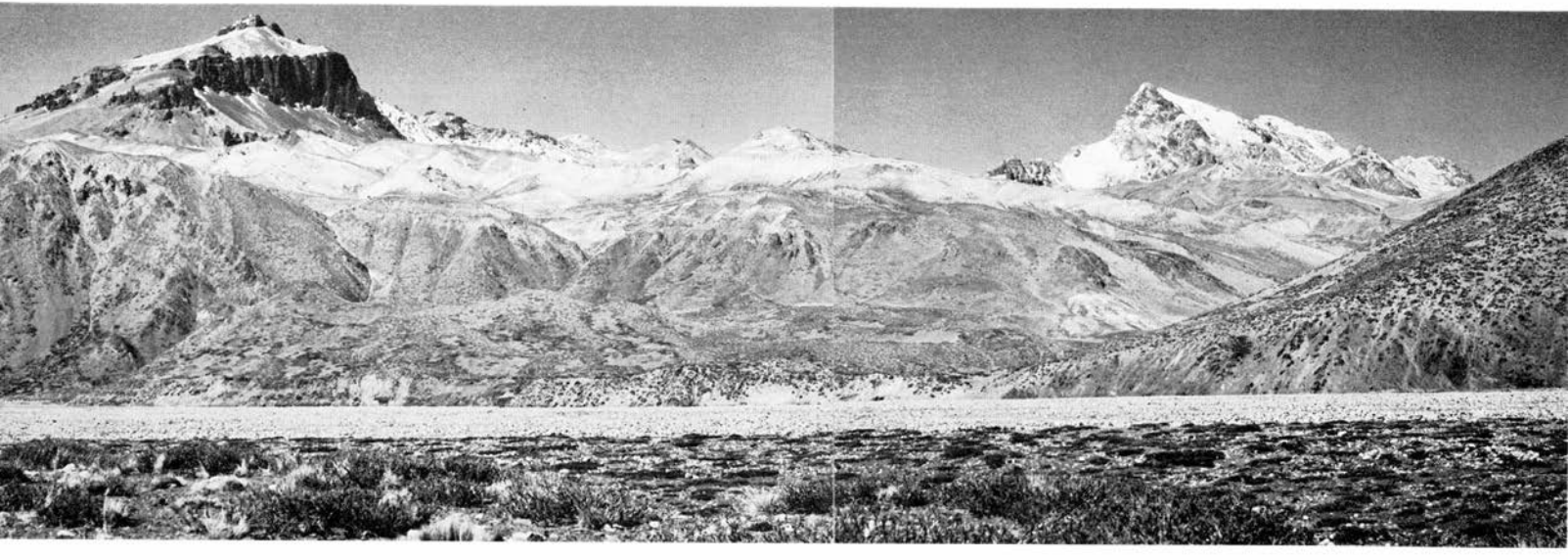
隊　長　朝井一男　61歳　防衛大学校教授
登攀隊長　川上　隆　42歳　防衛大学校校友会山岳部部長
　　防衛大学校校友会山岳部監督
　　横浜市立鶴見工業商校

隊　員　大須賀浩　32歳　一等陸尉　第三五普通科連隊
〃　村田光昭　30歳　一等陸尉　第一三普通科連隊
〃　田尻一実　27歳　二等陸尉　第七特科連隊
〃　木村清順　25歳　二等陸尉　第三一普通科連隊
〃　安藤千年　25歳　三等陸尉　第一七普通科連隊
〃　田村真一　24歳　三等陸曹　第一三普通科連隊

アルゼンチン支援隊
第一次登山支援隊長
A・O・コルバラン（Corvalán）中尉　第一一山岳歩兵連隊
外、将校二名。
F・ルセロ（Lucero）伍長以下、下士官、兵ともに約三〇名。ムーラ一一五頭。
第二次登山支援隊長
A・N・マルケス（Marques）上級中尉　第一一山岳歩兵連隊
隊員、V・J・バサーン（Bazan）曹長以下、下士官五名、兵隊五名。
第一六山岳歩兵連隊下士官四名、兵一〇名。国境警備隊一名。ムーラ六七頭。
デアマンテ支援隊長
A・N・マルケス上級中尉
隊員、バサーン曹長以下、下士官五名、兵六名。トラック二台。

第一次登山期間と登頂した山名と隊員。一九六八年一二月一九日、ツプンガート村、アルゼンチン陸軍第八山岳歩兵旅団第一一山岳歩兵連隊発、一九六九年一月二日セロ・ネグロ（六一五二メートル）初登頂。村田光昭、安藤千年、ルセロ伍長（Fidel Lucero）、一月一二日ツプンガート村着。

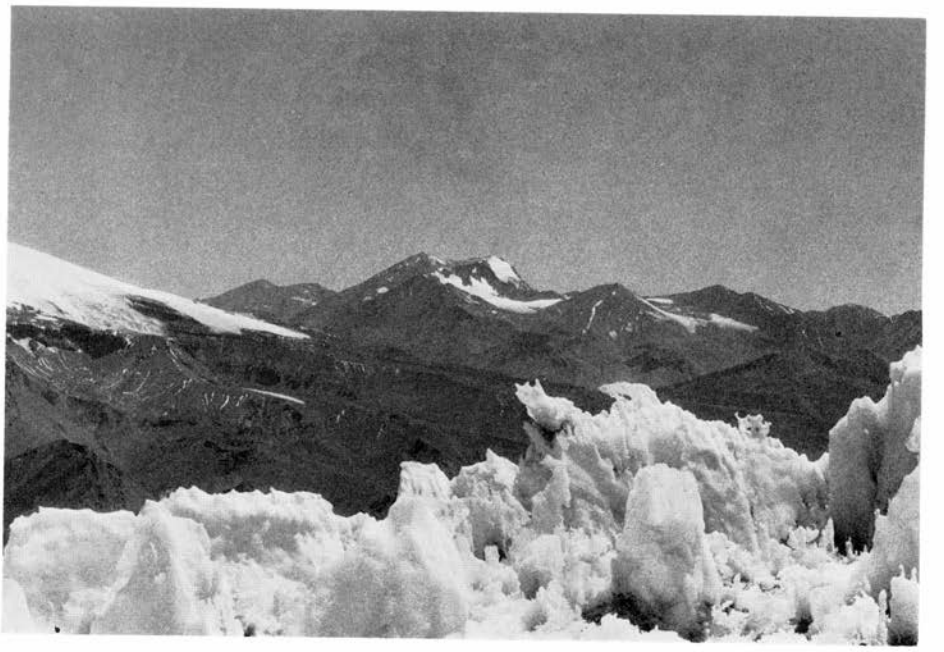
第二次登山期間、一九六九年一月二一日ツプンガート村発、エナノスに向かう。ツプンガート川の渡渉できず、一月二五日ツプンガート村着。登山目標変更、デアマンテ湖周辺の山々に向かって一月二九日ツプンガート村発、一月三一日、マイプー（五三五〇メートル）登頂、大須賀浩、田尻一実、木村清順、安藤千年、田村真一。二月四日アマリィジョ（四五六〇メートル）第二登、木村清順、安藤千年。二月五日セロ・ゴロー西峰（四九六〇メートル）初登頂、村田光昭、田尻一実、木村清順、安藤千年。二月五日　セロ・ゴロー西峰（四九四四メートル）初登頂、



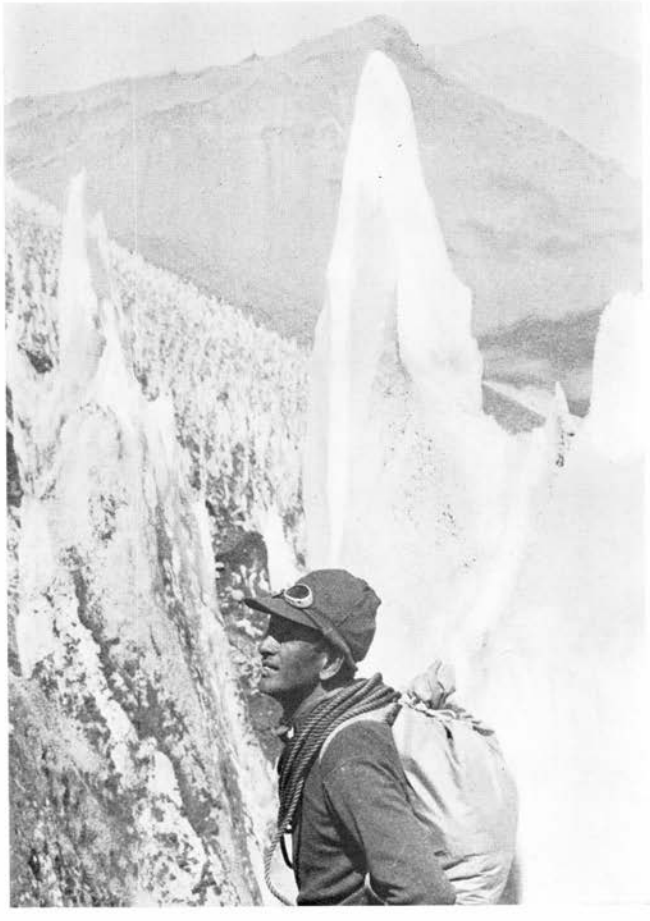
トヌジャン川からパロマレス尾根を望む、マルモレイホ東峰（5920m）とカスティジョ（4861m）
Palomares Ridge seen from Rio Tonuyan—Pico Este de Cerro Marmolejo (5920m) (left) and Castillo (4861m) (right).

セロ・ネグロ南氷河の中央氷壁
The central ice-wall of the South Glacier of Cerro Negro.

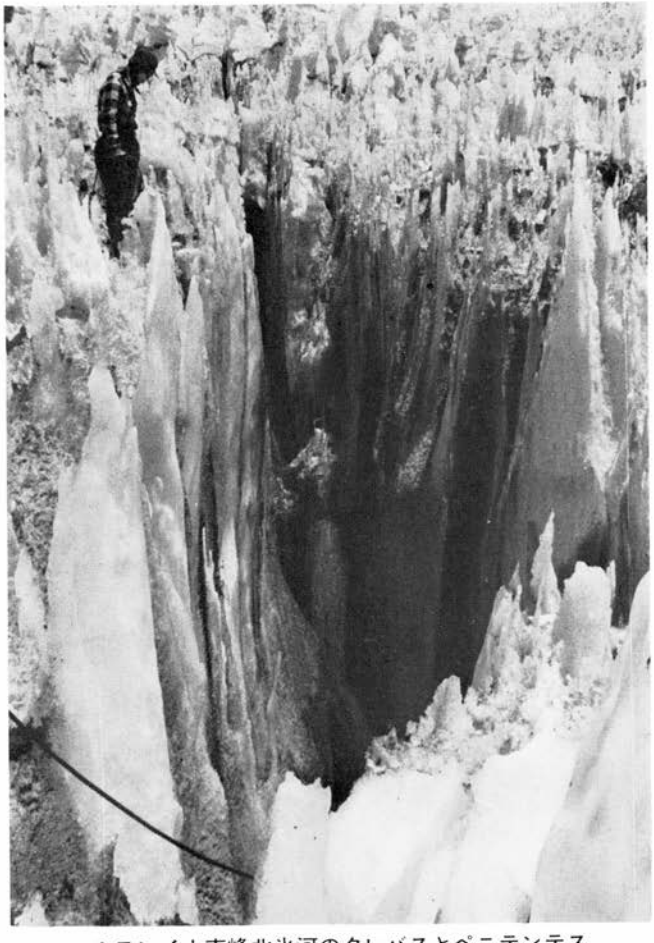
トヌジャン氷河とサンファン東面
Tonuyan Glacier and the east aspect of Cerro San Juan (6111m)



マルモレイホ東峰北氷河から望むセロ・ネグロ南面
The south aspect of Cerro Negro (6152m) seen from the North Glacier of Pico Este de Cerro Marmolejo.



セロ・ゴロ東峰南氷河のペニテンテス
Nieve-penitentes on the South Glacier of Pico Este de Corro El Gorro (4960m).



マルモレイホ東峰北氷河のクレバスとペニテンテス
Crevasses and nieve-penitentes on the North Glacier of Pico Este de Cerro Marmolejo (5920m).

川上隆、大須賀浩、田村真一。二月九日セロ・ラグーナー北峰（五一〇〇メートル）初登頂、川上隆、村田光昭、木村清順、安藤千年。二月九日　セロ・ラグーナー南峰（五〇三四メートル）大須賀浩、田尻一実、田村真一。二月一〇日、ツプンガート村着。

メンドサ市からツプンガート村へ

一二月一四日、サンチャゴ（San Tiago）から国際鉄道で川上、村田、安藤メンドサ着。全隊員がアルゼンチン・メンドサ州都メンドサ市に集結。われわれの宿舎は、市の中心部に位置する将校宿舎である。夕方から在メンドサ市日本人会発足のパーティに、比嘉さん宅に招待される。沖縄の人達が中心である。洗濯屋経営が殆んどで、内地人関係の移民者はホテル経営一、洋菓子屋経営一である。ビノをくみかわし、日本食に舌つづみをうち楽しい一夜を過ごす。

メンドサ市は人口約三〇万、プラタナスや桑の木の街路樹に包まれた森の都。市の西側にはサンマルチン（San Martin）公園が控え、緑の匂いを強烈に感じさせる。市をとりまく地域は、まさにステップ気候で、シャボテンや潅木の荒れ果てた疎林帯となっている。人間の住んでいる所は、潅漑用水され必ず植林した森に覆われ、その周りは広大な果樹園（ブドウ畑が主）となっている。気候は乾燥気候特有のさっぱりしたもので、空気は新鮮そのものである。

一五日は作戦会議、一六・七日、登山基地ツプンガート村の第八旅団第一一山岳歩兵連隊に集結する。

一七日、後発隊登山基地に到着。連隊長以下幹部総出の出迎えで、大変なもてなしようである。このあたりは、人里を離れると荒涼とした原野となり、ところどころに最近開発された原油掘索機が、のんびりと首を上下に動かしている。一一連隊の支援隊と打合せを行なう。一九日、いよいよトヌジャン川のベースハウスに向かって出発である。

ツプンガート村からトヌジャン川陸軍小舎ベースハウスでの行動

一九日、大須賀、田尻、支援隊と共に出発。支援隊は予想もしない大部隊である。支援隊長コルバラン中尉以下約四〇名、ムーラ一一五頭。二〇、二一日の二日間、大須賀、田尻、ルセロ伍長外通信兵一名はトヌジャン川のルート偵察。

二一日、朝井隊長以下本隊は、連隊長、連隊幹部と共にトラックでジャレータ（Yaretae）（三五〇〇メートル）に、ここでムーラに乗りかえる。目前にせまるアンデスの前山は、標高約四五〇〇から五〇〇〇メートル、黒褐色の岩肌も荒々しく、四〇〇〇メートル以上は昨日の降雪でほんのり雪化粧をしている。ここからムーラに乗った山旅となるわけである。つづらおりの

急な山道をムーラに揺られ、四三八〇メートルのアルゼンチン峠（Port Argentino）に立つと、目の下はスパリと切れた感じで、前方にはマルモレイホ東峰が黒びかりした岩肌を横たえ、北側には山全体が氷河に覆われたサンファンなど、六〇〇〇メートル級のアンデス主脈が、氷河をいだいて大きく波うっている。標高三八〇〇メートル以下は、ステップ状の河岸段丘を構成し、起伏と色彩的変化に富んだ風景である。

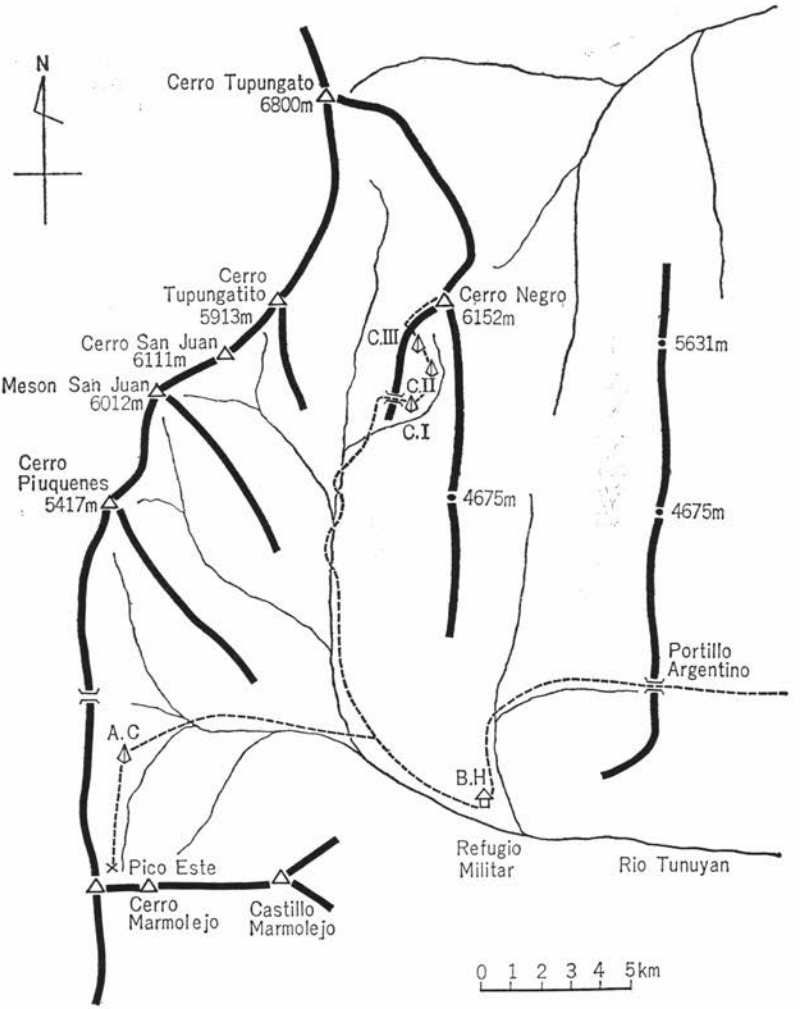
夕闇につつまれる頃、セロス・パロマレス末端の対岸、トヌジャン川の左岸に位置する陸軍小舎ベースハウス（二八六〇メートル）に着く。アルプス風の石造り二階建の小舎で、中にはなんの飾りもなく、収容人員は約九〇名、われわれのために簡易ベッドが二階に設営される。明日はネグロの南面及びマルモレイホ東峰、北面氷河の偵察をすべく支援隊と打合せ。

二二日、早朝、川上、大須賀、村田、ルセロ、通信兵一名で偵察に向かう。トヌジャン川を渡渉しパロマレス川の左岸にそって、ステップをマルモレイホ東峰の麓に向けてムーラを飛ばす。四〇〇〇メートルあたりの台地から振りかえると、北東にネグロ主峰、南面氷河、東峰と南東懸垂氷河がくっきりと見える。南面氷河の中央壁左側のコルから、主峰へのルートを確認、問題は南面氷河に突きあげている南谷の状態にしぼられる。

二三日、いよいよ朝井隊長ともお別れである。隊長やコルバラン支援隊長に見送られながらBHをあとに、ネグロ南面に向かって出発。日本側、川上以下七名。支援隊ルセロ以下一二名、ムーラ三二頭。トヌジャン川左岸から右岸の河岸段丘にはいり、トヌジャン氷河末端の左岸にはいっている南谷に向かって行進。兵隊の歌うアンデス山歌が隊員の心をなごませる。何回か渡渉し、目指す氷河と南谷の合流点に到着。氷河の末端は約一五メートルの高さで、一面に厚さ約一メートルのモレーンをかぶっている。南谷の左岸台地に仮のキャンプを建設。谷は入口から先の長さ一五〇〇メートルにわたって、二〇～三〇メートルの氷をつけた滝が五カ所程あり、結局谷の北側にある急なガレ場をルートと決定する。問題は物資の輸送であるが、ルセロはガレ場の乗越まで、ムーラを使用することにOK。二四日、全力をあげ乗越の先、三段台地の一番下、南谷中流の右岸に日本隊及びルセロ以下一〇名、ムーラ二八頭をもって、物資の輸送を完了、C1（標高四〇〇〇メートル）を建設。支援隊はルセロと通信兵一名を残し、引返す。ルセロの強引とも思える積極的支援に深く感謝する。

二六日、全員荷上げ。両岸からの落石に気をくばりながら、大きな石と雪をかぶった谷を一歩一歩と高度を高める。四〇五〇メートル地点になると両岸が狭ばまり、約三〇メートルの氷雪をつけた滝が現われる。手前から左岸台地を高まく。滝の上部、左岸台地四二〇〇メートルにデポ、C2予定地とする。付近にペニテンテスが何本かたち、これを水資源とする。

Cerro Negro & Cerro Marmolejo



二七日、C2建設。大須賀、村田、南面氷河偵察。

二八日、氷河の末端から二〇〇メートル程はいりこんだモレーン上に荷上げ、ネグロ南面を目前にして士気大いにあがり、一人平均三〇キロのボッカも快調にすすむ。

二九日、ルセロ、氷河末端にビバーク。夕方から風雪となりルセロの身を案ずる。三〇日、全員停滞、ルセロC1に下る。

三一日、快晴となり、いっ気にC3(五一〇〇メートル)建設。氷河の規模は比較的小さく、長さ二・八キロ、幅二・三キロ、表面はゆるやかなカーブで波うっており、クレバスも予想より少ないようである。登頂ルートとしては、氷河西側のゆるやかな岩尾根と、氷河中央を突破するルートが考えられるが、文句なく氷河ルートを決定する。

一月一日、大須賀、村田、田尻、安藤は氷河中央奥壁のルート工作。木村、田村はC3への荷上げ、ルセロC3脇にビバーク。いよいよ待ちに待った頂上攻撃の準備は完了。主峰隊、村田、安藤、東峰隊、大須賀、田尻と決定する。以下村田隊員の日記。

「黒々とそびえ立つセロ・ネグロから、南に流れ落ちる氷河は三方を山に囲まれていた。そして氷河の西端と山との接する地点に、私達のAC(C3)はあった。すでに、どの山々も朝日に照り輝いていたが、氷河にはまだ朝日の照射はなく寒風が吹きすさんでいた。

私と安藤は、未知への期待とかすかな不安を抱きながら氷河上に立った。一月二日の早朝である。川上登攀隊長から示された攻撃計画は、次のようであった。村田と安藤は主峰への登頂をひたすら目指し、大須賀、田尻は氷河の北端からつきあげた約六〇〇メートルの氷壁の上半分を工作、一番近い六一四〇メートル峰をアタックするというものだった。ルセロは西側の尾根から登攀、村田隊と奥壁のコルで合流することとした。

寒風に磨かれた氷河は、テラテラの青氷となり、歩くたびにアイゼンがキシキシと鳴った。そのアイゼンのキシミは、アンデスに残り少ない六〇〇〇メートルの処女峰に、二人の不法侵入者があることを、山の神々に急報しているかのように、周囲に響きわたった。

クレバスもペニテンテス(氷塔)もない、約三キロの平らな氷河を一時間程で終り、六〇〇メートルの氷壁となる。登攀開始。下半分二〇〇メートルは、昨日工作してあるので、フィックス・ロープを利用して急ピッチで登る。約五〇メートル登ると、朝日があたり暖かくなる。空はぬけるように青い。氷は硬くU字ハーケンが見事にうたい、がっちりときく。その上の氷壁に、ペニテンテス気味の小さなヒダがあるので、絶好のホールド、スタンスとなる。快適な登攀である。

約三五〇メートル登った頃、大須賀、田尻パーティが登攀開始である。赤いヤッケが朝日に輝いている。少々遅れ気味であ

る。彼等の健闘を祈りつつ、我々もピッチを上げる。所々に新雪をかぶったヒドン・クレバスがある。注意しなければいけない。

見上げると氷の壁が、朝日に映えてキラキラ輝く。まるで水晶細工のようである。それにスクリュー・ピトンが絶大な威力を発揮する。まるで一枚岩にうち込んだ埋込ボルトのように。

約五〇〇メートル登ると、いったん壁の傾斜がゆるやかになる。しかし、傾斜がゆるやかになるとペニテンテスが大きくなり、かえって歩きづらくなる。皮肉なものである。あと約一〇〇メートル。稜線は眼前である。この最後の一〇〇メートルはきつい。今まであったヒダもなく、ツルツルの青氷である。慎重に登って五八〇〇メートルのコルに出た。九時四〇分である。ここで稜線伝いに来たルセロ伍長と合流し休憩する。

コルからまばゆいばかりに輝くツプンガート、セロ・サンファン、メソン・サンファンなど、六〇〇〇メートル級の国境稜線が眼前に迫り、すぐ眼の下には、不気味なまでに侵蝕されたトヌジャン、ツプンガート氷河の景観があった。私達三人は、コーヒーで渇き切ったのどをうるおしながら、その圧倒的な大パノラマに酔いしれた。

コルからは岩の登りである。しばらく登ると、雪に覆われたもう一つのコルに出る。下をのぞくと大須賀・田尻パーティが氷壁を登っている。まだ相当下である。ザイルを固定するのに手こずっているに違いない。コールして互に無事を確認し合う。今日中に彼等が六一四〇メートル峰に登頂するのは無理かもしれない。やがて主峰と六一四〇メートル峰との分岐点である。左手にセロ・ネグロの釣鐘状の主峰が黒々とそびえ、その裾から右手に牧歌的盆地が広がり、やがて六一四〇メートル峰になる。これがアルゼンチン中部アンデスの六〇〇〇メートル最後の処女峰かと、疑いたくなるような平凡な岩山であった。しかし、いざその岩山を登り始めるとすぐ、私達は六〇〇〇メートル登山の厳しさに直面した。

浮石の足場は一足歩るく毎にくずれ落ち、危険なことこの上ない。そのうえ呼吸は苦しくなり、頂上は果しなく遠く思われ出した。ルセロ伍長は五〇〇〇メートルピークを数多くふんでいるので元気一杯でトップ、次は安藤、私はラストをのろのろと進む。ピークを一つ乗越すと次のピークが出現する。この次は頂上だと思うと、又次のピークが出現する。すわり込んでしばらく呼吸を整えて、またのろのろと進むことのくり返しである。

やがて安藤が四つ目のピークの上で「頂上！　頂上！」と呼んでいる。ルセロが心配し助けに来てくれる。とに角、夢遊病者的スタイルで頂上に立った。隊長の頭髪と登頂者の名前、日時を記入した用紙を埋めて、ケルンを積む。アルゼンチンと日本国旗をつけたピッケルを掲げて、記念写真を撮る。

いつも思うことだが、登頂までの苦悩と危険の時間に比して頂上に憩う時間というものは、何と短かく瞬間的であることだろう。登頂者にとって頂上は安住の地ではないのだ。

私達は頂上を後にした。降りも浮石が次々と落ち危険きわまりない。やっとの思いで分岐点にたどりついた。私にとって、コルから氷河までの氷壁の下りは悲劇的となった。昨日と今日張った固定ザイルのおかげで、やっと氷河まで降り立った。唯しっかりしないと危いという意識だけが、ボヤケタ頭の中で鮮明であった。山々はアーベントロートにつつまれ、暮色濃い氷河上には、冷たい夜の風が吹きまくっていたが、私達は強烈な夏の太陽でザクザクになった氷河の上を、長い影と凍りついたザイルを引きずって、トボトボと天幕に向った。一四時間のアルバイトの結果、やっと天幕にたどりついた。

次の日にキャンプを撤収した。そしてC1で登攀隊長に笑顔で迎えられて『御苦労さん。頑張ったらしいな』と握手をした時、登頂を果したという実感と喜びをしみじみと感じた。それから三日後に、濁流渦まくリオ・トヌジャンを下った。」

六日、支援隊がムーラをつれC1に現われる。C1撤収、トヌジャン川に降ると、一二月三一日から連日の晴天で、トヌジャン氷河はじめ各枝氷河が融け、川は異常な増水である。ムーラは恐れおののき、なかなか渡ろうとしない。ルセロの強引で、しかも細心な誘導の結果、どうにか全員何回かの渡渉を行なう。大きな岩がゴロゴロ流されている急流を渡渉するのは、時間にして一人渡るのは何分かでしかないが、気持のよいものでない。顔を空にむけろとルセロがどなる。ムーラは何回かよろける。ムーラを三列に組むがすぐ列が乱れてしまう。隊員が無事渡渉し終り、ホッとしたのもつかのま、兵隊が一名流される。頭を沈めなかったためと、波にはねられ、うまく岸にたどりつく。BHにたどりついた時は、人もムーラも一度に疲れがでてぐったりとする。この重労働の結果、ムーラはマルモレイホ東峰での一頭を加えて、六頭がトヌジャン川原に葬られることになってしまった。

ツプンガート村(一〇〇〇メートル)—六五キロ、トラックージャレータ(三五〇〇メートル)ムーラ集結所—二三キロ、ムーラ—アルゼンチン峠(四三八〇メートル)をへて陸軍小舎(二八六〇メートル)—一九キロ、ムーラ—C1(四〇〇〇メートル)—二キロ徒歩—C2(四二〇〇メートル)—三・二五キロ徒歩—C3(五一〇〇メートル)—四・二キロ徒歩—セロ・ネグロ主峰(六一五二メートル)。

八日、マルモレイホ東峰目指しBH発。日本側川上以下七名、支援隊ルセロ以下七名、ムーラ二二頭。パロマレス川左岸の砂漠にちかい草原の河岸段丘を、のんびりとムーラに乗って進む。この世はまさに天国といった楽しい山旅である。源流に近ずくと川幅約三キロと広く、岩のゴロゴロした広河原となって

いる。セロス・パロマレス寄りにC1（三五〇〇メートル）を建設。ルセロ外通信兵一名を残し支援隊BHへ。九日、マルモレイホ東峰北面氷河のルート偵察。氷河末端のアイスフォールの左岸にはいりこんでいる急なガレ場を登り、高捲き気味にアイスフォール上部にでる。ペニテンテスが想像以上に発達、高さ一・五メートルから二メートルもある。しかし東峰は間近かにせまり、ラッシュによる登攀の可能性がありそうである。

すでに一月九日、次の目標エナノス山群の登山にあたって、ツプンガート川の渡渉の可能性、ムーラの多くが傷つき、疲れきっていることなどから、できるだけ早く低地に移動してやらねばならない。日時的にマルモレイホ東峰登攀のチャンスは明日のみである。

一〇日、リーダー大須賀外日本側六名に、ルセロのメンバーで早朝出発。しかし氷河のペニテンテス、クレバスは登高スピードを著しく妨げる。標高五一〇〇メートル地点にて東峰を断念。一一日、C1撤収、BHに下る。

ツプンガート村からプンタ・デ・バカス（Punta de Vacas）へ

一二日、トヌジャン川陸軍小舎BHを撤収。第一一連隊に下山。一三日から第二次登山の準備を行なう。支援隊との調整に手間どり、二一日ツプンガート村発、途中ウスパジャータ（Uspallata）の第一六山岳歩兵連隊に一泊、ムーラを調達し、バカスにはいる。

日本側川上以下七名。支援隊、隊長マルケス上級中尉、下士官六名、兵五名以上第一一連隊。第一六連隊下士官四名、兵一〇名、ムーラ六七頭、バカスの国境警備隊一名の編成となる。

二四日、バカス発、ツプンガート川に合流するブランコ川（Rio Branco）の出合いにある警備隊小舎に向かう。盛夏期をむかえ、ツプンガート川の増水が気がかりである。混成隊のためか、支援隊間の性格の違いもあり、なんとなく士気に欠けるようである。ムーラの扱い方をみても、第一六連隊は優しいようである。今日一日で、支援隊にムーラによる負傷者が三名もでる。落馬や、蹴られた事故である。

私達が初めに予想し、打合せの時にトヌジャン川の場合を例にして、十分たしかめたのだが、川の増水は支援隊の予想よりはるかに多く、渡渉不可能となる。勿論前進を要請すれば無理をするだろう。しかし支援隊が混成部隊で、今日の三件の事故を考えても、強引に前進すれば間違いのおこる可能性は大きい。茶褐色に濁ったツプンガート川の流れは、あくまでも無表情である。対岸にはフェアの谷が、その奥に未踏査のエナノスが、五七〇〇メートルの山なみを横たえているのだ。

二五日、撤退と決定。マルケス支援隊長以下バキャーノ達に心から感謝される。アンデスは広い、他にまだ楽しめる山域が

あるはずである。すべては一一連隊に下山してから考えることにしよう。二五日、心身共に疲れはてた感じでツプンガート村に下山、一一連隊の正門にはいると、衛兵から日本からの電報を受け取る。増田甲子七防衛庁長官からの激励電報である。グッド・タイミング、隊員の顔が輝き、新たなるファイトが燃えあがる。翌朝は麻生人事局長からの激励電報もはいり、士気は一層もりあがる。

第一一連隊のムーラの疲労回復がおくれているので、トラックで山麓まではいれる山域を選定する。ツプンガート村から南に三〇〇キロ、ラグーナ・デアマンテ周辺の山々と決定する。デアマンテ周辺の登山については会報『山』第二九三号を参照。

アルゼンチン中部アンデスの山々は、夏好天に恵まれるため、アプローチの長い点をのぞけば、登攀技術上からはそれ程難かしい所はなく、楽しい山登りができる。あえて技術的な困難さを求めるとするならば、冬期登山ということになる。冬期登山での問題は、日本の山と同じように、悪天対策と雪崩の問題であるが、アプローチが非常に長いことと合せて考えると、相当の準備と覚悟が必要である。この地方の陸軍山岳部隊も、冬期には前述した原因で多くの犠牲者をだしている。

未登峰で、価値ある地域ということになると、この地方ではエナノスを除いてはないようである。エナノス登攀ということになると、ツプンガート川の渡渉の可能性が第一の問題で、あとは輸送面でムーラの調達如何である。第一については十二月中旬から一月上旬までで、これを過ぎては川の増水がひどくて無理である。ムーラの調達については、バカスの国境警備隊と連絡をとるのが一番のようである。

最後に、私達はアルゼンチン陸軍及び民間の善意あふれる好意の結果、数多くの山に登ることができた。日本を出発する前、一部でいわれていたトラブルは皆無であった。人々は明朗快活、機械文明こそ発達していないが、生活水準は南米一といわれるだけあって高く、心の温かさをしみじみと感じさせられた次第である。

コルディエラ・キムサクルスとイリマニ縦走 ―ボリビア・アンデス―（一九六八年）

阿部重男

各都道府県山岳連盟の動きが活発になるにつれ、何々県岳連登山隊という、県単位の登山隊による海外遠征が幾つも試みられたが、栃木県山岳連盟も、一九六八年五月から八月にかけて、結成二十周年を記念して、県単位としての海外遠征登山を行なった。

海外遠征となると、いまもって、まず当面するのが、いかにして資金および長期にわたるヒマを生み出すか、ということが我々のいつわらざる現実である。

しかし、我々は、その点、たいへん恵まれたのであるが、反面、看板（といってもコマーシャルのではない）を背負わされた固苦しい面も感じたが、やりがいのある海外遠征でもあった。

資金面では、全県あげての援助をうけた。地元の下野（しもつけ）新聞社が栃木県岳連と共催で行なう事業として、全県下によびかけ、人口一五〇万余りの県で、一般募金が約六〇〇万円になったし現物寄付も相当なものであった。県からも一〇〇万円の補助金が出たし、岳連会員ひとりあたり千円の寄付も集められた。

隊員の勤務先での扱いは、教職員は自己研修（俸給は支給される）、一般公務員は職専免（同上）、会社、公社でも、欠勤、休暇扱いにはならないし、給料一部支給という好意的なものであった。

そのような背景のもと、我々は距離的に最も遠いアンデスへ、しかも往復空路という一見ぜいたくにみえる（実は時間の節約のためなのだが）遠征が、わりあいに経済的支障なくできたのである。

アンデスには、わが国から既に多数の登山隊が出ているが、そのうちでは比較的数少ないボリビア・アンデスに目をつけた。ここには過去、一九六一年一橋大学隊のアポロバンバ山群（『山岳』五十七年参照）、一九六三年神戸大学隊のレアル山群（『山岳』五十九年参照）、一九六四年東京外語大学隊のレアル（『山岳』六十年参照）、一九六四年神奈川県浅野学園隊のアポロバンバ南部とレアル山群のイリマニ峰（『山岳』六十二年参照）、一九六七年女性三人による日ボ親善登山隊のレアル山群ワイナ・ポトシ峰（『山岳』六十三年参照）と五指を数えるに過ぎない。我々栃木県岳連隊は本邦第六番目のボリビア・アンデス登山隊である。

前述の五隊は、アポロバンバとレアル山群に集中しているが、レアルは、かつてオーストリア隊が、新大陸のヒマラヤとよんだように、すばらしい山なみである。

ボリビア・アンデスは、ペルー南部で東山系と西山系に分かれ、その間にアルティ・プラノとよばれる、幅数百キロにおよぶ、日本列島がスッポリおさまってしまうような、大高原が広がっている。

コルディエラ・レアルとは広義には、この東山系の大部分をさすが、普通には、北をコンサタ川、南をラパス川でしきられる約二百キロの山群をいう。このレアル山群の南東にラパス川の谷を隔てて連なるのが、キムサクルス山群であり、ラパス南東からオルロ方面に、北西から南東へ約百キロの山なみをみせている。

キムサクルス（Quimsa Cruz）とは三つの十字架という意味であるが、この山群は、美しいレアルのかげに目立たぬ存在となり、また、アプローチの不便さもあって、いままでは登山活動の対象となることが少なく、未踏地帯を多く残していた。

我々は計画の段階で、アポロバンバ山群とキムサクルス山群の両者を対象としていたが、同じ時期にアポロバンバには、ドイツの登山隊が入るという話を吉沢一郎氏から伝え聞き、吉沢さんにお願いして、ドイツ隊にアポロバンバをゆずり、キムサクルスはこちら専用に願った次第である。このドイツ隊（Oberfränkische-Anden-Expedition 1968）とは、後にラパスのクルブ・アンディノ・ボリビアノ（Club Andino-Boliviano）のルームで交歓することができた。

我々の登山計画は、次の三期に合かれた。つまり第一期（五月二十八日～六月二十一日）キムサクルス山群、第二期（六月二十七日～七月十四日）サハマ、第三期（七月二十二日～八月一日）イリマニであった。

栃木県山岳連盟南米アンデス親善登山隊と、妙に長々とした名称をつけたのは、県民の支援を得るためであった。アンデスがどこにあるかもわからぬ者が多いから、特に南米とつけろ、というほどだったのである。山岳連盟の隊であるから、隊員の構成は寄合世帯なのはいうまでもない。

登山隊員（年齢は遠征当時）

隊　長　阿部重男（三七歳）教員　栃木県岳連副理事長　宇都宮大学山岳部OB　宇都宮白峰会所属

副隊長　小材守志（三八歳）栃木県庁職員　渉外担当　栃木県岳連事務局長　宇都宮渓嶺会所属

隊　員　長谷川正（三六歳）教員　マネージャー　栃木県高体連登山部委員　宇都宮白峰会所属

〃　寺内真治（三〇歳）栃木市役所職員　装備担当　東

京農大ワンゲル部ＯＢ　栃木山岳会所属

隊　員　今井　仁（三〇歳）専売公社員　装備・輸送担当
専売公社宇都宮地方局山岳部所属

〃　大野　宏（二七歳）教員　記録・撮影担当　宇大山岳部ＯＢ会所属

〃　小島守夫（二七歳）県庁職員　医療・食糧担当　宇大山岳部ＯＢ会所属

〃　荻野　憲（二七歳）富士重工社員　食糧担当　富士重工山岳部たかね会所属

〃　小島　進（三四歳）海外移住事業団職員　現地参加
ボリビア国サンタクルス駐在　宇大山岳部ＯＢ会所属

〃　亀岡武彦（三五歳）報道担当　下野新聞社特派員

ほかに現地人で、次の二名が登山の一部に参加した。

ロニー（Ronnie）井畑（二二歳）クルブ・アンディノ・ボリビアノ（ボリビア山岳会）会長　日系三世　浅野学園隊のイリマニ登山に同行している。

アルフレド・マルチネス（Alfred Martinez）（三三歳）クルブ・アンディノ会員　一橋大学隊と同行、アポロバンバのチョクニャコータ、パロマニ・グランデに登頂、神戸大学隊とイリマニ、イヤンプに同行。

本隊行動日誌

2月18日　登山装備船積（横浜港）。

4月28日　先発隊出発（空路、長谷川、寺内）。

5月19日　本隊出発（空路）。

5月20日　全隊員ラパス集結（一〇名）。

6月1日　キムサクルス山群東面チャタマルカ湖南西岸にＢＣ設営。

6月4日　サンフェリッペ第一次アタック隊初登頂に成功（小材、寺内、小島、大野）。

6月5日　第二次アタック隊（長谷川、今井、マルチネス）サンフェリッペと無名峰（のちにヨコカワと命名）に初登頂。

6月6日　第三次アタック隊（阿部、荻野、寺内）サンフェリッペとヨコカワに登頂。

6月7日　小材、小島ヨコカワに登頂。今井、大野、サンロレンソに初登頂。

6月9日　キムサクルス山群主稜線上の無名峰にアタック開始
小材、寺内、C峰（のちにトチギと命名）に初登頂。

6月10日　阿部、今井、大野、荻野、A峰（のちにシモツケと命名）、長谷川、小島、B峰（のちにニッコウと命名）に初登頂。

6月12日　ＢＣ移動開始。

6月14日　キムサクルス山群西面ハチャクノコリョ山麓にＢＣ設営。

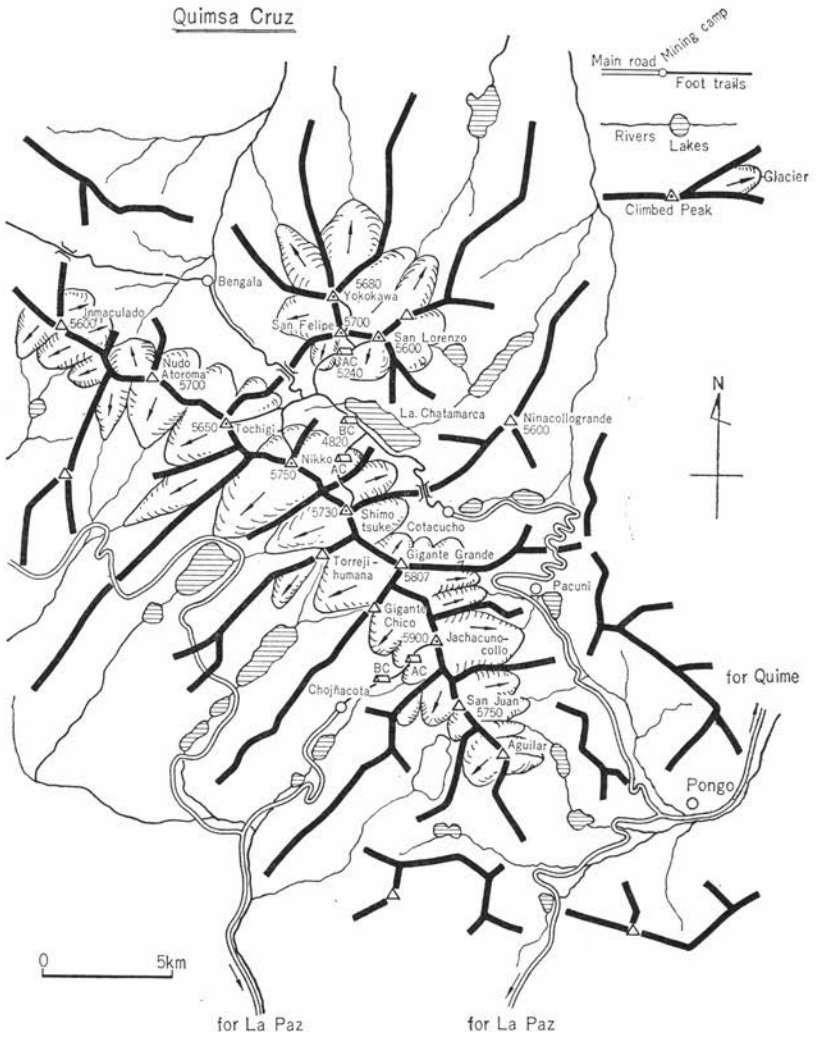
6月18日　ハチャクノコリョ登頂に成功（今井、寺内、大野、荻野）。
7月1日　サハマ山麓にBC設営。
7月4日　第一次アタック隊（阿部、寺内、大野、荻野、ロニー）南面ルンゼのルートで登頂。
7月7日　第二次隊（小材、長谷川、今井、小島、マルチネス）登頂。
7月22日　イリマニBC設営。
7月24日　イリマニ南峰の西尾根上五四一〇メートルに第一キャンプ設営。
7月25日　同尾根五六八〇メートルに第二キャンプ設営。
7月26日　今井、大野隊、縦走にはいる。小島、荻野隊、縦走隊をサポートして北峰に登頂。阿部、寺内隊、南峰に登頂。
7月27日　今井、大野隊、南峰、中央峰、北峰の縦走に成功。
7月28日　小材、長谷川隊、南峰に登頂。
8月1日　ラパス帰着、登山活動終了。
8月9日～12日　サン・ファン日本人移住地訪問。
8月15日　ラパス出発（空路）帰国の途につく。
8月25日　羽田帰着。

キムサクルス山群での登山

キムサクルスはラパスから南東、直線距離にして約八〇キロ付近から始まり、さらに南東方向に標高五千から六千メートルの峰々が五十座近く連なる山群である。その最高峰は、山群中央部やゝ南よりのハチャクノコリョ（Jachacunocollo-5,900 m）であり、その北にはヒガンテ・グランデ（Gigante Grande-5,807 m）、ネバド・アトロマ（Nevado Atoroma-5,700 m）、インマクラドウ（Inmaculado-5,600 m）など、またハチャクノコリョから南にはサン・ファン（San Juan-5,750 m）、アギラル（Aguilar-5,600 m ?）などが連なり、主稜線をなしている。

この付近一帯の登山活動は、詳しいことは不明であるが、我我が知り得た範囲では、一九〇三年ドイツ隊が初めて踏査したことに始まり、一九一二年スイス隊によりハチャクノコリョ、インマクラドウ、アギラル、カルナバル（地図上位置不明）などの初登がなされた。ついで一九二四年にドイツ隊が、インマクラドウ以北一帯を踏査したようであるが、詳細は不明であり、その後J・P・プレムのドイツ隊が一九二八年アトロマに初登、一九三九年ハチャクノコリョ、アギラルの第二登、ワイナ・クノコリョ（Huayna Cunocollo-5,800 m）（地図上位置不明）、サン・ファンの初登に成功している。さらに、一九六四年アドリアン（Adrian）のメキシコ隊がキムサクルスに入山、アトロマの第二登、アギラルの第三登、ヒガンテ・グランデの初登に成功している。

我々がこの地域のやゝ詳しい地図を見たのは、アメリカン・


Quimsa Cruz
Main road
Mining camp
Foot trails
Rivers
Lakes
Glacier
Climbed Peak
N
Bengala
Inmaculado 5600
Nudo Atorema 5700
5680 Yokokawa
San Felipe 5700
San Lorenzo 5600
AC 5240
5650 Tochigi
La. Chatamarca
Ninacollogrande 5600
BC 4820
Nikko 5750
AC
5730 Shimotsuke
Cotacucho
Gigante Grande 5807
Torreji-humana
Pacuni
Gigante Chico 5900
Jachacuno-collo
BC
AC
Chojñacota
San Juan 5750
Aguilar
for Quime
Pongo
0
5km
for La Paz
for La Paz

アルパイン・ジャーナル、一九四五年に載っていたJ・P・プレムのものであった。我々は、その図によって計画をすすめていたが、その後クルブ・アンディノのグテーレス（Gutierres）氏が航空写真と彼の山岳界から得た知識をもとにして集成した、スケール五万分の一の概念図的な地図を、ラパス日本人会長の井門泰氏から送られた。別掲の概念図は、その地図と我々の踏査の結果、作成したものである。栃木岳連隊の登山は、この地図における主稜線北東部に派生した、サンフェリッペ（San Felipe-5,700 m）山塊の初登頂に主目標をおいたのである。

五月十九日、羽田をたった本隊は、現地時間二十日昼近くラパス空港に降りた。装備類は、Kラインによりチリのアリカ港経由でラパス入り、在留日本人会の骨折りで心配した盗難にもあわず、通関もスムーズに行った。トヨタ・ボリビアーナの河合社長が、社屋の一室を本隊の装備類倉庫に提供してくださり、すべて順調にすすむ。

五月二十八日、一切の準備をすませ、マルチネスを同行し、ラパスを出発した（小島進は移住地に水害があったため登山には不参加）。

トヨタのトラックは、アルティ・プラノを二五〇キロ突走った。ゆるやかな起伏の褐色の高原が荒涼と果てしなく広がる。荒野にポツンと置き忘れられたようなインディオ部落。ところどころ、すすけたような草が申し訳のように生えているほかは、一木もみられない半砂漠状の高原の彼方に、キムサクルスの山なみがギラギラ輝いて、我々の闘志をわかせた。

トヨタ・ボリビアーナの新ヶ江氏は道に明るく、キムサクルスの山ふところ深い鉱山部落コタクチョ（海抜四六七〇メートル）（インディオはカルメンロサともよんでいる）まで乗り入れた。ここでトラックを帰すが、アンデスのアプローチが実に容易なことに稍々張り合い抜けの感じだった。翌日からベースキャンプ設営のため前進にかかるが、ここで一苦労する。

キャラバンにはリャマを雇うのだが、なかなか集まらない。インディオは実にルーズで、約束を守らない。さらにキャラバン途中で賃上げストまで敢行する始末だ。その結果、結局リャマ一頭につき一日六ペソ（一ペソ三〇円）となる。

それでも六月一日、コタクチョからサンエンリケ（San Enrrique）峠（四九〇〇メートル）を越えたところ、チャタマルカ湖畔（Lg. Chatamarca）にベースキャンプ（四八二〇メートル）を設営できた。

サンフェリッペ（五七〇〇メートル）

サンフェリッペは、頂上直下に大氷塊を崩壊させ、二キロ近い氷河をチャタマルカ湖に向け押し出している。ルートは、この南西氷河上にとり、南稜をのりこえ、頂上南東のプラトーに出る。プラトーに出る南稜ののっこしが困難であるが、プラトーに前進テント（五二四〇メートル）をあげてからは、稜線上の

比較的単調な登行となった。

氷は硬いが表面に新雪がついており、それほど困難はなかった。高度も五七〇〇メートルでは、ほとんど影響がなく、気候は全く安定しており、快適な登はんであった。

ヨコカワ（五六五〇メートル）

サンフェリッペの北部、尾根つづきに、ひときわぬきんでたヒマラヤひだのきれいな峰があった。やせ尾根づたいに登り、頂上直下に五〇メートルのフィックスを設けて、全員登頂した。これは無名峰であったため、本隊の後援会長であり、かつてラパスを訪れたことのある栃木県の横川知事の名をいただきクルブ・アンディノ、ラパス日本人会とも相談、諒承を得て、ヨコカワと命名した。以下に述べる三峰の命名も同様にした。

シモツケ（五七三〇メートル）　**ニッコウ**（五七五〇メートル）

トチギ（五六五〇メートル）

サンフェリッペ山塊とチャタマルカ湖を間にして、向かい合ったキムサクルス山群主稜線上、ヒガンテからアトロマ間の十キロほどの間に三つの無名峰が連なっている。これらを本隊を三班に分け、六月九日から十日にかけて登頂し、栃木県に因んだシモツケ、ニッコウ、トチギと命名した。

どの峰も氷河の上に突出屹立した岩峰で、その側壁に幾筋かのルンゼが懸垂し、それが氷雪で埋められていた。そのルンゼにルートをとり、数ピッチで頂上に立った。

ハチャクノコリョ（五九〇〇メートル）

前記六峰（サンロレンソ San Lorenzo-5,600 m には、サンフェリッペ前進キャンプに荷上げにきた今井、大野が七日初登頂した）の初登を終った本隊は、ベースキャンプをキムサクルス山群西面に移動した。キャラバンは地元の鉱山で使うインディオのトラックを利用した。

ハチャクノコリョへは、はじめ東面パクニ(Pacuni)からのアタックを考えたが、アプローチの容易さと、踏査の目的のためから西面チョヘナコタ（Chojnacota）へまわりこんだ。チョヘナコタから望むハチャクノコリョは、キムサクルス山群の盟主にふさわしく、雄大な山容を誇り、氷河のスケールも大きく、既にスイス、ドイツ隊が登った山だが、我々の闘志をかきたてた。

二日間の偵察のあと、ハチャクノコリョ氷河にルートを定めて、六月十七日寺内、今井、大野、荻野の四人がベースキャンプを出て、標高五七〇〇メートルにアタック・キャンプを設営、翌十八日強風にたたかれながらも晴天に恵まれ、戦後初の登頂をなした。

ボリビアの最高峰サハマ（Sajama-6,530 m）

サハマはチリ国境に近くそびえる氷の塊のような大きい山だ。本隊はトラックでラパスから、三五〇キロ走ってサハマ部落についた。ラパスを出て四日目の七月一日サハマ山の南西、

海抜四四八〇メートルの地点にベースキャンプを設営、二日南西稜を越えて、西面氷河上五〇五〇メートルに前進テントを設営、そこからダイレクトにアタックした。しかし山の大きいサハマは、氷河の状況も悪く、登頂ルートの発見は困難をきわめた。

七月三日、一日がかりでルート工作、長さ百メートルを越すフィックス・ロープを張ってルートをつけた。四日、阿部、寺内、大野、荻野、ロニーが八時間の苦闘の末、一九六四年の東京外語大隊につづいて日本隊二番目の登頂をした。つづいて七日、小材、長谷川、今井、小島、マルチネスが、本隊の第二次登頂をした。

イリマニ（Illimani-6,480 m）初縦走

本隊最後の目標は、ラパスから毎日仰ぎみられるイリマニの南峰、中央峰、北峰の初縦走である。

七月二十二日、イリマニ西面、四四六〇メートルの地点にベースキャンプを設営、イリマニ縦走の拠点とした。

二十四日、南峰から西へ張り出している尾根上五四一〇メートルに第一キャンプ、二十五日五六八〇メートルに第二キャンプをひきあげた。

二十六日、今井、大野隊が縦走にはいり、南峰、中央峰を踏んで、中央峰と北峰のコルでビバーク（高度六〇九〇メートル）した。ここには小島、荻野隊が、第二キャンプから直接のルートをとって、食糧などをサポートしておいた。

二十七日今井、大野隊は予定より早いピッチで登高を続け、北峰に登頂した。いっぽう小島、荻野隊は、さきのサポートのあと、二十六日北峰に登頂、同日阿部、寺内隊は南峰に登頂、二十八日小材、長谷川隊が南峰登頂に成功。結局全員が、南峰もしくは北峰に登頂した。

イリマニ縦走記録

1968. 7.26（金）晴	
C1 発	6：15
C2	7：15
南峰稜線	11：45
〃 頂上	12：00（昼食）
中央峰	14：05
北峰コル	16：45
1968. 7.27（土）晴	
コル 発	8：00
北峰頂上	10：15
〃 発	11：00
コル 着	11：45
〃 発	13：05
C2	15：25
C1	15：59

最後に、我々の登山が成功裡に終了したかげには、クルブ・アンディノの好意とラパス日本人会の絶大なる協力、日本大使館の親身の援護があったことを記し、忘れ得ぬ百日間のボリビア・アンデスの報告を終る。

サンフェリッペ（5700m）―チャタマルカＢＣから135mm望遠レンズで撮影
San Felipe (5700m) seen from the Base Camp by the Lake Chatamarca (by S. Abe).

ニッコウ峰からチャタマルカの谷を隔ててサンフェリッペ（中央）、ヨコカワ（左）、サンロレンソ（右）を望む
Yokokawa (left), San Felipe (center) and San Lorenzo (right) seen from Nevado Nikko beyond the valley Chatamarca (by T. Hasegawa).

サンフェリッペ前進キャンプからチャタマルカの谷を間にキムサクルス主稜線のトチギ峰（5650m）（左）とアトロマ峰（5700m）（右）を望む
Nevado Tochigi (5650m) (left) and Nevado Atoroma (5700m) (right) seen from the attack camp of San Felipe.

シモツケ峰（5730m）からの南望（キムサクルス山群南部）
View south from the top of Peak Shimotsuke (5730m)—The southern part of Quimsa Cruz Range. (by H. Ohno)

高度4000ｍの大高原アルティ・プラノには砂漠の景観が展開する。彼方にボリビアの最高峰サハマ（6530ｍ）が肩をそびやかす。

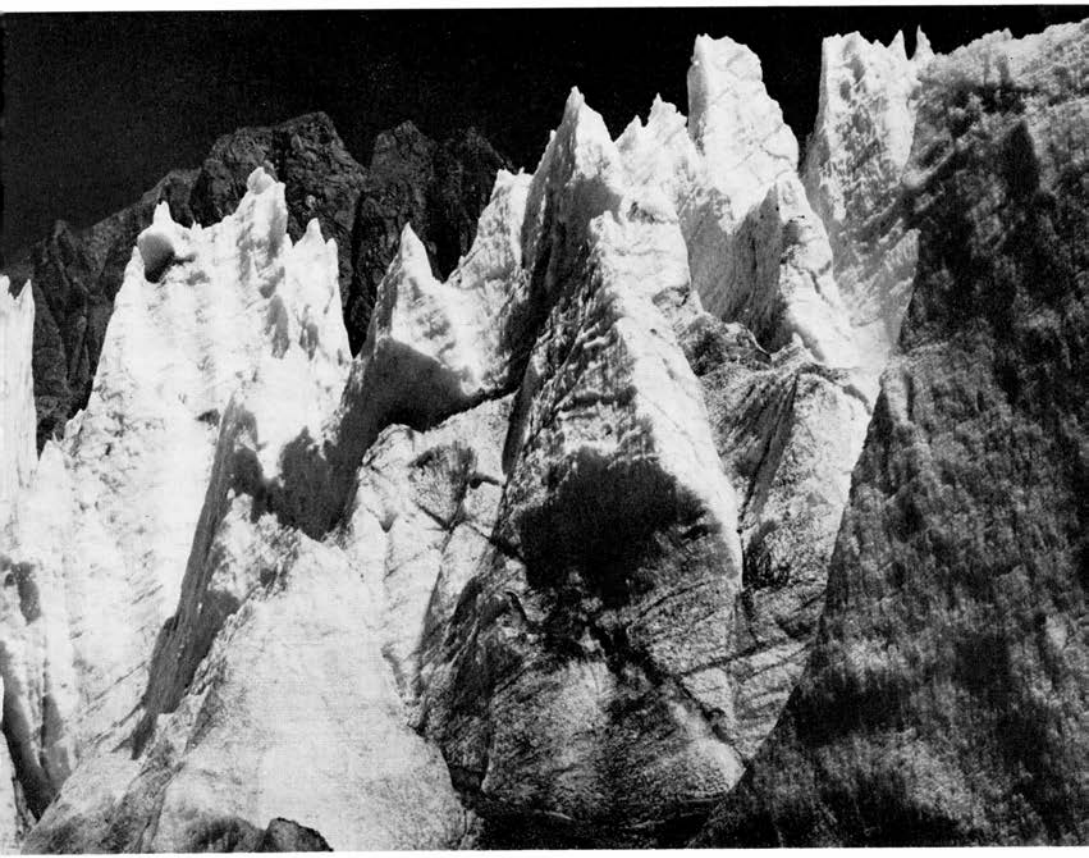
Nevado Sajama (6530m) seen from the Alti Plano. (by H. Ohno)

イリマニ南峰西尾根第1キャンプ（5410m）からイリマニ北峰とイリマニ氷河を望む
The North Peak of Nevado Illimani and the Illimani Glacier seen from Camp 1 (5410m) on tke West Ridge of the South Peak. (by S. Abe)

ベースキャンプからメルセダリオの南壁を望む
South wall of Mercedario (6770m) seen from the Base Camp.

メルセダリオの第2キャンプ（5200m）から第3キャンプ（5700m）へのルート工作
On the climbing route between Camp 2 (5200m) and Camp 3 (5700m) on Mercedario (6770m).

南壁下部の縦横に走るクレバス地帯
Crevasses area just below the South wall of Mercedario.



乱立するペニテンテ（メルセダリオにて）
Ghastly standing of nieve-penitentes (Mercedario).

クニックニックから見たマーカス・ベーカー主峰とサウスリッジ、左端が3、4峰、
中央の台形がジャンクション・ピーク
Mt. Marcus Baker (13, 176ft.) and its south ridge with the Junction Peak (table-shaped in center) and 3rd & 4th Peaks (left) seen from Knicknick.

空中から見たチュガーチ山脈
Chugach Range seen from air.

メルセダリオ南壁（一九六八年）

吉田三郎

小田原山岳協会では、第一回海外登山の目標を定めるに当り、高度六〇〇〇メートル以上であること、費用があまりかからぬこと、その他いくつかの条件をあげた結果、ヒマラヤ以外ではアンデスという意見が多く、南アメリカ第四位のメルセダリオ（六七七〇メートル）南壁に決まった。

ところが、この山の資料はきわめて少なく、わずかに吉沢一郎氏のポーランド隊による北西面からの初登頂の翻訳があるだけだった。しかし、それも三十四年前の記録であり、最近の資料を得るために、アルゼンチン大使館に資料の提供を依頼したところ、アルゼンチン陸軍とメルセダリオ山岳会との連絡に成功した。陸軍からは、サン・ファンからの道路のスケッチ図、メルセダリオ山岳会からは会報と、合同登山の申込みがとどいた。思ってもいなかった朗報に、喜びと気強さを覚えた。

早速隊員の選定を行なう。隊長は当初から計画の中心だった吉田三郎、副隊長は小島実、隊員は渡辺辰雄（食糧）、天利（医薬）、岡部佳生（写真）、笠間秀二（装備）、増山（現地参加、通訳）と決定し、一方アルゼンチン隊は次のように連絡をうけた。

隊長	Sergio Fernandez	38歳
	Oscar Kummel	33歳
	Antonio Beorchia	33歳
	Robelio Dupont	18歳
案内人	Manual Gonzalez	53歳
	Ricardo Valdez	37歳

これで日ア合同登山隊の編成が終った。一九六七年十一月十二日、天利・岡部の両隊員が先発として海路日本を発ち、本隊は一月三日、空路ブエノス・アイレスに向かった。一月十八日に全員集結、NHKブエノス・アイレス支局では我々のために特派員を派遣することが決まった。荷物の通関は関係者の協力により即日無税で通過し、我々の基地であるサン・ファンへ送ることが出来た。

人口二十七万、メンドサに次ぐブドーの原産地として発達している都市で、砂漠の中の森の都である。メルセダリオ・クラ

ブは、この都市の社会人団体として活動し、青少年の育成に努力しており、会員数七〇名の山岳会である。我々はクラブから提供された民家に居をかまえて、サン・ファン市関係者、警備隊への挨拶や、現地調達物資の入手に忙殺され、一方吉田以下三名はクラブ員の案内で、キャラバン用ムーラの最終契約に向かった。

ムーラの交渉は予想外に難行した。当初我々は予算の関係で入山と下山のみにムーラを使用することで交渉を始めたが、馬主は入山中の全日数の契約を迫って来た。金額も二十五万円と両方の意見が大きく違い、クラブ員とも再三再四打ち合わせを重ねる始末であった。結局我々が折れて、金額を十六万円(食糧含み)の契約にたどりつくことが出来た。契約に当っては文書を交換して、今後のいざこざのないようにしてサン・ファンへ戻った。サン・ファンでは別の隊員が荷物の積換えを行い、夕方にはサン・ファン州と日本大使館の厚意による日本週間の挨拶に出かけたり、いろいろ多忙であった。現地調達もクラブ員の案内があり、比較的スムーズに事が運んだようだ。一月二十六日、クラブから差向けられたトラック一台に十二名の大世帯が乗り、サン・ファンを後にした。

サン・ファンを一歩外れると砂漠となる。一路メルセダリオに向って疾駆する。小さな部落カリンガスタ、ベレキルと砂煙りをあげて通り抜ける。一日走り続けた我々は、ロス・パトス河とブランコ河の合流点フンタに着いた。広い河原にキャラバン第一日を迎えることになった。案内人ゴンザレスの出迎えを受けて、いよいよ入山だなという気持になり、全員活発に行動を起す。とにかくこれからは日ア合同登山で、我々の隊員でスペイン語のわかるものがいないのは心淋しいが、無事に下山したいものと思う。

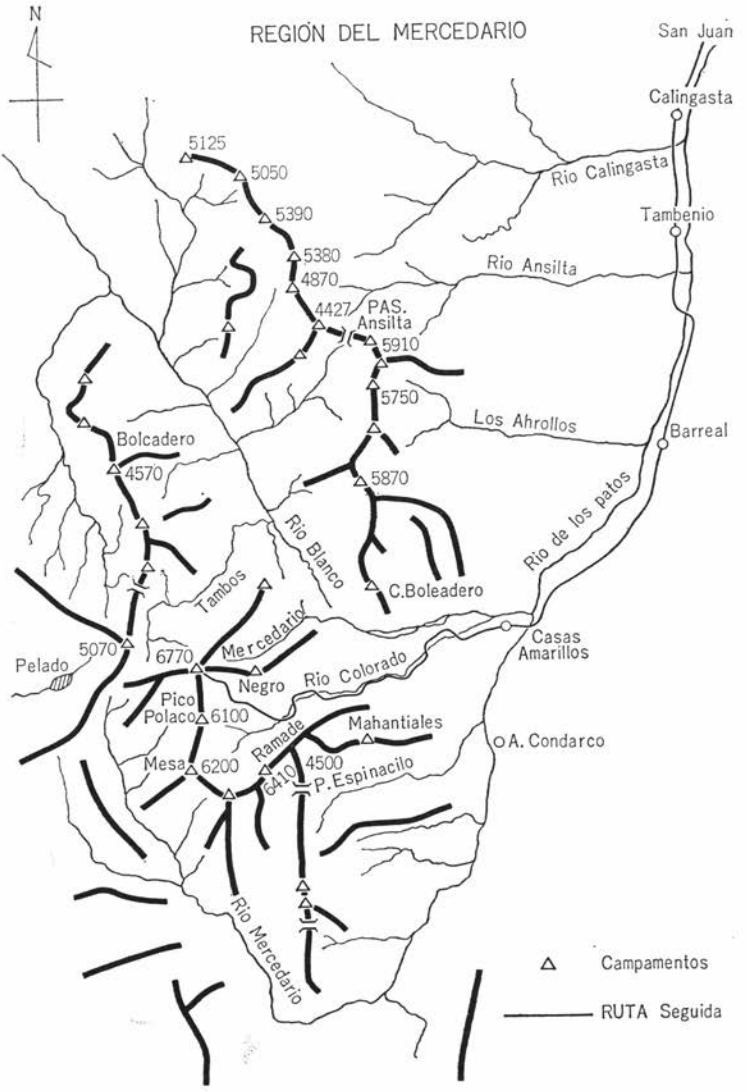
日ア両隊長とゴンザレスの三名でキャラバンの打合せを行い、次の点で一致した。

1、一日の行動範囲はムーラの半日行程とする(ムーラは二往復するため)。
2、日ア両隊の食事は別とする。
3、ムーラの附添はア隊より一名とする。
4、その他問題が起きた時は、その都度打合せを行う。
5、全行動の責任は日本隊長とする。

以上の点を全員に伝えて第一日を終る。

一月二十七日　慣れない土地だが、朝は日本の山と同じである。ムーラを使ってロス・パトス河を渡り、いよいよキャラバンが始まる。赤茶色に濁ったリオ・ブランコ河を右に見て、歩くこと二時間でカサ・マリージャ牧場に到着した。柳で囲まれた土壁の家には、インディオ系の老人が我々を迎えた。我々はここで羊肉を二頭分調達し、三時間の休養後、牛馬が昼寝して

メルセダリオ南壁（1968 年）



提供 CLUB ANDINO.MERCEDARIO

いる牧場を通り、リオ・ブランコ河とコロラド河の合流点には三十分後に到着した。このコロラド河は三十四年前、ポーランド隊が初登頂したときのルートである。我々はコロラド河を見送ってブランコ河の河原を、日蔭を求めつつ歩き続ける。

二十八日　高度二一〇〇メートルの朝である。矢張り朝晩は涼しい。雪解の水は濁っており、飲むまでに手間がかかる。日中は非常に暑いので、なるべく日中の歩行を避け、朝のうちに歩くようにして、昼間は仮睡することにした。アルゼンチンの生活様式が、隊員にも影響してきたらしい。牧場もようやく終り、谷間は極端に狭くなって来た。両岸が断崖になっている通称ピューマの谷へ、続いて今日のねぐらエル・チャカイ（二三〇〇メートル）へ着いた。我々はいつもガツガツと登っているので、ア隊ペースでは何か物足りない感じがする。

二十九日　昨日に比べて谷は一層せまくなり、岩壁の中復をへずったり、河を徒渉したり、手こずったりして、今日は道なき道を気楽くに行くムーラがうらめしく、たどり着いたのがコルレドル（二八〇〇メートル）の広い草原である。

三十日　今日も相変らず花崗岩の岩肌をへずり続ける。天候は昨日から変化のきざしが見られ、午後になると強い風と雨がくる。この一帯の天候は、新月になると天気が一変するとのことで、ア隊長は二月十五日頃まで悪天候が続くだろうという。高山植物が足もとに乱れ咲き始めている。久振りに放牧馬がのんびりとしている高原に出た。ここがガス・グランデで、思いがけず一人の登山者が現われて、我々の方へやって来た。彼はブエノス・アイレスに住む登山家で、十五日前からメルセダリオ南壁の初登攀を目指して入山していたが、三日前六〇〇〇メートルの地点で友人の一人が高山病になり、救助を求めて下って来たのである。日本隊のことは、入山前にブエノス・アイレスで知っていたという。彼らもメルセダリオ南壁の初登攀を、外国隊にさきんじられたくない気持があったかもしれないが、少しあせって登ったようである。

我々は早速、山の中腹に閉込められている仲間の登山者の救援に、全力を尽すことを約束して彼を休ませた。ただちに日ア両隊長で打合せを行い、馬二頭を提供することとした。また日本隊から救助要員一名を先行させ、必要ならば全員が救助隊を編成して取り組むことにする。救助隊と本隊との連絡を常に保ちながら、その間他の隊員はベース・キャンプ設営に向う。

三十一日　我々は増山隊員を救助に向わせ、本隊はキャラバン最終日の行動に移る。いよいよラマダ山群に入って来た。前方にはピコ・ポラコ（六一〇〇メートル）が氷河をともなって姿を現わした。相変らずスローテンポだが、隊員の高度順化には適当と思われ、全員には何も異状が見られない。ベースキャンプは広い河原の一隅に設けることが出来た。この基地はラマダの北稜の麓に位置し、メルセダリオ南壁が眼前にそびえ、モレ

ーンが重り合って落ち込んでいる。

メルセダリオは南東に尾根が続き、この尾根からメルセダリオ氷河に一直線に氷河となって落ちている。一方メサ（六二〇〇メートル）は下部にセラックス、上部にペニテントと氷塔が登頂を妨げるように存在し、頂上はドーム状に形成されている。この附近の山は鋭さはなく、むしろ一見容易に登れるような形態の山が多い。しかし六〇〇〇メートルを越える山である。またメルセダリオは、外国隊を含む四回の試登をこばんでいる程である。我々には経験のない困難さがあるのだろう。とにかく二日間は美しい谷間に休養して、それから行動を起すことにした。午後には増山隊員が遭難者を馬に乗せて下って来た。凍傷で手足の自由がきかないが、精神状態は普通に戻ったので、我々のベース・キャンプで休ませ、夕方我々に別れを告げて下山して行った。

二月一日　装備の点検と食糧の配分に費すと共に、登頂計画を打ち合せる。ア隊はメサへ登頂し、メルセダリオは我々七名ですべての行動をすることにして、大部分の荷物はC1へ荷上げしておく。

二月二日　強靭なムーラ五頭を選び、C1へ荷上げする一方我々もC1へ向かって出発する。うねり状のモレーンを上ったり下りたりし、氷河湖をいくつか越え、クレバスをさけて登る。高度四〇〇〇メートルを越えると息苦しくなり、ピッチは急激に落ちたが、ペニテント・スノーの少ない、南壁取付点から三十分の位置にC1（四二〇〇メートル）を設けた。今日も午後になると物凄い雪に見舞われ、これからの行動は多難を思わせる。慣れぬ高度で頭が痛く、仕事がルーズになって、荷上げの荷物の整理に手間どった。

ア隊員は荷上げのムーラと共にベース・キャンプに戻り、我我はルートの選定に取りかかることにした。先ずア隊が昨年六〇〇〇メートルまで到達したルートを検討してみた。第一岩峰は余り問題はないが、第二岩峰の上部が問題である。ア隊は第二岩峰を右にかわし、わずかに露出している岩をたどって稜線直下の岩稜に到達し、右にトラバースを準備中、表層雪崩に出会って失敗したのだが、我々も同じルートを取ることは同じ失敗を繰返す可能性が強い。むしろ第二岩峰の左側にある氷河に突込み、稜線直下の岩峰を左に大きくトラバースする方法が、雪崩をさける最善の策であると思った。そして詳しいルートは、その日の行動後に打合せをすることにした。

二月三日　小島・渡辺両隊員がルート工作のため先発し、他の隊員は荷上げに当る。

南壁取付までは堆石氷河の上を歩く。三十分後アンデス特有のペニテント・スノーの入口に着く。傾斜四〇度、林立するペニテント・スノーを、喘ぎながら一時間半で乗越す。今度は氷化した雪面が上に伸びている。ルート工作隊はロープ・フィッ

クスに専念してぐんぐん伸ばしている。八〇メートル、一〇〇メートルと、三〇〇メートルフィックスした所で第一岩峰の上部に小さなテラスを見つけ、ここをデポ地とする。

二月四日　今日は全員でボッカに当る。昨日と同様にペニテント・スノーを乗越すが、背に二十五キロの荷物は意外に重く感じる。一段登っては休む。とに角前進だ。フィックスされた雪面は休む場所が少なく、五メートルごとにつながり、前の者が立つとそこまで一気に登る外に休めない。苦しく喘ぎ、昨日のデポ地までたどりつく。そこからテント地まで一ピッチ、再び八〇メートルのフィックスを固定して登り終る。C2（五二〇〇メートル）は非常にせまく落石に見舞れるようだが、外に適当な場所が見当らないので、二時間かけて整地しテントを張る。渡辺・天利・笠間・増山隊員が残り、吉田・小島・岡部隊員がC1へ下る。

二月五日(晴)　C2から第二岩峰まで約五〇〇メートル、傾斜四五度から七〇度、氷壁の連続で風が強くルート工作がはかどらない。笠間が高山病にかかり、天利とC1へ下山させ、小島・岡部をC2へ残す。

二月六日(快晴)　今日も朝から風が強く、昨日のフィックスをたよってデポ地まで荷上げをする。更に高度を上げるためルート工作を行なう。第二岩峰直下のクレバスまで二〇〇メートル、実にきつい登りだ。ここを中間地点として第二岩峰直下を左に大きくトラバースする。風が通り抜けるとザザ……と落石に見舞われる。一気に通り抜け、第二岩峰と稜線からC1まで落ち込んでいる氷河の間の、ルンゼ状になっている氷雪地帯を登り切る。C3の設営地点を氷河地帯に求めるように指示したが、見当らないので偵察だけにしてC2へ帰らせる。隊員の疲労がはげしい。

二月七日(晴)　増山・渡辺両隊員をC1へ、天利・笠間と交代する。ルート工作は小島・岡部両隊員が行ない、C3設営地を見つけることが出来ない。C3は登頂への大切な基地なので早く決めたい。

二月八日(晴)　今日こそはと天利・笠間隊員がC3建設地へ四日目のルート工作へ出かける。第二岩峰の上部一〇〇メートルの氷河の中に、絶好のテント地（五七〇〇メートル）を見つけてくる。小島・岡部がC1へ休養に下り、増山・渡辺がC2へ入る。

二月九日(快晴)　増山・天利・渡辺・笠間の四隊員で荷上げとC3建設を行ない、増山・渡辺をC3に残して天利・笠間をC2に帰えす。小島・岡部はC2に入り、C1は隊長一人で無線で指示を与える。

二月十日(晴)　C2の隊員はC3へ負荷。C3の二隊員は稜線までのルート工作に向かう。C3からのルートは単調であるが、急斜面でなかなか進まず、七ピッチでC3へ戻る。

二月十一日(晴)　連日の行動で疲れがひどくなり、動作がにぶくなる。今日も定期便のように出発する。昨日からさらに三ピッチ伸ばしたが、大きなクレバスのため時間を費し、苦しい。稜線直下の岩峰にあと二ピッチの所でC3へ戻る。C3から隊長と交信し、岩壁を直登するルートと、左へ大きくトラバスし第三岩峰の左を巻くルートの検討をした。結局岩壁はもろくハーケンが使用出来ない状態では、第二案の他なく、またC4建設も日数の点で無理があり、C3からラッシュ・アタックを決行することにする。アタック隊員は小島・渡辺の二名、サポートは天利・笠間の両隊員とし、登頂期限を十五日までとする。

二月十二日　今日は稜線上に立ち、ルート次第ではビバークによるアタックを行うようにとの隊長からの交信で、四名で出発する。昨日のクレバスまで一気に登り、小島・岡部がコンティニュアスで一ピッチ行った。突然岡部が強い光線に目をやられ、両眼が全く見えなくなった。直ちに行動を中止してC3へ戻る。今後の行動に暗雲がたち始めた。C2にいる隊長と交信し、十三日は休養日とし、吉田・天利で岡部をC1まで下山させ、アタック・メンバーに増山隊員を入れる。

二月十三日(晴、風強し)　C2の三隊員がC3へ、岡部は吉田・天利に確保されながらC1へ下る。

二月十四日　昨夜来の風がおさまらず、食事を早目に済ませて出発を待ったが、風は天地をゆるがすようで、九時になり隊長から今日は行動を中止するように指示がある。午後から風はおさまり、明日のアタックは確実となる。今日は早く休むことにした。

アタック

二月十五日(晴)　午前零時起床、隊長と交信しいよいよアタックを決行する。昨日の風もおさまり、絶好のアタック日和となりそうだ。休養とはいえ五三〇〇メートルの高度、高山病に伴う頭痛は漫性化し、動作一つ一つが全くのスローモー、四時三十分、C3を発つ。

ヘッドランプの灯をたよりにして、フィックスされた氷雪面にアイゼンをきしませながら高度を上げる。六時三十分、山には朝日があたって来た。我々が休んでいるクレバス帯にも淡い朝日が射し込み始め、七時再び行動開始。第三岩峰直下を左にトラバースを試みるが、落石が多く傾斜もきつい。岩峰の一番左端基部まで四四〇メートル、三時間半を費して一気にトラバースする。基部からは氷雪面が六〇度から七〇度の勾配で、一五〇メートル位続いていた。四ピッチでようやく稜線へ出ることが出来た。時すでに十二時四〇分、簡単に食事を終え、アコンカグアが目前にすばらしい姿で聳えているのを見ながら、再び前面の巨大な雪壁へ押し進む。ウインドクラストされた雪面は歩きにくい。小さなクレバスをいくつか飛び越え、右上に巻き気味に登る。日照と疲労と高度により全員意識がにぶくなって

来た。突然、トップの小島がクレバスに転落したが、増山にジッヘルされ無事に済んだ。長くそして苦しい道中だ。一歩進んでは息をつく。呼吸がはげしい。巻き終ってガラ場に着くことが出来、更に気力を振りしぼって歩く。眠りそうな笠間をゆり起し、頂上の見える所までとにかく歩いて行った。雪もなく平凡なピークである。我々はチョコレートとビスケットをポケットに入れ、荷を軽くして頂上へ向かう。これからは自分の意志との闘いで、十歩あるいては倒れ込むように休む。一六時四十五分、遂にメルセダリオの頂上に立つ。もはやこれからは苦しい登りがない。南壁からの初めての登頂!!　この喜びと感激をだれに分ち与えよう。午後六時、心残りのする頂上を下る。登る以上に下りはむずかしい。気持をひきしめて慎重に下降し、午後十時、リオ・コロラドの谷間から昇り始めた月が照らしだすC3へ、無事辿り着くことが出来た。

マーカス・ベーカー峯登頂（一九六八年）

青山学院大学体育会山岳部

一九六六年六月から七月にかけて、山岳部ＯＢの栗林一路が単独でアラスカ山脈東部の偵察登山を行ない、これにつづいて同年八月に徳久球雄山岳部長が、教育大のマウント・ボナ登山隊に参加した（『山岳』第六十二年参照）。

これらに刺激されて、学生部員の中からアラスカ遠征のプランがもち上り、目標はヘイズ、サンフォード、と二転して、ようやくチュガーチ山脈の主峯マーカス・ベーカー峰（一三、一七六フィート）にきまった。初登頂は一九三八年のウォシュバーン博士によるノース・リッジからのもので、もう一隊がやはり同リッジより登ったから、私たちはサウス・リッジにルートをとることにした。隊の構成メンバーは次のとおり。

隊長　栗林一路　ＯＢ
隊員　小倉雅之　経4（気象）
〃　土田紘介　法4（装備）
〃　坂井義隆　法4（食糧）
〃　青山一雄　法4（会計）
〃　菅　昭　経3（庶務）

七月十六日、先発二名羽田発。
七月十九日、本隊四名羽田発。
七月十八日（現地時間）夜中にアンカレッジ着。パイロットと打合せて、ただちにアリエスカ・エアサービスの基地、アリエスカ山麓のガードウッドに直行。船荷はすでに先発隊によってここに運ばれ、エアサービスの小屋に仮眠。

七月十九日、荷物をセスナ機に積めるように分解、再梱包、装備四四〇ポンド、食糧三五〇ポンド、人員六名で八六〇ポンド、計一六五〇ポンド。ソリつきのセスナ機は一回に六〇〇ポンドぐらいしか運べないから、四回に分けることにする。

七月二十日（晴・雲量四・気温一〇度・風速三フィート）。十二時、一番機で二名同乗飛び立つ。行程約六〇マイル、所要時間五〇分、空中に舞い上ると同時に、左右に氷のピークと美事な氷河の連続で、カメラのシャッターを切りっぱなし。十三時、クニック氷河の源頭に降りたつ。

源頭といっても横幅は八キロほどあるので平原の上のよう。靴は一〇センチほどもぐる程度。四番機が到着したのが十七時半頃。着陸地点があまりにも氷河の中央すぎたので、リッジに

近く移動。十九時ベース・キャンプを張り終る。気温2度C

七月二十一日（晴・雲量少々）。隊員をグレーシャー隊とリッジ隊に分け、それぞれ偵察に出す。夕刻、両隊帰幕後に、それぞれの報告を検討、クレバスの多いサウス・リッジをあきらめ、ジャンクションに真直ぐつき上げるグレーシャー隊のとったコース（後に青山グレーシャーと呼称）を使うことに決定。

七月二十二日（快晴・風速一五フィート）。クレバスに落ち足を少々痛めた一名をテントキーパーに残し、残り五名でサウス・リッジ四・五のコルの台地（一万フィート）までボッカ。アドバンス・キャンプを作る。第一次登頂隊二名を残し、三名はベース・キャンプへもどる。

七月二十三日（小雪のち晴・風速三フィート・気温五度C）第二次登頂隊の二名を十時にベース・キャンプから送り出す。今日はアドバンス・キャンプまで登らせる。登り五時間ほどの予定。午後三時のトランシーバーによる交信により、第一次隊登頂成功の報告が入る。オールド・サントリーで乾杯。

七月二十四日（快晴・風少々）。雪崩の音が絶え間ない。正面のサウス・リッジがじゃまになっているせいか、交信不能、二十時十五分、薄ぐらい白夜の底から、第一次登頂隊が疲れはてて帰えってきた。その報告によれば、ジャンクション・ピークの左肩には雪庇があり、その右手の青氷との間を、アイスバイルのピックを突き立てながら登り、ジャンクション・ピーク

を乗越えた先のプラトーからは、主峯の左肩めがけて直登。この登りも氷壁で、表面にいつも雪が流れ、危険この上もなく、緊張の連続であった。頂上着十四時二十分。

ガスって視界悪く、記念品を埋めて、同じルートで撤退。ジャンクション・ピークを降り切ったところで体力を消耗し、十九時、ツェルトをかぶってビバーク。翌朝、第二次隊とすれ違って帰幕した。

七月二十五日（雲量七）。朝七時という約束のチェックフライト機が、十時になってベース・キャンプへ到着。パイロットが奥さんの作ったホームクッキーを、土産にもってきてくれたのはいいのだが、こちらの登頂成功の日本宛電報ももたずに飛び上り、そのまま帰えられてしまった。

このパイロットは、最初に飛んでくれたグレーシャー・パイロットと違い、数ヵ月まえに本土のカリフォルニアから出稼ぎにきたとかで、氷河へ降りた経験もわずかだったらしい。夜二十時三十分、第二次登頂隊も成功して、ベース・キャンプへ戻ってきた。

第二次登頂隊は、四時三十分アドバンス・キャンプ出発、九時ジャンクション・ピーク、十二時二十分頂上。三十分とどまり十六時ジャンクション・ピーク、二十一時二十分アドバンス・キャンプに帰幕、ということである。

七月二十六日から天候悪化、向う五日間は完全に雪に閉じこめられ、毎日雪洞を掘ったり、迎えにくる飛行機着陸地点の整備（マーキングと旗立て・ザイル張り・整地）で暮らした。最低気温はマイナス十度、日中最高気温は二十度。

余力があれば、クニック氷河の入口にあるマウント・グード（一〇、六一〇フィート）もアタックする予定にしていたが、あまりにもクレバスが多いので、止めることにした。そのかわり、クニック氷河源頭の中央にでんと坐っているクニックニック（九五五三フィート）という突起に挑んだが、これも巨大なクレバスに撃退された。そのほか、隊員たちはベース・キャンプを中心に、スキーを利用して各方面を偵察して歩いたが、適当な目標となるべきピークが近くになく、スキー練習で終った。

八月一日から六日まで晴つづき。つまり出発してから帰るまで六日周期で、はっきりと晴の日と雪の日が分れたわけである。八月六日に待望のセスナ機がやってきて、こんどは三便で完全に撤収、二十日ぶりで雪と氷のない土の上へ降り立った。ガードウッドの飛行基地は、川の対岸に熊が散歩をする楽天地で、氷河の上の苦労などいっぺんに吹きとんでしまった。

隊員たちは荷物を整理するまもなく、ＡＭＵ（アラスカ・メソジスト大学）のサマーセッションに参加するために、大学の学生寮に入り、私も同行してバスにつかったとき、ようやく文明を思いだした。学生はそのあとレンタカーでアラスカ・ハイウェーをとばし、一週間にわたってバルディーズやフェアバンクス

を訪れ、マッキンレイの途中まで行って引きかえし、合宿を無事解散した。

ちなみにセスナのフライト・チャージは、往路四便、復路三便、チェック・フライト一便、計七便で七五〇ドルであった。

（栗林・記）

山岳　第六十三年

（一九六九年三月刊）

ウェストン「日本氷河遺跡論」と明治十年代前半の氷河不存在論その他　岡山俊雄
ロシュ・ゴル　一九六七年　一橋大学山岳会
ヒリシャンカ・グランデ　一九六七年　田中元
マウント・コーベ　一九六七年　大野光彦
ペルー・アンデス　一九六七年　横地康生
マッキンリー南壁中央稜　佐々木孝雄
山岳会初期の人々　中村清太郎
私の登山　松本善二
ヤジュン峰登頂（一九六七）　増永迪男
ゴーレン・ゴル源流を探る　宮森常雄
ヒンズー・ラジ　一九六七年　海老原道夫
ティリチ・ミール　一九六七年　高島一芳
エルブールズ山脈での合宿　浜野吉生
サンタ・マルタ山群紀行　山本良三
ボリビア・アンデス（一九六七）　岡田美智子
ヘス峰登頂（一九六七）　中村純二
小川登喜男君を憶う　成瀬岩雄

追悼　中村清太郎氏、神山勉氏、伏見鎌次郎氏、三森幾二郎氏、小林正尚氏、小里頼忠氏

海外登山年表 ‖ 一九六七年 ‖（松田雄一編）
図書紹介・会務報告・英文梗概
A5判三三〇頁・写真四三葉・地図二一面・定価二二〇〇円

パンジャブ・ヒマラヤ

＝バランザール峰試登（一九六八年）＝

吉野　勲

はじめに

ナンガ・パルバートとヌン・クンを除くと、パンジャブ・ヒマラヤには名の知れた巨峰が殆んどなく、この二峰をつなぐパンジャブの主脈上の数多くの山々は、登山者にとって昔からいわば忘れられた存在だった。事実、クマウンやネパール・ヒマラヤに比べれば、パンジャブ・ヒマラヤの主脈の一般的な標高は低く、スリナガールから入り易いハラムーク、コラホイ等の五千メートル級の岩山が、登山家の興味をそそった位であった。

しかし、六千メートルの峻峰ならば、この地域にも少なからず存在していたのであって、ナンガ・パルバート周辺のマゼノやルパールなどのような衛星峰でなく、ちゃんとした独立峰が奥深くそびえていたことは、昔からある程度知られていた。

メイスンの『アボード・オブ・スノウ』を見ると、「ヌン・クンの南東にある山稜は、まだあまり知られていないし、地図も一八六〇年代の古い測量によって作られたものがあるだけである。キシュトワール、チャンバ、ラフルの北方境界にある幾つかの峰は、二一、〇〇〇フィートに達していることが判っている」（田辺・望月訳『ヒマラヤ』三一頁）。「ヌン・クン山塊の南東方にあるグレイト・ヒマラヤの山々や氷河は、未だ不明のところが多く、その分水山脈は一度も正規に測量されたことがなかった。三角測量によって、その位置を確定された山々は所々にあるが、まだ十分とはいえない。キシュトワールの測量は一九二一年には完了せず、しかも、それ以後続けられなかったので、幾つかの主なルートや二、三の峰を除いては、チャンドラ＝バーガ（チェナブ川上流）とザスカールとの間の地域は、大部分が事実上空白のままである。

一九四六年、F・コルブとL・クレネックはチェナブ川の支流ブート川を遡って、短期間だったが興味深い探検をおこない、それらの空白部に人々の注意を喚起した。その踏査の間に、二人はバーズンの流れや氷河の地形図を修正した。そこには幾つかの秀峰（最高は二一、五七〇フィート）が聳えて登山者を待っている。彼等はまた、ムニ・ラの近傍の地図を修正した。その地方には山岳測量家の遠征にとって広大な領域がある。」（田辺・望月訳『ヒマラヤ』三七四頁）

私達が目をつけたのは、これであった。空白地帯の真中にそびえる純白の最高峰、二一、五七〇フィートが私達を魅了したのである。インド測量局のクォーター・インチ・マップを見ると、確かに六五七五メートル（二一、五七〇フィート）の無名峰の記載がある。調べると、そこへの入山経路は、途中までヌン・クンへのそれと同じであることが判った。例のコルブ等の記録は『ヒマラヤン・ジャーナル』の一九四七年にのっているが、そこにはその最高峰のいかにも奥深い処女峰らしい写真もあり、それで私達の計画は決まった。

私達の隊は、登歩渓流会の有志が三人集まっただけの、ささやかな個人山行グループといったものにすぎないが、登歩渓流会の仲間の中では、まったく初めての海外山行であり、その成果次第では会の本格的な遠征につながることもあって、夢と期待に満ちたものであった。

隊員の構成は次の通りである。

隊長　小原ケイ（四〇歳）
隊員　山田長政（二六〃）装備担当
〃　吉野勲（二五〃）食料・渉外担当

計画の概要を述べると、五月二九日ニューデリーを発ち、現地での情報（二年前英国隊がチェナブ川側（南面）から入山し同峰を目指し失敗した）によって西面からの入山経路をとることとし、マロー川源頭のハワール部落から一日行程の氷河末端に、六月一〇日ベースキャンプを設営した。

同山系は、現地でバランマと呼ばれ、最高峰はバランザールと呼ばれていることを知った。

その後、北稜伝いに登路を開拓、六月二四日、頂上アタック中、五七〇〇メートル付近で小原がスリップし、氷河下部へ転落するというアクシデントが起ったため、登山計画を中止し、七月六日ニューデリーに戻った。

次に行動の詳細を追って記すことにする。

シェルパとクーリー

ヒマラヤ初見参の私達にとって、最も心配なのがシェルパの問題であった。全てが初めての私達にとって、彼らの経験と行動力は欠かすことの出来ないものであった。私達はマナリにある「シェルパ・ガイド・スクール」からシェルパ一人、ネパールのタンボチェ出身のハイ・ポーター二人を雇った。「シェルパ・ガイド・スクール」に籍を置くシェルパ、リンジンは、ラダキ（チベット系のラマ教徒）出身で、過去の活躍は全てマナリ周辺に限られている。他の二人のポーターは六千メートル以上の経験はなく、当時のネパールの登山禁止令のため、インドにシェルパの見習いを兼ね、出稼ぎにきていたのである。

キシュトワールからソンダル（二日行程）まで馬が使え、それからBC予定地までクーリーを雇うことにした。特に専業のクーリーはいないが、各農家から七人程集めて貰った。丁度田植えのシーズンで、人が思うように集まらず、二日ほど日数を無駄にしてしまった。

アプローチ

ニューデリーからは、日本から持ち込んだ国産車を馳って、国道一号線をまっしぐら、バトテへ向う。丁度、二日行程プパサンコットとスリナガルの中間に位置する街道町、バトテへ着く。ここはヒマラヤ杉に囲まれた、標高千五百メートルの大変涼しい所である。スリナガルで夏をすごすインドの上流階級の人々が多く見うけられる。ここからスリナガルへの国道と分れ、チェナブ川に沿って道を進む。この道は途中、二ヶ所、川を渡るが、雨が降ると全くの悪路となり、至る所で、土砂くずれが起こる。そのうえ国道をそれると、ガソリンが入手出来ず全く閉口した。バトテから五時間、自動車道路の終点、キシュトワールに着く。

この町は古い街で、中央の広場を中心に牧場のように展けた素晴しい所だ。緑の広場に天幕を張ったが、初めての日本人を見ようと、町中の人が押し寄せ何の作業も手につかない。学校の先生、町の有力者、英国人のキリスト教伝道者と、次々に天幕を訪問してくる。この地方では郡長（タシルダール）が一切をしきっており、食料も全て配給である。登攀用の食料しか持たない私達にとって、この郡長の好意が全てを解決してくれた。また国防省の協力要請状は、この広いインドにあっても絶対的なものであった。

キシュトワールから四頭の馬を雇い、いよいよ目指す山域に歩を進める。相変らず、四千メートル級の山々が僅かに頂上付近に雪を残し、一向に意欲をそそるような山は現れてこない。二日目のソンダルで馬を返し、七人のクーリーを雇う。町はずれでヌンへの道と分れ、狭い谷へと入り、キシュトワールを出て一週間、欧州アルプスをそのまま大きくしたような景観が、谷一杯に広がってきた。草原、森林、氷河、岩、何もかも同じだ。違うのは高さだけである。どこを見渡しても五千メートルはくだらない岩峰が、頭に申訳程度に雪をかぶっている。ネパールとは、あまりにも異っている。やはり緯度のせいであろう。

目指すバランザールは、そこから半日行程の氷河の末端で、はじめて望むことができた。ベース・キャンプ、標高三二〇〇メートル、これより標高差三三七五メートル。ネパールの七〇〇〇メートル峰に匹敵する。

登山開始

六月一二日、今日からいよいよ登山開始だ。吉野、リンジン、

パサン、ギャルツェンの四人が偵察となって、第一キャンプを設営するために、二五キロずつ荷物を持って出発した。約一時間のモレーンの登りで、氷河の末端に立つ。仮りに名付けた、「バランザール氷河」を二時間程登り、アイスフォールの手前の台地に第一キャンプを設営する。

六月一三日、全員、第一キャンプに集合。

六月一四日、前半のキーポイント、アイスフォールの難関もブロック雪崩を避けて早朝通過、二ヶ所のザイル工作で難なく抜ける。さすがに上部に出てのクレバスには肝を冷された。コルに近づくにつれて、ルートに考えていた西尾根が姿を現わして来たが、上部はなかなか悪るそうだ。コルの手前の平らな場所に第二キャンプを設営。標高、四五三〇メートル。

六月一六日、天幕二張を残して、全員第三キャンプ建設のため出発する。昨日偵察しておいたルートを辿り、二時間のトラバースの連続で目標の尾根に取り付いた。岩稜を一ピッチ廻り込むと次に四〇メートルの岩稜が続き、吉野がトップで登って荷物を吊り上げ、全員空身で登る。ここから上は、岩屑を積み重ねたように崩れやすく、一歩々々押えるように慎重に登る。急傾斜での設営場所を選定するのは難かしいが、次の岩峰下の雪面を切りくずし第三キャンプを設営する。高度、四八五〇メートル、カシミールの山々がとりまく三六〇度の展望がすばらしい。直下の氷河には真青な氷河湖が一段と美しい。

六月一七日、パサン、ギャルツェンを第二キャンプへ帰し、明日よりのアタックの準備に時をすごす。

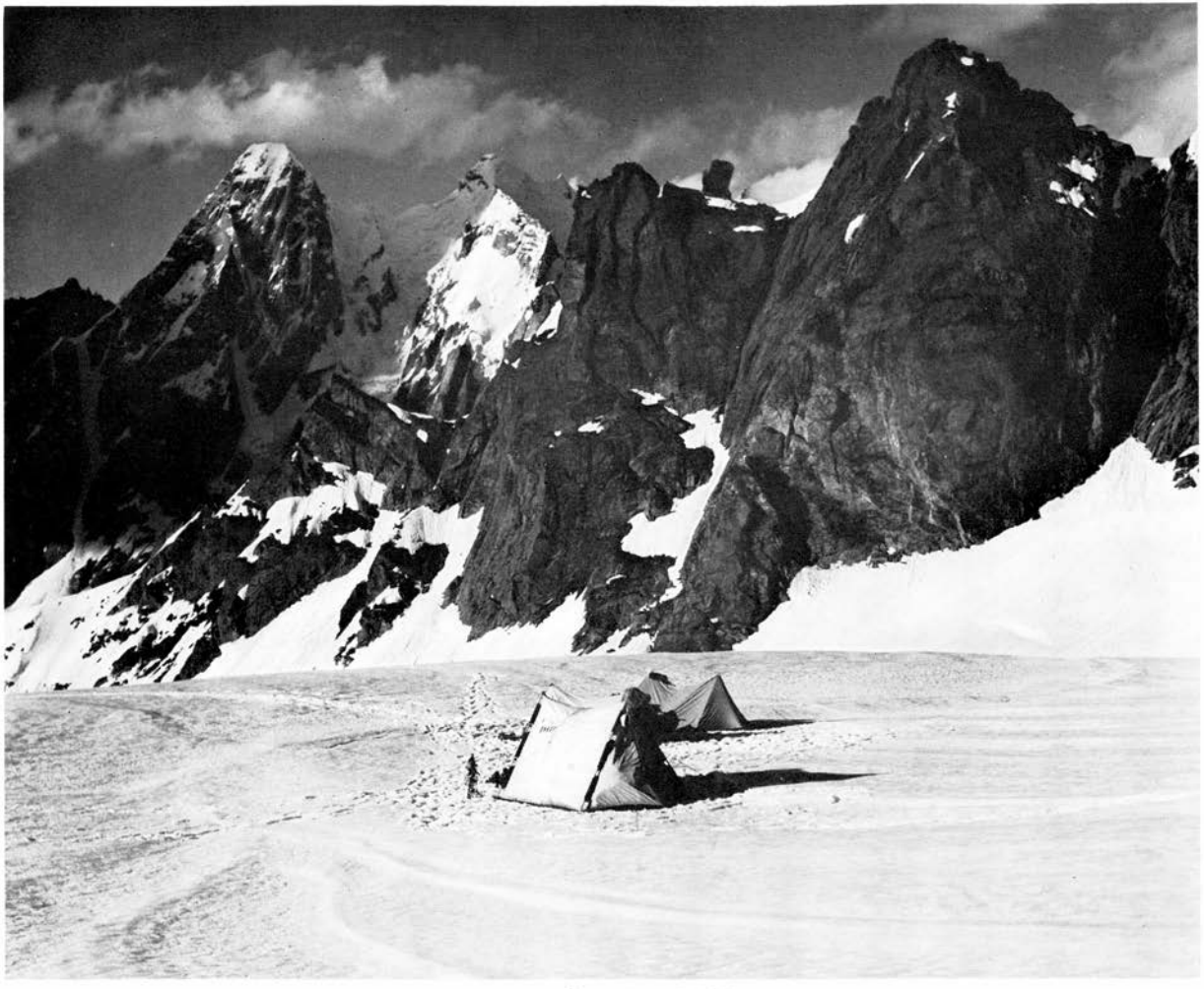
頂上攻撃

六月一八日、四日分の食糧、装備を持ちビバークの用意をして出発する。昨日ルート工作をしておいたので、尾根の下までは楽に行けた。尾根は悪るく、比較的傾斜の緩い雪面を選んで登ったが、陽が当ると雪面がくさり、膝の下までもぐってしまう。トップを交替で登るがピッチはなか〳〵はかどらず、思いのほか時間がかかった。第三キャンプから上は、ツェルト露営を予定していたので、頂上から出ている大きな尾根に出た所のスノーホールを見つけて露営した。

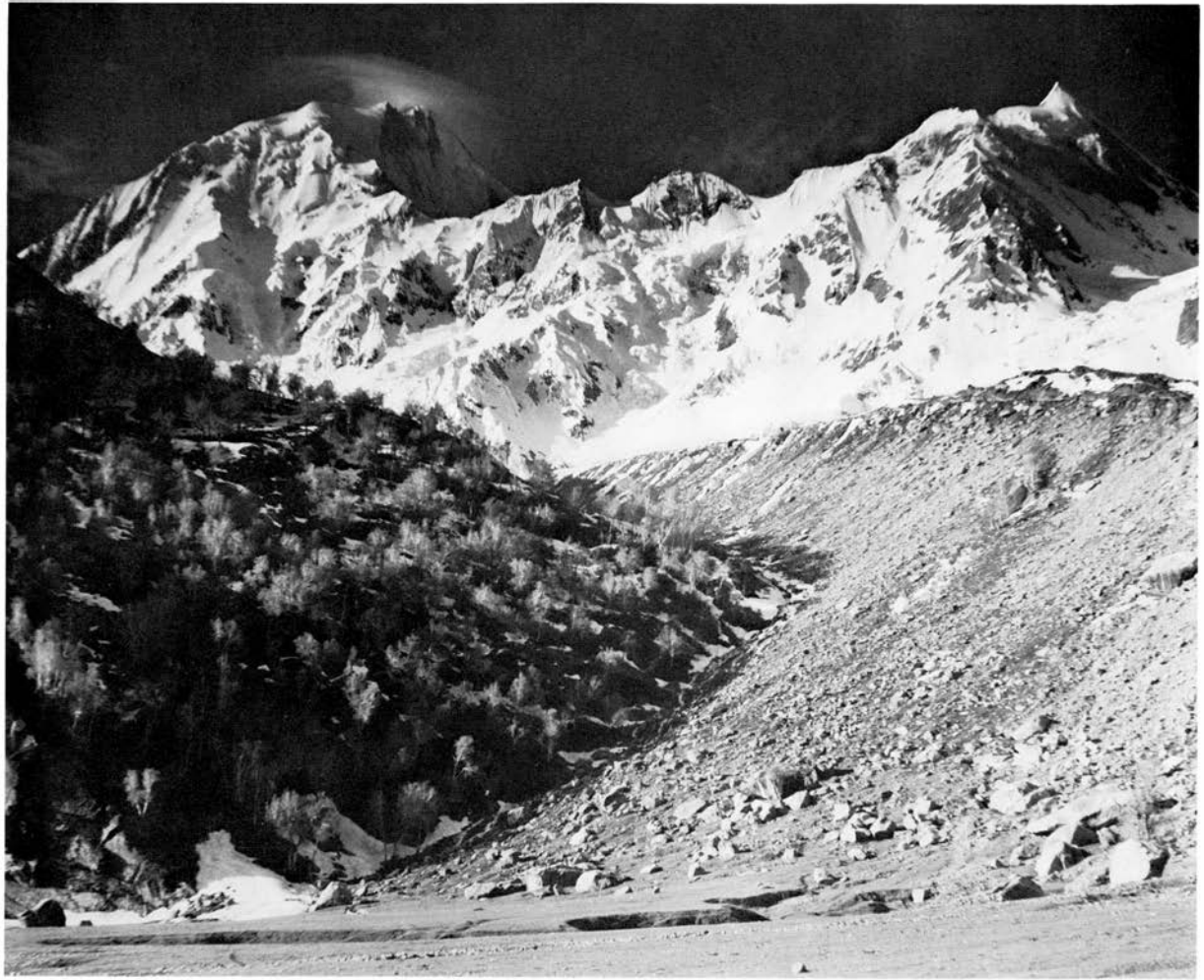
六月一九日、食糧はベースキャンプ以上は日本食なので、日本の山と同じように食べられるが、石油が悪いので食事に時間がかかってしまう。尾根は相変らず鋭い雪稜が続き、予想外の時間をついやした。展望は素晴しく、ヌン・クンを始めパンジャブ・ヒマラヤの山々を一望に見渡すことが出来る。今日もスノーホールを見つけてビバークする。

六月二〇日、今日はいよ〳〵頂上アタックだ。相変らず頂上直下までナイフエッジが続いている。肩に出ると山田が吐き気と頭痛を訴え、一人安全な場所で休息する。頂上まで僅か七〇メートル位であるが、頂上へ続く右の岩稜は逆層のスラブで、

第2キャンプから北面の双耳峰（ドリカント峰）を望む
Dricant which lies just north of Camp 2, seen from the same camp (4530m).



第2キャンプから北西面を望む
Northwestern range from Camp 2 (4530m) of Bharanzar.



ベースキャンプ（3200m）からバランザール峰（6575m）を望む（左後方）
Bharanzar（6575m）from the Base Camp（3200m）. Bharanzar seen at the left background.

バランザールの6000メートル地点からヌン・クンを望む
Nun Kun group seen from the point of 6000m on Bharanzar.

左は今にも落ちそうな雪面になっており、正面のアイスフォールを登ってみたが、道具不足と体力を相当使っているし、時間が遅いのであきらめ、下山にかかった。一旦第三キャンプに戻り、休養後再度アタックする予定にしたのだ。下り始めて間もなく、小原がくさった雪に足をとられてスリップしたが、吉野の所で止まりホッとした。しかし、すぐまた二度目のスリップを起こし、ザイルを結んでいた吉野も引きずられて落ち、止ったが吉野が腰を痛めてしまった。下るのに時間がかかる一方となり、全くスローモーなパーティーになってしまった。途中のスノーホールを見つけてビバークする。

アクシデント

六月二一日、少しでも早く第三キャンプに下らなければならないので、ゆっくり下る。午後になると雪の状態が悪くなり危なくて下れない。一日かかって一五〇メートル程下り、ビバーク。

六月二二日、状態も昨日同様なので、相談の結果、もう一日そこで休むことにする。

六月二三日、吉野も徐々に調子が戻り、今日はゆっくりであるが、五七〇〇メートルの岩場まで下ることができた。岩場は傾斜が四〇度程であるが、岩を除けて二人ずつ寝られるテラスを作り、上のテラスに小原と吉野が、下のテラスに山田とシェルパが二人ずつ別れて寝た。すぐ下に見える黄色のテントが無性に恋しく感じられる。

六月二四日、軽い朝食を撮り、下山準備のためアンザイレンしようと、小原が下のテラスへ下ろうとした瞬間、思いもかけない事が起った。小原の体がふらりとすい込まれるように、私達の眼前から消えてしまった。突然の出来事に一瞬茫然となってしまったが、すぐ気を取り直して小原の落ちた氷河に下り、捜索しながら下った。全く手掛りはつかめない。午後から入山後初めての雪が降り始めた。

氷河の状態も危険になったので、一応捜索を打ち切り、夜九時過ぎ、第三キャンプに戻った。

その後数日、なだれの出る程の降雪をついて捜索するも遺体は発見出来ず、やむなく下山し、六月二八日、ベースキャンプを撤収した。

日印合同登山（一九六八年）

宮崎英子

真暗な中に、あかりが二つ三つ見えたと思うと、飛行機はニューデリーのパラム空港に着いた。一九六八年四月二二日、午後一〇時五〇分、とうとうインドへやってきた。飛行機からバスに移り、空港建物の前でおりると、すぐに「宮崎さんですか」とサリンさんの出迎えを受けた。サリンさんは、日印合同登山のインド側の推進者で、インド国防省の次官であり、またインド登山財団の会長である。建物内に入ると、五人の隊員たちがニコニコと迎えてくれた。一人一人名前をききながら、手紙によって紹介されていた名前と照し合せた。一番小さくてニコリともしない人、その人が二六歳のパテル隊長だった。ドクターは、二、三日おくれてボンベイから到着した。

隊員を紹介する。

1、隊長　ナンディニ・パテル（二六歳）グジャラート州（ボンベイ北西部）出身、グジャラート大学大学院学生、マウント・アブ州立登山学校教官。

登山歴はシュリ・カイラス（六二二、七四二フィート）、マトリ・ピーク（二二二、二五〇フィート）、デオ・ティバ（一九、六八七フィート）登山隊に参加、グジャラート大学女子登山隊の隊長をつとめ、ガンゴトリI峰（二一、八九〇フィート）の登頂に成功した。そして日印合同登山の直後、ニューデリーに帰って四日目には、トリスル（二三、一五四フィート）へ向い、これにも登頂した。

身長一五〇糎ほどの小柄な人だが、足が長くてスタイル満点、疲れを知らぬ顔で余裕があり、登山技術は一番優れていた。非常に無口な人だった。

2、ドリー・シャヘール（三〇歳）グジャラート州出身、商学士、法学士、パテル隊長と同じ登山学校の教官。

フレイ・ピーク（二〇、〇〇〇フィート）、ガンゴトリI峰（二一、八九〇フィート）登山隊に参加、フォト・ピーク（一七、二六二フィート）、デオ・ティバ（一九、六八七フィート）に登頂。そして彼女もこの登山のあと、パテル隊長と一緒にトリスル隊に参加した。

かん高い声でよく喋り、よく面倒をみ、私たちにも何かと気を配ってくれた。感情に起伏があり、黙りこくってしまうこともあった。

3、コキラ・メタ（二五歳）グジャラート州出身、アートカ

レッジの経済学講師。

フレイ・ピーク(二一〇、〇〇〇フィート)、シュリ・カイラス(二二一、七四二フィート)、マトリ・ピーク(二二一、二五〇フィート)に登頂した。

肥っていて、陽気で、おしゃれで、甘いものが大好き。「来年結婚する。そしたらもう山へは行かれない」と、嬉しそうに話していた。登山隊には、こんな人も必要だと思わせられる、たのしい人だった。

4、シャシ・カンタ(三一歳)パンジャブ州出身、陸軍大尉。クル・マナリ、クマオン・ヒル、ガンゴトリのトレッキング。

十人中一人の奥様隊員で、公の場所で挨拶をするのはいつも彼女だった。小柄なインド隊員の中にあって一人だけ大柄で、堂々としていて、やさしい人だった。パテル隊長の信頼厚かったけれども、山の方は弱かったようだ。

5、ダフニイ・キアンテ(二六歳)アッサム出身、看護婦。登山学校修業過程中の登山で二〇、八六四フィートの登山を経験した。

サリンさんに、日本人五人、インド人五人の登山隊だと云われたほど、日本人にそっくり。キャラバン中、土地の人から、あなたはヒンディが上手いが、インドにどの位居るのかときかれた、と云って笑っていた。そんなわけでもあるまいが中立的存在で、自らすすんでインド隊員の意見を英語に翻訳してくれた。くせのないきれいなキアンテさんの英語は、非常に分り易くて、とてもたすかった。カイラスの登山計画を話し合ったときのこと、みんなに英語で話すように頼むと、はじめは英語で話しているが、興奮してくると次第にヒンディにかえってゆく。グジャラートからきた三人が、何かさかんに話しているので、いま何を話しているのかと、カンタさんにきくと、私にも分らないと答えた。

6、ミーナ・アグラワル(二四歳)ボンベイ出身、外科医。

一九六六年全インド婦人コクタン(二一〇、〇〇〇フィート)登山隊に参加、登頂した。

きゃしゃで弱い感じの人だが、外見上に似合わず頑張り屋で、体力の弱さを精神力でカバーしていた。

インドには、ダージリンとマナリとウッタラカシとに国立の登山学校がある。基礎課程と上級課程があり、ダージリンの場合は両課程とも五週間程度で、女子のクラスは一年に春と秋の二回だけで、生徒数は一クラス三十人程度である。看護婦のキアンテさんが、上級課程をウッタラカシに学んだ他は、すべて基礎、上級課程ともダージリンの登山学校の卒業生である。

日本側の隊員は次の通りである。

宮崎英子(三四歳)立大卒、日科技研勤務。

三島蓉子(三二歳)看護婦。

須田紀子(二七歳)明大卒。

折井正子（二五歳）法大卒、日米会話学院生。

行動のあらまし

4月22日　東京からニューデリーへ、五日間の出発準備ののち、
4月27日　ニューデリー出発。
4月30日　バルモールに到着。ここで六十人のポーターを集めて、
5月1日　キャラバン開始。
5月5日　BC設営（三〇三〇メートル）。
5月13日　カイラス（五六五六メートル）に全員登頂。
5月16日　クグチの部落（標高二九〇〇メートル、チャンバ地域最奥の部落）に引上げる。
5月18日　サナクデンク・ジョット峰（六〇四六メートル）に向う。
5月22日　CⅡ設営（四六五〇メートル）。
5月24日　サナクデンク・ジョットの登頂を断念して、無名峰（五五七五メートル）に登山中、午前九時十分、頂上近くで雪崩発生、インド隊員のシャヘール、アグラワル、シェルパのニマ、ソナの四人流される。ソナ死亡。
5月25日　BC（三三五〇メートル）へ戻る。四つ目の山、バラカンダ（五八五二メートル）が残っていたが、登山を中止し、
6月4日　ニューデリーに帰る。
6月9日　解散。

パッキング、打合せ、挨拶と、またたくまに五日間を終えて四月二七日の夜、列車でニューデリーを出発した。お世話になった多くの人たちと別れて、車中に十人きりになったとき、はじめて山へ行くの実感が湧いてきた。

鉄道の終点パタンコットからバスでチャンバへ。チャンバは標高九三六メートル、人口は一万二千人で、王宮があり、寺院があり、カレッジもある文化村で、人々の服装もこざっぱりした美しい村だった。

チャンバからジープで四時間のバルモールは、二千メートルの高さになる。大木の木陰がこの村の学校だった。村の青年会に夕食に招待された。室内にはテーブルも椅子もなく、壁にそって板の間に坐った。一人一人の前に、直径三十センチもありそうな大きなしんちゅうのお盆が配られ、コップが配られた。コップに水を入れるのに、バケツの水をコップに入れるのではなく、コップでバケツの水を汲みあげてくるので、そのたびに手が水の中に入る。やがて、これまた大きなバケツに山ともら

れた御飯をさげた青年があらわれて、やにわに手づかみで、お盆の中に御飯をなげこんでゆく。ダールやミートカレーなどの副食も、すべてこの一つのお盆の中に配られた。それらを指でまぜ合せていただくのだが、私たちはスプーンを貸してもらった。チャンバの王様の優雅な晩餐会を経験していた私たちは、あまりの変りように、おどろきの目を見はり、食べ物ものどにつかえがちだった。食後、太鼓が持ち出され、バケツを持ってまわった世話役の青年が、哀調をおびた恋歌をうたってきかせてくれた。

一ヶ月後、この村に帰ったときにも夕食によばれたが、もう異和感はなくなっていた。けっこうなれるものである。

私たちは、

カイラス	五六五六メートル
無名峰	五四一七メートル
サナクデンク・ジョット	六〇四五メートル
バラカンダ	五八三五メートル

の四つの山に登る計画だった。カイラスと無名峰は近くの山で、隊を二つに分けて同時に登山するつもりだったが、偵察の結果、日数がかかりそうなので、カイラスに全力を集中することにした。毎日午前一〇時頃から雪がふり出す悪天続きだったが、一一・一二日と晴れ、登頂した一三日の午前中まで晴れていたことは幸運だった。はじめはカイラスの南側へまわってみたが、難しいルートだった。東側に登路をみつけ、五月一二日四五一〇メートルにCⅢを設けた。そして翌日、一気に一一〇〇メートルを上ることにし、二人ずつ五組のロープパーティを組んで、午前三時二〇分にこうこうと冴えた月光の中を出発した。晴れていた空も午後には雪となり、全員登頂して最後の組がCⅢに帰ったのは、夜の七時だった。別段難しいところはなかったが、下が見えない長い長い急斜面上のリッジの登りは、晴れ無風の好条件であったればこそと思う。

サナクデンク・ジョットの西面は、オーダン氷河から頂上まで何もさえぎるものなく、一直線にその全容をあらわしていた。氷河上のCⅡが四六五〇メートルだったから、その標高差は一四〇〇メートル、雪のついていない部分があるので、全体として黒い壁といった感じだった。シェルパの偵察によると、北からのルートはアイス・フォールで千メートルの固定ザイルが要る。南からは鋸状の岩稜と雪庇とで登攀は難しい、と云うことだった。

サナクデンク・ジョットをあきらめた私たちは、氷河をへだててサナクデンク・ジョットと向い合っている無名峰(五五七五メートル)に登ることにした。五月二四日の午前五時に出発して、頂上への最後の斜面にかかったとき「ああっ!」という

声に顔をあげると、音もなく滑りゆく雪の中に七、八人の仲間がおちてゆくのをみた。大きくまい上る雪煙に、雪崩はまるで稜線の向う側から、稜線をこえて来たかのように見えた。二番目のロープは途中で止ったが、先頭ロープの四人は、おちて行って見えなくなった。二人のインド隊員と、一人のシェルパは幸運にもかすり傷だけだったが、もう一人のシェルパは息絶えた。BCに引き上げた私たちは、ニューデリーからの指示を待って、ラビ河のほとりで遺体を荼毘にふした。メラメラともえ上る真赤な焔をふり返りふり返り、小雨の中をクグチの村へ帰って行った。

習慣がちがい、ものの考え方もちがうインド人と日本人とでは、山の登り方もちがうようである。サナクデンク・ジョットを例にとれば、偵察をシェルパだけに任せたこと、シェルパは男性だから、足も早いし、力もある。職業柄よい方法も知っている。メンバーが加わるとおそくなるから、シェルパだけの方が時間の節約になるし、能率的だと云うのである。そして、シェルパが「ノオ」と云えば、それでおしまい。はるばる日本からやってきたのに、自分の目で山も見ずに断念するとは、そんなバカなことがあるだろうか。頂上へは行けなくても、途中までもいいから行きたいと云う、切なる望みも受け入れられず、無念の涙をこらえた。インド人の側からみれば、登れないと分っている山に、途中までもいいから行くと云う私たちの考えも、また理解できなかったようである。自分の荷物は自分で背負う習慣のついている日本人と、殆んど荷を持たぬインド人と、几帳面な日本人と、時間に無関心なインド人と。こんな相異のあるのは仕方のないことであろう。でもシェルパ死亡のあとは、バラカンダへの登山を続行すると云うインド側と、中止するという日本側と、意見は完全に分れた。アメリカのエベレスト隊は、隊員が死んでも登山を続行したと云う。私たちが強力な隊ならばそれもよいかもしれぬ。彼らは雇われているのだから、私たちが行くと云えば、ついてくるとインドの隊員たちは云うのだが、意気消沈しているシェルパをみると、私たちの登山がシェルパの力に負うところが大きいだけに、シェルパの心をもくみとって、判断の一材料にしなければならないと思った。時間的に余裕のないバラカンダに向うことは、恐しいことだった。公費でやってきた彼らには、四つの山に登る筈だったのに、一つしか登っていないという、あせりの気持があったようである。登山を中止すると云う日本側の意見がとり入れられて、予定より早く六月四日にニューデリーに帰った。

登山技術に関してはパテル隊長は、インド隊員は岩に強いと云っていたが、それは期待はずれだった。登山学校に学び、岩登り訓練を受けたと云うことが、彼女らには「できる」と云う一つの尺度になっているようだ。登山学校の教師であるパテル、

シャヘールさんの二人は別として、山へ行くのは一年に一度か二度とごく僅かのようである。けれども、その一度か二度がヒマラヤの五千、六千メートル級の山へ行くのだ。日曜日は山へ行くことが日課になっているような私たちは、高度の経験はできないが、彼女らをはるかに凌ぐ山行の回数において、結果としては鍛えられていると思った。

装備品については、これも登山学校の教師は別として、他の人は靴に至るまで、登山財団の借り物である。この靴、あの靴と足をつっこんでは適当なものを選んでいた。メタさんなどは靴が合わずに苦しんでいた。日本から持って行った羽毛服も、登山財団が買って貸していた。時たましか山へ行かなければ、自分で揃える必要もないのであろう。私たちが個人装備は全部自分のものだと云うと、おどろいていた。

何はともあれ、肌の色がちがった二国の人種が、かたことの英語で気持を通じ合い、同じものを食べ、一つのテントに眠り一本のザイルにつながって、登山を経験し得たことは、お互いに貴重な経験であったと思う。リーダーの役割の重要性を口では云っても、日本の山で気心の知れた人のみとの山行では、気がつかなかったインサイド・ワークとでも云おうか、身をもって感じとることのできたのは収穫だった。

別れて一年以上たってしまった。私たちはいまでも手紙を交換している。十人のうち四人は結婚し、一人は未亡人となった。つらかったこと、悲しかったことは、次第にうすれて、たのしかった思い出だけが残ってゆくようである。再び合同登山が企画されるならば、達者な会話力を持って参加し、納得のゆく登山をしてほしい、そう思うのである。

羅臼岳と硫黄山の原名について

早川禎治

はじめに
一、海岸線の地名の変遷
二、文献にみる知床半島
その1　知床の存在
その2　知床の山名
その3　松浦書と問題点
三、羅臼岳と硫黄山の原名について

はじめに

山にむかう時、対象の山がどのように見えるのかということは、気になることだ。それは車窓からであれ、文明から見はなされた気配を漂わす登山口からであれ、同じだ。その印象はそれ以降の登高慾ともかかわりあって、良くも悪くも強烈に残る。山に別れを告げるにしても、人は峠や平野部に立って山を眺めたがる。一つ一つの鮮烈な記憶と共に、山を一番美しく眺めたいものと願う。自然に名を与えた先住民族の心に触れる想いのするのも、そんな時である。

知床半島の場合、山岳は東西の海岸に住む人びとの共通の存在ではあったが、一方では重畳とした岩頂やハイマツ原が、東西の交流を遮断した。それでも山稜を越る者もいたが、一つのコタンを支えるには豊饒な海をひかえた谷間は、それで充分だった。そうして一つの谷間に一つの固有名詞が生まれる。それはやがて谷奥の山岳にも与えられる。共通な山岳に、それぞれのコタンの呼称が成立する訳である。ところが北海道化にともなって、先人たちの多様で豊かな表現を圧殺したのは和人であった。北海道の山名の混乱も、彼ら開拓者たちが、一つのコタンの固有な名詞を強引に普遍化しようとしたことに、起因し

ていると思われる。

ここでは海岸線の地名のうつり変わりを頭におきながら、羅臼岳と硫黄山の原名についてふれてみたいと思う。

一、海岸線の地名の変遷

ここに四枚の地図がある。

安政六年刊、東西蝦夷山川地理取調図（松浦武四郎）
明治二八年刊、二五万分之一地図（北海道庁地理課）
大正一四年刊、五万分之一地形図（大日本帝国陸地測量部）
昭和三九年刊、五万分之一地形図（国土地理院）

山名について別に触れるとして、知床半島の海岸線の地名のうつり変りを、安政から昭和までの約一〇〇年の間に刊行された四枚の地図で見ようとする訳である。

地名の変遷は表1・2にまとめたとうりであるが、安政年間松浦武四郎が採集したものは、ウトロ・知床岬間で七二の地名にのぼる。一方、羅臼・知床岬間では四二になる。これが三六年たった明治二八年の地形図をみると、残された地名は前者で二二、後者で三三である。斜里側（オホーツク海側）では地図上で五〇もの地名が消失している一方、羅臼側（根室側）では消えたのはわずかに九である。明治以降は、その数にそれ程の大きな変化はないが、昭和のになると若干漢字化が進行しているのも、特徴として上げることができる。北海道の中でも、現在もなおカタカナ地名を有しているのは、この知床と日高山脈くらいのものであるが、それでも羅臼側で一〇、斜里側で四の地名が漢字に変っている。地名の変遷から見ると、蝦夷地の北海道化即ち日本化は、知床においてはオホーツク海側の西海岸より、東側においてより進んだことが結論づけられよう。

ここでは海岸線の地名についてのみ見たが、この結論は国境稜線の山岳の原名を考える場合に、特に重要と思われる。半島部の背稜を連ねる山岳は、東西のコタンにとっては、たしかに共通の存在ではある。けれども山名に共通なものを求めるのは、本来無理が多い。それは山を介在させる時に起る、生活空間の断絶からくるし、山それ自体の持つ多面性にも起因する。コタンによって異なる呼称が成立する訳であるが、和人への伝承が優勢を占めた東海岸側の固有名詞であったことは、容易に推察できるのである。たとえば羅臼岳という山名についてみると、それは東海岸（メナシ）の羅臼コタンの人たちによる呼び名ではあったにしても、斜里側のコタンにとっては無縁のものであったろう。

以下山名の項で詳しくふれたいと思う。

二、文献にあらわれた知床

その1　知床の存在

知床という地名が記録にあらわれたのは、寛文一〇年（一六七〇年）の『津軽一統志』がはじめてらしい。これには前年起った寛文蝦夷乱についての、隠密による調査報告がのっている。巻十の「松前夷蜂起」の項がそれであるが、オホーツク海沿岸の次のようなコタンのアイヌが、シャクシャインに組して松前に反旗をひるがえしたことになっている。

しよや村、つんべつ村、幌別村、とほし別村、幌別村、おむ村、おこっべ村、しよこつ村、まふ別村、ほこつ村、ゆふ別村、はゝしり村、うからや村、ちやる村、うなつ村、やるけ村、なしや村、しれとこ村、くなしり村。

以上の一九のコタンで、加担者の数を合計三千人とふんでいる。この中の「ちやる村」は斜里、「なしや」はルシャをさしているという（更科源蔵氏による）。

ちやる村　狄二百五十人位
　大将　しやなはしりこんた
うなつ村　狄五十人
　大将　れかつ
なしや村　狄百人位
　大将　いかんてき
しれとこ村　狄百人位
　大将　不明

ここには子女、老人などは入っていないと見てよいから、当時西海岸の各河川に、コタンの規模としては最大級のものが、散在していたと考えてよいだろう。

正徳二年（一七一二年）になると『和漢三才図会』にのっている「蝦夷之図」によって、当時の北海道の地図をみることができる。この正徳図の写しを見ると、帯のように長い北海道が認められる。内陸には尻別岳、タルマイ岳、内浦岳があり、そして北東には北海道本島と切り離されて、大きな島が一つある。名を「志利恵止古島」（知床島）といい、知床は半島としては存在しないのである。

網走の海岸に立つと、知床半島はオホーツク海のむこうにあって、離れ島をみている錯覚におちいる。さらに半島部の先端に目をやると、ルシャの辺で二分されて、海水面に没しているかに見える。おそらく網走の海岸あたりから遠望しただけでは、知床岳の辺を離島と見ても無理はない。地図の感じもそんなである。

林子平の手になる『三国通覧図説』の中にも北海道が掲げられている。天明五年（一七八五年）のことであるが、知床半島と根室半島とは一つになっていて「白い所」（知床岬）のさきに「ノサップ」がある。ルシャ川は「ルウシャ」と記載されてい

て、深い入江になっている。

このようにして北海道の奥地にも、少しずつ和人の目がむけられていくのであるが、寛政年間に入ると、ロシア人の南下に手をやいた幕府は、同一〇年東蝦夷を直轄せざるを得ない情勢においこまれる。伊能忠敬が東蝦夷の海岸の測量をおこなったのは、この時期であって、海岸線については、現在の地図とほとんど変るところのないものとなった。

その2　知床の山名

時代はさらに下って安政四年（一八五七年）島義勇の『入北記』に次のような文がある。

「シレトコ岬北江直に出る。山色五通り計にて奇首の山もみへ硫黄山に烟たつ。」

これには二枚の絵も挿入されていて、うち一枚が知床半島の全景をよく描いて注書がある。

「シヤリ山　シヤリノ番家ヲ去ル事十里」

「ウナヘツ山」

硫黄山とはっきりわかる山体の中腹には、噴煙が上がっていて、

「硫黄ノ烟タツ」

と記されている。

もう一枚のスケッチは、斜里あたりから眺めた半島部であろう。中央の一段と高い岩山に、

「シヤリノチャチャノボリ、一名ラウシノ岳」

と注がある。羅臼岳、海別岳、斜里岳という山名がスケッチと共に、明確に示されている貴重な文献である。

安政四年という年は、知床に関する文献の非常に豊富な年であるが、『観国録』（石川和助著）では知床の山を次のように記述している。

「東北岬尽頭、第一峯ヲシレトコト云ヒ、第二峯ヲメナシ（東ノ義）、チャチャ岳、第三ヲイハオヒベツ、第四ヲウナベツト名ク。些ノ距離アリテ運上屋背後ニ在ル山ヲ、第五シヤリ嶺トス。」

但し、この山名は斜里の番人に聞いて記したものだから、他の記録と必らずしも一致しないと付け加えている。これによるとチャチャ岳とイハオヒベツとの順が逆になっている。

この年に出たものにもう一つ。『蝦夷地見置書』（協和私役）があり、斜里川を渡って運上屋に入った翌日、

「門外ニ出テ南ノ方、シヤリ山ヲ見ル。高シ。其左ニウナベツ山アリ。其東ヲチャチャノホリト云フ。又其東ヲルシャノボリト云フ。チャチャ山モットモ高シ。シャリ山其次ナリ」

としている。この書で注目しておきたいのは、ルシャノボリという山名が加えられていることである。

年代は明確でないが『北海道歴検図』という色彩のつよい絵巻がある。全道が二八巻に収められているものであるが、この中の北見州に知床の山のスケッチがある。きわめて正確な山姿

を見ることができるのであるが、「ルシャ山」という山名が、ここでも発見される。それは硫黄山とはっきりわかる山群に与えられている。

その3　松浦書と問題点

さて、ここで松浦書について触れねばならない。武四郎が第一回の渡道で、根室を経て知床に初見参したのは、弘化二年（一八四五年）であった。その後三回にわたって知床を訪れているが、弘化三年にはオホーツク海岸を南下して斜里に至り、そこから舟で知床へむかった。その記録は『再航蝦夷日誌』に収められたが、海岸の地名を克明に記して正確である。その点では『知床日誌』にみられる混乱はないのであるが、内陸の山岳については、彼にとってもまだ未知であった。

安政五年（一八五八年）、松浦は六回目の渡道を試み、根室から知床岬をまわって斜里に出た。それは『知床日誌』と『山川地理取調図』となって結晶するが、山名についての不統一など、かなりの混乱があることは、従来指摘されてきたところである。

次に『知床日誌』から山名にまつわる部分を抄出する。

「ヲラウシヲハエト岩岬、キャルマイ石門、弁慶妹大蛇に追はれ逃非り此穴より覗居たりしと。其上をヲフイ岳、又知床岳とも云へり。」

「ホロムイ湾。上にホロムイ岳。其下ニホロソウ大滝。」

「頭を挙れば其源はチャラセホロ岳と云ふ高山也。ホロワタラ大岩。」

「ルシャ、此所ネモロのルシャと背向すと。上をルシャ岳と云ふ。并て西南にチャチャ岳大山。」

「イワヲベツ巾五、六間。水源硫黄岳より来る故至て酸し。此川筋を上り、右ヲンネ岳左り祖父岳。其間より根諸のラウシに越と。其半腹迄惣て三、四尺の五よう松匍匐し其上凡八丁斗の間、一面硫黄山にて燃出たりと。」

「ウトルチクシと云に着。名義岩間を舟が越る義か。其辺岩の峨々突兀たる様頗る面白く其上をヘケレ岳。」

「ヲンネベツ急流なり。川筋宇多し、其源右ヲンネ岳。左ヘケレ岳。」

「源ウナベツ岳より来る。」

「ユフヲベツ滝。硫黄川の儀。此三筋皆硫黄岳より落故に号く。」

「上は余利岳、クテリンベツ岳、チセネ岳、ウナベツ、ヲンネベツ、サリキウシ、イミキ岳、シヤマツケ岳、チャチャノボリ、ラウシ岳等、風景目覚しき事也。并てルウクシナイ小川。川筋宇多し。左エキシャラシ岳、右祖父岳。」

これは根室側から望んだものである。

文章とは別に同書にはスケッチが挿入されている。根室側からのは知床岳と命名されたピラミダルな山があり、オホーツク海側からの一枚には、ウフイ岳とカシュニ岳が描かれている。

知床日記に挿入された地図（地図1）

位置的には現在の獅子岩の沖合からのピークと思われる。

一方、松浦の地図についてみると二枚ある。一枚は『東西蝦夷山川地理取調図』に収められた知床と、他は『日誌』に挿入されたものである。地図1（別掲）の『日誌』のものを見ると、岬の方から、ウフイノホリ、ホロナイノホリ、チャチャノホリ、イワヲノホリ、ラウシ岳、シャマツケ岳、ヘケレノホリ、ヲンネノホリ、ウナヘツ岳、チセネ岳、カンチウシ岳の一一峰である。山川図（地図2）のをみると岬の方から、ウイノホリ、ホロナイノホリ、チヤラセホロノホリ、チャチャノホリ、ユワヲノホリの六峰が上げられている。

この地図は全道を二六冊に分けたものの一つであるが、序にあたる「首」の分冊をみると、各地方の人別・境界・泊家・名山・名所などが一覧表になっている。舎利（斜里）の項をついでに見ると高岳名山に、斜里岳・海別岳・チャチャノホリの三峰が上がっている。名所としてイワヲノホリ温泉の名が見える。これは現岩尾別温泉のことである。

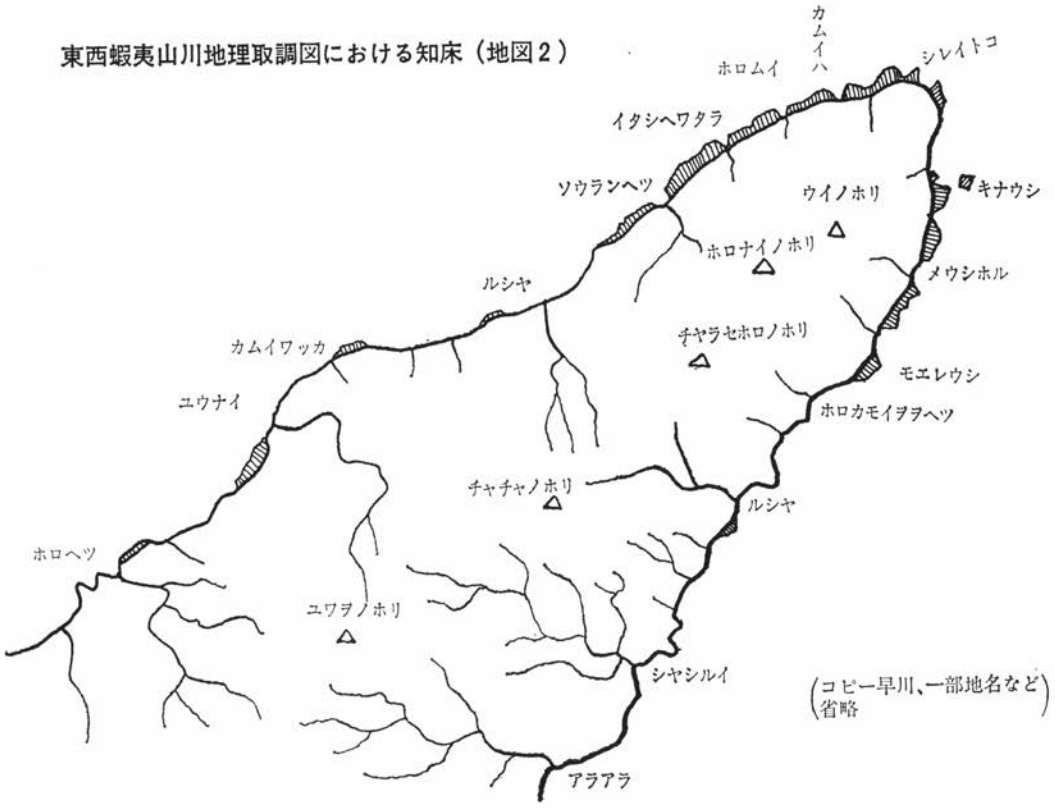
以上が松浦武四郎の偉大な業績の一端であるが、羅臼岳・硫黄山・知床岳の原名については、決して明確になっていないことがわかる。特に羅臼岳と硫黄山の混同が多く、イワヲノホリ（ヌプリ）・チャチャ岳（ヌプリ）・ルシャノボリ・ラウシ岳・硫黄岳が全く別な山であるのか、単なる同一山頂の異称なのかは不明である。ここでは松浦書の不統一を追求するばかりでなく、羅臼岳や硫黄山についても、果して現在さしているあのピークを意味しているのかどうかという、存在自体に疑問を投げかけてみる必要も出てくる訳である。

明治七年、知床の地質調査に訪れたベンジャミン＝スミス＝ライマンによっても、松浦書の不統一は次のように指摘されている。「余輩、網走川ノ渡場ヲ舟ニテ渡リシニ、イタシベヲニノ硫黄地ナル半島ノ山岳峨々トシテ、一望ノ中ニ在リシカバ、袖珍『セキスタン』ノ直角ヲ以テ其高サヲ測リシニ、外端ナル第一ノ高山（チャラセノボリカ）ハ大約五千五百尺。其次ナルイタシベヲニハ大約六千五百尺。其次ノチャチャノボリモ六千五百尺。又其次（ウナベツダケカ）ハ大約五千五百尺タリ。（中略）松浦ノ地図ニハチャチャノボリト硫黄山ノ名称ヲ取違ヒタリ。」（明治一二年刊開拓使顧問ホラシ＝ケプロン報文より抄出。）

現在では硫黄山の原名はイワヲヌプリ。羅臼岳はラウシ岳又はチャチャヌプリということになっている。

ここで松浦以降、知床の地形図ができる明治二八年までの資料も、若干みて置くことにしよう。それ程目新しいものはないが、ただカムイワッカの硫黄鉱山開発は急速に進んでいたので、硫黄山については詳しい。明治一一年に発行された『北海道地質総論』（B・S・ライマン著）では、硫黄山という呼称はつかわず「イタシベオニ火山」としている。明治二二年の『北海道鉱山略記』（北海道庁刊）では正式名称を「シレトコ山」とし、

東西蝦夷山川地理取調図における知床（地図２）



（コピー早川、一部地名など省略）

二四年の『北海道鉱床調査報告文』（北海道庁刊）では「知床硫黄山」としている。これは川湯硫黄山（アトサヌプリ）との混同をさけるためと思われるが、現在でも用いる人が多い。この報文には硫黄鉱山現場の地形図も掲載されていて、噴火口の標高を五四一メートルとしている。又カムイワッカ川はこの火口から流出する硫黄で、うずめつくされている状態も明示されている。

そうして明治二八年の地形図（地図3参照）をみるのであるが、測量は海上からされた。知床岬ちかくに六〇六メートルのウーイヌプリ。そのすぐ西南のピークにサマツキヌプリの名が与えられた。知床岳の名は見えず、測量された三角点もない。硫黄山はカムイワッカの上流、六三五メートルの岩稜のピークに与えられ、ラウシ岳は高度に若干のくるいがあるが、位置は現羅臼岳と正確に一致している。その他は内陸には何もない。国境稜線は、現在のものと比較すると、羅臼岳と知床岬の二点では一致しているものの、その間は全くのデタラメである。

三、羅臼岳と硫黄山の原名について

羅臼岳と硫黄山の原名を前記した文献から整理すると、次のようになる。

羅臼岳は、ラウシ岳、メナシ岳、チャチャノホリ、ユワヲノホリ。硫黄山は、イワオヌプリ（イハオヒベツ）、ルシャノボリ、チャチャヌプリ。明治になってシレトコ山、知床硫黄山、イタシベオニ等である。

ここでユワヲノホリ、イワヲ（ウ）ヌプリ、イハオヒベツ（ヌプリ）は、口承をカタカナ文字化する過程での若干の違いであって、要は硫黄岳（山）のことである。その限りにおいて知里真志保博士が、硫黄山の原名をイワオヌプリとしたことには問題はない。

さて羅臼岳（本来、ラウシ岳）の原名についてみると、松浦書を別にして考えるならば、チャチャヌプリがその一つであったことは明確である。それは前記した文献以外においても一致している。ところが現在の硫黄山（一五六二・五メートル）になると、原名がイワオヌプリであるという証拠はない。もっと厳密にみると、一五六二メートルのあのピークが硫黄山であるという確証さえないのである。

現地を訪れた人には印象のあることと思うが、たとえばオシンコシンやウトロの海岸から山やまを見やった場合、他を圧する形でそびえるのは羅臼岳である。半島部に入ると、これ程ピラミダルで個性的な山姿は他にない。チャチャヌプリの原名も当然と思われてくる。ところが硫黄山についてみると、山としての魅力もない上にたいして特徴もない。知床の山やまは、連山とか山脈といったイメージは意外に少なく、どちらかと云う

と、連なりながらも一つ一つが独立して、オホーツク海に没する感じである。斜里岳がそうであるし、海別岳、遠根別岳や知床岳にしても、独立峰とみることもできる。そんな中にあると、硫黄山は羅臼岳という個性の強い山の余波にしか過ぎぬ。この感じは、ウトロを出てイワウベツに至っても変らない。カムイワッカは硫黄山を源流としている川であるが、そこまで行っても同じである。ところが、タツコフ岬をまわってルシャに至った者は、そこで大きな発見をする。北面の硫黄山が、こんなにも美しく高い山であったのかと、ただただ驚愕するのである。それが知床岳の広大なハイマツ台地から望む段になると、神々しくさえ思ったものだ。今もなお、その感じが鮮烈なものだから、硫黄山の原名にルシャノボリの呼称を発見した時は、当然と思えた（前出、『協和私役』、『北海道歴検図』参照）。現在硫黄山の東八四八メートルの三角点に、ルシャ山の名を与えているがデッチ上げである。

ここで若干とぶが、明治二八年の地形図を再び見ることにする（地図3参照）。これにはさきにのべたように、現ピークの一五六二に硫黄山の名はない。それは当時盛んに硫黄を採掘していたカムイワッカの鉱山現場より、三〇〇メートル程上の岩稜に与えられた。これは炭山などと同じように、必らずしも絶頂を意味しない鉱山のイメージである。この硫黄鉱山の歴史は古く、すでに安政年間に経営されていた記録もある。

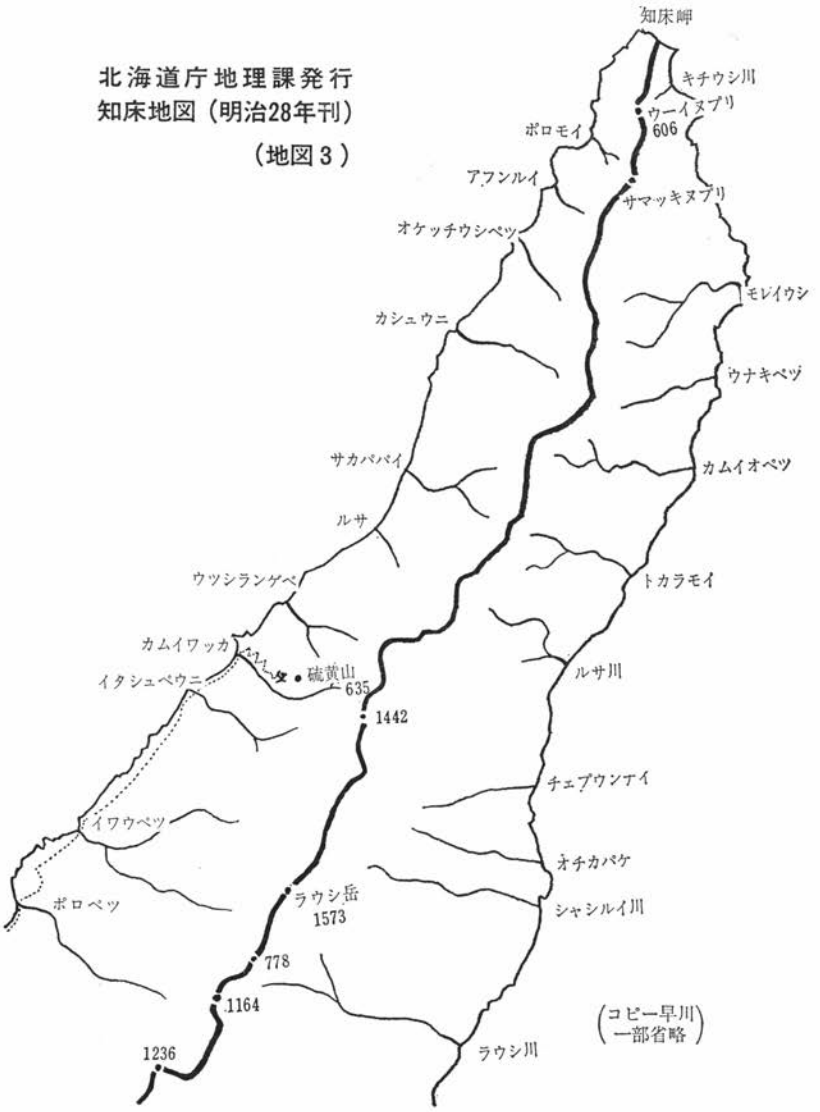
以上のことから、現在のピークに硫黄山の名が与えられたのは、極めて新しい時期とみてよいだろう。そうして文献にしばしばあらわれる「硫黄山」なる固有名詞を、登山者が単純明解に考える山頂として、いきなりとらえることに無理がありはしないかという疑問も起こってくる。半島の基部側からでは、少なくとも個性の乏しい一五六二の一点に、明確にイワウヌプリの原名を求めることは無理であるし、ピークがオホーツク側によっているので、羅臼側からではさらに不鮮明となる。

このように素朴な疑問を投げかけてみると、現ピークにつけられた山名は、まずはルシャにコタンを営んだ人びとの生活の中から出てきたものとして、自然である。現実には硫黄鉱山の開発と共に、急速ないきおいで硫黄山＝イワウヌプリが流布され、知里博士によって言葉上の理屈づけがされたに過ぎないのである（『斜里町史』のアイヌ語地名解の項――知里真志保執筆参照）。

それでは文献に常に出てくる「イワオヌプリ」とは、どの山頂をさしたのであろうか。ここで問題の松浦書を再度見ることにしよう。

彼は二枚の地図において確に山名を明らかにした。しかし、その地図間に不統一がある上に、『日誌』の記述にもイワウベツとカムイワッカの取り違えがあったりする（前出）。その点で信頼のおけないところもあるが、イワオヌプリに関しては従来のように、彼の感違いとしてしまう訳にいかないものがある。

北海道庁地理課発行
知床地図（明治28年刊）
（地図３）



二枚の地図では位置に少し差が認められる。しかしイワヲノホリ（ユワヲノホリ）がイワヲヘツ（ユウナイ）、即ち現イワウベツ川の源流にあるという点では一致している。これはライマンによって、チャチャノボリ（彼にとっては、この場合羅臼岳）と硫黄山の取り違えをしていると、指摘されたところである。しかし、これを取り違いとして一蹴できないものがある。即ち筆者には単純だが素朴な発想がある。イワヲペツの源流の山、それは当然イワヲヌプリであろうという。かなりまだ解決しきれない疑問もあるが、硫黄山＝イワオヌプリ程の無茶ではないと確信している。

羅臼岳の原名は確にチャチャヌプリという、共通の尊敬すべき名称で呼ばれていた。しかし、それはラウシコタンの人びとが、その源流の山をラウシ岳として慕ったのと同じように、イワウペツの谷間の人には、イワウヌプリであったであろう。この三つの固有名詞は、すべて一六六一メートルの絶頂に付けられたものと考えるのは、無理であろうか。松浦武四郎は決して感違いや創作をしたのではない。谷をめぐり、コタンを訪ね歩くうちに、変る固有名詞と変化する山姿に混乱したに過ぎないのである。さきに『知床日誌』から抄出したが、イワヲベツの源流は硫黄岳であり、沢をつめると右手に遠根別岳があり、左に祖父岳（羅臼岳）があって、峠を越すとラウシに至るとしている。その後カムイワッカの描写と思われる部分もあるが、その混乱によって前者まで否定される必要はない。

このように考えてくると、知床半島の北海道化が、東と西とでどういう傾きをもって進行したかを、今一度想起するなら、羅臼岳が一六六一メートルの固有名詞としての地位を確保したのは、歴然としてくるのである。

最後に松浦地図におけるチャチャヌプリの位置について、どうしても疑問を解けないでいる人も多いと思う。筆者にとっても最後までひっかかった問題であるが、今はそれ程固執はしていない。

ルシャの南にある美しい山、ルシャヌプリ。この美しく高い山にチャチャヌプリの呼称を与えたとしても、何の不都合があろうか。更科源蔵氏によると、先人たちは斜里岳をもチャチャヌプリとしていたというではないか。

むすび

以上で本稿は終る。

硫黄山と羅臼岳の原名について、その定説をくつがえすことが本稿の目的であったが、その他に、単なる誤りとされていた松浦武四郎の書に対する、若干の弁明を行なうことでもあった。しかし、それはそれ程私の内部において問題ではなく、山野に美しい素朴な名を与えていた先人たちの心を、伝えたいと云うのが本音である。その点で、この稿は充分にその意図を達

したとは思っていない。

最近秘境の名の下に、知床は観光産業の餌食にされてきている。ところが私たちの仲間（とは考えられない）の中に、そのブームに便乗して、観光業者と変らないことをやっている者も多い。それに岳界に君臨して大きな組織を動かす方々も関係するとあっては、我慢ならないものを感ずる。具体的な例を上げておく。勝手にハイマツを切り開いて、全日本登山大会なるものを知床で開いただけではないのだ。そのパンフレットに「知床峠」や「ルシャ山」などと、勝手な名称をデッチ上げて、あやしげな概念図をバラまいたのは許せない。組織は大きいからコミュニケイションの効果は大である。

あるいは又、ある大学のクラブの校名を、峠につけてみたり、無名湖に個人の名をつけて得意満面としている例もある。彼等がニセモノかホンモノかはともかく、自然に対するそうした思い上がりを、海外の未知の山やまへももちこんでいるのであろうか。無神経というよりは不遜。彼等には山名の重みなどわかろうはずもないのだ。本稿は、そうした初心を忘れた者への抗議文でもある。

引用文献の大半は、北海道大学附属図書館北方資料室に負うている。又引用文中の傍点は、すべて私が付したものである。

表 1　　地 名 の 変 遷　　安政 6 年 (1859 年)
斜 里 側　　昭和 39 年 (1964 年)

山川取調地図	北海道庁地理課地図	大日本帝国陸地測量部地図	国土地理院地図
シレイトコ	知床岬	知床岬	知床岬
イタカシヤラエ			
イラヲロウシ			
シュンタモイ			
ヲンネモイ			
タンネシラリ			
ヲンネハシクロホロ			
ウエンヒロタウシ			
クシャラキウシ			
ワッカエワタラ			
カムイハ		獅子岩	獅子岩
チラウンヲハエト			
ヒヤラヲマイ			
	ポネオルシ		
ホロムイ	ポロモイ川	ポロモイ川	ポロモイ川
エヲロウシ			
イマエヘウシ			
ホンアフンルイ			
ヲンネアフンルイ	アフンルイ	アウンルイ川	アウンルイ川
カラヘイヨクウシ			
イタシヘワタラ	イタシュペワタラ		
ウチセ			
チャラセワタラ			
ヲキッテウシ	オケッチウシペツ	オケッチウシ川	オケッチウシ川
フフウシシリエト			
フトヒラウシヘツ	ポトピラペツ	ポトピラペツ川	ポトピラペツ川
ソウランヘツ			
フイ			
カハラヲワタラ	カパルワタラ		
ハアシュニ	カシュウニ		
ホロワタニ		鯖岩	鯖岩
イエヘシニケウエウシ			
ウハシオマイ			
チャラセナイ	チャラッセナイ		チャラセイ川
テケル			
ホンエヲロシ			
チカホハニ	サカパパイ川	チャカパパイ川	チャカパパイ川
ヘケ			
ノントルハウシ			

山川取調地図	北海道庁地理課地図	大日本帝国陸地測量部地図	国土地理院地図
チャロカハエ			
	テッパンベツ	テッパンベツ川	テッパンベツ川
ルシャ	ルサ川	ルシャ川	ルシャ川
ショショ			
ホンヘツ		ポンベツ川	ポンベツ川
シラリア			
シュフンウシ			
ホンフフウシ	ボウノプシ		
シルトカン			
フフウシナイ		ウプシノッタ川	ウプシノッタ川
ホンユウヘツ			
ユンヘッショ			
		ウンメーン岩	ウンメーン岩
ルウサンヘツ			
ヨウコシヘトホ			
ヨウコシノツ			
ヨウコウシヘツ	ウツシランケベ		
タツコフノツ			
タツコフソウ			
カモイワッカ	カムイワッカ	カムイワッカ川	カムイワッカ川
エヤラムイ			
ヲキシカルシヘ			
イタシヘウニ	イタシュベウニ	イタシュベツ川	イダシュベツ川
	イショウトルンナイ		
テシレト	エエイシレト		
フクレヤノツ			
ユウナイ	イワウベツ	イワウベツ川	イワウベツ川
ホンシュマチセ			
ホロシュマチセ			
ホロヒナイ			
イシカリムイ			
フレヘ			
フュニ			
ホロヘツ	ボロベツ	ホロベツ川	ホロベツ川
ウエンクシ			
アハシリノツ			
ヘケレノツ	ベレケナイ	ウトロ	ウトロ

表 2　　地 名 の 変 遷　　安政 6 年 (1859 年)
昭和 39 年 (1964 年)

羅 臼 側

山川取調地図	北海道庁地理課地図	大日本帝国陸地測量部地図	国土地理院地図
シレイトコ	知床岬	知床岬	知床岬
アツホロラシ			
メナシタアンムイ			
ヌサウシ			
ニヨモイ			
フンヘヲマムイ			
ヘケルホロ	ペレケポール		
エシヨヤ			
トウチェウシ			
	ソウヤワタラ		
キナウシ	キナウシ川		
シュネシュンエト	シネモイ	赤岩	赤岩
ニカルウシ	ニカルシナ		
クチヤコルシ			
メウシホル			
ヘケレノツ	ペレケノツ	ペキンノ鼻	ペキンノ鼻
ヌエキ			
モエレウシ	モイレウシ川	モイレウシ川	モイレウシ川
		ポロモイ	ポロモイ
	ウナキペツ	ウナキペツ川	ウナキペツ川
リウェンレリ		観音岩	観音岩
	レクイシララ		
	クワマペツ		
ホロカモイヲヲヘツ	カムイオペツ	カモイウンペ川	カモイウンペ川
ホンカモイヲヲヘツ			
	シットキウシ	合泊	合泊
		セセキ	セセキ
チャラセナイ	チヤラッセナイ		
トカラモイ	トカラモイ	トッカリモイ	トッカリムイ
ヲショロコツ	オショロコツ川	オショロッコ川	オショロッコ川
フフシナイ	ポノフシ川		
		コブカリコタン	コブカリコタン
ルシャ	ルサ川	ルサ川	ルサ川
キキリヲヘツ	キキロペツ	キキリペツ川	キキリペツ川
		ショージ川	ショウジ川
クアマヘツ	クオペツ	ケンネペツ	ケンネペツ川
チセフシャクヘツ	チェプサタペツ		
チェフウシヘツ	チェプウンナイ	知円別	知円別
ルフネシュマヲイ			

山川取調地図	北海道庁地理課地図	大日本帝国陸地測量部地図	国土地理院地図
モセカルヘツ	モセカルベツ	モセカルベツ	モセカルベツ
		天狗岩	天狗岩
ヲチカハケ	オチカバケ	オッカバケ	オッカバケ
トカルウシ	ニカルシ		
シャシルイ	シャシルイ川	サシルイ川	サシルイ川
	ウネレキソー	トビニタイ	飛仁帯
ハシコイ	アシュコイ川	ハシコイ	ハシコイ
	ラウシノ立岩	立岩	立岩
チカフコエキウシ			
チトラエ	チトライ川	チトライ川	チトライ
	ペセバケ		
マカウシ	コカイウシ	}スネトヒニウス	スネトヒニウス
イコスシュマイ			
アラアラ			
ホロムイ			
ラウシ	ラウシ川	羅臼（川）	羅臼（川）

（注）・山川取調地図：松浦武四郎の東西蝦夷山川地理取調図のこと。安政6年刊
・北海道庁地理課地図は明治 28 年 10 月発行（二十五万分之一）
・大日本帝国陸地測量部地図は大正 14 年発行（五万分之一）
・国土地理院地図は昭和 39 年発行（五万分之一）
・山名は除外してある。

追悼

近藤　茂吉氏（一八八三―一九六九）

近藤さんとマムさんのこと

ここ数年来、いな戦後の山岳会の色々の集会には、必ずと云ってもいいくらい、几帳面に御元気な姿を見せて下さっただけに、近藤さんの急逝は何んとも嘆かわしい次第である。

僕の如き若輩が、そもそも近藤さんのような大先輩に、特に御親しくしていただいたと云うことだけでも、矢張り山岳会なればこそと、旧き伝統の山岳会と云うところは、僕にとっても離れ難いクラブでもあるわけだ。

その昔、日本山岳会など、とても寄り附き難いと、ただ憧憬のみ抱いていた頃『高山深谷』に確か「五色ヶ原、野営の朝」と云う美事な写真が載せられているのを見て、初めて近藤さんの御名前を知り、後には辻村さんの『スウイス日記』等でもその御高名は充分知り尽していたものの、僕にしては全く幸運にも、その近藤さんの御紹介で日本山岳会に入会出来たのだから正に恩人でもあるわけだ。

早くから貿易商を御自分で経営されていた近藤さんが、大正十二年の震災の年の暮も近附く頃だったと思うが……。スイス製のスキーや登山具を多量に輸入されて、今の銀座四丁目の角の「和光」の店の処に木造バラックみたいな建物の二階で、陳列会、即売会を催されたことがあったが、その時僕は初めて近藤さんに拝眉の栄を賜わったのである。

それまでに一応、槇さんがスイスから最新式の登山用品を持って帰られたのを見て、ただただ羨ましく思っていただけに、この陳列、即売会は我々にとって正に眼を見張るものばかりであったのだ。槇さんの説明によれば、その中にはエベレストの連中が使っているのと同じものだと云う、ほんもののアイダーダウンのシュラーフ・ザックも二個来ており、そもそもシュラーフ・ザックが日本に輸入されたのは、これが最初のものだと思う。その他にも、近藤さんが実際に御自分がスイスの山で色色経験深いことだから、何れも無駄な品物はなく、僕等にとっては珍らしく、しかも欲しいものばかりであったわけだ。ラングリーメンとか、B・B・ビンディングとか、ローデンのマントとか、固形燃料のメタ等も、この時始めて日本に輸入されたのではないかと思うが……。スキーにしても、今まで裏に溝のない、リリエンフェルト式のスキーしか穿いたことのない僕には「アイガー」と焼印の押してある溝の入ったスキーを見て、思わず暫らく手を触れて離れなかったことを思い出すのだ。それに、スキーの両杖等も、この時始めて多量に輸入されたものの一つではないだろうか。

この意味から云っても、近藤さんの日本登山界に対する貢献は、大なるものがあったと云っても差支えないと思うのだが。

亡くなった大島亮吉さんが、このシュラーフ・ザックを度々持って、「試験」と称して晩秋の武尊や穂高にゴロ寝の材料に使ったのも、このシュラーフ・ザックなのだ。

当時、近藤さんの御店は保々近藤合名会社と云う社名で、京橋の八丁堀にあり、度々お邪魔するようになったのもそれ以来であったが、未だ学生の身分で、近藤さんの御商売多忙中に邪魔にこそなれ、決して得にはならない僕を、いつもニコニコ顔で迎えて下さり、スイスの山、辻村さんのお話、マムさんのことなども、何れも僕を引付けて止まぬ、よもやまの話を伺うようになったのもこの頃からであったのだ。その上、登山は決して危険なものではないということを、東京倶楽部で僕の親父に説得して下さり、むしろ近藤さんの方から山岳会入会をどんどん進めて下さったのだから、僕にとっては正に夢のようなものだったわけだ。

後年、僕も成人してお酒の味を知るようになった頃、VAT・69と云うウィスキーが輸入されていたが、これなども貿易商としての近藤商店が、日本への一手輸入元だったと聞いている。しかもこのウィスキーは、日本山岳会の発足に、大いに蔭の力となって協力、推進を惜しまなかったA・Cのアーノルド・ルイス・マムさんが、英国のさる醸造家の御曹子で、VAT・69の譲造元だということも聞いていたので、千葉県の老舗の醸造家の御曹子の近藤さんとマムさんが、特に親しくされていたということも、成程とうなずける次第である。

山岳会も英図山岳会のように、創立当初はどっちかというと比較的裕福な人達によって、所謂クラブ式の会であったようだが、近藤さんにしてもマムさんにしても、何れも夫々お国柄は違っても、アルパイン・クラブを中心に毛並みのよい御両人が親しくなられたことは、小島さんの『山の風流使者』の中の、「登山家マムと日本山岳会の人々」によっても当然のことだと思うし、又この名文は僕の今でも時々、書架から引張り出して読み返して、独り楽しんでいる一文章でもあるのだ。殊に最近近藤さんを失なっては尚更のことだ。

ここでチョット、マムさんのことに触れさせて貰いたいものだが……。

それは今以て忘れられない、一九二七年の九月、マムさんはアメリカを経て日本を二回目に訪れられたのだ。当時横浜港に上陸された時の同船に、偶々ヨーロッパ帰りの僕の妹も同船しており、妹の話しでは永い航海中、船中で度々船客同志の会合や余興会が催される例になっていたのだが、或る日、偶々マムさんが「日本の富士山」という題で、講演されたというのである。岸壁についた船に、早速上って行った僕に、妹はこのマムさんを早速紹介してくれ、光栄なる握手を交わしたものだが、かねがね、近藤さんから伺ったり、色々な文献によって僕が勝手に作り上げていた、アルパイン・クラブに集る御連中の雰囲気、一つのイメージの中の人物にそっくりの、優しそうな紳士であっただけに尚更、僕にとっては忘れられない時間であった

のだ。

マムさんは奈良ホテルに、秋まで滞在されるということだった。奈良が好きだという事も、この時聞いた話だったが、当時奈良にはマムさんがオックスフォード大学以来の（或いはケンブリッジだったかも知れない）親友たりし、前駐日英大使、チャールズ・エリオットが退官後、個人として再度来日、奈良ホテルに滞在して、大蔵経の研究に没頭、屢々高野山に通っておられたそうで、近藤さんも交えてこのお三人の仲は、東京クラブに於ける特に親しき間柄であったことも、かねて僕は親父から聞いて知っていたのだが、マムさんはこの晩秋、A・Cの暮の晩餐会に間に合う頃迄、奈良の静かな風景を楽しみ、帰国の途につかれたわけだが、途中香港で病に冒され、一船遅らせて急ぎ帰国されたものの、不幸船中で又々悪化することとなり、遂に最期を遂げられ、ビスケー湾に葬られたということを近藤さんから伺ったが、当時の近藤さんの落胆の模様は、いま近藤さんを失なった僕にとっては、忘れられぬ思い出の一つなのである。

近藤さんはその昔、マムさんを通じてエベレスト登山隊に、参加を申込まれたという程の親しき間柄でもあり、またマムさんについては、今さら僕がここでくどくど説明する程のこともない周知の紳士であり、その謙虚な人格的の魅力は、多くの友人先輩から、尊敬と親愛の情を集めていたことだというし、ロングスタフなどもトリスル登山の一節で、如何にマムさんが教養深く、よく自我を克服して辛抱強く、仲間の気持をそこなわないような態度を、終始してくれたということを述べている。このような人物と、特に親しくしておられた近藤さんについては、僕はつねづね御目に掛る度に、たとえマムさんにはただ横浜で十数分間会っただけとは云え、日本人としてはどっちかと云うと背高の近藤さんは、外人の間に入られても、それ程見劣りするような体格でもないだけに、マムさんとお二人で、アルパイン・クラブ辺りで柔かいソファーにでもくつろいで、パイプや葉巻を口に、物静かに語り合っておられるような図を、独り勝手に頭の中に描いていたこともあったのだから、僕にとっては近藤さんを思う時は、ついマムさんを離して考えることは出来ないのだ。

事実、アルパイン・ジャーナルの In Memoriam に載ったマムさんの写真――それは、従来の In Memoriam にはあまり例のない、椅子に腰掛けて書見するマムさんの、如何にも温和な、あの姿……。『アルパイン・クラブ・レジスター』に半生を注ぎ込まれたのも当然だと、思わすにふさわしい書見姿のマムさんの、あの、柔かみのある写真……。しかも、このマムさんの追悼文はフレッシュフィールドが筆をとっているのだから、こんな三拍子揃った In Memoriam も、正に豪華版とでも云いたいところだったので、今となっては尚更、僕は近藤さんを思う時は、ついマムさんを離して考えることは出来ないのだ。

戦争中、暫らく近藤さんにも御目に掛れず御無沙汰に打過ぎていたが、戦後お茶の水のルームが出来て間もなく、未だ物に不自由な時ではあったが、そろそろ「有志晩餐会」も始めよう

じゃないかという話から、一晩各自食器持参ということで、スキ焼会を催したことがあったが、この時も近藤さんが見えられ、当日世話人の一人を引受けた僕に、近藤さんは久しく音信絶えて会えなかった孫にでも再会した時のような温顔で、話し掛けられた時のお顔も、未だに忘れられないのだ。

かねてから、蓼科に山荘を持っておられ、晩年はそこに逼留されることが、東京在住よりだんだん永くなり、是非僕にもと来泊を勧誘して下さったが、遂にその機を得なかったのは、今にして見れば残念でならないことだ。

それにつけても、蓼科に於ける近藤さんのことについて、如何にも近藤さんらしい、その温情溢るる人柄の話を、同じく蓼科に居を構えていた会員交野武一君から聞いているので、この機会に披露して近藤さんを偲び度いと思う。

疎開以来、同地の村人達とは特に親しく交わっておられたということは、近藤さんのお人柄からいっても敢えて不思議なことでもなく、また当然のことでもあったろうが、或る日村の長老格の葬式に、偶然めぐり合せた交野君が、その柩を担う数人の中に、どう見てもネッカラの村人には見えない、粗末な野良着を着した気品のある村人が、柩の一端を担いで静かに村の歩道をゆるゆると歩いて行く姿に、思わず歩を留めたというのだが、交野君も近藤さんのお名前だけは知っており、また蓼科におられることも噂には聞いていたのだが、このような珍らしい機会に、特に村人の誰れの紹介によるでもなく、唯その時の自然の態度だけで、直感的に近藤さんであると判り、自ら名乗をあげて、爾来親しく願うようになったと云っているが、恐らくつねづね多くの村人達とも、なごやかな交際をされていたことだろうし、また一面、尊敬もされていたことだろうと思う。

近藤さんの登山については残念ながら『山岳』には余り詳しく述べられてないが、『スウイス日記』には仲々茶目気タップリの記事などもあることは、『スウイス日記』の面白さの一役を担っていると、僕はかねがね思っていたのだが、芦峅の名案内平蔵を特に東京のお宅によばれ、親しくもてなされた半面、たまたま風雨のために損傷した同家の屋根瓦の手直しに平蔵が手伝わされ「剣の峻や黒部の急流など朝飯前の豪の者の平蔵も、さすがに滑っこい屋根の登攀にだけは、冷汗をかいていましたよ……」なんていう話を、近藤さんから僕は直接伺ったのだが、こんな茶目気も近藤さんから直接伺うと『スウイス日記』の近藤さんを、また思い出すことになるのだ。

晩年には視力が大分弱って来て、「この頃は会報を読むのにも仲々、時間が掛りますよ……」等と洩らしておられたが、それでも会の会合に御出席の時はいつも、槇さんや三田さんに上等の葉巻をポケットから一本宛取り出され、葉巻やパイプをたしなまぬ僕などが傍から見ていて、頂戴する御両人の喜ばしそうな姿も勿論だが、与える近藤さんの、如何にも後輩をいたわるような楽しそうな温顔の状景は、今もって僕の脳裏を離れることのない状景でもあり、最後迄山岳会を愛し「クラブ・ライフ」と云うものを衷心よりエンジョイされ、我々若輩の尊敬の中心であった老先輩を失ったことは、山岳会のためにも、また

僕個人にとっても、誠に淋しき限りである。

人、年老い、円満にして、特に黙して語らずとも後輩を引付けるような人物は、はたから見て何んとも云えない、天下の美観だが、人間の性質は様々だからと云ってしまえばそれ迄だが、何年たっても角のとれない、他人の批難を止められない老人というものは、如何にもみっともないものだ。これとは凡そ正反対の近藤さんの急逝は、大きな損失と云わざるを得ない。

（一九六九年十一月四日）　（成瀬　岩雄）

＊

近藤さんとは、昨年十二月六日の年次晩餐会で、お会いしたのが最後になりました。

その日は、「この一本展」の催しもあり、開会時間よりも一時間ばかり早く行きましたところ、近藤さんも早い目に見えましたので、お隣りに坐って、いろいろ、お話しをうかがうことが出来ました。「初夏の頃、田舎のうちへ遊びにいらっしゃい」とお誘い下さったのでしたが、この頃の人は、花や木に乱暴をし、時には、ひとのうちの庭にも、無断で入って来て、花をとったり、それも大事に持って帰えるのではなく、途中で捨ててしまったりする、というお話しが出ましたので、「ウォールタ・ランドーの詩にも『私は自然を第一に、そして、自然の次に芸術を愛した』というのがございますね」と、自然を尊重しない人々の多いことを、ご一緒に嘆いたのでした。私は詩の中でも、エレジー、悲歌が好きです。エレジーは、パストラール、牧歌調のが多く、田園風景が背景となり、詩にうたわれる、なき人も、花や木のかげの中に、かくまわれているようです。ノイスが一九五三年のエベレスト登山の時に愛読した、マシュー・アーノルドの「スカラ・ジプシ」につながる、友人アーサ・クロフの死を悲しむ哀歌「サーシス」でも、たびたび一緒に行った、オクスフォド近くの田園風景の中に、今はなき友をしのぶのです。そして、二人が愛着を抱いていた、あの「エルムの木」のある風景の姿が、美しく画き出されています。

ノイスは、この一九五三年から九年の後、一九六二年の七月パミールの登山で、なくなりましたね。この頃は、私も、自然や動物の多く現われる、ハドスンやスティーヴンスンやアンナセン（アンデルセン）の詩や小説を、いろいろ読んでおりますが、中でもアンデルセンの散文詩ともいわれる、あの美しい、「絵のない絵本」は好きです、と申しました。この語り手は貧しい若い画家ですが、ヨーロッパの国々をはじめ、アフリカ、インド、チャイナー、グリーンランドなどで、月が見た情景をこの画家に語りきかせるのです。「絵のない絵本」は三十三夜の物語りになっていますが、日本のお話しは出ません。このような、お話しをしながら、ふと窓の外を見ましたら、澄んだ空に美しい月が出ていましたので「月が日本も——おや、あなたを見ていますよ」と申したら、近藤さんも少し身をかがめるようにして、月を眺め、「あ、きれいな月だ」と、おっしゃいました。ここで、開会の知らせがあり、めいめい席に着きましたが、席も離れておりましたので、これが最後のお話しになりました。

近藤さんとは、ご一緒に旅行をしたこともなく、おもに山岳会や松方さんのお宅での会合などで、お会いするお付合いだったのでしたが、私の無駄話しなども、聞き手になって下さいました。松方さんの会では、良いシガーを二、三本、おみやげに持っていらっしゃって、槙さんや葉巻の好きな人を喜こばしておいでしたので、つい、シガーに関する笑話などお話ししたことがありました。また、それらの会では、よく、乾盃の音頭とりを、お引受けになったので、いつでしたか、お隣りに坐った時、イギリスの舟乗りが港に帰って来て、仲間と一ぱい飲む時の、愉快な乾盃の言葉だというのを、小声でいって盃を合せましたら「そういう面白いのを、いろいろ書きあげて、教えて下さい」と、おっしゃったのでしたが、あいにく僅かしか知らず、また本でも見て集めようと思っているうちに、日がたってしまいました。

近藤さんとの、本についての思い出は、昨年の「この一本展」にも出品しました、ハントがエベレストのあの高い所で読んだ、ジョージ・ボロウのウェイルズ旅行記『ワイルド・ウェイルズ』です。この本のことはハントの『ジ・アセント・オヴ・エベレスト』で知って、さっそく買求めて読みましたが、そのお話しをしましたら、自分も、ぜひ読みたいとおっしゃったので、その「ワールド・クラシック」版をお貸ししたことがありました。これは活字も小さく、お目が疲れることかと思っておりましたら、しばらくたってお会いした時に「目が疲れるので、だんだん、おくれてしまったが、あと少し（六二二ページのうち）まだ残っています」とおっしゃいました。その後「エヴリマンス・ライブラリ」の一九五八年リプリント版も求めてまた読みましたが、この方が活字も読みやすく、こちらをお貸ししればよかったと思ったのでした。前に、スコットランドにおいでのことがあったのですから、その間に、ウェイルズへもお出かけになり、ボロウの旅行記にも出るスノウドンなどへ、いらっしゃったりなさったのではないでしょうか。

近藤さんは八十におなりになってからも、山岳会の晩餐会にもよくご出席になりました。昨年の晩餐会の日から、もう七ヶ月の月日がたちましたが、晴れた夜、美しい月を眺めるたびに、あの夜の最後の思い出が心に浮かびます。

（一九六九年七月六日夜）　（田辺　主計）

近藤茂吉氏略歴

・明治十六年（一八八三）一月七日、千葉県海上郡飯岡町に生れる。
・音羽豊山中学校を卒業後、明治三十七年から三十九年まで、ウイスキー研究のため英国グラスゴー大学留学。
・明治四十年十月、東京に近藤商店を設立、直輸入業を開始する。
・一般スポーツへの関心から、次第に登山にも興味を引かれるようになり、**明治四十三年十二月**日本山岳会入会。紹介者高野鷹蔵、三枝威之助。当時東京市麹町区平河町五ノ五に住む。会員章番号二六〇番。
・明治四十五年（大正元年）七月～八月、立山室堂から劔岳試登、平、針ノ木峠を越え大町に出、上高地に至り、前穂高、奥穂高、北穂、槍ヶ岳縦走、上高地に戻る。大町まで高野鷹蔵氏と同行、前穂高は大北聡彦氏同行。案内は佐伯平蔵ほか越中の人夫二名。奥穂と涸沢岳の鞍部か

ら、平蔵ら人夫は涸沢を下らせ、槍ヶ岳まで単独で縦走した。明治四十二年鵜殿正雄、四十四年小島烏水に次いで三回目の穂高、槍縦走記録。

・大正二年七月～八月、室堂から長次郎谷を経て剱岳登頂（明治四十二年吉田孫四郎一行に次ぎ登山者として第二登）。別山尾根を初下降。五色、薬師岳、三俣蓮華岳、鷲羽岳、赤牛岳往復、双六岳、槍ヶ岳初縦走。平蔵ら越中人夫を同行。

・大正三年八月、スイス・アルプス、グロース・シュレックホルン登頂後、下山途中雪崩にあい負傷する。同行辻村伊助氏、スイス・ガイド二名。

・大正八年七月、室堂から剱岳登山後剱沢下降を試みたが果せず、仙人沢下降、落口付近で黒部川を渡河、棒小屋沢落口まで溯行を企てたが、食糧不足のため牛首尾根から鹿島槍ヶ岳に登り大町に下山。北アルプス北部初横断に成功する。案内は平蔵ほか越中人夫。剱岳は神戸のドーント氏と同行。

・大正九年十一月、日野春から初冬の甲斐駒登山を企てたが新雪が深く屏風小屋で三泊し待機したが、ワカンジキがもぐるため断念。さらに赤穂から木曽駒に向かったが、地元の案内が求められず中止する。案内は平蔵ら越中人夫。

・この間幹事及び評議員として日本山岳会のため尽力し、主として外国との交渉に当る。

・大正十年英国王立地学協会に対し、第一回エベレスト隊参加を申込んだが実現せず。

・昭和五年十月、株式会社近藤商店に改組し取締役社長に就任。

・昭和二十五年四月、日本山岳会名誉会員に推薦される。

・昭和三十四年一月、近蔵商店取締役会長に就任。

・昭和三十八年五月、池田総理大臣から輸出振興に尽力したことにより表彰状を受ける。

・昭和三十八年十月、藍綬褒賞を受ける。

・昭和四十年四月、勲四等瑞宝章を受ける。

・昭和四十四年二月二十二日、聖路加病院で死去。享年八十六歳。二月二十七日神田キリスト教会で葬儀が行なわれた。

〔付記〕　右の略歴は、故人の生前小生が直接禅雲寺の御自宅にうかがい、メモしておいたノートに基いたものである。近藤氏の登山記録のくわしいものは、ほとんど書き残されていなかったからである。右登山の一部については、次の文献に記載されている。

・会員登山報（『山岳』第七年三号）

・会員登山報（『山岳』第八年二号）

・穂高岳の早期登山者（『穂高星夜』山崎安治著）

・剱岳の早期登山者（『剱の窓』山崎安治著）

・『スウイス日記』（辻村伊助著）

・槍・穂高登山史序説（『山の序曲』山崎安治著）

・近藤茂吉氏の黒部横断（『山の序曲』山崎安治著）

（山崎　安治）

武山　良次氏（一八八六―一九六八）

永年会員武山良次氏の略歴、登山歴等につき、編者の依頼に

より同氏息、武山二朗氏から送付された資料にもとずき、述べることとする。

同氏は明治十九年十月十五日、武山芳右衛門（当時石巻町で繭の加工場を経営）の二男として誕生、仙台までまだ鉄道のない頃で、北上運河、貞山堀を経て塩釜から鉄道で仙台へ出て仙台二中に学び、後慶応義塾大学理財科を明治四十三年三月に卒業（小泉信三氏と同学年）、同年四月鐘渕紡績（株）営業部に入り、昭和十二年まで購買部商務調査部長等を歴任、昭和十六年三月樺太石炭会社の創立に際し、鐘紡から出向を命ぜられ業務部長に就任、同十七年一月石炭統制会樺太支部の設立により、樺太石炭の業務を吸収せらるるに至り、同支部嘱託となって勤労部長の事務を担当、同二十二年四月樺太から引揚げ石巻市に帰る。同二十四年四月法務府東北少年院分院青海寮に職員として勤務、同二十八年退職。昭和四十三年十一月十日逝去。

本会へは明治四十年（一九〇七）二月入会、会員番号一一四、昭和四十年（一九六五）永年会員制実施に際し永年会員となる。

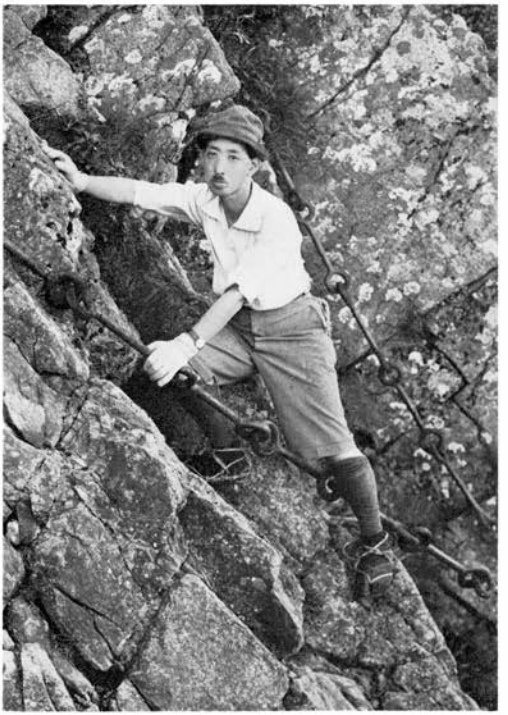
以下は同氏の義弟斎藤省三氏（近畿大学教授）に依る登山概要である。

大正九年以前の登山歴は不明であるが、これ以前に少くも二回は北アルプス方面に行ったことは、その後の同氏の話で知った。然し年月、経路等はききもらした。大正十年から十二年までは大阪市桜の宮に住み、大正十三年から昭和十六年頃までは豊中市に住み、私もごく近くに居を定めたので、この間、日曜日には年中、しかも殆んど晴雨降雪にかかわらず、近畿の山々や河内平野を歩きまわった。近畿の山々では兵庫県の六甲山、摩耶山、再度山、京都方面の比叡山、愛宕山、奈良方面では生駒山、二上山、信貴山、葛城山、金剛山、等数回以上、六甲山などへは数十回も登った。雪の多いときには比叡山、愛宕山へ。または芦屋から谷を登って六甲山頂に出る、特に困難な路を選んで、足と装備の訓練をした。

記憶のみを辿って記すので、年月については或いは誤りがあるかも知れぬが、初めて私と北アルプスに行ったのは、大正十三年八月であったと思う。大阪から夜行で翌朝松本着、島々まで電車、島々に一泊し翌日徳本峠を越えて上高地に至り清小屋に泊った。案内人は島々で二人傭った。翌日は梓川を右に左に渉って槍沢の小屋に一泊した。われわれの足ごしらえは殆んど皆同じで、紺の脚絆に紺足袋、草鞋ばき、腰には二足ぐらいの代わりの草鞋をぶらさげていた。徒渉が多いので靴は不向きであり、靴をはいてる者は殆んど見られなかった。

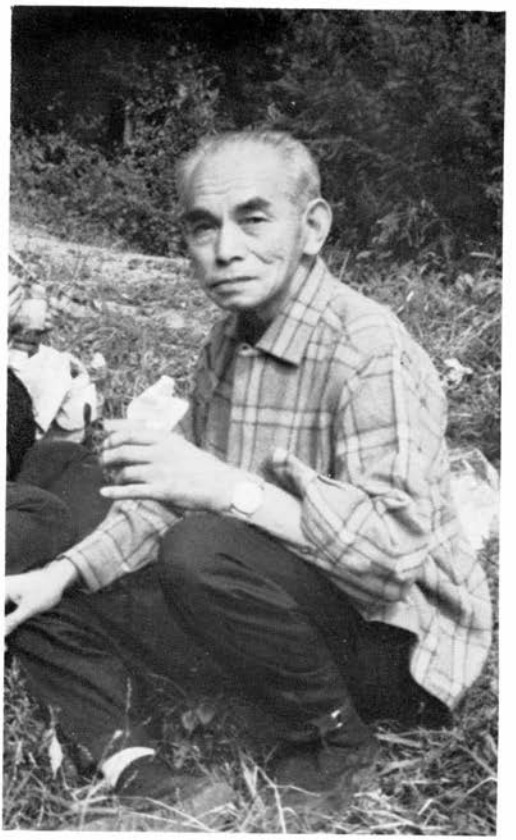
翌早朝暗いうちに、提灯をたよりに槍の頂上目がけて、約六十人位の山小舎に同宿した登山者が雪渓を登った。東京大阪方面の大学山岳会員が大部分であった。槍の肩に出たときは大暴風雨となっていたので、大槍まで登ったのは島々松本間の鉄道に勤めているという人と、良次兄と私との三人だけで、他は岩蔭に避難した。われわれ三人はやっとの思いで頂上に辿り着き、良次兄と島々の人は、狭い頂上の中央にある小さな石祠の処まで這って行ったが、私は頂上のとりつきにあった石の測量標柱にすがりつくのがやっとであった。肩まで降りてから聞い

名誉会員　近　藤　茂　吉氏
Shigekichi Kondō (Hon. mem.)
(1883－1969)
(1962年5月13日東京麻布広尾の自宅にて、
藤島敏男氏撮影)

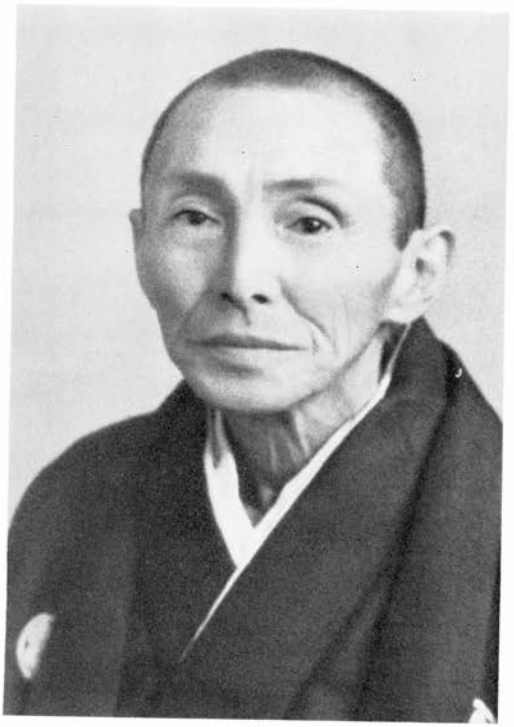


武 山 良 次氏
Ryoji Takeyama
(1886－1968)

山 根 雅 男氏
Masao Yamane
(1890－1969)



太田清吉（耳動子）氏
Seikichi Ohta
（1898－1966）



稲田豊八氏
Toyohachi Inada
（1893－1969）

たところでは、島々の人は槍に登ること七回目であり、良次兄は三回目であり、私は初めてであった。このことから良次兄は、この以前に少くとも二度は北アルプスに来ていることを知った。

この日のうちに槍沢の小舎に戻り、常念の小舎泊り、翌日は大天井、燕を越えて中房温泉泊り、翌日中房川に沿うて下り松本を経て帰阪した。

二回目は翌十四年八月、劔岳に登る目的で、芦峅寺の老案内人佐々木助七親子外四名を連れて、良次兄、私外四人の同勢で、第一日目は黒部の鐘釣温泉泊り、翌日は猿飛から本流と分れて小黒部谷を登った。その夜は雪渓中に幕営したが、この日小黒部谷の左上の山脊を通る熊を見た。

翌日は池の平を経て三田平の小屋に泊ったが、雨漏りが激しく小舎の中にテントを張る始末。ここで三日間豪雨に見舞われ身動きが出来ない。四日目登山を断念して、雨中別山乗越を経て立山の室堂に引き上げた。ここも避難者で大混雑であったので一泊した後、降り止まぬ豪雨の中を、芦峅の助七がついているからと、われわれだけが室堂から下山を許されて、数メートル先が見えない程の雨の中を藤橋に下った。このときの下り路は、まるで小川のように流れるところを歩くのだから、疲労した者は足もとがあやしくなって、よく転倒した。私は先頭を歩き、良次兄は最後を歩いた。良次兄が一番強かったからである。このときの雨は一週間も止まなかったので、大阪の新聞には山での遭難が報ぜられたりした。

後日もの語りになるが、この時の案内人助七の子息が、昭和九年室戸台風が大阪を襲って、大被害を受けたことを新聞で見て、五歳位の男の子と、古つづら、大のこぎりを背負って、良次兄と私のところを尋ねてきた。大阪市は全滅したので、燃料に困るという話だから、炭焼に来たというのだ。これには、こちらの方がきもをつぶすほど驚いた。

翌昭和二年の夏、加賀の白山に行った。同じように五人位の同勢である。滑川の支流と思われる川の左岸をのぼり、途中無人の温泉場に一泊して、翌日大豪雨の中を白山の裏手から、雪渓をわたって山頂に出た。このときの雨の強さは、バケツの水を頭からかけられるようで、雨合羽の下に背負っていたルックサックから、昼の食料が出せなかったほどであった。白山の頂上を経て白山温泉に一泊、翌日は山代温泉でくつろいだ。

昭和三年の夏は、大町から入って黒部川上流の渡場、針ノ木峠、お花畑、立山々頂、立山温泉、常願寺川下り富山へという平凡なコースであった。

昭和四年には白馬岳に行ったが、これも大雪渓を上下した位の平凡なコースで、帰路浅間温泉ではねをのばした。

その翌年は私の外遊のため中止、昭和六年の夏、乗鞍岳に行った。大体同じ同勢である。島々から歩きだして、小説大菩薩峠で有名な白骨温泉に一泊、翌日は谷のようになって雨のときは中央が水の流れる細路を登ったり、倒木をのり越えたりして頂上に出た。なんにもない丸い形の山であった。このときも雨に濡れながら、夕刻飛騨側の平湯温泉に着いた。翌日はバスで

高山へ出て二泊、次の日は下呂温泉一泊で帰阪した。

これ以後は仕事が多忙になって、アルプス行きは中止した。

斎藤氏の記述は以上の通りであるが、二朗氏の手紙によれば、小学校の頃よく六甲山、摩耶山へ連れてゆかれ、ヤブくぐりをさせられたこと、また故人は、歩くことが非常に好きで、八十近くなっても他の老人のように歩くことを苦にせず、足が弱ると困るといって必ず散歩を続け、また最後まで山岳会員であることを誇りとし、断片的ではあるが、山の話をよくしたという。ことに永年会員となり、銀を巻いた会員章をうけてからは（この頃からやや老化現象が進んできた）、来客のあるたびに、持ち出しては自慢話をしながら、見せていたという。

地方に在住したため、東京での知り合いが殆んどなかったが六十年の永きにわたって会員であった、故人の霊の安らかならんことを祈ってやまない。（編者）

山根　雅男氏（一八九〇―一九六九）

一昨年（昭和四二年）の春頃、山根さんから細野だよりを頂いた。そのはがきは蔵い忘れたが、文面は「ここに来て会員額田敏氏に出会い、日本山岳会が懐しくなった。自分は昔、藤島敏男氏の紹介で入会したが、現在会員外である。君はよく藤島さんと同行しているようだが、会員に復活する方法を知らせて欲しい」との意味だった。

山根さんが以前会員だったことは、わたしには初耳で、藤島さんに連絡したところ「復活大歓迎だね」と言われたので、その旨お答えした。七月下旬に「目下腹こわしで休養中だが、近日直接出向いて手続きする」との葉書が山根さんから届き、八月三日付でめでたく復活された。

昨年五月末に、古い山仲間十六七名で、高尾山に参籠したことがあった。ばんどりの飛ぶのを見たり、般若湯を傾けて山の思い出話に花を咲かせたり、楽しい一夜を過ごしたが、これが山根さんの最後の山行？　だったと思われる。また、この時藤島さんに会いたいと言われ、六月一日（土）に会のルームで両者久々の歓談をして頂いた。これも山根さんが山岳会に顔を出された最後ではあるまいか。

山根さんの入会は、昭和六年（一九三一年）十月である。また翌七年四月には、日本登高会に入会されている。山根さんが最も活躍されたのはこの頃で、日本登高会の会報を繙いてみると、八年五月に同会の事務所を引き受け、翌九年四月までの一年間の山行十五回、日数六十余日となっている。会報に載らないのもあるだろう。出入りの多い事務所を預ってなかなか出来ないことだし、貞江夫人も参加されている山行が多いから、ご夫婦揃って大変な張りきり様であった。

山根さんは酒も煙草もかなり好まれたが、どちらも目を細め

て恍惚とされるので、アルコールに弱いわたしなどをして、酒もよいものだな、と思わせたほどである。この温厚な人柄が、若い山男たちから「オヤジさん」と仰ぎ親しまれ、昭和十九年に東京岳連の理事長に推された所以である。こう考えると山根さんは登山そのものよりも、若い人たちを育成された点で、岳界に大きな功績を残された。

一緒に川苔山へ行った時のこと、頂上で山根さんが貞江夫人に「今朝預けた水筒を出してくれ」と言われると、夫人は「先刻麓で休んだとき石の上に置き忘れた」と答えられた。山根さんはご機嫌斜めで、それがしばらく解けない。わたしは、水筒の一つ位何だ、と思ったが、あとできくと中身は酒だった。

また、夫人のピアノのお弟子たちも同道で赤城山へ行ったとき、山根さんの姿がふと見えなくなった。夫人が「多分きじうちでしょう」と言われると、ピアノの女性たちが「だって、ご主人は鉄砲をお持ちだったんですか」と不審がったので、大笑いになった。こんな和気あいあいの山行が多かった。

今年の正月にめでたい金婚式のお祝いをされた山根さんは、今頃は何処かの山頂の岩に腰かけて、そんなことを思い出しながら、パイプに目を細めて居られることだろう。合掌。

略　歴

ヨゼフ　山根　雅男
生誕　明治二十三年（一八九〇）十二月一日（鳥取県）
昇天　昭和四十四年（一九六九）六月十二日
日本山岳会入会　昭和六年（一九三一）十月
（会員復活　昭和四十二年八月三日）
会員番号　一三四五番

前述一九三三年五月～一九三四年四月の山行を一例として挙げると次の通り（括弧内は日数）。

穂高　五月（7）、秩父　六月（5）、八ガ岳　七月（3）、燕、槍
穂高　七月(5)、夏山穂高合宿　八月(10)、三峠岩登り　九月(1)、
針ノ木、剱、黒部　九月(9)、二子山、御荷鉾山、炮烙峠　十月(3)
湯西川　十一月（3）、富士大沢クライミング　十一月（2）、冬期
合宿唐松八方尾根　十二月～一月（9）、日光スキー　二月（1）、
上ノ原スキー　四月(3)、川苔山　四月(1)、大蔵高丸　四月(1)

（川崎　精雄）

太田　清吉(耳動子)氏

（一八九八―一九六六）

太田さんとわたしとは、勤務先（銀行）での先輩後輩の間柄だった。同氏は一生を俳句に親しんだ人で、耳動子という俳号は広く知られていた。

昭和十六年に中途退社されており、わたしの同行した山歩きは十回位と思われるが、いつも大きなストライドで軽快に歩かれた。それも道理、昭和三十六年刊行『耳動子句集』の年譜によると、陸上十種競技に適した人で二十歳の時、東北樺太北海道のオリンピック（極東か）支部大会に、中学生三人と組んで

四百と八百のリレーに出場、アンカーをつとめて両方共優勝、走り高跳は四位だった。また成蹊在学二十二歳の時は、父兄会の際薙刀七段の女史と試合し、一薙ぎも受けずに相手を羽目板に押しつけてお面二本とった、という。

そうした腰のバネで、相撲も強かったし、山歩きにも適していたわけだ。三歳の時将棋をおぼえ、五歳の時将棋修行をさせたら、との話も出たそうである。

美声の持主で、山頂の岩に立ったり跨がったりされると、よく追分などがとび出した。その合間には頻りに句が出来ていた。太田さんが名だたる山は片っ端しから登られたのに対し、わたしはむしろあまり知られていない山を覗っていたので、これが同行回数の少い原因だった。

太田さんにわたしが最も感謝していることは、俳句を教えて頂いたことである。上達への指導も勿論有難いが、俳句を知ったことで自然を見る目が養われたことである。それは山登りと日常生活とにうるおいを与えて呉れた。

山岳会への入会は昭和八年（三十五歳）で、放黒田孝雄さんが紹介者である。これと前後して、わたしも黒田さんから入会のお誘いを頂いたが、入会を見合わせていた。それで太田さんとは俳句と山の話でいつも顔を合わせた（訪問し合っていた）のに、入会されているのを知らなかった。考えるとおかしなことだが、わたしの入会はずっと後だし、あまり近しいと、こんなこともあるのであろう。

俳人で無類の旅行好きだったから、全国隅々まで歩かれた。登られた山も後掲の表に載らないのがたくさんあり、現にわたしと歩かれた山は一つも載っていない。

昭和三十八年の夏、実に三十余年ぶりで一緒に山へ登った。岩手山行だったが、四日間雨に降られ、結構楽しかった。太田さんは途中の出来ごとや、見た草木を克明にメモをとられた。帰途小岩井牧場へ寄り、牛乳やジンギスカン鍋を賞味したのもよい思い出だった。次に同氏愛誦の句を二、三列記しよう。

霧の峠まれに来る人佐藤君

渋峠単独行の作で、静寂をひしひし感じて憩う作者の前に、向うから来た人がある。意外にも同じ職場の佐藤君だった。きわめて普通の表現でありながら、霧の峠の人恋しさのにじみ出た句である。

雲海の上に雲なし夏の月

雲海の波のただよう膝がしら

這松の焚火に雪を煮たりけり

以上三句は昭和六年農鳥小屋での作。

略歴

明治三十一年（一八九八年）三月十五日生（青森市）
大正十年成蹊実務学校卒、三菱製鉄へ入社、後銀行へ転社。
昭和十六年三菱銀行退社後、太田産業（株）創立。この頃より画人との交遊甚だ多し。
玉堂、桂月、土牛、三良、鉄山、案山子、千冥、任牛、多茂都、その他諸氏。
昭和四十一年（一九六六年）八月二十一日逝去。

山　歴

明治四十五年　岩木山（十四歳）。
大正十二年　富士山。
昭和八年　立山、剣、針ノ木（日本山岳会入会）。
昭和十四年　穂高と槍。富士山。苗場山。
草津白根より渋峠。阿能川岳。
昭和十七年　桜島。
昭和十八年　阿蘇。霧島。開聞岳。
昭和二十九年　栃本より甲武信、雁坂、中津川。
昭和三十年　妙高。八海山。富士。黒部より能登。将監峠より雲取（雪）。
昭和三十一年　白馬より鑓。みちのく旅行。
昭和三十二年　万三郎。伊勢路より矢ノ川峠を越す。九州一週。紀州。北海道。清津峡。
昭和三十三年　荒川岳、東岳、赤石岳。塩見岳。石鎚山と四国一週。
昭和三十四年　聖岳より赤石岳。山口県一週。木曽御岳。乗鞍。会津駒より燧、尾瀬沼。
昭和三十五年　知多渥美両半島。八幡平と陸中海岸。
昭和三十八年　岩手山（六十五歳）。

（川崎　精雄）

稲田　豊八氏（一八九三―一九六九）

〝守門の神様〟稲田豊八氏は、〝稲豊さん〟と越後の岳人たちに親しまれ、敬われた愛称であった。

稲豊さんの五十余年の文化活動は、三面六臂の摩利支天が自在の通力をもって、一切の災難を打ち破ったと云うのに、ぴったり当てはまる。登山・スキー・植物・桜・花菖蒲・野鳥・錦鯉の研究、実践まで、それぞれの分野で後世に残る立派な業績を残している。この多趣多芸の各方面に精力的に精進した稲豊さんの不幸は、この見事な仕事を受け継ぎ、敷衍し開花させる、よい弟子を持ち得なかったことである。栃尾市という地域の狭さのためと思うが、私も不肖の弟子の一人として、切なく思っている。

稲豊さんの人柄の一端にふれ、登山に及んで追悼としたい。痩た小柄の身体で、優しさのこもった低い声、いつも笑顔である。守門山と動・植物に限りない愛情をそそぎ、どこにあれほどのエネルギーが、潜在するのかと思う程の座談の名人となる。博覧強記、人を笑わせるユーモアは、全く欲もなければ飾り気もなく、時間の経つのも忘れさせるので、聴く方が余程の時間的用意が無いと、かえって失礼になるくらい、熱心であった。

それにまた、若々しい人生観が、脈々と躍動しているので、私等は圧倒される力強い迫力をもっていた。

しかし、温顔と笑いのたえない対話も、ひとたび市政の批判や、自然に対する感想が文章となると、痛烈な皮肉となり、秋霜烈日の激しさとなり、知る人も意外に思うほどであった。

稲豊さんの多方面な業績のうち、登山とスキーの面で教えを受けたにすぎない。植物・野鳥の研究の数冊の著書、里桜の品種保存のための広範囲な活動があったが、これら生物学分野の仕事も〝山〟を媒体にしての展開であったことは明瞭である。山こそ、特に守門山こそ、稲豊さんの正面にあったと信じている。この〝山〟で四十年近く指導を賜ったことは、私の生涯の幸せであり、心から誇りと思っている。

稲豊さんの〝山〟に対する考え方であるが、その登山歴には高峻な山岳の初記録とか、特に困難なコースの初登攀など云う、華々しいものは極めて少ない。守門山、浅草岳を中心に、その周辺の越後、会津国境の山々を、時間をかけてこつこつと歩きまわった。会津朝日岳へ小砥沢から鋸歯を越えた登頂は、当時未踏の尾根であった。浅草岳の初登頂は、草原に一筋に伸びる〝獣道〟を感激して辿ったなど、初期の登山は地味ながらも、開拓の意欲に満ちたものであった。

稲豊さんの山行の偉大さは、一つ一つの登山の価値にあるのでなく、登山に関連して自然観察の厳しさ、深さにあったことを、身をもって教えられたことであった。同行した県内、県外の誰人でも、その草木や野鳥への深い愛情に感嘆し、山を知る眼の深さ確かさに敬服し、新しく開眼されたのを経験している。

稲豊さんの山歴は、個々の登山を箇条書にしても意義は少ない。山と自然科学と取り組んで、一生のうちでも転機となった登山や行事を拾い書をしておく。それによって、年とともに昂まっていく自然への情熱と、執念の跡をしのんでみよう。

（昭和四十四年十月十四日）

稲田豊八氏登山略歴

明治二十八年（一八九五）十月二十一日栃尾市栃尾町七〇番に生まれる。

大正二年七月　初めて八海山に登る。大いにへたばり、こんな難儀な山登りは、一生やるまいと思った。

大正十三年　どういう転機か、登らぬ覚悟であった山登りを始め、栃尾山岳会を創立。登山の実践と普及に乗り出した。

大正十四年十月　アルバータ初登頂の槙有恒氏を招き講演会を開催し、深い感銘を受けて、以後守門山の開発に一生を捧げ〝守門の神様〟になる契機となった。

昭和三年三月　槙氏からの刺激を受け、初めて降雪期の守門山へ登る。スキー登山を試みた長岡市の松木喜之七氏（会員故人）等一行のスキー登山隊に逢い、山岳スキーの妙技にたまげてしまった。以後スキーの利用に熱を上げる。

昭和七年三月　第四銀行一行の守門山遭難に際し、捜索隊長として遭難者の救出にあたり、その地金に磨きをかけた。

昭和八年九月　同好者を集め〝アバル会〟を組織し、守門山麓道院池畔にスキー・ヒュッテを建設。山岳雑誌〝山と渓谷〟に「守門山・付

追悼

そのシーヒュッテについて」を執筆。この前後、新聞・雑誌による文筆活動は頗る活発となった。

昭和十五年十月　栃尾報国体育団を発起人となって組織する。「歩け、歩け」運動に力を入れ、栃尾～皇居間の徒歩行進を完遂し、全国的な話題となり、厚生大臣表彰を受ける。

昭和二十一年九月　日本山岳会入会、会員番号二三八〇。

昭和二十三年八月　県内外の岳人を集め、第一回守門山登山大会を開催す。講師、東京科学博物館佐竹博士、大井博士、歌人遠山夕雲氏、俳人佐野良太氏、藤島玄越後支部長を招き、自然観察、自然愛護について、受講者に深い感銘を与え、自他ともにこれを契機に、登山者として植物・昆虫・地質と風流に志す人が多くなった。

昭和二十四年八月　野鳥研究家中西悟堂氏その他の諸氏を講師として、第二回守門山登山大会を開催す。登山者に総合的な山の知識教養の高さを求める、稲豊さんの姿勢がみられる。

昭和三十二年三月　高松宮を守門山に迎える。計画、準備、実行に至るまで、孜先して総指揮をとる。

昭和四十四年二月七日夕方逝去。七十二歳。

主な業績

走査式日本植物検索便覧	五八五頁	自刊
日本野鳥検索便覧陸鳥篇	三六三頁	共立出版
植物科名事典	二五二頁	自刊
花菖蒲検索便覧	八八頁	自刊
早春の守門	No. 11～12号	新潟科教研誌
媒花集	一五〇頁	自刊
守門	三五頁	栃尾市教育委員会
手近かにある薬草	八〇頁	自刊
稲田シリーズ	No. 1～14	自刊
栃尾植物園シリーズ	No. 1～	自刊
守門の映画春の守門山	35粍　一巻	昭和二年
吹雪の守門	16粍　二巻	昭和七年

主な公職　栃尾植物園長、長岡科学博物館顧問、日本さくらの会委員その他生物関係・文化財関係団体の役員

遺族　夫人、稲田レンさん、三女マサ子さんの夫忠良氏が稲豊書店を経営している（栃尾市栃尾町七〇番）。

（佐藤　金一）

『山岳』六十三年（一九六八年）写真説明の訂正

同書対一二五ページの赤石岳山頂での記念写真の説明に誤りがあるのを、三枝守博氏が指摘されましたので、訂正致します。

右端＝高野鷹蔵氏は三枝守博氏の誤り、また撮影者を三枝氏としたのは、高野氏の誤りでした。なお三枝氏の左隣りは高頭氏が伴った従者で、鉄砲をかついでいるのが、案内人中村宗平であろうと、三枝氏は言われています。（編者）

図書紹介

山溪記（全五巻）

冠　松次郎著　第一巻一九六七年十一月刊　三三四ページ　定価九百円　第二巻一九六八年三月刊　三四〇ページ　定価九百五十円　第三巻一九六八年十二月刊　三二七ページ　定価千円　第四巻一九六九年六月刊　三三〇ページ　定価千円　第五巻一九六九年八月刊　定価千円　縦19・5センチ×横15・5センチ　箱入り　写真概念図多数　題字制作畦地梅太郎　千代田区外神田二ノ一八春秋社発行

本会名誉会員冠松次郎氏の業績については、いまさら小生のようなものが、あらためて紹介するまでもないであろう。氏はただひたむきに山を登り、谷を探られたばかりでなく、それらの行動を一つ一つたんねんに紀行文にまとめ、まず『山岳』に報告し、次いでそれらを何冊もの書物にされていた。氏の山登りもさることながら、その筆まめさも、ちょっとほかの人には真似の出来ないことであった。氏は、この二月で満八十七歳になられた。過去六十余年の山旅で書きためられた、尨大な紀行と随想を、明治時代から年代順に編み、加筆して、こんど発行されたのが『山溪記』と題する全五巻本である。

第一巻の発行が昭和四十二年十一月、第五巻が昭和四十四年八月だから、足かけ三年がかりでこの大著が完結したわけで、これもまたまことに息の長い、根気のいる、われわれ若いものを圧倒させる大事業といわざるを得ない。

「私は八十歳を越えると急に身の衰えを感じて来た。最近では足と腰が不自由になって、疲れると寝床にもぐりこんでは身体をやすめている。あと、どのくらいまで生きられるものか、自分でも見当がつかない。しかし、とにかく八十歳まで無病息災で生きて来られたのは、まことにありがたいことである。起きているときには本を読み、また筆をとる。床の中では考えたり追憶にふけっている」と、著者はその近況をまえがきの中で述べておられる。著者の追憶の中には、さまざまな光景がまわりどうろうのように動いているのであろう。かつて歩いた山、溪、森林、高原、親しかった山の友、山の人たち。そしてそのなつかしい思い出が、この五巻の書物の中でまざまざと浮きぼりにされて生きているのである。

各巻とも随想と紀行という形式がとられており、その大略を紹介しておかねばならない。第一巻の紀行は、初期の山行篇とでもいえるもので、明治三十五年夏の最初の富士登山から始ま

り、日光、初夏の赤城、初冬の浅間、日本アルプス篇では、明治四十二年の槍ヶ岳登山から、その翌年の常念山脈、四十四年の白馬岳から祖母谷下降、大正三年の北岳、そして大正六年有名な劔岳早月尾根初登攀の紀行を焦点に、黒部渓谷篇一までおさめられている。第二巻は黒部渓谷篇の二で、大正十四年の黒部渓谷完渕記を中心に、劔沢行、黒薙川の渓谷の三篇がおさめられ、黒部渓谷中心部の探検の苦心をあらためて感じさせられる。第三巻は、奥秩父、遠山川・頸城山塊と戸隠、立山・後立山連峰、黒部の秋の四篇、第四巻は双六谷と棒小屋沢篇が中心となり、随想篇では当時のパートナーであった別宮貞俊、沼井鉄太郎両氏の追悼文が眼を引く。第五巻は白馬山群、鹿島槍ヶ岳、尾瀬・上高地、高瀬渓谷、黒部その後、の五篇がおさめられ、小島烏水氏の書評「白馬連峰と高瀬渓谷」を巻頭に掲載し、「谷のウインパー」と称された著者の、登山界における評価を明らかにしている。またその巻末には「私の初登攀メモ」と題し、大正四年七月劔岳平蔵谷下降を初め、岩井谷から薬師岳、早月尾根、御山谷下降など、二十六の山行がリストアップされており、登山史上の資料としても、きわめて興味深いものがある。

各巻とも著者の撮影したものを中心に、辻村伊助、別宮貞俊、岩永信雄、川口邦雄氏らの写真でかざられていて美しいが、印刷が少々不鮮明なのはまことに残念に思う。装釘はがっちりしていて、著者の山登りの風格を感じさせる。山岳書としても、また前人未踏のこの冠全集の発行をお祝いすると同時に、著者の御健康を切にお祈りしたい。

〔山崎　安治〕

日本登山史

山崎安治著　A5判三二四ページ　写真一二ページ　略図数葉　一九六九年六月　白水社発行　定価一三〇〇円

欧州において、登山の歴史について書かれた書物の刊行は、わりあい早くから行われていて、すでに数書を数えるというのに、これほど山登りと山の本の出版が盛んな国で、登山史の現われないことに、ものたりなさを感じていたところ、本書の刊行によって、渇きのいやされる思いがした。

「欧州登山史」の場合、ふつう十六・七世紀頃、アルプス越えの旅行者などのことから書き初められた例が多いが、自然観や山と人との関わりあいの相違するわが国の場合、果していつ頃まで遡ればよいか。

著者は、先ず火の山―日本の出現、そして富士・阿蘇山の噴火に「山」を発見する。次いで原始宗教における山岳崇拝と古代祭祀の遺跡、山の先住民族といったことをとりあげ、それを序章として以下、中・近世の登山から近代登山のはじまりに触れたうえ、日本アルプスの探検登山、アルピニズムの勃興時代に進み、さらにマナスル登頂から最近の海外登山の趨勢へと登

山史を発展させてゆく。

日本は火山列島である。いまも火を噴く山々が国土の各地に存在しているが、古代には富士山をはじめ火を噴く山がさらに多かった。この火山を古代の人々はどのように見たであろうか。また、山は古くから日本人の生活と結びついていた。そこに山の信仰が生れ、説話が生れ、文学と歴史が生れたのは偶然でない。山の信仰が特色ある内容をもつがゆえに、後世外国人のまなこを見はらせたのは事実である。著者は、このような背景を心において、発端の筆をとったと思われる。

戦後、わが国の考古学があげた業績はまことにめざましい。数々の遺跡発掘など実り多い研究が進められた。古代登山史の分野にも、何か新らしい発見をと期待するのは私のみであるまい。著者もその辺には抜け目なく、日光男体山頂の発掘、蓼科山の遺跡調査、さては八ヶ岳標高二四〇〇メートル地点における、黒曜石やじりの発見などの成果をとりあげている。

有史以前のことは暫くおき、諸峰開山の時代に入っても、今なお謎のベールにつつまれたままのことが多い。著者が、日本各地の山々の開山の由来を訪ねることは、まことに興味深いことと、述べているのには共感する。むろん、そこには正確な歴史的事実はなく、何れも伝説であり、後世にいたってさまざまに潤色されていることが多いので、登山史の立場からは、信憑性を追求されなければならない。著者が考証に払った苦労の跡は、随所に窺えるのである。開山縁起について、もっとも議論のやかましい双璧は白山と立山であろう。立山の開山を大宝元年（七〇一）、白山のそれを養老元年（七一七）とする説は古くから伝えられたが、考証の結果、立山の登頂は白山の開山におくれること約五十年といわれるようになった。そんな経緯もかなり詳しく述べられている。

『常陸国風土記』にはじめてその名を現わし、万葉歌人によってうたいあげられた名山富士にしても、登山の実証できる時代の記録となると、実は容易でない。今からおよそ九百三十年前に、『富士山記』を書いた都良香自身に登山の経験があったにせよ、無かったにせよ、頂上附近の記述が極めて正確であるところから、当時すでにかなりの登山者があったことは信じていいだろう。と、すると古文献に「大同元年富士山頂に立祠」という文字も残るので、この間に資料の裏付けさえ発見できれば、登頂記録は更に何年か遡らせることができるわけである。

登山史を書く場合に必要なのは、このような裏付け資料を、古文書・絵図等をも含む文献はもとより出土品、発掘遺跡等まで広く求めて役立たせたい。いわゆる、わが国の名山のなかには、年号入りの石祠、鳥居などの奉納を見かけるし、たとえ現存しなくとも、先輩が実見した記録など貴重である。

登山史を書くためには、極めて広汎な文献渉猟が必要なのは当然である。巻末参考文献には、かなり多くの文献名の引用があるが、まだ隠れた資料が地方に眠っているかも知れない。どうしてそれを掘り起すかが大きな課題である。この種の書物には、西暦・日本暦双方の年代附記は欠かせない。通読して明らかに誤植と思われるものや、誤認あるいは既出文献に二説ある

ものなども散見されるが、後日の研究修正に待つこととして、ここでは触れない。

ただ、気付いた一、二の点のみいえば、江戸中期の画家谷文晁描く『名山図譜』三巻に収める山の絵を、蝦夷地五座、本州・四国八十座、九州四座の計八十九座と記すのには若干の誤りがある。すなわち初版本『名山図譜』では八十八座、後版の『日本名山図会』をとれば、人の巻に磐手山と玉東山の二図を加えるので計九十座となる。なお、文中に九州四座とあるのは五座が正しい。

いま一つ、ウエストンの滞日中の登山年譜がまだ明らかでないことから、かねて最初の富士登山の年代ならびに登山回数を知りたく思っていた。本書でウエストンの富士登山に触れる初出の記事に「十二月には村山口から富士山に登り、宝永山の火口でその年の秋の地震の跡を調べた」とあるが、それは何年のことか。三行ほど遡ると「明治二十一年七、八月にまず浅間登山をふり出しに松本へ出て徳本峠を越え、槍ヶ岳登山を試みたが悪天候のために失敗……」と記されるのに続くので二十一年を指すのか。そこで念のため原著の "Exploration and Mountaineering in the Japanese Alps" を開くと、第十章のところで一八九一年（明治二四）十月二十八日の震災の直後、富士山の地形が変ったと噂されたので、それを確認するため、その年の十二月（原文には in the following December とある）いやがる人夫を促して宝永山まで登ったが、何の変化も起っていなかった、と記されている。一八九一年（明二四）が濃美地震の起きた年であることは理科年表からも確認できるので、ウエストン登山の十二月は、つまり明治二十四年が正しいということになる。なお、槍ヶ岳を試みて果せなかったのは明治二十一年でなく、二十四年が正しいことも『日本アルプス』第四章の冒頭に、一八九一年（明二四）に経験したその楽しい旅行がもとになって、翌年の飛騨側からの計画となったと語られていることから裏書されよう。なお、この機会にいままでウエストンの富士登山について触れた諸書を調べたところ、いまそれを詳しく記すいとまはないが、『山岳』への寄稿（自伝）、アルパイン・ジャーナルの追悼文、黒田孝雄「ウエストンの杖の跡」、"INAKA" 第八号、岡村精一訳『日本アルプス』巻末の年譜（角川文庫・創元社版）などに、それぞれ異同があったり、曖昧の点の多いのに驚いた。

再び本題にもどり、近代登山のはじまりと、日本アルプスの探検登山の項は、いわば本書の中心をなす部分で、著者の勉強ぶりが窺えるとともに興味がそそられる。お雇い外国人の登山に続く日本人による学術研究の登山、とりわけ地理・測量などに関する個所は資料も豊富で、調査が行届いている。また伝統的な山水趣味から山へ登り、好紀行文を残した文人派のいくたりかに触れたうえ、とくに高橋白山、小杉復堂、久保天随の三人の名をあげ、それらの山行から近代登山の精神が酌みとれるといっているのが印象に残る。

アルピニズムの勃興以下に触れる後半についても感興が深いが、拙評が冗長のため紙数を使いすぎた憾みがある。最後にち

ょっぴり慾をいえば、これだけの内容に対し、巻末に人名・山名の事項別の索引を欠くのが惜しい。それにより読者は目指す山についての歴史を知り、あるいは初期の登山者を容易にさぐり出すことが、できるのではないかと思う。

ともあれ、著者が『穂高星夜』ほか一群の書物に見せていた研究が実のり、ここにはじめて日本登山史の誕生を見たことに、心からの拍手を送るとともに、国産クーリッジ氏の多年にわたる労をねぎらいたい。

〔小林　義正〕

近代日本登山史

安川茂雄著　菊判五六八ページ　別刷写真八ページ　本文中図版多数　一九六九年六月　あかね書房発行　定価一六〇〇円　別に限定特製本あり

多年待望の「日本登山史」が、本年奇しくも二冊まで得られたことを喜びたい。その一つ安川茂雄『近代日本登山史』は、表題の如く近代登山に焦点をあてて纏めあげた、五百頁を越す労作である。

今からおよそ百二十年前、長い鎖国の夢を破る黒船の来航に江戸の街は湧いていた。そこへ登場する人物、松浦武四郎を発端にしてこの登山史は展開する。武四郎は江戸末期に壮年時代をすごして、蝦夷地探検で盛んに活躍、北海道の山岳では開拓者的役割りを遂げた。明治維新に入り、齢五十を越えてもなおかくしゃくとして各地を巡歴、登山への情熱を絶やさなかった近代稀れにみる探検家・登山家といえるばかりでなく、まさに登山史上、江戸から明治へのかけ橋というに相応しい人物であった。次に登場するのが、英国の一青年外交官アーネスト・サトウで、日本での行動は条約上制限されたが、東海道や海上から眺めた富士山の美しさに惹かれ、ついに明治元年に登山の宿願を果した。もちろん、これより以前に来日外国人の富士登山がないわけではなかったので、オールコック、パークス夫人などの登山をも織りまぜて紹介している。あたかも昨年は明治百年ということで、近代日本の文化発祥をさぐる気運が高まり、それにつれていわゆる〝お雇い外国人〟たちに関する事蹟が見直されたが、この筆者も西欧文明の渡来と外人科学者にはすこぶる熱心で、ことに日本での山登りに関係ある人々、ガウランド、ミルン、アトキンソン、チェンバレン、ナウマンらの動静については、第二章以下で詳しく述べている。ただ、登山を裏付ける資料となると、今日決して充分とはいえない。消息が一部にしか伝わらなかったり、あるいは出版が判っている本さえ滅多に見かけなかったりして、もどかしさを感じるのが現状である。抜群な記録蒐集能力をもつ著者は、かつて何らかの形式で発表されたものは、じつに丹念に収録し、しかもそれを巧みにアレーンジしながらエピソードを加え、読みものとして興味深

く纏めあげている。全編が人物を中心に展開するが、構成に無理がなく、自然にその流れについてゆけるよう手慣れた運びをみせている。

注記の多いのも本書の特色の一つ。有名な“Hand Book for Travellers in Central and Northern Japan”については、別に一項を設けて、関係の深い信・越・飛に亙る部分の訳文を添えているのは、同書が今日稀本であるだけに親切だ。第三章のウエストンの来日、小島烏水との接近から諸先輩たちが懐いた山への情熱、そして第四章における山岳会創立に至る前後の動きは、著者のもっとも力を注いだ部分と聞いたが、新たに得たらしい材料も織り込んで克明に語られている。

ウエストンに関しては、たまたま山崎安治氏の『日本登山史』の項でも触れたように、同師の富士登山に興味があったので、そのくだりを見ると、明治二十四年はじめてベルチャーとともに中部山岳を歩いたのに引続き「翌明治二十五年もウエストンは五月から行動をはじめ、友人フォルダムと箱根宮ノ下から乙女峠を御殿場へ越えたのち、残雪の富士登山に成功した」とあって、富士登山はこれが初回らしく読みとれる。なお次頁（七一頁）へ進むと「同年十二月にも地震による富士の地貌の変化を視察のため村山口より登山しているが、翌二十六年五月になるとウエストンは……岐阜より中津川へ入り、恵那山を往復したのち、時又から天竜川を下って浜松へ出た。さらに鈴川をへて大宮口より御殿場に下っている」といっているので、これをそれぞれ第二、三回目とみたい。ところが「同年十二月」にいう同年は、文中に翌二十六年と記される個所があることから、二十五年を指すと判断していいだろう。すでに山崎氏『日本登山史』のところで述べたように、地震のあったのは明治二十四年の筈。すると同年というのは二十四年が正しく、さきに第一回とした二十五年五月の登山とは順序が入れ替る。あとの二十六年五月の大宮口より御殿場に下山には誤りがない。

年代の取扱いにはとかく誤解を理じ易いものである。いま一つ、本書の九十五頁で木暮理太郎氏の事蹟に触れたなかに「翌二十七年九月にも、理太郎は群馬県師範学校教諭渡辺千吉郎など一行十数名に加わって利根川水源探検隊に同行している」云々と書かれている。この利根川水源探検紀行は雑誌『太陽』創刊号に掲載され、しばしば引用される初期の上越探査行として重要だが、木暮氏が同行しているというのは本当か。この記事の出典と想われる木暮氏の文章を引用してみる。「私が此地方に始めて足を踏み入れたのは渡辺氏の一行に追蹤して尾瀬へ出たときであるが、今にしてその当時を回想する何一つ記憶に存しているものがない。……」（『山の憶い出』上巻、利根川水源地の山々―一六五頁）。著者はおそらく文中の「追蹤」という文字と、木暮氏がはじめて尾瀬へ抜けたときのコースを憶測したうえ、同行と判断したらしく考えられる。しかし、木暮氏の文章はその前段において、古来この地方に関する紀行文としては、天保年間の上野藤原温泉紀行と、渡辺氏の利根川水源探検紀行との二編があるにすぎない、として、この行を語っているように解釈される。念のため雑誌『太陽』創刊号にあたると、渡辺

千吉郎氏は紀行のはじめに、一行全員の姓名を肩書入りで記したうえ「余を合わせて総計十七名、中途帰りし者を除けば十二名とす。右の三角印は中途帰りしものとす。此他人夫十九名導者三人、合計三十九名とす、但し人夫中四人及導者三人は中途に帰りたるを以て、探検の目的を達せし人員は合計二十七名となす。」もちろん掲出のなかに木暮氏の名はなく、ただ人夫と導者の姓名が不詳だが、このうちに含まれるとはまず考えられない。

以上はたまたま気付いた点について、少しく詮索を加えたばかりで、なお仔細に見れば誤認、引用年代・人名の誤植など散見されないわけではない。

しかし、これらをもって、この労作の価値を減ずるものでないことはいうまでもない。むしろ特別の縁故から創期会員の直話として、従来あまり知られていない事柄を聞き出し、克明に附記されていることを知るのである。

著者は、さきに山岳小説『霧の山』を書き、また『歴史の山旅』、『黒部奥山軍記』などの歴史的読みものから、一群の遭難記をものした名負うての健筆家である傍ら、かねてわが国登山史の執筆には情熱をもち続けてきた人である。近代登山史の作者に相応しいばかりでなく、この書は氏の代表著作として残るであろうことを信ずる。

〔小林　義正〕

雪山・薮山

川崎精雄著　A5変型判三二〇ページ　色刷挿画二（生沢朗・上田哲農）写真一七一　一九六九年二月　茗渓堂発行　定価一二〇〇円　百部限定特製本あり

川崎精雄さんの山歩きに年期の入っていることは、ベテラン仲間に定評がある。そういえば、私が山の雑誌などで川崎さんの名を知ってから、もう三十年以上になる。その長い山歴から生まれた、数多い紀行や随筆の中から四十八篇を選んでまとめられたのが、この『雪山・薮山』である。

まず本書を開いて感ずることは、この騒々しい人海登山の時代に、今もって人気（ヒトケと読んでもニンキと読んでもよい、同じ意味なのだから）のない山々のことが、本書では大部分を占めていることである。そこに本書の生まれた意義と価値があるといいたい。

地域的にいえば、最も多いのは尾瀬を中にはさんで、利根水源や只見川上流の山々（景鶴、平ヶ岳、笠、小沢、中ノ岳、荒沢など）と、南会津の山々（駒、田代、荒海、大嵐山など）や峠の紀行である。そのほか奥秩父や西上州、鳥甲や佐武流とい

った辺境の山も含まれている。

年代的に見れば、これらの山々のパイオニアとして精力的に活躍された戦前のものと、その同じ山へ何度でも訪れて、自然と山村生活への親愛感を深めていかれた、戦後の観照的なものとの対比がうかがえる。

戦前の精力的な活躍をつづけられた頃の一例として「鳥甲山と佐武流山」(昭和十五年四月)をとってみる。この二つの山の登攀を終った後、荒天を冒して大岩山、赤倉山を経て赤湯へ越したのであるが、「雨はそろそろ身体に浸み初め、夕方の気配も迫ってくる。……すでに朝からスキーとアイゼンの着脱幾たび、へずり、ぶら下り、匍上り、飛下り、様々の労働に疲労を覚えはじめた。尚も頑張って先へ搦む。」「物凄く陰鬱な赤湯の戸を叩いたのは七時。……豪雨となり、清津川の水量がぐんと増し、川底をぶつかりながら巨岩の流れる音が、家を揺がす程だ。わたしたちの渡ってきた橋も、川下の橋も流れたに違いないと老爺がいう。」

翌日、この橋の流れてしまった清津川を、赤湯山や笞山を高巻きして、三国街道の元橋へ出るのに十二時間の苦闘をつづけ、その足でさらに五六里の夜道を歩いて湯沢から夜行に乗った。「山の為には勤め先を休まない、というのは私のモットーであり、今まで一日も休んだことはない。」

こうした、はげしい山行にくらべると、戦後に書かれたものには自然への澄んだ感性が鮮かで、そこに美と静けさがある。「横道から少年を乗せた裸馬が現われて歩いて行く。うしろから仔馬が小走りについて行く。馬の躍動する体や振る尻尾に、五月の陽光が燦と輝く。」(八ヶ岳の裾野)「山の頂きからスキーを滑らす時、鈴を振るような音色をきいて、何だろうと耳を傾けると、それは山の頂辺から湧く水が、雪の下で春の序曲を奏でていたのだった。」(藤原の春)「会津の奥の、誰もいない、どこも見えない沢で、シメジの香に咽び、梢洩る秋日を浴びながら、冷い水をこくりと飲んだ。」(南会津秋の峠越え)「雪の上にナナカマドの葉とも見える黄色い一片が、貼り着いていた。しかしそれはよく見れば、黄色い蝶の骸であった。」(新雪のころ)

こうした静寂感と美意識は、川崎さんの句作への精進と無縁ではないだろう。本書には俳句も配してあるが「み仏のかろき頬杖木の実降る」「いただきの残雪知らず蜥蜴棲む」「茶毘の火をおそいし春の夜の嵐」といった句などは、詩情をそそる十七葉の写真とともに、いっそうこの本を親しいものに感じさせる。

一九三八年、川崎さんはこう書いている。「眼白が手のとどくほど近い枝に来て啼く。私がその真似をすると、眼白が首をかしげる。このような所に住めたら、ということは、若い私は決して考えはしない。また考えるべきではあるまい。けれどもしも心の端に蘇るたびに、こうした所を訪うことが出来るならば、人生のアルバムを、心地よい思い出で満たすことが出来るだろう。」(鹿島の初冬)

それから三十年、川崎さんはいま、昔歩いた山々、桧枝岐や藤原などの心のふるさとを訪れて「人生のアルバムを、心地よい

思い出で満たし」ているようである。この息の長い、地味でしかも充実した雪山と藪山の記録に、敬意を表したい。

〔今井　雄二〕

キンヤンキッシュ　一九六五

東京大学カラコルム遠征隊編　一六センチ×二四センチ　本文二〇七ページ　写真六〇ページ　一九六八年五月　茗渓堂発行　定価三〇〇〇円

東大スキー山岳部は一九六三年、バルトロ・カンリの登頂に成功したが、六五年には二度目のカラコルム遠征隊を未登の峻峰キンヤンキッシュ（七八五二メートル）へ送った。不幸にして遭難事故が発生したため、七二〇〇メートルから退却した。本書は、この学術登山隊の公式報告書である。登山としては敗退の記録でありながら、これだけ尨大な報告書を作った努力には敬服する。たんに尨大なだけでなく、必要なことが要領よくまとめられているので、遠征を実行しようとする立場の人間にとっては、熟読にあたいする興味ある報告書である。横書きであるのは好ましい。

巻頭の六十ページは写真である。写真の数は七十葉で、うち四葉がカラーとなっている。

本文は四つの章に別れ、第一章「紀行」は主として登山隊の行動記録、第二章「調査」は学術報告、第三章「計画と反省」はこの計画を実践するための実務報告と各種リスト、第四章「日誌」は行動日誌と気象日誌になっている。最後に英文の梗概がある。

学術をも含めると多岐に亘る内容の報告であるから、すべての読者が同じような読み方をするとは限らない。

この遠征の核心を知ろうとする場合は、第一章と第三章をまず読めばよい。第三章の「一、隊出発までの経過」と「二、交渉」がこの遠征隊の導入部である。これによると、東大山の会ではカラコルム遠征の長期計画として、バツーラ主峰が長年の目標となって来たとある。しかし許可はキンヤンキッシュにおりた。

隊員十四名（隊長白木博次）、経費千四百五十万円。準備をおわり、五月十日、荷物と四隊員が横浜からカラチへ出航した。その六日あとに、突然パキスタン政府から許可取り消しの通知が来た。つづいて、取り消しは印パ国境紛争によるもので、現地へ行って交渉しても取り消しを撤回させることは、九九%だめだろうという情報が入った。にもかかわらず二人の隊員が現地へ飛び、苦労のすえ再許可の取りつけに成功する。しかし、半月という貴重な日時を、ベース到着前に失うという結果となり、そのために前途には多大の困難が待ち受けることになる。遠征に苦労はつきものだが、この隊程不運に見舞われつづけた隊もめずらしい。

カラコルムの特徴として、この隊もポーターやハイポーターに手を焼いている。

先発した偵察隊が西面、北稜、南稜を検分した結果、南稜をルートに選ぶ。北稜と南稜のいずれをルートに選ぶかには問題があった。北稜は技術的困難は少ないが、十キロ以上という長さである。南稜は北稜より短く約七キロ（これもかなり長い）だが、途中には難場が多い。

六月二七日、本隊がベースキャンプ入りして、前進キャンプ作りが始まる。七月二四、二五日頃が頂上攻撃の理想的期間と考えられていた。残る日数が一ヶ月弱では、困難な南稜を前にしては不安があった。

前半は好天にめぐまれ、雪庇尾根とかカニのハサミとか、その他にもいろいろの難所を克服して、七月二五日には、アイスケーキの上のC6予定地（六九〇〇メートル）に達した。二九日から十日間悪天候に見舞われ、全員がC4に閉じ込められる。八月七日以後、天気はやや回復し登行は再開される。しかし、快晴は少く雪や曇が続く。

遭難は八月一九日、七二〇〇メートルの地点で発生した。C8を出発し、三角山の稜線をラッセルしていた先頭の中村隊員が雪崩に巻き込まれた。そのあたりは、非常にやせた岩稜が多量の新雪でおおわれており、中村隊員の歩いていた場所は、実際の岩稜の上よりやや左にはずれていたことが、墜落後判明した。事故の起る直前に「ザイルを使用すべきかどうか、簡単に相談したが、その必要もなかろうと、再びラッセルにかかった」とある。この件についてはあとで「われわれの犯した致命的な誤りは、ザイルの使用を怠ったことである」と反省されている。

帰りの旅で、この隊は三度目の災難に会う。インド、パキスタンが戦争状態に入り、戒厳令がしかれてしまう。ギルギットからの脱出は人間のみで、隊荷は持ち出せないことになってしまう。カラチ空港の国際線は全部ストップしていたが、日航特別機を偶然につかまえて、やっと日本へ帰ることができた。残した隊荷を処理するために阿部隊員は、印パ停戦後の十月までカラチにとどまらなければならなかった。

筆者は、この登山隊の記録を映画でも見たことがある。南稜は技術的に困難なだけでなく、非常に危険なルートのようでもある。報告書の中でも「この尾根（南稜）のむずかしさと危険性を、いやという程思い知らされた現在、北稜か南稜かの問題は、もう一度検討されてもよい問題であろう」とあるが、それぞれの尾根に一長一短があり、容易に結論は下せないようだ。

遭難について、まず考えられなければならない技術的な問題は、アンザイレンに関する態度についてであろう。ベースキャンプより上部では、いついかなる場合も、アンザイレンすることを鉄則としなければならないということが、この隊では常識になっていたのであろうか。四千メートルを越す高所では、どんなやさしい場所でも、つねに危険があると考えるべきであろう。過失以外に、低酸素の影響による突然の意識障害なども発生し得る。最近の日本隊では、アンザイレンしていなかったために発生した遭難が、海外で頻発している。

日本人の場合、アンザイレンに対する考えがややあいまいな点は、強く反省しなければならないと筆者は考える。アンザイレンすべきかどうかを、議論する必要はないのではあるまいか。アンザイレンは、いついかなる場合でもすべきものと考えるべきであろう。国際的感覚からゆけば、これは登山技術の基礎にすぎない。議論すべきことは、スタカット・クライミングにすべきか、コンティニュアス・クライミングにすべきかの点のみであって、ザイルをつなぐべきかどうかの点ではないはずである。

調査報告は六項目あるが、高山医学と気象の二つが特に充実している。他の項目に関しては筆者の議論し得る分野でもない。学術調査は、どんなささいな調査でも貴重な意味があるに違いない。しかし医学や気象や地球科学のような大きなテーマは、小グループの研究からだんだん脱皮する必要があるように思う。こうした貴重な報告を登山界がどう消化するかという点も、実は大へん重要な問題だと思う。〔原　真〕

遥かなるヒマラヤ

薬師義美著　B6変形判　三〇一ページ　写真多数入　一九六九年五月　あかね書房発行　定価九五〇円

著者は地理学専攻で、卒論は「ネパールの人口と地域構造について」であった。ネパールに行く前から、この国の勉強をしていた。その前に富山山椒会という山岳会間の連絡体をつくった。将来の遠征母体というべきものであった。この本の目標の山、ティリツォ・ピークを見つけ、会からの遠征を計画したが、考えたほど容易ではなかった。結局、気心のあった三人で出発した。ヒマラヤ見参者として慎重な計画と準備であった。丁度ネパールのヒマラヤ登山禁止直前の、あわただしい世情であったが、広くヒマラヤを見ようと、粘りで半年のヒマラヤ偵察と体験をつんだ。一九六五年秋から六六年二月までの行である。

カリ・ガンダキを溯り、アンナプルナの北、ティリツォ・ピーク（七一四八メートル）を試登偵察した。このあとムクチナート巡礼、ニサンゴ峠越、マナンとアンナ山群を一周した。

第二ラウンドはソロ・クーンブのナムチェからクーンブ、イムジャ、ゴジュンバの三氷河に入り、この地域の山々を眺めたのは一二月。続いてイヌクー、ホングウ川を渡り、アルン河に出て、チャインプール（一月二日）、タプレジュンからタムー

ル河を見下ろす、カンチ・マカルー・スカイライン（ミルキァ尾根）を南下しダーランに出た。第三のトレッキングはランタン谷だったが、入谷が許されず雪のゴザインクンド行で一月も終った。

帰った年末には、泊山岳会中部ネパール踏査隊『一九六五―六六年中部ネパール踏査報告』を上梓した。本書同様生々しい好資料であった。それから二年、ティリツォへの郷愁にも似た執念は、情熱をつかみ調べ、より完璧な姿としての個人報告となった。

著者は調べうることは充分に調べ、外国の踏査者と文通したり、事態の認識をしっかりつかんでから筆をとる正統派だ。踏査に当っては、片っ端から事実を集め、現住民にもただす。例えば地名の発音（チベット、シェルパ、タマン、タカリー、ネワール語等々）を綴り、その変化由来に及ぶ。また稲や麦の穂粒を数え、高地と低地、日本との差を比較し、さらにこの国の複雑な人種、民族などについても見分け特徴をつかむ。ヤクの雑種、数詞の比較は一一語を採集した。ペダンチックともいえようが、足と眼と耳で集めたこれらのデータは、水平的思考として注目すべきであろう。これらは丹念なフィールド・ノートをとらねばならず、川喜田さんのKJ方法に負うものと思う。二年の間にハイメンドルフの『ネパールのシェルパ族』やスネルグローブの『ヒマラヤ巡礼』を、よく読みこなしているからだが、チベットへの思慕も強いからだ。

文章はよみやすく、てらいもかまえもない。シェルパの操従も融合も前半と後半では異るが、初見参者として素直に述べているのはよい。著者は地図を作ることも得意である。山座の同定も空んじている。だが登山の対象として山を偵察するとなると、地形の観察や描写について至らぬ点がある。もし紙幅が少いために省略されたのであるならば、おしいことである。これは未知の土地に至れば、当然行わなければならぬことであるからだ。写真の矢印のつけ方がよくない。これは編集者の努力不足であろうか。

著者ら三人は、目下ダウラギリ山群のグルジャ・ヒマール（七一九五メートル）の初登頂に成功したという。一九六九年三月の登山解禁直後に、ティリツォ・ピークに遠征を申請したが、許可が得られず変更したものである。おそらく帰りにはブッキングは忘れないであろうし、今回の遠征でさらに深くネパールを理解するであろうし、捲土重来して湖上の頂上に立ってほしいと希わずにはいられない。（一九六九・一一・一五）

〔田中　栄蔵〕

ヒマラヤ登攀史　第二版

深田久弥著　新書版　二一五ページ　地図一　写真多数入
一九六九年一月　岩波書店発行　岩波新書七〇四　定価一五〇円

マナスルの登頂された次の年、昭和三十二年七月に本書の第一版は出版されている。それ以後、実に沢山のヒマラヤ登山がおこなわれてきた。正確で幅広いヒマラヤの知識と情報網を持つ著者としては、一日も早く改訂版を出したい気持であったろう。八千メートル十四座が、一九六四年のゴザインタン登頂を最後に総て登頂され、一九六五年にはネパール・ヒマラヤの登山禁止が発表されて、ヒマラヤ登山は一応の幕となった。しかし、一九六九年にネパール・ヒマラヤ登山は新しい規則のもとに解禁された。この時期に本書が改訂されて出版されたことは、まことにタイムリーであったといえよう。

初版と比較すると、序章と終章はほとんど書き改めてあり、第一章以下も小見出しを廃止したり、組み改めたりで、初版のときと同じ、あるいはそれ以上の苦労があったことと想像される。レイアウトなども変えてあるので、一読してみると別の本という感じであり、お蔭で私たちは二冊のヒマラヤ登攀史を読めることになったようなものである。初版のときの挿画はなくなったが、そのかわりに八千メートル峰の写真が入った。それらの写真が総て日本人の撮ったものであるのは、嬉しいことである。

序章は「ヒマラヤへの遥かな道」として、世界の屋根ヒマラヤの八千メートル峰が登頂されるまでの略史が、要領よく紹介されている。I章からXV章までは、各八千メートル峰についての登頂にいたるまでの登山史と、登頂の模様がエピソードなども含めて、読者に興味をおこさせるように、かなり気を配って書き込まれている。

エベレストが登頂されるまで、人間としての最高到達点であった八五七二メートルに達した一九二四年のエベレスト隊々員ノートンの、第六キャンプでもぐーぐー眠ったというような話。ナンガ・パルバット隊のアウフシュナイターとハーラーの二人が、チベットへ脱走した一九三八年のできごと。一九五四年、パサン・ダワ・ラマがわずか三日で四千メートルの高距を登って、チョー・オユーに登頂した前後のこと、などなど多くのエピソードが、ほんの二三行の場合もあるのだが、実に全体を生き生きしたものにしている。

最後の章には「日本人のヒマラヤ登山」として、つい最近までの成果が書かれている。世界の岳界に誇ることのできる、日本人のヒマラヤでの活躍を加えることができたのは、ヒマラヤを多くの人々に紹介し、ヒマラヤへの道を自らもたどってみせ、後に続く者を勇気づけた著者としては、最大の喜びであっ

ただろう。しかし、輝かしい数多くの登山記録に比較して、日本でのヒマラヤ登山のより深い研究は、いろんな意味でおくれており、それはヒマラヤ登山が日本人社会にニュースバリューのあるものとして受けられているし、登山者の方にもそれを期待する動きがあるからであろうが、これを著者はどのように考えておられるだろうか。

私の山仲間の十人ほどで、本書をテキストに使ってヒマラヤゼミナールを開いたことがあるが、初心者はそれなりに、また、ある程度ヒマラヤを研究した者は、この本のバックグラウンドを想い出し、語ることでさらに多くの楽しみを得たようであった。一番得ることが多かったのは、仲間よりは少しはヒマラヤを知っているつもりの私であった。ゼミナールを進めていくと、いつも横道にそれてしまったが、しかし、そうさせるプラス・アルファを本書は持っている。

本書からヒマラヤの劇的な登頂の感激や、物語としての面白さを直接受けとることは、扱う対象の割にページ数が少ないので無理であろうが、汲み出せばいくらでも水の湧き出てくる無限の泉のように思えた。エベレスト初登頂を読んで、昭和四十五年のわが日本山岳会のエベレスト南壁登攀を思い、マカルーの全員登頂の幸運を知って、日本山岳会東海支部のマカルー東南稜からの登頂の意義を考えてみたりしていると、時のたつのを忘れる。「歴史とは過去と現在の対話である」ことをつくづくと感じた。

このように、登攀史ではあるが一般の歴史の本のような固苦しさはほとんどなく、語りかけてくるような手法と文章は、著者の登山について書かれている他の沢山の本と共通した、独特の枯れた味があり、年期というようなものを感じさせる。それだけに登山者でなくとも充分に面白く読める本である。本書と並んで岩波新書に入っている『わたしの山旅』、『パタゴニア探検記』もきっと多くの読者を得るであろうが、これらの本を通じて一般の人たちが、ヒマラヤ登山や探検をより深く理解してくれることが期待できる。

ページ数の関係で、文献目録があげてないのが少々残念である。最後の章に二三あげてはあるが、もう少し多く欲しかった。もちろん、本書は専門的なものではないので、そう多くをあげる必要はないが、本書をヒマラヤ入門の本とするならば、この次に何を読むべきかという、読者の要求に答える第二ステップのための本を、あげてあればと思った。沢山のヒマラヤの本の中から、数冊ないし数十冊を選び出すのは至難なことであろうが、それだけにその難事業は、著者であって始めて可能なことであろう。

ともかくヒマラヤに関心を持ち始めた人に、まっ先にすすめている本である。

〔沖　允人〕

パタゴニア探検記

高木正孝著　新書版　二二八ページ　地図二　写真多数入
一九六八年六月　岩波書店発行　岩波新書六八二　定価一五〇円

本書の著者、高木正孝氏はこの原稿を書きあげた後、一九六二年八月六日に神戸大学南太平洋諸島学術調査隊の一員として調査中、南太平洋の船上で突然行方不明になった。本書は氏の遺稿である。

全体は一〇章に分れ、パタゴニアの地理と歴史に始まって探検隊成立のいきさつ、チリへの出発、北部氷陸地帯への旅、未登峰アレナーレスの登頂、そしてチリとの別れが一つの流れになって語られている。しかし文章の構成は複雑である。なにげないようで、実によく練られている。はじめのほうに出てくるスタンゲ夫人とカラファテのことを、最後に持ち出してうまく話をまとめていることなどは、その例である。このような文章の構成はユニークである。しかし、そのために一気に読み流すというわけにはゆかないという面もある。

著者は心理学者であった。東大文学部哲学科を卒業してドイツに渡り、ベルリン大学理学部心理学科を卒業した。本書には、著者の学問からのものの見方が随所に出て来て、なかなかおもしろい。本書はこれ一冊で完結した話になっているが、著者は、ヨーロッパ、マナスル、パタゴニア、南太平洋という著者のたどった道を、大きく一つにまとめる構想を持っていたのではないかと思われる。あとがきに、著者の原稿には「外国人心理と日本人心理」という副題がつけられていた、とあるが、このような趣旨にそって加筆するための布石と思われる箇所が、文中随所に見うけられる。こう考えると著者の突然の失踪は、本当に残念である。

本書で著者は日本人と南米人を対比して描いている。第四章で、著者がラテン系の国民心理についてまとめている八つのことがらなどは興味深いものである。本書は、日本人とチリ人という二つの異質の人々が一つの目標をかかげ、その共通の目標を達成するために、どのようなチーム作りの努力をしていったか、という一つの組織の成長の記録であるとも言える。

この書には、以上のような面のほかに、もう一つの面がある。第一章から第四章までの堅い、決して読みやすいとは言えない文章は、話がチリに入ってからのことになると、おもしろくなって来る。心理学者の眼から日本人と南米人を眺めようとした当初の意図は、話の進展とともにだんだん変化し、最後に「帰るのはいやだ！　もっとここにいたいんだよう！」と、すっかりパタゴニアに感激してしまっている。本書はまた、パタゴニアの自然と人に魅了された人間の語る美しい物語である。お伽話を聞いているようなマゼラン一行の挿話、日本出発まで

の煩わしい仕事の思い出、アレナーレス登頂の苦労、これらはチリで過す最後の夜に、著者の心を占めた悲しい気持にすべて集約される。心理学者が、わかれの悲しさは自然の美しさのせいだ、と言うだろうか。著者は心理学者であると同時に登山者であった。渡辺兵力氏との共著『垂直と水平の道』の中でも、著者はこの遠征のいくつかの思い出を語っているが、こちらのほうでは心理学者としての著者は影をひそめていて、一個の人間としてのパタゴニアの印象があざやかに語られている。

金がすべての価値に先行する資本主義の世の中を憎む著者の、これは人間の本性への回帰の書である。

自然に触れ、人間に触れることの少ない現代人にとって、本書はよいリフレッシュメントである。そしてこれを読んだ若い人たちは、自然の、そして人間の何であるかを見せてくれる、すばらしい本であると思うだろう。〔浅見　正夫〕

"George Mallory"

by David A. Robertson,
Faber and Faber, London,
1969.

マロリーと言えばわれわれは直ぐ、一九二四年にアービンと共にエベレストの山稜上から永遠に消えてしまった、あの、写真でみると、貴公子然とした面長の、そして理知的な顔と姿をしている人を思い出す。

事実この本は、そのマロリーについて書かれた、詳細なそして完全に近いと思われる伝記なのである。

マロリーのことが書かれている書物に対し、最も都合のよい、最も適当な立場にある人は、今では恐らく、日本にも最近再訪されてきた Thomas H. Somervell であろう。

その彼が最近の〝アルパイン・ジャーナル〟の図書紹介の一番先に出ている、その文の最後に、

〝マロリーの古い友達で登山仲間であった私なら、これは是非一本を求めたいものだと言いながら、この紹介文を結んでもよいのではないでしょうか。それ以上言う必要はありません。〟

と言っているのである。なお彼は "Journal of the Fell and Rock Climbing Club", 6 (1924) に "George Leigh Mallory" という短い記事を書いている。

私も彼がそういうなら、それ以上つけ加える必要はないと思うのだが、それではどこがよくてそうなるのか、さっぱりわからないので、私としては少し蛇足を加える義務があるのである。

マロリーの伝記で単行本となっているのは Sir David Pye の "George Leigh Mallory", 1927 と、最近出た Showell Styles の "Mallory of Everest", Hamish Hamilton, London, 1967. 21s の二つだと思うが、後者は W.H. Murray の

焼き直しだという批評もあり、その上、ショウェル・スタイルスの本の多くは寄せ集めの上に、場当りものが多いようなので、テンではじめから読む気がしない。

それに反して前者はマロリーをよく知っている人が書いているので、良心的なものであろうと思うが、もう私の手には入りそうもない稀覯本になっている。それにこれは今度の本に較べると、可なり表面的なことしか書かれていないのではないかと想像される。しかし、それは現在の本でも度々、その文章が引用されているところを見ると一読の価値は充分あるものと思う。

それでは今度の本の特長は何かと言うと、今まで門外不出であったマロリーの私信、妻に当てたもの、G・W・ヤングその他の親友や、心を知り合った先輩に出したもの、又その逆方向のもの、そうした凡ゆる手紙がフンダンに使われている点にあろう。

結婚前に Ruth Turner に当てたラブ・レターの如きは、マロリーの知られない一面がすっかり浮き彫りになっていて面白いし、妻君には思った通りのことを率直に書いているとみえ、一九二一年の最初のエベレスト行に隊長になった、ハワード・ベリーのことを〝むしずの走る男〟とか何とか、公式の報告書（一九二一、二二、二四）には絶対に出ていない、いわゆるエベレストの裏ばなし的なことが沢山そのまま紹介されていて、読む者にとっては興味津々たるものがある。

さて今度は著者というよりは、寧ろ編者と言った方がいいと思われる David A. Robertson のことだが、この人がどうしてあんなにマロリーの私信を、フンダンに引用することが出来たかと言うと、実は彼の妻が、マロリーの次女 Beridge Ruth Leigh-Mallory であったからなのである。〝あった〟というのは、その妻（生れは一九一七年）が既に一九五三年に死んでいるからであって、現在の妻君は Victoria Bryer という。

ロバートソンはアメリカのニュー・ジャージーにあるプリンストン大学を卒業してから、特別研究員の資格でケンブリッジ大学の Trinity College へ来た。私の想像では、この時にマロリー家の人達と知り合いになったのではないかと思う。

彼は別に山とは関係がないのかと思っていたら、アメリカ山岳会の編集補佐を何年もの間やっていたと書いてあるので、自分の持っているバックナンバーを調べてみたら、少なくとも一九五五年までは、それをやっていたように思われる。

現在のニュー・ヨークにある Baruard College で、英語の何とか教授（McIntosh Professor）をしているという。

興味のある内容の紹介は後文でするとして、まず、マロリーの姓名と生年と生地について述べておくことにしよう。

生れはイングランドの北西部にある Cheshire（Chester ともいう）の Mobberley というところ。オギャーといったのは一八八六年六月一八日であるから、エベレストで行方不明（一九二四年）になった時は三八歳ということになる。

お父さんは教区の牧師をしていた Rev. Herbert Leigh Mallory という。洗礼式の時に クリスチャン・ネームとして George Herbert Leigh というのをもらった。

その後一九一四年にお父さんが国の許可を得て苗字をLeigh-Mallory とした。だから索引などで彼の名前を並べる時には、〝L〟のところへおくのが本当だと思うのである。この本では一般的に知られている方をとって〝M〟のところに分類してある。しかし良心的（？）に、Lのところにも出ているのは言うまでもない。

この本では索引が又念入りに且うまく出来ていて〝人間と集団〟と〝地名〟の二つに分れており、例えば人間の方でマロリーのところをみると、約一四〇行あって、自分の必要なところが簡単に出せるようになっている。実に行届いていると思う。

さて前文までは余り内容に立入ってないので、今度は典型的な私信などに触れて、その面白い所以を明らかにしておこう。その前にまず目次をあげよう。

一、モバリーとウィンチェスター（一八八六―一九〇五）
二、主としてケンブリッジ時代（一九〇五―一九〇九）
三、山とチャーター・ハウス（一九〇九―一九一一）
四、ゴダルミング（一九一一―一九一四）
五、大戦（一九一四―一九一八）
六、ポスト・ベラム（戦後、一九一九―一九二〇）
七、エベレスト（一九二一）
八、エベレスト（一九二二）
九、アメリカとケンブリッジ（一九二三）
一〇、エベレスト（一九二四）

中味は以上の通りだが、これに前書きと後書きと、人間、団体、地名に分けた索引と、使かった資料がこと細かに書き記されており、この部分だけでも大いに参考になる。

伝記だから、生れてから死ぬまでのことが書かれてあるのは当然だが、私としては、マロリーが死んでからあと、残された奥さんや三人の子供達が、どう生きぬいて行ったのかを少しは知りたかったのであるが、そのことには何も触れられていない。大家のお坊っちゃんでなかったマロリーのあとの生活は、相当茨の道ではなかったかと想像する。

マロリーを山へ引っ張り込んだのは、昨年（一九六八年）遂にこの世を去ったR・L・G・アービングで、この二人は一九〇二年に英国山岳会（AC）に入会したが、当時ACの頑固親父どもの嫌いだった、ガイドレス登山が好きであったのは皮肉なことである。

一九〇四年の冬にウィンチェスターで〝Ice Club〟というのが出来たが、その会長がアービング、会員にはあとで皆有名になっている Mallory, Gibson, Tyndale, Bullock などがいた。そして面白いことに、彼らはお互いを呼ぶのに、アルプスの一流ガイドの名をつかっていた。マロリーはアルマー（クリスチャン・アルマー）と呼ばれていた。手近かに山がなかったので、牧師館の屋根などに窓伝いに登ることを発明したのも、この頃らしい。

マロリーが未来の妻、ルースに会ったのは一九一四年の四月三日、ベニスにおいてであった。彼は彼女にすっかり参ってしまった。〝pretty〟なんていうケチ臭い言葉ではとても表現出

来ない。Botticellian（ボティチェリの画いたビーナスといったような意味か）とでも言えば、どうにか言い現わせようといった次第。一四五頁にあるルース・マロリーの写真をじっと見ていると、それも強ち、惚れた者の弱味とは思えなくなる。

その翌月に結婚した。G・W・ヤングが仲人となった結婚式（七月二九日）までの、両者の間で交わした結構な手紙がいくつか紹介されている。遠いところへ行く新婚旅行は大戦でオジャン、それでも北デボンまで行ってキャンプしたが、戦争で頭の狂っていた人達から、ドイツのスパイだと疑われてしまったという。

マロリーが第一回のエベレストに参加したのは、余り自発的なものではなかったらしい。そう言えば三回ともそうした気分が漂っており、特に最後の行では、今度はもう戻って来ないかも知れないと、洩らしていたようである。第一回の時に決心しかねていたマロリーに、そしてその妻のルースに、G・W・ヤングはこう言っている。

〃エベレストはのがしてはならない機会だ。それは、とてつもない冒険になるかも知れない、しかし、それによって知られるようになれば、教育家とか文筆家としての将来に役立つかも知れない〃と。

これでルースもジョージも承知したようだ。英国地理学協会（R・G・S）とA・Cが共同でつくったエベレスト委員会の初代委員長、ヤングハズバンドは〃マロリーは登山隊参加への公式招待に対し、別に嬉しそうな顔もしてみせずに承諾した〃と述べている。

いろいろの私信を読んでいると、どうもマロリーは、エベレストで行方不明になるように、はじめから運命づけられていたような気がしてならない。

マロリーがルースへあてた手紙の中に、エベレストへの途中で死んだケラスの印象が書いてある。これも面白い。

〃私はケラスが好きになってしまった。スコッチ丸出し、言葉といわず総てがそうです。ある大宴会があった時、彼は六キロ離れたグロムというところから歩いて来たのだが、全員が席についてしまった一〇分後に、ボーボーの髪のままで入って来た。錬金術師の茶番劇には、もって来いの姿でした。背は低く猫背で、異様な眼鏡と尖がった鬚。だが彼は全く献身的な、私心のない人です〃

とある。これに反し隊長のハワード・ベリーについては（一番クシャクシャしていた時ではあるらしいが）、〃正直にいうとベリーがいないとホッとします。一緒にいる時は表面愉し気に話していますが、とても好きにはなれず、窮屈で仕方がありません。向うでもそう思っているでしょうが。〃

二一五頁には一寸おだやかでないことが出ている。即ち、

〃マロリーが、書いたことも口に出したこともないことが、アメリカでの講演の一つのあとで、繰返したずねられた質問に対する、彼の与えた簡単な答えとして、広く引き合いに出されている。

――あなたは、どうしてエベレストに登りたいのですか――

――そこにあるからです――

この言葉は説教の時に説明されたり、広告文に使われたり、数知れない記事や随筆に引用され（いつもという訳ではないが、普通は登山の話の時に）、後にはエベレスターの一人が、南極横断のことを書いた本にまでもこれを使っている。〃――その他略す。

マロリーを一番よく知っている人々は、この "Because it is there" という言葉を、そうまともには扱っていない。――これは何回目かの同じ質問に対して（ただ、もしずっと長い言葉なら、もっと解説的に答えられたであろうのに）、疲れ切った、而も生れつきは辛抱強くない人によって吐かれた言葉と考えている。因みに彼の講演の原稿の一つには、次のように書いてある。

〃いや、もし機会が与えられるなら、エベレストへ行くと思います。というのは一言で言えば、そうせざるを得ないのです。あるいはもう少し違った言葉で言えば "Because we are mountaineers" となるのです。……そこで登山家は機会があれば山に登ります。それは山が登山家に心要な冒険を提供するからです〃

と書いている。

ロバートソンの考えによれば、マロリーが一九二四年にエベレストへ（死にに）行くべく決心したのは、義務観念からである、となる。前後の事情や彼の言動からするならば、どうもそういう結論になるようである。

一九二四年に登山への出発が近ずいてきた時に、彼は Geoffrey Keynes にこう言った。

〃今度のは登山にではなく、まるで戦争に征くような気持ちがします。まずは戻っては来ないでしょう〃と。

こういうことを紹介していたら切りがないので、この辺でやめておくが、兎に角、マロリーとエベレストとの関係を本当によく知るためには、この本はどうしても読まなければならないものの最高のものであろう。但し、ミスプリントは二ヵ所あったと思う。

〔吉沢　一郎〕

"Mountaineering"

—From Hillwalking to Alpine Climbing—

by Alan Blackshaw
Approved by the British Mountaineering Council and the Association of Scottish Climbing Clubs.
Kaye & Ward, London, 1968.

近頃英国は経済的には余りパッとしないらしいが、山の本は日本に遜色のない程、沢山出ているらしい。最近私のところに来た本には、次のようなものがある。

"The Book of Modern Mountaineering",
edited by Malcolm Milne,
Arthur Barker, London,1968, 63 s
"Encyclopaedic Dictionary of Mountaineering",
by Peter Crew,
Constable and Co., London, 1968, 31 s
"The Alps and Alpinism",
editor: Karl Lukan,
Thames and Hudson, London, 1968, 90 s
"English Place-names and their Origin",
by G.J. Copley,
David & Charles, Newton Abbot, 1968, 30 s
"The Younghusband Expedition",—An Interpretation,
by Parshotam Mehra,
Asia Publishing House, London, 1968, 60 s
"Himalayan Village",—An Account of the Lepchas of Sikkim, Second Edition,
by Geoffrey Gorer,
Thomas Nelson and Sons, London, 1967, 70 s
First Edition, 1938.
"Portrait of Snowdonia",
by Cledwyn Hughes,
Robert Hale, London, 1967, 25 s
"The North-West Frontier of West Pakistan",
—A Study in Regional Geography,
by David Dichter,
Clarendon Press, Oxford,1967, 63 s
"Asian Frontiers"—Studies in a Continuing Problem,
by Alastair Lamb,
Pall Mall Press, London, 1968, $5,00
"FitzRoy of the Beagle"
by H.E.L. Mellersh,
Rupert Hart-Davis, London, 1968, 63 s
"No Tigers in the Hindu Kush",
by Philip Tranter,
edited by Nigel Tranter,
Hodder and Stoughton, London, 1968, 35 s
"Cable from Kabul",
by Nigel Tranter,
Hodder and Stoughton, London, 1968, 21 s

いずれも今，日本で出ている本の定価の平均よりは高い。よく買う人がいるものだと感心するが，英国でも登山人口は日本同様激増しているというから，別に不思議なことではないのかも知れない。

さて，首題の〝登山〟であるが，これを著したアラン・ブラックショーは，一九三三年に北西イングランドのリバプールで生れた。山歩きは一五歳の時からはじめ，英国や大陸の岩場も

多く攀じ、一九五八年にはハントについてコーカサス、一九六〇年には北東グリーンランドと幅広い登山を行って来た。一九六二年結婚。可愛らしいジェーンさんとの間にセア嬢がいる。職業は電力省の大臣秘書。英国山岳会の年報の名誉編集長という面倒な仕事を引受けている。私は一九六八年の国際山岳連盟のロンドン総会以来、彼からその友人の一人としての待遇をうけている。英国山岳会へ入会出来たのも、彼のお蔭だと思っている。

そこで本のことに移るが、この〝登山〟は最初一九六五年にPenguin Books Ltd. から一八S六Dで出されたのであるが、その後大きな改訂を施して再版を出したという訳である。本人の語るところによると、前の本は二万以上売れたということである。今度の新らしいのにも普及版があるらしい。

序文は例のハントが書いている。アランはハントの愛弟子のようだ。ハントの正式な名前は近頃、The Right Honourable Lord Hunt of Llanvair Waterdine となってしまって、これが昔の Sir John Hunt であるとは思えないが、簡単に言えばハント閣下なのである。

この本の内容は大きく分けて四部からなっている。

(一) 英国での山歩き
(二) 英国での岩登り
(三) アルプス登山
(四) 付録

(一)、彼は山登りもまた、step by step のスポーツであるという信念から、各章をそれぞれの段階に分けて説明している。夏秋の山歩き、冬春の山歩き（雪と氷）、山歩きの装備品、英国の山中施設、キャンピング百科、等が第一部の内容。

(二)、は英国の岩登り、技術、ロープ、人工登攀、雪氷登攀用具、同技術、登山事故、山歩きと登攀地の紹介。

(三)、はアルプスへの手引き、アルプス登山用具、状況と天候、登山技術、クレバス救助、登山地案内。

(四)、は付録だが、これはわれわれのような登山記録に興味をもっている者には、非常に参考になるものである。

(A)の地名解説（ゲーリック、ノルウェー、ウェールズ）は特によい。発音の方法も書いてある。ヒンズー・クシュに Acher Cioch という山があるが、これの命名者は知らない。しかしキオホはどうやらゲーリックの〝乳首、乳房〟の意味ではないかと思われてきた。又、英本国の最高峰、Ben Nevis(1,344 m)は、今まで〝雪の山〟とばかり考えていたが、nevis はアイリッシュの neim=venom 即ち venomous one（害毒のある、意地悪な）から来ていることがわかった。ウェルシュでは Ben が Ban になる。Pen は〝頭、頂上〟である。

(B)は山に関係のある国家的施設、登山訓練所ないし学校、この中に、私も見学してきた Capel Curig にある Snowdonia National Recreation Center（別名 Pras-y-Brenin,〝王の家又は城〟というウェールズ語）も出ている。

(C)は英国の山岳会の紹介である。スコットランドとイングランドはどうも一緒になれないと見えて、英国には日本山岳協

会みたないのが二つある。一つはBMC (British Mountaineering Council, 英国登山評議会)、これにはAC (The Alpine Club 英国山岳会) をはじめとして一二五の山岳会が加入。

二はASCC (Association of Scottish Climbing Club, スコットランド山岳協会) で、加盟団体は二七。両方とも大学山岳部は直接に入っている。いずれにも加入していないのが五〇団体ある。日本にも立派な組織の総合団体があるが、内容はまだまだ研究の余地が沢山あるようだ。因みに一九六八年の国際山岳連盟総会のホストはBMCであった。——今、カソリックとプロテスタントとの間に、何やらいざこざが起っている英領アイルランドにも、山岳会が七団体ある。

(D)は大陸の山岳団体の紹介で一〇ヵ国が出ている。全体を通じて皆、住所が書いてあるので便利である。

(E)には地図と磁石の使用法が説明されている。私はここで〝北〟に三つあることを知った。〝真の北〟〝磁石の北〟それに〝格子網の北〟(Grid North) である。日本の地図ではどうなっているか知らないが、この本では、丁度去年の秋、私が現地で買ってきた陸地測量部(O・S)のSnowdonia図で説明している地図の縦線は、グリッド・ノースを示しているから、五三度Nのあたりでは、磁石の北より右へ六・五度のところへ地図を合せなければいけないことになるらしい。

(F)は登山家のためのロープの結び方。

最後が参考文献であるが、この中には写真や地質、映画のものまで含まれている。そして総索引をもって、この本の締めくくりとしているのである。

この本は対象が主として英国の若い人達となっているが、われわれが読んでも、なるほどと思わせるところが多い。機会があったら是非読んで頂きたいと思う。 〔吉沢 一郎〕

"The Hard Years"

—An Authobiography by Joe Brown—

Victor Gollancz Ltd., London, 1967, 42s

この本の内容を理解するには、まずジョー (Joseph)・ブラウンのことを知るのがよいと思う。

一九六八年一〇月七日、私は国際山岳連盟の総会に出席した各国の代表者と一緒に、例のジョン・ハントその他の接待役(主に英国山岳会の人たち)の案内で、ロンドンのユーストン駅から急行列車のリザーブド・コーチに乗り、ラグビーなどという知っている名の駅などを通ってクリューの駅におり、貸切バスに乗り換えて、いよいよ待望のスノードニアの中心に向った。

汽車が二時間、バスが三時間で着いたところがカペル・クーリグにある、プラシ・ブレニンの登山学校であった。

翌日私がジョー・ブラウンにグリーンウッドから紹介されたのは、この学校の食堂でであった。これがムズターグ・クワーやコンミュニズム峰、さてはカンチェンジュンガの頭に真先に立った男とは、とても思えないような、声の小さい、背の低い、一寸猫背で遠慮勝ちな人物であったが、私が写真を撮ったり、手帳を出したりすると、別にうるさがりもせず、言うなりになってくれていた。

彼の方では小さな東洋人が一人いたぐらいしか、覚えていないかも知れないが、私が彼から受けた印象は感動深いものであった。

トム・パテーはこの『ハード・イヤズ』の最後のところに、次のような詩を載せているが、私には詩才もないので散文みたいなものにして紹介しておこう。

〃雪に消えた勇ましい登攀家の物語りは沢山にある。だが、これはジョーという名の丁稚小僧が、名を得るまでに到る過程の韻詩である。

彼はあの古趣のある、昔ながらのマンチェスターに住んでいた。彼の名は伝説になった。——そうだ、ジョー・ブラウンの物語りとなったのである。

ジョーは氷と岩で一番苦労した人間である。信じられない偶話となったジョー。それは素晴しい男である。

岩に手を触れたのは一九四九年が初めてであった（注・生れは一九三〇年）。

動きは遅いが度胸があったし、それに初心と幸運と母親の物干し紐があった。

未開の技能で砂岩の古典ルートを攀じた。彼の名は間もなく、グリッドやダンジョン・ギルまで伝わっていた。

不運なリーダー達のよく落ちる、ディナス・クロムレフの後ろに、コーナー岩が立っていた。

ジョーはひどく小さかったが、胆は大きく、神経は鋼鉄のようだった。この記念すべき石造の砦、やるべきだった。そしてジョーもそう思った。

彼は海を渡ってシャモニへ行った。ドリューの西壁では記録を三日も引離した。ブレティエールの未登の壁に〃ブラウンの割れ目〃というのが残された。

エバンズが遠いネパールへの参加者を募集した時、その声に応じて馳せ参じたのが、ジョー・ブラウンであった。

巨大なカンチの上に、祖国の旗が翻った。岩壁が八キロもある、寒い寒いカラコルムで、フランスの最右翼、マニョーヌらが、コソコソと通り過ぎた時、ムズターグ・タワーの頂きに先に立ったのは、ジョーの名で知られている。

ロシア戦線ではハントと共に、東西に橋を渡して平和の道を歩いた。頂上での話を導いた男、それがタワリシチ・ジョーとして知られた男であった。

彼は壁の上を飛んで行く鷲のように幸福であった。縄梯子は何百メートルという空間で揺れていた。

オーバーハングの上の小さな手掛りで、ニヤニヤ笑っているジョー。誰からも、決して落ちない男として知られていた。

壁にへばりつく人間蜘蛛であるかのように、吸い込み、自信、そして摩擦―その他には何もない。

しかし彼の成功の秘密は、オーバーハングの裂け目にある小穴にぶらさがる、あの驚嘆すべき技巧にあった。

ブラウンは並通りにおりていたよと彼らは言った。彼はデニス・グレーや私のような、ボンクラどもとも攀っていた。

登攀を続けるために、そして先頭のためによく調子を合せていた。そして、あの悲しい道化師、ブラウン王は、今や凡人になり果てた。

岩と氷クラブの萎んだ花のために、彼らはそれを昔歌った、それで充分ではないか。

彼は今何をしているのか。カヌーに乗っている。懐しの昔の友よ、あの割れ目登りのジョーよ。

マーティン・ボイスンもそう言った、若いバス・イングルもそう言った。豪語するアラン・オースティン、そして〝雑色服〟のピーター・クリューもそうだった。

外の暗闇から、雷のような声が聞えた時、ブラウン壁王は困惑した渋面をしながら、仮睡から覚めた。〟

彼の登山観、と言えば大袈裟だが、登攀乃至登山に対してどういう考えをもっているかを、一寸紹介してみよう。

〝われわれが何故山に登るのか〟という問いに対する〝そこに山があるから〟というマロリーの答え（注・別記『マロリー伝』参照、彼はこんなことを言ったことがないらしい）は、この登るということの複雑な理由の説明には不充分である。

総てではないとしても多くの人々には、はけ口の必要な冒険心というものがある。よく知られているスポーツの多く、つまり自動車競争、帆走競争などには沢山のお金がいるが、山登りには少なくとも最初は、一足の運動靴と古服がいくらかあれば充分なのである。

登山のよい面の一つは、小さな練習崖でブラブラ登りをやるようなことから、ヒマラヤのような大きな山に苦労して登るといったような、いろいろな段階や型でそれらが楽しめるといったことにある。

……

〝恐怖〟は登山家なら誰でもが、いつかは味わう感じである。それがなければ、慎重などというものの必要はない。

しかし私は恐怖を感じた時には、その登攀を楽しむことができない。とは言え、緊張らしいものが一つもなかった登攀よりも、恐ろしいような場面のあった登攀の方を、一層はっきりと覚えていることも確かである。

……

一般に登山というものには、大変な頑丈さと神経がいるという考えは間違っている。もしそれが本当なら、一番がっちりした人が、最上の登攀家になるはずであるからである。しかし、そうはいかない。

力や強さというものは、登攀家にとっての財産ではあるが、技術的な問題をうまく処理できる精神的な能力、肉体的

な柔軟性と機敏さ、それに適正量の自信というものの複合が一番重要なことだ。

これらの資質の最初の二つは、普通なら誰でも持っていて多くの岩壁の下で発見される、小さな丸石問題で実演されているが、以上の三つがすべて具わっているということは滅多にない。

以上の抜き書によっても、ハンド・ジャム（Hand-Jam, 手挟み）のジョーとして名の通っている彼の、繊細な身体から出てくる闘志と最高の美技が、われわれの眼の前に躍如として現われてくるのが、感じられることと思う。

そこで今度は、彼のキャリアを年代順に追ってみよう。

彼は英国はマンチェスター郊外にある、鉄道陸橋の近くに住んでいた一家の末子（第七子）として一九三〇年に生れた。当時にあっても、マンチェスターとシェフィールドには、登山活動の中心地が二つあって、The Peak (636 m) 地方の砂岩や石灰岩の岩山に、沢山の登山家が集まっていた。家は貧しかったが、品位は保たれていた。母が潔癖な人だったからである。父はジョーが生後八ヵ月の時に死んだ。一生建築大工だったが、水夫になった時もあった。その船上での負傷がもとで足に壊疽ができ、それが原因で死んだという。

当時の働らき手は長兄だけだったので、母は近所の洗濯ものを請負って、家計のつじつまを合せていた。皆が少しずつ大きくなって働らけるようになると、その稼ぎを全部母に渡し、母から改めて小使いを貰っていた。

以下年代順に彼の足跡を追おう。

一九四二年、一二歳の時からハイキングに行くことが好きになった。一番の問題は、その度に母の許しを得ることと、仲間を探すことであった。――（小さい時には絶望的な劣等感をもっていたので、名が知られてきて皆からチヤホヤされると、ひどく面喰ってしまったという。）

一九四四年、小学校を出た時には四フィート一インチ、軍隊から出てきた時でさえ、五フィート四インチしかなかった。何でも屋のアーチという鉛管職のところへ年期奉公に入った。このおじさん、なかなかいいところがあって、彼の山登りに別に文句も言わず、高い靴なども買ってやっている。後にジョーから助けられるようになる。

一九四六―四七年、最初の岩登りは Kinder Downfall という滝場でやった。ロープはビール醸造家の使う重いものであった。Colin F. Kirkus（注・英国の岩登りの先駆者の一人）の "Let's Go Climbing" を読む。この時は母が、窓の吊り紐から物干し紐にしたのをロープにして使った。湖水地方に進出したが、まだ岩登りや登山についての一般知識は何も持っていなかった。

一九四七年、クリスマスに初めてウェールズへ行く。この頃は Thomas Merrik Sorell（通称 Slim, 一九歳の水管工）が親分であった。

一九四八年、イースターに遥々とスコットランドのベン・ネ

ビスへ行った。冬季にはアルプスと同条件になる悪名高い山である。最初に登ったのが No. 3 というガリー。Portfolio という岩場で最初の墜落を経験する。

真夏の頃、マンチェスターの仲間を中心とした Valkyrie Club というのをつくった。シェフィールドの近くには Brown's Eliminate とか Brown Corner といったような場所がいくつかある。Fred Ashton とのウェールズにおける登攀には特記すべきものがある。場所は主として Snowdon とか Llanberis Pass 付近。四八年から五一年にかけては湖水地方にある Arthur Dolphin（一九五三年、アルプスで死ぬ）のルートを殆んど登った。

一九五一年、Valkyrie が解散され、"Rock and Ice" が創設された。Don Whillans（一九三四年生まれ）が参加、Joe Smith も仲間にいたが、三〇人を越すことはなかった。

一九五二―五三年、主としてウェールズで活躍、麻ロープはナイロンに変ってきたが、ピトンはまだ少なく高価でもあった。人工登攀を始める。そして五三年にはじめてシャモニに現われる。

一九五四年、ドリューの西壁で時間的記録をつくり、Fissure Brown という名が残る。

一九五五年、カンチェンジュンガ。エバンズからとうとう呼び出しがかかる。費用は全部遠行隊持ち、小使いとしては二〇ポンドもあればよいという。だが彼にはそんな金の持ち合せはないとは言えなかった。登山用具を競売にする。初めて王侯のような旅行。五月二五日、G・バンドと頂上に立つ。〃山登りでは一方が大学教授だろうと、一方が労働者だろうと、そんなことは関係ない〃と彼は言う。

戻ってからシャモニへ。職業は今度は家屋修理業、学校の先生をしていた Val と伝統的な結婚式を挙げる。写真をみるとおとなしそうな、そして理知的な面ざしをした美しい人である。この年からビブラム靴使用。

一九五六年、カラコルムのムズターグ・タワー。これはマクノート・デビスから電話。二週間以内に行く、参加頼む。金はどうする。いくら持っている。八〇ポンド。オーケー、充分。あとで聞いたら、マクとハルトーグは各々一〇〇〇ポンドずつ出していたらしい。

帰国してから以後、TVやラジオへのタレント業が忙しくなって行く。そのためにドロミテやイランのアサシン洞窟（六一年）、ペトラ（六二年）などに行っている。

一九五八年、ランベリス峠付近、シャモニ遠行。

一九五九年、ウェールズの Cloggy で新ルートの開拓。

一九六〇年、Cima Grande 北壁。

一九六二年、パミール遠行、ジョン・ハントが隊長。共産主義峰に登る。ガルモ峰の帰途、Robin Smith と Wilfrid Noyce が滑落死をした。

一九六四年、Tom Patey とシャモニへ。Midi の南壁で、フランスの一流ガイドたちと共にTVフィルムをとる。

一九六五年、ランベリスに登山用具中心の店を開く。

現在までウェールズ周辺の海岸地域で、未開拓の海崖登攀地を、自分のためや映画のために、探し歩いているという。

さて今度の本のことに移るが、これは八月に初版、一一月に再版が出ている。書名の〝苦しかった年月〟というのは、一九三〇年に生れてからどこまでの意味かよくわからないが、現在では少なくとも経済的にも精神的にも、すっかり落着いているはずであるから〝苦しかった〟のは、スノードンの西麓にある上高地みたいなランベリスに、運動具店を開くまでのことと見てよいと思う。

因みにスノードンというのは古い英語では Snowdun（雪の山）であるが、ウェールズ語では Eyri といい、この方は〝鷲の家〟という意味である。この方が趣きがあってよいと思う。なお Snowdonia という言葉があるが、これは行政上の地名ではないらしく、Flint, Anglesey, Caernarvon, Merioneth, Denbigh 等を含めた総称らしい。丁度アメリカで New England と言えば、ニュー・ハンプシャーとかコネティカット、ロード・アイランドなどの州を含めた地方の、総称となっているのと同じ意味ではないかと思う。

序でに私が今持っているスノードン関係の本を、御参考のために御披露しておこう。

・"Snowdon Biography"
by G.W. Young, Geoff. Sutton and W. Noyce,
J.M. Dent and Sons, London, 1957.

・"Rock Climbers in Action in Snowdonia",
by Tony Smythe,
Secker and Warburg, London, 1966.

・"Portrait of Snowdonia",
by Cledwyn Hughes,
Robert Hale, London, 1967.

まあこれだけ読めば、スノードンに関する大概のことはわかろう。なお、

・"Over Welsh Hills",
by Francis S. Smythe (Tony の父),
Adam and Charles Black, London, 1945.

も私の書架にあるが、これも面白い本である。

ブラウンの本はV・ゴランスで出した登山家の自伝本として三冊目で、前の二つはリオネル・テレーの『無償の征服者』と、クリス・ボニントンの『私は登攀を選んだ』である。三冊目のジョーの本も、英国では凡ゆる階層に普ねく知られたことでは、ウインパー以来のことと言われるだけあって、忽ち再版が出されている。彼は忙しいこともあると思うが、自ら筆をとるのに余り積極的ではないとみえて、この本の殆んどはテープに吹き込んだものの再生らしい。

内容は、前書き、あと書き、その他を除いて一一章、マンチェスターで生れて以来、学校には興味がなかったと見え、英国での有名な登山家が殆んど、オックスフォード、ケンブリッジなどの出であるのに、彼がそうでないのも面白い。そう言えば

われわれのよく知っているドン・ウィランスなども、ジョーと同じく鉛管工であったようだ。

この本によると彼の山行、というよりも岩登りがどんな順序で行なわれていったかが、よくわかるが（前記の紹介文もこの本を通読して書いたのである）、彼を一躍有名にし、一流の登山家の仲間に加えさせたのは、ドンとやったドリューの西壁の新記録であった。

その後、彼はエバンズ隊に招かれて、世界の第三高峰カンチに偵察に行ったが、これは偵察でなくて本物になってしまった。最初に頂上に達したのは彼である。カラコルムのムズターグ・タワーも小登山隊で登った。この時の隊員分担金のことが面白く書かれている。

パミール行の章では、彼は可なり辛辣にソ連の登山家乃至は登山組織について書いている。スレッサーの『赤い峰々』にも同じようなことが書いてあったが、あの国のことは、自由主義者であるわれわれには、余りピンと来ないところが多過ぎる。それにしても、こういうことをアケスケに本に書いて、あとの祟りはないのであろうか。この辺がどうも私にはゲせない。

ジョーが私の手帳にサインしてくれた時、その名前の下に、ACGとつけ加えてあった。これはACの中にある若手のグループである Alpine Climbing Group（これは四〇歳を過ぎると自然退会となる）。私はあとでACの名簿をみたが、それには彼の名前は載っていなかった。一寸不思議な感じがしたが、ACGを出ると自然に、ACの会員に、編入されることになってるのだと思う。

こういうグループは（日本語に訳すとおかしな山岳会名になってしまうのが多いが）、気がついてみると各国にある。フランスではGHM、オーストリアにはÖAK、スペインにはGAMドイツがAAV、イタリーではアカデミコ。日本にもそれらしい名前のものはあるが、実質的には、まだヨーロッパのものとは、相当の開きがあるのではないかと思う。

〔吉沢　一郎〕

会務報告

一九六八年七月～一九六九年六月

◇七月理事・評議員会　七月十八日（木）ルーム
出席者　吉沢、深田、藤井、山崎、大塚、丹部、飯野、川森、竹田、宮下、長尾、小倉、野上、大貫、渡辺、加藤、石原、沼倉、中田、高山、牧野
▽議事、報告
一、神河内山荘の件
二、ルーム移転の件
三、海外委員会よりキンボール氏来日の件
四、図書委員会より図書交換会開催の件
五、その他報告事項
（詳細は「山」二七九号参照）

◇九月理事・評議員会　九月五日（木）ルーム
出席者　三田、吉沢、深田、山崎、丹部、大塚、宮下、広谷、川森、長尾、小方、中島、野上、小倉、佐藤、石原、沼倉、津田、中田、
▽議事、報告
一、エベレストの件
二、神河内山荘の件
三、年次晩餐会の件
四、遭難対策シンポジウムの件
五、その他報告事項
（詳細は「山」二八〇号参照）

十月理事・評議員会　十月三日（木）ルーム
出席者　三田、深田、藤井、山崎、大塚、丹部、飯野、宮下、広谷、長尾、大貫、芳野、中島、野上、加藤、佐藤、石原、沼倉、中田、牧野
△議事、報告
一、エベレストの件
二、神河内山荘の件
三、講演とシンポジウムの件
四、年次晩餐会の件
五、冬富士技術講習会の件
六、海外委員会よりキンボール氏来日の件
七、「山岳」「山日記」刊行の件
八、その他報告事項
（詳細は「山」二八一号参照）

◇十一月理事・評議員会　十一月七日（木）ルーム
出席者　三田、飯野、竹田、宮下、小倉、山崎、大貫、中島、野上、浜野、長尾、沼倉、辰沼、川森、望月、佐藤、津田、石原
▽議事、報告
一、エベレストの件
二、年次晩餐会の件
三、登山講演会の件
四、冬富士講習会の件
五、「山岳」の広告と進行状況

六、会員名簿の件
七、女子職員採用の件
八、図書交換即売会の件
九、編集出版委員会の報告
十、六甲山オリエンタルホテルの件
（詳細は「山」二八二号参照）

◇**十二月理事・評議員会**　十二月十二日（木）ルーム
出席者　三田、吉沢、深田、藤井、大塚、宮下、山崎、野上、丹部、広谷、大貫、長尾、中島、小倉、竹田、飯野、川森、渡辺、佐藤、石原、沼倉、牧野
▽議事、報告
一、エベレスト登山の件
二、ネパールの万国博参加の件
三、山陰支部ヒンズー・クシュ遠征の件
四、東海支部晩餐会本部役員出席の件
五、富士講習会の件
六、登山講習会の件
七、この一本展の件
八、会員名簿の件
九、年次晩餐会の件
十、足立画伯の画寄贈の件
十一、「山岳」広告の件
十二、アルパータのザイルをカナダ山岳会に寄贈、送付の件
十三、忘年会の件
十四、大自然を守る会の件
（詳細は「山」二八三号参照）

◇**一月理事・評議員会**　一月九日（木）ルーム
出席者　三田、吉沢、深田、長尾、小倉、川森、広谷、大塚、浜野、丹部、藤井、大貫、山崎、野上、芳野、飯野、沼倉、佐藤、石原、藤島、堀田
▽議事、報告
一、エベレスト登山の件
二、四十四年度新役員の件
三、磯野氏追悼の件
四、「日本山岳志」覆刻版の件
五、会費の見通しの件
（詳細は「山」二八四号参照）

◇**二月理事・評議員会**　二月六日（木）ルーム
出席者　三田、吉沢、藤井、丹部、大塚、竹田、広谷、小倉、川森、野上、長尾、山崎、佐藤、渡辺、石原、望月、沼倉、辰沼
▽議事、報告
一、来年度役員の件
二、エベレスト登山の件
三、「山岳」索引の件
四、「山岳」六十三年広告の件
五、日山協指導員制度の件
六、氷原氏辞任の件
七、小集会の件
八、海外連絡の件
九、婦人懇談会の件
十、松方氏カトマンズ出発の件
十一、山形県へ講師派遣の件

十二、会費値上げの件
（詳細は「山」二八五号参照）

◇三月理事・評議員会　三月六日（木）ルーム
出席者　三田、吉沢、深田、藤井、山崎、大塚、飯野、丹部、宮下、広谷、芳野、長尾、小方、中島、小倉、浜野、野上、佐藤（久）、望月、石原、沼倉、津田、高山、堀田

▽議事
一、エベレスト登山の経過の件
二、会員総会の件
三、その他
（詳細は「山」二八六号参照）

◇三月臨時理事・評議員会　三月二十五日（火）ルーム
出席者　三田、吉沢、深田、宮下、小方、野上、山崎、大塚、小倉、広谷、丹部、中島、飯野、長尾、芳野、佐藤（久）、石原、牧野、沼倉

▽議事
一、昭和四十四年度事業計画案及び予算案検討の件
二、エベレスト登山の件
三、昭和四十四年度役員候補者推薦の件
四、ルーム基金目標額達成の件
五、国際アルピニスト集会の件
六、信濃支部マッキンレー登山の件
七、シェラクラブ訪日の件
八、「山岳」六三年号刊行の件
（詳細は「山」二八六号参照）

◇四月理事・評議員会　四月十日（木）ルーム
出席者　三田、深田、吉沢、藤井、山崎、丹部、大塚、飯野、竹田、広谷、川森、長尾、芳野、小倉、浜野、野上、堀田、沼倉、渡辺、槙

▽議事、報告
一、エベレスト登山の件
二、会員総会の件
三、一九六九年度ＵＩＡＡ総会の件
四、シャモニ国立登山学校招待の件
五、谷川岳登山条例に関する身分証明書発行の件
六、磯野氏追悼会の件
七、屋久杉保護の件
八、古家実三氏短冊寄贈の件
（詳細は「山」二八八号参照）

◇昭和四十四年度通常会員総会　四月十九日（土）ルーム
出席者　一一〇名

▽総会次第
一、会長挨拶　三田幸夫
二、昭和四十三年度事業報告　大塚博美
三、支部報告
東九州支部（野口秋人）、東海支部（伊藤洋平）、静岡支部（山本朋三郎）、越後支部（藤島玄）、宮城支部（伊達篤郎）、秋田支部（荒巻広政）、石川支部（小林雄二郎）
四、昭和四十三年度決算報告　飯野享
五、昭和四十三年度財産目録報告　飯野享
六、監査報告　牧野衛
（全員異議なく収支決算の報告を承認）
七、昭和四十四年度役員選任の件

四十四年度役員として次の各氏を選任した。

〔理　事〕三田幸夫、吉沢一郎、深田久弥、山崎安治、大塚博美、飯野享、小倉董子、広谷光一郎、長尾悌夫、中島寛、浜野吉生、野上成勇（以上再任）、加藤泰安、辰沼広吉、村木潤次郎、川上隆、松田雄一、藤田佳宏、原真、牧野内昭武（以上新任）の二十氏を選任、退任された藤井運平、丹部節雄、宮下秀樹、竹田寛次、川森左智子、大貫良夫、芳野赴夫、小方全弘八氏の労を謝した。

〔監　事〕牧野衛氏の任期満了に伴う後任として小原勝郎氏を選任。

〔評議員〕松方三郎、加藤泰安、佐藤久一郎、小原勝郎、辰沼広吉、伊藤秀五郎、村木潤次郎の七氏が退任され、その後任として、中野征紀、今西寿雄、析井健一、織内信彦、村山雅美、藤井運平、金坂一郎の各氏を選任、退任された七氏の労を謝した。

八、昭和四十四年度事業計画案　大塚博美

（全員異議なく原案どおり承認）

九、定款一部（第六条一、二）改訂の件　飯野享

（年会費および終身会費改訂）

（全員異議なく原案どおり承認）

十、昭和四十四年度収支予算案　飯野享

（全員異議なく原案どおり承認）

（詳細は「山」二八八号参照）

◇**支部長会議**　四月二十日（日）ルーム

出席者　富山＝中田、静岡＝山本、越後＝藤島、北九州＝野口、宮城＝伊達、石川＝小林、秋田＝荒巻、吉沢、深田、飯野、加藤、辰沼松田、中島、山崎

▽議事

エベレスト登山の件、指定山小屋の件などについて説明があり、指定山小屋の件はいちおう中止とした。そのほか各支部の現状などについて懇談した。

◇**四月臨時理事・評議員会**　四月二十四日（木）ルーム

出席者　三田、深田、吉沢、加藤、辰沼、広谷、飯野、大塚、浜野、山崎、川上、野上、長尾、小倉、牧野内、松田、析井、今西、金坂、藤井、村山、島田、中田、織内

▽議事、報告

一、常務理事互選の件

加藤泰安、辰沼広吉、山崎安治、大塚博美、広谷光一郎、飯野享、松田雄一、浜野吉生、中島寛の九氏を互選。

二、常任評議員互選の件

藤井運平、沼倉寛二郎、織内信彦、村山雅美、金坂一郎、渡辺公平の六氏を互選。

三、理事の事務分担の件

加藤（総務、自然保護、支部）、辰沼（遭難対策）、山崎（会報）、大塚（エベレスト）、松田（海外）、飯野（経理、山荘、庶務）、中島（山岳）、広谷（指導研究）、川上（集会）、浜野（学生部）、牧野内（山日記）、小倉（婦人部）、長尾（医療研究）、野上（図書、ルーム）

四、エベレスト登山の件

五、国際アルピニスト集会参加者推薦の件

六、婦人懇談会の登山研修会開催の件

（詳細は「山」二八八号参照）

◇**五月理事・評議員会**　五月十六日（金）ルーム

出席者　三田、吉沢、深田、加藤、原、松田、長尾、浜野、山崎、

大塚、飯野、野上、牧野内、辰沼、金坂、石原

▽議事、報告

一、各専門委員会設置の件
エベレスト委員会、医療委員会、指導研究委員会、海外連絡委員会、自然保護委員会、支部連絡委員会、学生部指導委員会、山日記編集委員会、会報編集委員会、山岳編集委員会、図書委員会、婦人懇談会、集会委員会の十三委員会を設置

二、エベレスト登山の件

三、ルーム移転の件

四、P29阪大後援の件

五、都岳連評議員推薦の件

六、日山協新役員の件

七、東海支部マカルー登山の件

八、神河内山荘補修の件

九、その他

（詳細は「山」二八九号参照）

×　×　×

◇六月理事・評議員会　六月五日（木）ルーム

出席者　三田、吉沢、飯野、山崎、松田、広谷、小倉、住吉、長尾、川上、大塚、牧野内、中島、織内、沼倉、金坂、堀田

▽議事、報告

一、遭対委および各種委員会委員追加の件

二、各委員会の運営方針

三、加藤理事辞任願いの件

四、関西支部長交替の件

（詳細は「山」二八九号参照）

◇小集会

▽第二四四回　昭和四十三年七月十七日（木）於・ルーム
参加者二十名
タトラの夕べ　チェコ映画

▽第二四五回　昭和四十三年九月十八日（水）於・ルーム
参会者五十名
日印合同婦人登山隊報告　宮崎英子氏

▽第二四六回　昭和四十三年十月十六日（水）於・ルーム
参会者四十九名

▽第二四七回　昭和四十三年十一月九日（土）～十日（日）於・富士山麓十里木部落　参会者二十九名
静岡支部主催第十一回もみじ会

▽第二四八回　昭和四十四年一月二十九日（水）於・ルーム
参会者二十五名
人喰い人種に喰われそこなった話　西丸震哉氏

▽第二四九回　昭和四十四年二月十九日（水）於・ルーム
参会者二十九名
東北の山　伊達篤郎氏

▽第二五〇回　昭和四十四年三月十九日（水）於・ルーム
参会者二十二名
ヒンズー・クシュの山の話　雁部貞夫氏

▽第二五一回　昭和四十四年六月二十日（金）於・ルーム
参会者四十名
アメリカの山・ニュージーランドの山　Donald M. Woods 氏

▽第二五二回　昭和四十四年六月二十六日（木）於・ルーム
参会者五十名

極点旅行　　村山雅美氏

◇主なる行事および集会

▽富士山頂診療所の開設　七月二十日～八月十二日の二十三日間開設し一〇三名の診療を行なった。

▽第一回山岳図書交換・即売会が十月二十六日ルームで行なわれた。

▽第九回登山技術講習会　十一月二十一日～二十四日　於富士山　参加者二十九名（「山」二八三号参照）

▽一九六八年度年次晩餐会　十二月六日、於・マツヤサロン。司会加藤泰安氏、名誉会員、永年会員推薦のあとスピーチ、懇談が行なわれた。（「山」二八三号参照）

▽この一本展　十二月六日　年次晩餐会の会場の一隅に恒例によって展示された。（「山」二八三、二八四号参照）

▽忘年会が十二月十八日ルームに於いて行なわれた。

▽第七回木暮翁碑前祭親会　五月十七、十八日に金山平で開催（「山」二八九号参照）

× × ×

◇海外登山界との交流

▽本年度は二十八ケ国五十八団体と機関誌の交換を行なった。

▽国際山岳協会連合（UIAA）総会に吉沢一郎副会長が出席した。

▽キンボール氏来日　九月二十四日、国際文化会館において歓迎会を開催した。（「山」二八一号参照）

▽本部事務所には、米・英・仏・独・スイス・イタリー・中国・韓国等十ヵ国の登山家が訪問し、交歓を行なった。

◇海外登山

一九六八年は別掲（「海外登山年表＝一九六八年＝」）のように六十四隊の登山隊が海外の山に出掛けたが、これらの各隊には本会会員が多数参加した。なお本会に直接関係のある海外登山に関するトピックとして、次の点を記録しておきたい。

▽海外登山審議委員会　昭和四十四年度国際スポーツ行事用外貨割当てを検討する日本山岳協会の海外登山審議委員会は、十一月五日開催され、日本山岳会東海支部マカルー隊一九〇〇ドル、泊山岳会ネパール・ヒマラヤ登山隊六三八ドルの二隊が承認された。（「山」二八三号参照）

▽第七回海外登山技術研究会　十一月三十日～十二月一日の両日東京代々木のオリンピック記念青少年スポーツセンターで行なわれた。参加者百九十名で、今回十二名の女性が初参加した。（「山」二八三号参照）

▽エベレスト登山　ネパール政府は昭和四十三年八月十九日、登山禁止令の一部を解き、三十八座の登山許可を認める旨発表した。それによって本会のエベレスト登山計画は軌道にのり、以下に示されるような活発な動きがくりひろげられてきた。

○昭和四十四年二月十日、松方三郎氏、ネパール政府との交渉のためカトマンズに赴く。

○三月の定例理事・評議員会で新エベレスト委員会設置

○第一回エベレスト委員会　三月十八日

・七〇年プレ実施に関する基本問題

○第二回エベレスト委員会　四月八日

・エベレスト本隊計画原案を検討、南壁をとりあげることを承認。

○第三回エベレスト委員会　四月十六日

・第一次偵察隊派遣の件

・準備委員会編成の件

・酸素の研究と発注の件

○第一次偵察隊藤田隊長他三名　四月二十三日、羽田を発つ。

○第四回エベレスト委員会

・資金計画検討

・酸素の件

×　×　×

◇岳界トピック

本会とは直接関係はないが、この期間に記録すべき次のトピックがあった。

▽第一回国際ヒマラヤ研究集会　九月七、八日　於京都の比叡山　参加者十五名（「山」二八一号参照）

▽第九次南極越冬隊南極点に立つ。十二月十九日、八十三日の旅行の後南極点にある米国のアムンゼンスコット基地に到着した（隊長は本会員の村山雅美氏）。

×　×　×

◇ルーム基金　八百万円を目標とした募金事業を継続したが、昭和四十四年三月末をもって目標を達成し、募金を終了した。

×　×　×

◇山岳　第六十三年（通巻一二二号）を三月三十一日に発行した。編集者望月達夫。

◇山　第二七七号～第二八八号を発行。編集代表山崎安治。

◇山日記　一九六九年版（第三十四輯）を十一月下旬に発行した。編集代表大貫良夫。

◇名誉会員　昭和四十三年十二月六日の年次晩餐会の席上、松方三郎氏（会員番号五四七番）を名誉会員に推挙した。

◇永年会員　本年をもって在籍五十年に達した左記の四氏が、永年会員

一九六九年度役員

会　長　三田幸夫

副会長　吉沢一郎、深田久弥

常務理事　加藤泰安、辰沼広吉、山崎安治、大塚博美、広谷光一郎、飯野享、松田雄一、浜野吉生、中島寛

理　事　村木潤次郎、小倉董子、川上隆、藤田佳宏、長尾悌夫、原真、野上成勇、牧野内昭武

監　事　堀田弥一、小原勝郎

常任評議員　渡辺公平、望月達夫、析井健一、織内信彦、沼倉寛二郎、村山雅美、藤井運平、金坂一郎

評議員　島田巽、中屋健弐、石原憲治、後藤幹次、藤島玄、津田周二、水野祥太郎、中野征紀、今西寿雄、中田勇吉、高山忠四朗、三井松男

支部長　柴田均二（秋田）、後藤幹次（山形）、伊達篤郎（宮城）、伊藤弥十郎（福島）、藤島玄（越後）、塚本茂樹（信濃）、三井松男（山梨）、山本朋三郎（静岡）、熊沢正夫（東海）、中田勇吉（富山）、小林雄次郎（石川）、今西寿雄（関西）、織田収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、三谷孝一（熊本）

書　記　岩佐義宗

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXIV 1969 **Issued in April, 1970**

Contents

(In English)

Greenland Crossing Expedition, 1968·····By Kaneshige Ikeda····· 1

Crossing the Ice-cap of Patagonia, 1968–1969 ·····By Hidetaro Sakagami····· 2

Bolivian Andes, 1968·····By Shigeo Abe····· 4

Central Andes, Argentine, 1968–1969·····By Takashi Kawakami····· 6

Ascent of Sha-i-Anjuman, Central Hindu Kush, 1968·····By Sakio Takagi····· 7

Langar, 1968·····By Tanenori Tachibana····· 8

From Turkey to Hindu Kush, 1968·····By Kyoko Sato····· 9

An Identification of the peaks of Istor-o-Nal·····By Eizo Tanaka·····11

(In Japaneese, except the articles mentioned above)

Random thoughts on Mt. Fuji·····By Saburo Matsukata·····35

Recollection of Hidaka Range·····By Osamu Aikawa·····44

South face of Mercedalio·····By Sabro Yoshida··· 104

Macus Baker·····By Kazumichi Kuribayashi··· 117

Bharanzar, Panjab Himalaya·····By Isao Yoshino··· 121

Indo-Japanese Joint Expedition·····By Hideko Miyazaki··· 126

Origin names of Mt. Rausu and Mt. Iwō·····By Teiji Hayakawa··· 132

In memoriam :

Shigekichi Kondo, Ryoji Takeyama, Masao Yamane,

Seikichi Ohta, Toyohachi Inada····· 149

Book Reviews····· 164

Club Proceedings ····· 193

Chronicle of Japanese Overseas Expeditions, 1968··· Ed by Yuichi Matsuda

····· & Hiroshi Nakajima·····13

Editor: Tatsuo Mochizuki

The Japanese Alpine Club

(Fouded 1905)

Address : Mukai Bldg. No. 23, Kanda Nishiki-cho, 3-chome, Chiyoda-ku, Tokyo

.....

(April, 1969-April, 1970)

President : Yukio Mita

Vice-Presidents : Ichiro Yoshizawa, Kyuya Fukata

Honorary Secretaries : Taian Kato

Honorary Editor : Tatsuo Mochizuki

Honorary Librarian : Kyuya Fukata

Honorary Treasurer : Toru Iino

Auditors : Yaichi Hotta, Katsuo Ohara

.....

Committee

Yoshihiro Fujita	Yoshio Hamano	Makoto Hara
Koichiro Hirotani	Toru Iino	Taian Kato
Takashi Kawakami	Akitake Makinouchi	Yuichi Matsuda
Junjiro Muraki	Hiroshi Nakajima	Yoshio Nagao
Seiyu Nogami	Hiromi Ohtsuka	Nobuko Ogura
Kokichi Tatsunuma	Yasuji Yamazaki	

.....

Council

Unpei Fujii	Gen Fujishima	Kanji Gotoh
Toshio Imanishi	Kenji Ishihara	Ichiro Kanesaka
Shotaro Mizuno	Matsuo Mitsui	Tatsuo Mochizuki
Masami Murayama	Yukichi Nakata	Seiki Nakano
Kenichi Nakaya	Kanjiro Numakura	Kenichi Orii
Nobuhiko Oriuchi	Tatsumi Shimada	Chushiro Takayama
Shuji Tsuda	Kohei Watanabe	

.....

Chairman of Local Sections

Akita : Kinji Shibata	*Yamagata* : Kanji Gotoh
Miyagi : Tokuro Date	*Fukushima* : Yajuro Itoh
Echigo : Gen Fujishima	*Yamanashi* : Matsuo Mitsui
Shizuoka : Tomosabro Yamamoto	*Shinano* : Shigeki Tsukamoto
Tokai : Masao Kumazawa	*Ishikawa* : Yujiro Kobayashi
Toyama : Yukichi Nakada	*Kwansai* : Toshio Imanishi
San-in : Osamu Oda	*Fukuoka* : Daisuke Suematsu
Kumamoto : Koichi Mitani	*Higashi Kyushu* : Akito Naguchi

Greenland Crossing Expedition, 1968

By Kaneshige Ikeda

In 1965, an expedition organized by the Nihon University Alpine Club (led by T. Miyahara) visited Aogmagssalik in the East Greenland to climb Mount Forel (3,360 m). The party was compelled to give up climbing due to lack of time after reconnoitering the mountain because it took the party too many days to approach there. (see Sangaku Vol. 61, 1966)

In the next year, a party led by H. Nakajima achieved all that they expected under the good weather condition. The party reached the summit of Mount Forel after 15 hours of climbing. (see Sangaku Vol. 62, 1967) While I, as a member of the expedition, stood on the top and looked over the ice-cap, I was fascinated by the thought of crossing it. This expedition was thus conceived.

I was thinking of crossing the ice-cap from Scoresbysund to Jakobshavn, but it would take two years to carry out the plan, setting up supply depots in the first year and accomplishing the crossing in the following year, and the party decided to start from Kungmiut where we knew well. The route for Jakobshavn from Kungmiut had not been tried by anyone else, but seemed to be able to cross in the season.

After two years' preparation, the party started from Yokohama on the 1st of June and reached Sondre Stromfjord via Siberia and Copenhagen on the 19 th, then flew to Kulusuk near Angmagssalik. The last stretch to Kungmiut, the starting point of the expedition, was sailed on a couple of small motorboats.

We sailed from there on the 3rd of July and landed near Sermiligad village early in the next morning, from where we started with one ton of equipments and provisions on a dog sledge and two specially designed human sledges. We arrived at the foot of Mount Forel on the 16 th via Stephans Geltscher, Knud Rasmussens Gletscher, 16' September Gletscher where three advanced members had set up supply depot, Haabets Gletscher, Glacier de France, Femstjernen and Paris Gletscher. We set up the camp there and stayed for a week. During those days, five members climbed Advantgarden's highest peak, 3,249 meter high, while other four climbed Mount Forel in the fair weather.

When the climb was over, the party divided itself into two groups, five members each. One group returned to Kungmiut with the dog sledge and

another started the trip over the ice-cap on ski with two sledge-loads of 350 kg on the 23 rd.

We, members of the crossing party, climbed a nunatak, Jomfruen, on the 26 th. That was the last peak and there was not any object to be seen ahead on the snowfield, and the navigator began to gather the sun. We reached the highest point, 2,800 m high, two weeks later. During the first step of the trip, we were bothered by violent snowstorms and low temperature, and the weather was so bad that sometimes we could never proceed for a whole day. On the 10 th of August, however, the weather improved. We hoisted sail on the sledges, as F. Nansen's expedition did, and could proceed 30 to 50 km a day. We advanced mostly at night when the temperature was below −10°C and the snow condition was better for skiing than at day time.

On the 18 th, we saw one of the many frozen lakes and streams for the first time. When we came near the western edge of the ice-cap, we encountered huge crevasses and snow hummocks. Therefore we were forced to seek the route at more northern part of region than we had expected.

Disko Island and the Nugssuaq Peninsula came in sight on the 25 th and the Manitsok Mountains two days later. We came down to Pakitsokfjord situated 80 km to the north of Jakobshavn on the 29 th. We pitched the tent there and slept for 24 hours.

Crossing The Ice-Cap of Patagonia, 1968–1969

By Hidetaro Sakagami

Expedition Japonesa del Colegio Jesuitas Rokko a Patagonia was organized for the thirtieth anniversary of Rokko Jesuit High School in Kobe. We intended to cross the untraced ice-cap of Patagonia.

Hidetaro Sakagami 43 years old led the expedition. The other members were Isao Ikawa (27), Kimio Matsunaga(27), Shuji Iwata(22), and Hiroyuki Maekawa (21). The Jesuits of Chile gave us a great help preparing for the expedition.

On November 14, 1968, we arrived in Santiago by air. By December 22

all of the members gathered at Puerto Eden. There we began the immediate preparation for the expedition while waiting for the boat to take us to Fiord Exmouth. During the stay in Puerto Eden we climbed several peaks from where we could see the ice-cap.

On January 6 th, 1969, we set our camp at Fiord Exmouth. We were five kilometers away from the ice-cap over the 1400 meters' high. The route to ice-cap was covered with bushes and forests and the foot of the ice-cap was cut off by a rock face of 500 meters high.

When we settled camp 4 on the ice-cap on January 26 th, we perceived that twenty days had already passed since our landing. During these days we had to carry about 600 kilograms of supplies by ourselves because no porter was available.

We started to cross the ice-cap on January 28 th. It had been raining or snowing every day since our landing, but from the first to the third of February we had clear weather. Three days were the only clear days we had in 61 days of travel. On February 2 nd we saw a mirage on the west side of the plateau. We could see the whole aspect of the Mariano Moreno Range, the Volcan Lautaro and the Riso Patron which was our object.

On February 5 th we pitched Camp 8 at the foot of the pass which we had to cross. In spite of the bad weather, we carried the supplies every day.

On February 15 th Camp 9 was pitched on the pass at last after ten days' struggle. In the afternoon the weather became better, so we prepared for the attack on Riso Patron.

On the 16 th two of our members, Matsunaga and Maekawa, reached the summit of Riso Patron, but they found another higher peak. However they did not have enough time to try to climb the peak.

On February 19 th we crossed the pass to the Argentine side, but in the afternoon we were overtaken by a terrible blizzard, pitched Camp 10 at once. After then, we could not even move for the ten days stucked by the blizzard. As the snow piled up about three meters, we had to abandon our tent under the snow to escape in a snow hole. We waited and waited for the weather to become better.

On March 1 st, we got out of the snow hole only with one tent and food for seven days. We went toward the Glacier Upsala in blizzard which had abated a little. Fortunately the weather became better in the afternoon.

On March 5 th we finished crossing the Glacer Upsala from the north-west

to the south-east. We thought that we would be able to reach Estancia Cristina on the 6 th, but it took about half a day to descent the rock face which was 300 meters high. Because it was much longer than we expected, we had to bivouac near the Lake Anita. We crossed two cold rivers that day.

On March 7 th we finally arrived in Estancia Cristina, sixty-one days after our landing at Exmouth.

Bolivian Andes, 1968

By Shigeo Abe

The Tochigi Federation of Mountaineering Associations, sent a mountaineering party to Bolivian Andes in 1968, in commemoration of the 20 th anniversary of the foundation of the Federation.

We aimed to climb some virgin peaks in the central part of Quimza Cruz, Mt. Sajama, the highest mountain in Bolivia and to traverse three peaks of Illimani.

We spent 54 days in all at mountains as follows: 25 days from May 28 till June 21 in Quimza Cruz, 18 days from June 17 till July 14 at Mt. Sajama, 11 days from July 22 till August 1 st at Mt. Illimani. We climbed six virgin peaks and three mountains within the period. Two members from Club Andino Boliviano, Ronnie Ibatta and Fernand Martinez joined us.

(1) Quimza Cruz Range

Mt. San Fellipe (5,700 m), the first target we tried, got its name from "Indios" working in the mines around the mountain. It was a beautiful mountain facing the sources of the Amazon on the east, and it had a glacier of two kilometers long on the west side.

It was hard to get to the plateau, but rather easy to the top from there. The members who climbed are as follows: Ozai, Terauchi, Ohno and Ojima on June 4, Hasegawa, Imai, Ohno and Martinez on June 5, Abe, Terauchi and Ogino on June 6.

After the ascent of six unclimbed peaks: Mt. San Fellipe, *Yokokawa* Peak, *Shimotsuke* peak and other three, we moved our base camp to the east of Quimza Cruz for Mt. Jachacunocollo(5,900 m), the highest mountain in Quimza

Cruz.

This mountain has a magnificent appearance and great glaciers, but was already been climbed by two parties from Switzerland and Germany. On June 17 th, Imai, Terauchi, Ohno and Ogino left the base camp. They pitched the advance camp at 5,700 m on a small plateau, overcamed many troubles with crevasses on the central glacier and they reached the top on the next day.

(2) **Mt. Sajama** (6,530 m)

We arrived at Sajama village by a truck of Toyota Bolivian after 350 kilometers' drive from La Paz.

July 1 st, the fourth day after we left La Paz, the base camp was set up at 4,480 meters on the south-west side of Mt. Sajama. Next day, the advanced tent was pitched at 5,060 meters by way of the south-west ridge. First we went up straight, but the way was soon obstructed by terrible condition of the glacier. It was very hard to find out the route to the top, but after eight hours' struggle, Abe, Terauchi, Ohno and Ronnie climbed the top on July 4 th.

On July 7 th, Ozai, Hasegawa, Imai, Ojima and Martinez made another successful ascent.

(3) **The traverse of Mt. Illimani** (6,840 m)

Our final target was the traverse of the three peaks of Illimani; the south, the central and the north peaks. On July 22, the base camp was set up at 4,460 meters on the west flank. Camp I was pitched at 5,410 meters on the ridge stretching out from the south peak on July 24 and Camp II at 5,680 meters next day.

On July 26, Imai and Ohno left Camp I and began the traverse from the south peak and successfully finished it next day after one bivouac on the main ridge.

In the meantime, on July 26, Ojima and Ogino climbed the north peak for the purpose of supporting the traversing members and Abe and Terauchi climbed the south peak on the same day.

The members: Shigeo Abe 37 (leader), Moriyuki Ozai 38, Tadashi Hasegawa 36, Shinji Terauchi 30, Jin Imai 30, Hiroshi Ohno 27, Morio Ojima 27, Akira Ogino 27, Susumu Ojima 34, Takehiko Kameoka 35 (pressman).

Central Andes, Argentine, 1968–1969

By Takashi Kawakami

We, Defense Academy Alpine Club, received the invitation to the Central Andes from Gen. Alejandos Guillermo Salcon, Commanding General of the Argentine Army on Sept. 1968. So, we dispatched a 7-men's party to Andes early November. On the December 18th the party arrived at climbing base in Tupungato village, where the 11 th Mountaineering Infantry Regiment was stationed, and then started Mountaineering activities.

On 19 th the advance party reached Ref. Militor, a hut of the military (2860 m) at the left bank of Rio Tunuyan and Parmalas. We set Camp I(4000 m) on the table land near the right bank of the Tunuyan glacier on 27 th and then on the 31 st, Camp 2 (4500 m) on the plateau and Camp 3 (5200 m).

On January 2 nd, while Murata and Andoh climbed central icewall they met an mountaineer, Corporal Lucere, who climbed up there via south-east ridge. Then they joined together and climbed Mt. Cerro Negro (6152 m). Corporal Fidel Lucero is a member of the 11 th Mountaineering Infantry Regiment, strong and intrepid, a typical "Bacano" (Mountaineerng soldier of Argentine army).

Generally speaking, Cerro Negro is so steep but the easiest route is via southern valley with a long approach. South glacier of Negro was 2.8 km long and 2.3 km wide. *Nieve penitentes* on the glacier was about 50 cm but not difficult to go through.

Climbing of Cerro Marmorejo east peak was very difficult, because *nieve penintentes* grew up 2 m high and piled up. We failed our ascent and left the base house to descent for Tupungat village on January 13 th. We also had to give up Mt.Enanos group, our secondary object, due to unusual rise of the River Tupungato, but instead of it, we aimed Laguna as our next target.

Cerro Laguna is stated near the border of Chile (34°10′ S–69°40′ W)consisting of a few unclimbled peaks about 5000 m high. We set the base camp on southern shore of the Lake Diamonte, 300 m north from the hut of Gendarmeria Nacional. On January 31 st Osuga, Tajiri, Kimura, Andoh and Tamura ascended Volcan Maipu (5350 m) from the north side through Volcan Maipu glacier. On

February 4th, Kimura and Andoh climbed Cerro Amarillo (4560 m) from the saddle of south ridge and on 5th, Murata, Tajiri, Kimura and Andoh climbed Cerro El Gorro west peak (4960 m) via the saddle of south ridge. In the meantime Kawakami, Osuga and Tamura climbled Cerro El Gorro east peak (4944 m) via south eastern ridge.

Then on 9th, Kawakami, Murata, Kimura and Andoh climbed western glacier directly which was piled up *nieve penintentes* and succeeded to scale Cerro Laguna north peak (5100 m), while Osuga, Tajiri and Tamura climbed Cerro Laguna south peak (5034 m) via east ridge.

On January 10th we all returned the 11th Regiment and finished our climbing in Argentine. Among the peaks we climbed, the following was the first ascent: El Gorro West, El Gorro East and Laguna North.

The Members: Takashi Kawakami (Leader), Hiroshi Ohsuga (Capt.), Mitsuaki Murata (Capt.), Kazumi Tajiri (First Lt.), Kiyonori Kimura (First Lt.), Chitoshi Andoh (Second Lt.), Shinichi Tamura (Sgt.).

Ascent of Sha-i-Anjuman Central Hindu Kush, 1968

By Sakio Takagi

The only unclimbed 6,000 m-peak in the Central Hindu kush was climbed by our party in 1968. We named it Sha-i-Anjuman, which was decided in consult with Mr. Seraj, the President of Olympic Committee of Afghanistan in Kabul.

On June 20th, 1968 we chartered a bus from Kabul to Gonju, where we formed a party of twenty horses and twenty-nine porters, started for Anjuman. On the third day, when we passed the Anjuman Pass (4,200 m), we felt refreshed to see a range of snow-capped peaks towering ahead of us. Though porters' strike troubled us, we arrived at Anjuman Village on the 26th where we set our base camp.

During the first survey for Peak X, we climbed 5,050 m-peak along the Jalgya Valley, which we named Koh-i-Stara. But, to our disappointment, we

could not find the Peak X along this valley.

The second reconnoitering party found the peak, going up deeply along the Sare-Tund Valley at right side of the Paghar Valley. On July 3 rd, we set up our base camp, and a reconnaissance party could reach up to 5,000 m through the glacier. It was on July 14 th that we could find a route leading to the summit from the west ridge through a rocky wall in the middle of the way.

At dawn on July 17 th, the attack members, S. Inukai and N. Kawai, left the second camp. The weather was not so good because of approaching monsoon and we were afraid that our prospect might be gloomy. They climbed up along the couloir and got to the rocky wall. After a little rest, they scrambled the gully on the right side of the wall. It was about noon that Inukai and Kawai stood on the summit. Poor as the visibility was because of snow fall, they recognized Koh-i-Safed and Mir-Samir from the top. They returned safely to the first camp at 7 : 30 p.m.

After that, we climbed 5,585 m peak on July 22 nd, which was named Koh-i-*Ogaki* named after the City of Ogaki, the sponsor of our expedition party. We left Anjuman and came back again to Kabul after forty days' trip,

Members: Yoshiheko Muto (Leader), Sakio Takagi, Yasuo Takagi, Masashi Hayashi, Osamu Sakuma, Susume Inukai, Nobuo Kawai, Kosei Segawa (doctor), Yoshio Andoh(reporter).

Langar, 1968

By Tanenori Tachibana

In summer 1968, we, Waseda University Hindu-Kush Mountaineering Team, climbed Mt. Langar Main (7060 m) and nameless peak (ca. 5600 m) facing west side of Hushko glacier, in West Pakistan Hindu-Kush.

We, T. Tachibana, M. Suzuki and K. Noguchi, reached Chitral with our liaison officer on 7 th July and started to the mountain on the 20 th. After seven days of march-in, we settled base camp at the edge of Hushko glacier (4000 m) at the head of which our peak was located at about 25 km distance.

We settled four advanced camps; Camp 1 (4250 m), Camp 2 (4500 m), Camp

3 (5100 m) and Camp 4, a snow-hole (6200 m). The two of our members climbed a nameless peak (ca. 5600 m) facing west side of the Hushko glacier at 10 a.m. on 12 th of August from Camp 3.

After four days, we attempted Mt. Langar from Camp 3, but could not climb this peak in a day. So we dug a snow hole in the plateau at 6200 m high and tried it again on the 18 th. After twelve hours' climb, we reached the summit of Langar (7060 m). We left the base camp on 27 th of August, and came back to Japan at the end of September.

From Turkey to Hindu Kush, 1968

By Kyoko Sato

"Japanese Women's West Asian Expedition" was composed of four members of "Jungfrau" mountaineering group.

During the six months' travel through U.S.S.R., Turkey, Iran, Afganistan and Pakistan (from March 6 to September 6), we visited the following four mountain areas: Ararat, Jilo Mountains, Demavend, and Istor-o-Nal.

First, we scaled Ararat (5,165 m) in north-east Turkey which is famous for the story of Noah's Ark. Then, from April 30 to May 10, we visited the Jilo Mountains in south-east Turkey. Going up the Avaspi River, we explored the north-west side of Reshuko (4,168 m; the highest peak of Jilo), which is surrounded by steep rock walls about 1,000 meters high. I heard that some Austrian climbers tried to climb this rock wall directly to the summit, but failed. So, we went round to south-east side of this peak, from where many climbs to Reshuko were made before. We tried to climb this peak from Orisha Village (of Kurdish tribes folk), but we couldn't have a chance to attack the summit because of bad weather. Howeve, we were happy to find these rocky mountains as beautiful as the Alps.

After the trip to Jilo, we turned the eyes over to Iranian mountains, Demavend (5,601 m), for a while with the successful ascent of it on May 28 th.

Finally, we arrived at Chitral, the entrance of East Hindu Kush on June 26. We began march-in towards Istor-o-Nal on June 30 th, and seven days later set

our base camp at 4,400 m on Tirich Glacir. The hard work of carrying our gear up to Camp I (5,200 m), Camp II (6,100 m) and Camp III (6,400 m) continued from July 10 th to July 26 th without any help of porters. Over a wide gentle snow slope, we could see two narrow couloirs rising up to the west ridge of Istor-o-Nal. It seemed to us that the upper couloirs, though obstructed by an ice-fall, provided a good route to a col on the west ridge. Camp II was set in the middle of this couloir on the steep ice slope, and Camp III on the col where the previous party had also found a suitable camp site (6,400 m).

On July 28 th at 6 : 20a.m. we set out for the summit from Camp III. It was completely clear. We three, S. Watanabe, Y. Ashiya, and I were all in good condition. First, we climbed a rock wall of 100 m, and them along the long narrow ridge rising up to the first snow peak. Coming close to this peak, we found the ridge became wider. We made up our mind to bivouac beause this peak looked like the top of Istor-o-Nal. The next morning we easily climbed this peak only to find that it wasn't the top we were aiming at. We began to advance along the narrow ridge whose direction was changed from east to north. After the sun turned red, we could see the striking rock pinnacle beyond the beautiful red snow ridge. It must be the real one! We hurried up to the top. At 7 : 20 in the evening, we finally reached the highest point on the west ridge just above the rock pinnacle. The sun had already been set and cold wind began to blow. We left an aluminum bar on the top and passed the night at the foot of the rock pinnacle.

We believed this peak to be the main peak of Istor-o-Nal because the U.S.A. party led by J.E. Murphy in 1955 reported that they traced the same west ridge as the one we followed. In the summer of 1969, however, a Spanish party led by Sr. Anglada made the ascents of Istor-o-Nal main peak (7,403 m), South Peak (7,303 m) and South-East Peak (7,365 m). They found the aluminum bar which we left on the last peak of the west ridge at the height of 7,200 m, and then they continued to follow the ridge down to the Great Saddle (7,100 m) and up to the three other peaks mentioned above.

According to their report we judged the peak we climbed was so called the west peak (ca. 7,200 m) of Istor-o-Nal.

An Identification of The Peaks of Istor-o-Nal

By Eizo Tanaka

When Jungfrau group came back from Istor-o-Nal, we had a hot argument on the subject which peak they had climbed in their expedition to Hindu Kush. Some of us were doubtful whether these ladies truely climbed over 7,000 m, but this doubt drove me to examin the previous climbing record of the mountain. My identification work was done by reffering to the following materials which I could get in hand.

North part :

Saraghrar South Peak, Udren Zom South Peak,
(Hitotsubashi University Exp., '67)
Lopar Joz Zom (Kurt Lapuch, '67, Fig. 5) and North Peak of Istor-o-Nal (Fig. 6).

East part :

Gerald Gruber's panorama (Fig. 6).

West part :

Near the summit of Noshaq (AACK, Fig. 7), Polish Expedition and Pischinger's photo, Ghhul-Lasht Zom (K. Lapuch, Fig. 8).

South part :

Lawder, Murphy, Chiba Tirich Mir Exp., '67 (Figs. 9, 10 and 12),
Jungfrau group Exp., '68, Kwansai Gakuin Univ. Exp., '69, All Fukuoka Himalaya Exp., (Tirich Mir, Fig. 11),
The first ascent of Istor-o-Nal Main, South and South-East peaks by Barcelona Exp., '69 (leader, Jose Manuel Anglada).

By these works I found out the under mentioned facts:

1) Although the West (or South-West) ridge of Istor-o-Nal which had been thought to joint directly the Main peak, was not connected with it but with the North peak (see Fig. II).
Two peaks were identified anew. They were the West peak 2(ca.7,280 m) near the North peak and the West peak 1 (ca. 7,300 m) near the Great Saddle.

2) The peak that was reached by the Jungfrau group was one of the peaks on the West ridge (ca. 7200 m). KGUE '69 climbed the same one. Accordingly, I presume the peaks attained by the previous expedition were those on the West ridge, because there were no descriptions of the Great Saddle which lay between the West ridge and the Main peak, although they had said to have approached or climbed the Main peak. (suggestions by Adolf Diemberger and Kult Lapuch).

3) J.M. Anglada, the leader of the Barcelona Exp., climbed down to the Great Saddle from near the Rock Pinnacle (Monolith) on the West ridge. Setting up C 6 (7,600 m) on August 12 th, they crossed the Couloir 1 and Grat 2, and traversed the 2 peaks…South peak (7,303 m) first, then South-East peak (7,365 m)…and reached the Main peak (7,403 m) from the upper Couloir 2. This was the first ascent of the highest peak of the Istor-o-Nal group. They then climbed down directly to the Great Saddle.

4) 7,373 m North peak was climbed for the first time by K. Lapuch's party on June 29 th, 1967. The North-East peak still remains virgin.

In these identifications I was happily offered many valuable informations from Dr. Adolf Diembergers, Kurt Lapuch and J.M. Anglade by the kind arrangement of I. Yoshizawa, the Vice-President of the JAC. I am very glad to have a chance to express my hearty thanks to the above mentioned outstanding mountaineers and some members of the Japanese expeditions who have helped me much in this work.

海外登山年表＝1968年＝

(Japanese Overseas Expeditions in 1968)

松田雄一・中島　寛編

1968 年に日本から海外にでかけた隊の総数は，65 隊 231 名に達している。しかし記録面からみると低調であった。これは日本隊だけでなく，各国の登山隊にもいえることで，ネパールの登山禁止，印パ動乱につづく政情悪化のため，パキスタン政府がカラコルム入りを許可しないことに起因しているといってもよい。そのため 7000 m 以上のピークの初登頂が，オーストリア隊によるディラン峰だけという，近年にない低調な年であった。

日本隊の中で国際的にみて優れているのは，日本大学グリーランド横断隊の記録である。人間の足だけに頼ってのグリーランド横断の記録としては，ノルウェーのナンセン，イギリスのシンプソン隊に次ぐ，史上三度目の快挙であるが，北極圏沿いに 60 日を要して 800 km に及ぶ横断をなしとげたことは，その踏破距離において前二者をはるかにしのぎ，イギリス，デンマーク等で高く評価されている。

ペルー・アンデスでは，技術的に困難なサルカンタイ峰（6271 m）の南稜を，愛知県山岳連盟の登山隊が完登したが，このルートからの初登攀は，特にペルー・アンデスが数十年ぶりの悪天候であっただけに，素晴らしいものであった。

女性だけの登山隊，女性山岳同人「ユングフラウ」の佐藤京子氏他 2 名による女性隊のイストル・オ・ナールの登頂も特筆すべきものであった。正確には主峰に立ったのではなかったが，女性隊員のみによる 7000 m 峰の登頂は賞讃に価するものである。

一方ヨーロッパ・アルプスの壁では，東京北稜山岳会のパーティーが，エギーユ・ド・ブレチエール西壁の積雪期登攀を行なったほか，夏のシーズンには多くの壁の登攀が行なわれた。特に 1968 年夏のシーズンのアルプス地方の天候は，悪かったにもかかわらず，アルプスの三大北壁といわれるグランド・ジョラス北壁のウォーカー稜を 4 パーティー 14 人，マッターホルン北壁も 3 パーティー 10 人が登攀しており，今や日本のクライマーはヨーロッパ・アルプスの壁を，完全にこなすころまで成長していることを実証した。

しかしながら 1968 年の日本隊で目につくことは，海外登山での遭難事故が多かったことである。約 360 名の海外登山者の中，5 件 8 名の遭難死者（死亡率 2 %）を出している。しかも，いずれも比較的簡単な場所でのスリップ（高度障害が原因），雪崩によるもので，伸びきった日本の海外登山に足もとをみつめさせるべき警鐘を与えている。

参考までにこの 65 隊に登場した参加者の延人数は 231 名だが，このうち女性は 10 名，本会会員は 83 名が（表中会員には＊印を付してある）参加しており，本会会員がほとんどの隊の中心として活躍していることは，例年のとおりである。

なお今回はエベレスト登山隊出発直前という多忙な時期にもかかわらず，「山岳」編集担当理事の中島寛君が，殆んど一人で全部を整理編集にあたられたことを付記しておく。（松田記）

ヒンズー・クシュ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
※ 1	1968.5～8	Peak X (6026 m) の初登頂ほか	**大垣市制 50 周年記念ヒンズー・クシュ・ヒマラヤ遠征隊** (Ogaki Hindu-Kush Expedition 1968) **隊長**＝武藤嘉彦(42) **副隊長**＝高木碕男(45) **隊員**＝高木泰夫(38) 林正陽(34) 佐久間修(31) 犬飼進(24) 川合伸雄(21) **隊医**＝瀬川昴生(27) **報道**＝安藤好男(43) **通訳**＝Nasurulah Noorisiani (28) **行動概要**：6月 20 日カブール発，パンジシール谷を遡行し，6月 26 日アンジュマン到着。6月 27 日から7月2日かけてバガール谷の偵察を行ない，6月 29 日佐久間，犬飼，川合が 5050 メートル峰に初登頂，Koh-i-Stara (星の峰)と命名する。7月7日ノゴルガイ氷河末端に BC (3900 m)建設。7月8日 C1 (4400 m)，9日 C2 (5200 m) 建設，7月 19 日犬飼，川合が Peak X (6026 m) に初登頂，Sha-i-Anjuman 5585 m (アンジュマンの王) と命名する。7月 22 日高木(泰)，林，佐久間，犬，川合，瀬川の6名は 5585 m 峰に初登頂し Koh-i-Ogaki と命名。7月 24 日 BC を撤収，ケロンジュルム，ファイザバード，クンズーズを経由して8月 10 日カブールに帰着。 **文献**：大垣市ヒマラヤ委員会編「シヤー・イ・アンジュマン登頂」(1968 年7月 10 日発行)，「岳人」262 号 (1969 年5月) JAC 会報「山」27 号 (1968 年9月)，「山岳」64 年 80 頁参照。
2	1968.6～8	コー・イ・バンダコール Koh-i-Bandakor (6843 m) 登頂と周辺の踏査	**愛知学院大学ヒンズー・クシュ学術遠征隊** (The Japanese Scientific and Mountaineering Expedition to H.K., 1968) **隊長**＝湯浅道男(31) **隊員**＝†黒宮義孝(23)大野紀和(23) 伊藤一之(20)伊藤正人(20) 伊藤賢治(20) 浅井修二(20) **通訳**＝Nagibulla Ayub (28) **行動概要**：7月8日カブール発，ファイザバード経由で7月 12 日ハザラド・セイ着，7月 18 日ケロン着，7月 21 日サキ谷の 4400 m 地点に BC 建設。7月 28 日 C2 (6050 m) を出発した伊藤 (正)，黒宮両隊員はビバークの後7月 29 日コー・イ・バンダコール (6843 m) の第7登に成功。しかし，黒宮隊員は帰路 6700 m 地点で転落，行方不明となる。3日間の全員による捜索にもかかわらず，遺体は発見できず8月 11 日 BC を撤収ファイザドードを経由して8月 11 日カブールに到着。 **文献**：「岳人」256 号 (1968 年 11 月)，湯浅道男編「愛知学院大学遠征隊仮報告書」(1968 年刊)。

3	1968.6〜8	イブラール・リッジ主峰の偵察とイブラール・リッジ北峰 Ibrahl Ridge North (5438 m) の初登頂	**立正大学ヒンズー・クシュ登山隊 1968** **隊長**=*望月恭一(34)　**副隊長**=*鈴木英雄(30)　**隊員**=*森田洋史(26)後藤喜久夫(21)望月敏夫(21)　**リエゾン・オフィサー**=アヒドラ・ハーン　**通訳**=アビドラ・ハーン **行動概要**：7月 10 日カブール発，パンジシール川を遡り，アンジュマン峠経由で7月 16 日ケロン着。サキ谷からイブラール谷に入り，7月 20 日 BC(4000 m)建設。7月 22 日 C1 (4300 m), 7月 25 日 C2(4600 m)を建設，7月 26 日，鈴木，後藤の2名がイブラール・リッジ北峰 (5438 m) に登頂。8月2日 BC を撤収，8月 11 日カブールに帰着。 **文献**：望月恭一編「立正大学ヒンズー・クシュ隊の報告」(1969 年刊)。
※ 4	1968.5〜9	ランガール主峰 Langar I (7016 m) の第二登	**早稲田大学ヒンズー・クシュ遠征隊**(Waseda University Hindu-Kush Expedition) **隊長**=*立花種則(31)　**隊員**=*鈴木理己(24)*野口勝志(25)　**リエゾン・オフィサー**　=Captain Nasib **行動概要**：7月 21 日チトラル発，7月 27 日ジワール・ゴルの 4000 m 地点に BC 建設，8月2日，C1 (4300 m)，8月5日 C2 (4500 m)，8月 10 日 C3 (5100 m) 建設。8月 11 日，C2 から附近の 5600 m 峰に登頂。8月 16 日 AC(6200 m) 建設，8月 18 日ランガール主峰に登頂 (第2登)。8月 25 日 BC を撤収し，9月1日チトラルに帰着。 **文献**：「山岳」64 年 60 頁参照。
5	1968.5〜9	イストル・オ・ナール東峰 Istor-o-Nal E. の試登と高所医学の研究	**札幌医科大学山岳部第1次ヒンズー・クシュ遠征隊** (The First Expedition of Sapporo Medical College Alpine Club to Hindu-Kush) **隊長**=*松浦正司(28)　**隊員**=*村田俊雄(32)　*西尾彰(25)　*中村哲彦**リエゾン・オフィサー**=Captain Munawar Khan(28) **行動概要**：7月 20 日チトラル発，7月 26 日南アターク氷河 4300 m 地点に BC 建設。8月1日 C1(4800 m) 8月 18 日 C2 (5500 m)，8月 21 日イストル・オ・ナール東峰と南アターク峰とのコルに C3 建設。8月 22 日松浦，西尾，中村の3名で南アターク峰 (6241 m) の登頂に成功。8月 23 日下山の途下，5300 m 地点で村田隊員が 15 m ほど滑落，クレバスに落ち，頭部損傷により意識不明となる。8月 31 日 BC 撤収，9月4日チトラル着。村田隊員は9月1日死亡。 **文献**：札幌医科大学山岳部編「第1次ヒンズー・クシュ遠征隊報告書」(1967 年7月)。

6	1968.6～8	ディル・ゴル側からティリチ・ミール試登	**東海大学山岳部第2次ヒンズー・クシュ遠征隊** (The 2nd Expedition to Hindu-Kush of Tokai University Mountaineering Club) **隊長**＝*岡本竜行(32)　**隊員**＝鈴木政孝(23)和田博文(19) **行動概要**：6月 28 日チトラル発，7月2日ディル・ゴル氷河 4300 m 地点の堆石上に BC 建設。7月15日ディル・ゴル側から頂上へ抜ける唯一のルートと思われるバットレスに取り付くが，危険なので退く。7月 16 日～17 日鈴木，和田の2名が BC 北西の 5579 m 峰に登頂する。7月 20 日 BC をゴシャネル・ゴルに移す。7月 27 日 S·G ピークから西にのびる山稜(約 6000 m)に出てひきかえす。7月 31 日 BC 撤収，8月3日チトラルに帰着。 **文献**＝JAC 会報「山」281 号 (1968 年 11 月)「東海大学新聞」1968 年8月号,「岳人」260 号 (1969 年3月)
7	1968.8～9	シャー・フラディ登頂。	**独標登高会員の個人山行** **隊員**＝*岡本竜行(32)，*芦谷洋子(24) **行動概要**：8月 19 日バーミヤン発，BC (3800 m)建設。8月 20 日シャー・フラディ登頂。8月 24 日 BC を撤収，バーミヤンに到着。 **文献**：JAC 会報「山」281 号 (1968 年 11 月号)，「岳人」260 号 (1969 年2月)。
8	1968.6～8	イストル・オ・ナール峰の偵察と現地事情調査	**立教大学ヒンズー・クシュ学術調査隊 (1968 年)** (Hindu-Kush Research of the St. Paul's (Rikkyo) University) **隊長**＝*西川益生(36)　**隊員**＝*山野井武夫(33)　**ハイポーター**＝Ajia-du-din (35), Wilart Shar (28) **行動概要**：6月 22 日チトラル発，6月 30 日ティリチ・ミール氷河上 4300 m 地点に BC 建設。イストル・オ・ナールの登路偵察(6000 m まで) とアッパー・ティリチ・ミール氷河の偵察を行ない，7月 14 日 BCを撤収，7月19日チトラルに帰着。その後西川は7月27日～8月1日ギルギットに滞在し，現地事情調査を行なう。 **文献**：未刊。
※ 9	1968.6～8	イストル・オ・ナール西尾根の1峰 A Peak on Istoro-Nal West Ridge (7200 m) の第2登	**日本婦人西アジア親善隊** (Japan Women's West Asian Expedition) **隊長**＝*佐藤京子(29)　**副隊長**＝*渡部節子(29)　隊員＝*芦谷洋子(24) **行動概要**：トルコでの山旅を終え，6月 30 日チトラル発．7月6日 BC (4400 m) 建設。7月 14 日 C1 (5300 m)，7月 22 日，C2 (6200 m)，7月 26 日 C3 (6500 m) 建設。7月 29 日ビバークの後イストル・ナ

			ール西尾根上の1峰の第二登に成功し，その日も 7100 m 地点で第2回目のビバーク，7月 30 日 C3 に帰る。8月2日 BCを撤収し，8月7日チトラルに帰着。 **文献**：「山岳」64 年 69 頁参照。JAC 会報「山」281 号（1968 年 11 月），「山と渓谷」（1968 年 11 月号），佐藤京子編「トルコからヒマラヤへの山旅」（同人ユングフラウ，1968 年 11 月刊），佐藤京子編「ヒマラヤ 7403 メートル」（1969 年5月，あかね書房刊）。

ヒンズー・ラジ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
10	1968.6～9	ブニ・ゾム山群の踏査	**法政大学ブニ・ゾム登山隊** **隊長**＝大屋悌二(34)　**隊員**＝西尾勝男(25)杉山勝(24)岡建治郎(23)西田哲弥(22)山田真行(21)福重憲嘉(21)下郷昭(21)上北和夫(21)　**隊医**＝野原士郎　**リエゾン・オフサー**ニマホメッド・サディック(32) **行動概要**：7月 22 日チトラル発，7月 28 日BC (4450 m) 建設。ブニ・ゾム本峰は雪の状態並びに隊員の体調悪く断念，ブニ・ゾムの山群の2峰に登頂。8月 10 日 BC 撤収，8月 16 日チトラルに帰着。 **文献**：法政大学体育会山岳部編「ブニ・ゾム登山報告書」（1968 年 12 月）。
11	1968.6～9	コヨ・ゾム Koyo-Zom の試登とヤルフン川流域の調査	**RCC II・フラッテロ第2次チトラル踏査隊**(RCC II and FRATELLO's Second Chitral Expedition) **隊員**＝雁部貞夫(29)†橋野禎助(30)†剣持博功(23)　**通訳**＝Saeed Ahmad **行動概要**：7月 11 日チトラル発，マスツジ川，ヤルフン川を遡り，7月 24 日ベチウスに BC (3400 m) 建設。7月 28 日雁部，橋野，剣持の3名でイシュペル・ドーム Ishper Dom (c. 5900 m)，雁部，橋野の2名でフラッテロ・ゾーム Fratello zom (c. 6200 m) に登頂。コヨ・ゾームは氷河の片態悪く断念。8月8日橋野，剣持の2名がコヨ・ゾム西面コタルカシュ氷河に入るが，そのまま行方不明となる。雁部は8月 16 日以降同氷河およびギルギット方面を捜索するも発見できず，8月29 日チトラルに帰着。 **文献**：「岳人」259 号（1969 年2月）。
12	1968.6～7	コヨ・ゾムの試登とヤルフン川流域の調査	**学生ヒマラヤ学術調査隊 1968 年**（Japan Himalaya Academic Expedition of Studies) **隊員**＝高木信明(22 北大) 三瓶清明(22 王川大) 上原博和(22 中央大)

			行動概要：6月4日チトラル発，マスツジ川，ヤルフン川を遡り，6月 19 日ベチウスに BC(3400 m) 建設。コヨ・ゾムを試登した後7月3日 BC を撤収，シャー・ジナリー峠 Shah Jinali An を越え，7月 11 日，シャー・ジナリー氷河 4300 m 地点に BC 建設。シャージナリー氷河，オチヒリ氷河を踏査，7月 21 日 BC を撤収し，リチ・ゴル，ツリコー川を下って7月 31 日チトラルに帰着。 **文献**：「山と渓谷」374 号 (1969 年 11 月)。
13	1968.6～9	ヒンズー・ラジの踏査とゴラッシュ・ゾム Gorash Zom (6100 m) の初登頂	**学習院大学輔仁会山岳部ヒンズー・ラジ遠征隊** (Gakushuin University Hindu-Raj Range Expedition) **隊長**＝*賛田統亜(29)**隊員**＝時田昌幸(21)*千木良滋夫(19) **行動概要**：7月6日チトラル発，マスツジ川を遡り，7月 14 日ゴラッシュ・ゴル 4770 m 地点に BC を建設。7月 21 日 C1 (5470 m) 建設。7月 25 日，賛田時田，千木良の3名で，ゴラッシュ・ゴル，リシュト氷河，ガゼン氷河を分ける無名峰 (6100 m) に初登頂，ゴラッシュ・ゴルと命名。7月 28 日 BC を撤収，ヤルフン川を遡り，8月2日ベチウスに着く。8月4日コタルカシュ氷河から 6660 m の無名峰 (グルーバーのいうトゥイII峰) に向かったが，悪天のため，8月8日 4270 m までひきかえす。8月 12 日帰路につき，8月 22 日チトラルに帰着。 **文献**：学習院大学輔仁会山岳部編「ヒンズーラジ遠征隊報告」1968 年6月)。

カラコルム

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
14	1968.7～8	スワート・ギルギット・フンザ周辺の山々の踏査	**北海道大学山岳部員の個人山行** **隊員**＝*石井宇一郎(24)小林敦(23)飯豊利秋(23) **通訳**＝Hobibra Khan **行動概要**：7月 10 日ラワルピンディ発，スワート・ギルギット両州界のダ・ダリリ・アン (5060 m) を経て7月 25 日ギルギット着。7月 30 日ギルギット発バルチット着，8月2日裏山の氷河を 5000 m 付近まで登る。8月4日バルチットをたち，ハサナバード氷河，ムチュアー氷河を遡行して．4500 m の最奥部に達し，8月12日バルチット着，8月 14 日ギルギットに帰着。 **文献**：未刊

15	1968.7～10	ヒスパー氷河周辺の探査	**西山会西カラコルム捜査隊** (West Karakoram Expedition '68) **隊長**＝真壁功英(30)　**隊員**＝斉藤周保(26)石井竜介(24) **通訳**＝ヒダヤット・シャー(38) **行動概要**：8月20日ギルギット発フンザ着。8月24日フンザ発 24 日ナガール着。8月 27 日ナガールをたってヒスパー河を遡り，8月 29 日カニバサー氷河手前に BC 建設。9月7日ヒスパー氷河を遡り，ヒスパー峠に達しビバーク，9月8日 BC に帰着。9月 11日～12日カニバサー氷河の踏査を行ない，9月 13 日 BC 撤収 9月 14 日ナガール着，9月 18 日ギルギットに帰着。 **文献**：「岳人」257 号 (1968 年 12 月)。

パンジャブ・ヒマラヤ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
※16	1968.4～7	カイラス峰 Kailas (5656 m) の登頂と日印親善	**日印合同婦人ヒマラヤ登山隊** (The Indo-Japanese Women's Expedtiion to Chamba Area, 1968) **隊長**＝Miss Nandini M. Patel (25)　**副隊長**＝*宮崎英子(35)　**隊員**＝*三島蓉子(33)*須田紀子(27)*折井正子(25) Miss Dolly B. Shaher (30), Miss Kokila B. Mehta (25), Miss Daphne Z. Khiangte (25), Captain Shashi Kanta (32) Dr.　**隊医**＝Meena Agrawal(24)　**シェルパ**＝Kundar Singh (23), Sher Singe (21), Dorjee (22), Nina Wangchen (21), Pemba Tharkey (25), Sona (35) **行動概要**：4月 27 日ニュー・デリー発，チャンバよりラビ川を遡り，5月2日クグチ着 BC 建設。5月7日 C1 (3500 m)，5月 12 日 C4(4510 m) 建設，5月 13 日全員でカイラス峰 (5656 m) に登頂。5月 16 日クグチに帰着。5月 18 日クグチをたちサナクデンクジョットに向かう。5月 24 日無名峰 (5575 m) 登山中，雪崩によりシェルパ1名を失う。直ちに登山を中止し，6月4日ニュー・デリーに帰着。 **文献**：JAC 会報「山」276 号～277 号 1969 年6月～7 月号)，日印合同婦人ヒマラヤ登山委員会編「1968年日印合同婦人ヒマラヤ登山隊報告書 (1968 年 12 月，日本山岳会刊)，「山岳」64 年126頁参照。
※17	1968.4～7	バランマ山群の踏査およびバランザール峰の試登	**登歩渓流会パンジャブ・ヒマラヤ踏査隊** **隊長**＝†小原ケイ(40)　**隊員**＝山田長政(26) 吉野勲(25) **シェパ**＝リンジン(27)　**ハイポーター**＝パサン(24)ギャルツェン(22) **行動概要**：6月6日キストワール発，マロー川を遡り，

			6月 11 日 BC(3230 m) 建設。6月 13 日 C1(3870 m) 6月 14 日 C2 (4530 m)，6月 16 日， C3 (4850 m) を建設。6月 18 日小原，山田，吉野，リンジンの4名でバランザール峰の登頂を目指して C3を出発，6月 20 日頂上直下 80 m 地点でひきかえす。6月 24 日，下山中 5700 m 地点で小原が滑落，行方不明となる。山田，吉野は6月 26 日 BC に下山，7月3日キストワールに帰着する。 **文献**：登歩渓流会編「山旅のらくがき」(1968 年 12 月),「岩と雪」14 号 (1969 年4月),「山岳」64 年 121 頁参照。
18	1968.7～8	ラホール・ヒマラヤの調査	**アルパインクラブ・ケルン・ラホール・ヒマラヤ踏査隊** (A.C.C. Lahul-Himalaya Expedition) **隊長**＝中井義博(34)　**隊員**＝高延公彬(28) **行動概要**：8月7日クルーをたちマナリ着。8月 11 日マナリをたちラコ，コクサルを経てケロングに至り，8月 15 日マナリに帰着。その後マナリにて次回登山の交渉を行ない，8月 18 日クルーに帰る。 **文献**：未刊

トルコ・イラン

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
※19	1968.4～5	アララット山 (5165 m) とデマバンド山 (5670 m) の登頂とジロ山群の偵察	**日本婦人西アジア親善隊** (Japan Women's West Asia Expedition) **隊長**＝*佐藤京子(29)　**副隊長**＝*渡部節子(29)　**隊員**＝*芦谷洋子(24)泉久恵(26) **行動概要**：4月 18 日アンカラ発，15 日ドウバヤジット集結，4月 18 日入山，4月 20 日 AC 建設，4月 21 日アララット山に登頂，4月 23 日ドウバヤジットに帰着。4月 30 日ハッキリアリ発ジロ山群に入る。天候悪く，最高峰レシュコ (4135 m) の登頂は出来ず，5月 10 日下山。イランに移動し，5月 25 日テヘラン発 5月 28 日デマバンド山に登頂し，5月 30 日テヘランに帰着。 **文献**：「山岳」64 年 69 頁参照。JAC 会報「山」281 号 (1968 年 11 月)。「山と渓谷」362 号 (1968 年 11 月刊)。佐藤京子編「トルコからヒマラヤへの山旅」(同人ユングフラウ，1968 年月刊)，佐藤京子編「ヒマラヤ 7403 メートル」(1969 年5月，あかね書房刊)。

アラスカ・カナダ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
20	1968.5～7	バンクーバー峰 Mt. Bancouver(4789m) 南西稜の登攀	**大阪府山岳連盟アラスカ登山隊**　(Osaka Alaskan Expedition 1968) **隊長**＝*桑原信夫(36)　**隊員**＝†沢田康博(26)*河田徳次(27) †西川好一(27)上田修一(29)†宮本敏明(25)水田恵夫(25) 柴田勝(24)木村正一(20)清水寛治(24) **行動概要**＝5月 20 日本隊，先発隊シアトルを出発，カナダ経由陸路ユーコンに向かう。5月 25 日登山基地クルアーネ着。5月 28 日ビーバー機4便でセワード氷河に入る。5月 30 日最高キャンプ(4250 m)を建設し，6月 10 日柴田，木村の名がサウス・ビークの登頂に成功。しかし第2登攀隊のうち沼田，西川，宮本の3名が6月 10 日 C2直下で雪崩にあって遭難。6月日 BC 撤収し，6月 27 日クルアーネへ帰着。 **文献**：大阪府山岳連盟編「アラスカ遠征登山報告書」(1968 年 10 月)，「岳人」259 号 (1969 年2月)。
21	1968.5～9	スティール峰 Mt. Steele (5080 m) とウォルシュ峰 Mt. Walsh (4600 m) の登頂ならびにユーコン，アラスカ各地における氷河と植生の調査	**神戸大学ユーコン学術登山隊**　(Kobe University Scientific Research and Climbing Pary to Yukon) **隊長**＝*中西哲(39)　**副隊長**＝坂本享(27)　**隊員**＝*増田正勝(39) 中園卓爾(24) 坂西俊一(21) 中村正男(21) 井上達男(20) **行動概要**：6月 15 日ヘインズ雄結，6月 19 日クルアーネ湖の基地着。6月 28 日ドンジェク氷河 3000 m 地点に BC 建設。7月7日ドンジェク氷河，スプリング氷河，ウォルシュ氷河の源頭部基部に ABC (4500 m) 建設。7月 18 日坂本，中園，中村，坂西の4名で東南稜からスティール峰の登頂に成功 (第7登，東南稜からは第2登)。7月 22 日隊長を除く6名でウォルシュ峰に登頂 (第5登)。7月 24 日ヘリコプターでクルアーネ湖へ下山。その後，氷河と植生の調査をして8月 25 日アラスカを発つ。 **文献**：神戸大学山岳会・山岳部「山と人」第3号，神戸大学ユーコン学術登山隊特集号。
22	1968.6～7	ウォディントン Mt. Waddington (4041 m) の登頂	**大阪府山岳連盟（大阪登峰会）カナダ登山隊** **隊長**＝神藤裕二(35)　**副隊長**＝清水敏一(32)　**隊員**＝岳部恒代(28)津田敬(29)柴田輝雄(27)高橋之術(25)河本博光(21) **行動概要**：6月 22 日ゴースト湖の登山基地発，タイドマン氷河を遡り，6月 28 日ウォディントン東稜末端レニー・ノブに BC 建設。6月 30 日 C1 (3100 m)，7月1日，C2 (3400 m)，7月2日 HC (3700 m) を建設

			7月3日柴田，高橋，河本の3名で東南壁からのウォディントン主峰（4041 m）登頂に成功。HC からの所要時間は 13 時間。7月5日清水，柴田，岳部，斉藤の名でウォディントン前衛峰(スピアマン・ピーク 2650 m）に北稜から登頂。7月6日全員でブラボー・ピーク Pivot Dome（3550 m)に登頂。7月8日 BC を撤収，7月 13 日ゴースト湖に帰着。 **文献**：「岳人」258 号（1969 年1月)。
23	1968.5～6	セント・エライアス山群キングピークの試登	**恋嶺山岳会カナダ・キングピーク調査隊** **隊長**＝相田昭(22)　**隊長**＝中台久雄(22) **行動概要**：6月4日ホワイトホースよりビーバー機により入山，キングピーク峰南稜末端に BC（2800 m）建設。6月5日から6月 15 日まで南稜の試登(3400 m の岩稜帯まで）ならびに南面の偵察を行なう。6月 18 日 BC を撤収し，ビーバー機でホワイトホースへ下山。 **文献**：相田・中台編「カナダ・キングピーク調査隊報告書」(1968 年8月 20 日）恋嶺山岳会発行，JAC 会報「山」279 号（1968 年8月)。
24	1968.7～8	チュガチ山群マーカスベーカー峰 Markus Baker（4016 m）の登頂	**青山学院大学アラスカ登山隊** **隊長**＝栗林一路(42)　**隊員**＝小倉雅之(24)土田紘介(23)坂井義隆(23)青柳一雄(21)菅昭(19) **行動概要**：7月 20 日ガードウッド発，クリニック氷河上 2500 m 地点に BC 建設。7月 21 日～22 日，偵察および AC 建設。7月 23 日青柳，土田の2名でマーカス・ベーカー峰（4016 m）登頂，続いて 24 日小倉，坂井の2名で第2次アタックに成功，7月 25 日 BC 集結。7月26 日 8～月5日悪天のため停滞，8月6日BC 発，ガードウッド着。この間，8月3日 BC 付近のクリニック峰（4000 m）に土田，青柳，菅で試登した。 **文献**：「山岳」64 年 117 頁参照。
25	1968.9	サンフォード峰 Sanford (5940 m)の単独登頂	**明治大学山岳部 OB の個人山行** **隊長**＝植村直己(27) **行動概要**＝9月 19 日単独でサンフォード峰（5940 m）登頂。 **文献**：未刊

アンデス・パタゴニア

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
※ 26	1968.5～8	キムサクルス山群 Cordillera Quimza の未踏峰の登頂とサ	**栃木県山岳連盟南米アンデス親善登山隊**（Bolivia Andes Mountaineering Expedition of Tochigi, Japan 1968)

		ハマ Sajama およびイリマニ Illimani の登頂	**隊長**＝*阿部重男(36) **副隊長**＝小林守志(37) **隊員**＝長谷川正(36)寺内真治(30)今井仁(30)*大野宏(28)*小島守夫(28)荻野憲(27) **現地参加**＝小島進(34) **報道**＝亀岡武彦(34) **ポーター**ニボニファシオ(37)セバスチャン・コルケ(18)エステバン・チッケ(不明) **ボリビア側隊員**(ボリビア山岳会)＝Ronny(22) Ibata(22) Alfred Martinez **行動概要**：5月 28 日ラパス発，トラックでキムサクルス山中チョケタンガ部落に到着。29 日から6月1日にかけ，リャーマでサンエリケ峠を越え BC (4700 m) を建設。6月2日，3日サンフェリペ (San Felipe) 南西氷河を遡り AC 建設 (5240 m)。4日小林，寺内，大野，小島守，サンフェリペ (5700 m) 初登頂。5日長谷川，今井，大野，アルチネスーがサンフェリペ登頂。続いてヨコカワ (本隊命名峰,5680 m) に登頂。6日阿部，寺内，荻野がサンフェリペ，ヨコカワ登頂。7日小林，小島守，ヨコカワ登頂。9日小林，寺内，トチギ峰 (本隊命名 5730 m) 登頂。10 日阿部，今井，大野，荻野，シモツケ峰 (本隊命名，5750 m) 登頂。11 日長谷川，小島守，ニッコウ峰 (本隊命名，5750 m) 登頂。6月14日 BC をキムサクルス山群西面のチョーヘナコタ部落奥に移動。17 日ハチャクノ氷河を遡り，AC 建設。18 日寺内，今井，大野，荻野 Jachacunocollo (5950 m) 登頂。7月4日阿部，寺内，大野，荻野，ローニ，サハマ (6531 m) 登頂。7日小林，長谷川，今井，小島守，マルチネス，同峰登頂。26 日阿部，寺内，イリマニ南峰 (6450 m)，小島守，荻野，イリマニ北峰 (6480 m) 登頂 27 日今井，大野，イリマニ3峰縦走終わる。 **文献**：栃木県山岳連盟南米アアンデス親善登山実行委員会編「南米アンデス親善登山報告書」(1969年5月 30 日，「山岳」64 年 101 頁参照。
27	1968.4～12	サルカンタイ Salcantay(6271 m) 南稜初登攀およびその他の登頂	**愛知県山岳連盟ペルーアンデス遠征隊** (La Expedicion Japonesa A Los Andes Peruanos 1968 Al Mt. Salcantay) **隊長**＝加藤幸彦(35) **副隊長**＝加藤英生(31) **隊員**＝曽我勤昭(26)朝日功(26)武田睦男(30)牧野仁雄(26)山本積(24) **ポーター**ヴィクトリオ・アンヘレス (プランカ山群) **行動概要**：6月 17 日先発名リマ発，6月 25 日 BC 建設。6月 26 日から7月 20 日まで 25 日間をかけてサルカンタイ南稜の登攀を行ない，7月 17 日加藤(幸)加藤(英)，曽我，朝日の4名で新ルートからのサルカンタイ Salcantay (6271 m) 登頂。続いて7月 20 日から8月6日まで 16 日間でソライ峰 Soray(5830 m) 南稜の登攀を行ない，8月4日加藤(幸)，曽我，牧野，山本

			の4名で南稜からの新ルートによる登頂に成功。8月9日BCを撤収し，コルディエラ・ブランカに向かう。8月 26 日BC建設。8月 26 日から9月2日まで8日間でワスカランの登頂を試み，8月 31 日加藤(英)，武田の2名がワスカラン南峰 Huascaran S. (6768 m) に，加藤(幸)，牧野，山本の3名がワスカラン北峰 Huascaran N. (6655 m) に登頂。その後2隊に分かれて一隊はパロン谷に，一隊はヤンガヌコ谷に入り，ヤンガヌコ谷に入った加藤英，牧野は9月8日ピスコ峰 Pisco (6000 m) に中央稜から登頂。曽我，山本は9月7日ヤナパクチャ北峰 Yanapaccha N. (5350 m) に登頂した。9月14 日リマ着。 **文献**：「岳人」258 号 (1969 年1月刊)，「山と渓谷」363 号 (1968 年 12 月)。
28	1968.5～10	アキルポ峰 Akirpo (5560 m) の初登頂とピスコ東峰 Pisco Este (6000 m) の第5登その他	**東京歯科大学山岳会ペルー・アンデス遠征隊** (Dental College de Tokio "La Expedicion de Peru Andes") **団長**＝渡辺富士夫(46)　**隊長**＝依田雄弘(31)　**副隊長**＝松島静吾(31)　**隊員**＝加藤喜代次(28)山口勝康(27)酒井優(25)朝浪惣一郎(25)　**ポーター**パブロ・モラレス，マルセリーノ・モラレス，オノラート **行動概要**：6月 20 日ワラス発，6月 28 日BC (4700 m) 建設。7月2日加藤，酒井，パブロがアキルポ南 Akirpo S.(5520 m) 峰に登頂 (第3登)。7月 12 日松島，朝浪，依田，山口の4名でアキルポ峰 Akirpo (5560 m) の初登頂に成功。7月 15 日BCを撤収してワラスに帰着。7月 23 日ヤンガヌコ谷 4500 m に BC 建設 8月4日朝浪，酒井がピスコ東峰 Pisco Este (6000 m) に登頂 (第5登)，8月9日依田，松島，加藤，山口，朝浪，マルセリーノの6名でヤナパクチャ峰 Yanapaccha (5380 m) 登頂 (第4登)。8月 13 日BCを撤収し，8月 15 日ワラスに帰着。 **文献**：未刊
29	1968.9～1969.1	サンチャゴ周辺の山およびパイネ山群の偵察	**東京歯科大学山岳会員の個人山行** **隊員**＝依田雄弘(31) **行動概要**：チリ一人登山家とサンチャゴ周辺の Peñon de la perla (4200 m) 登攀，および単独でパイネ周辺 (10 月 17～25 日) と中部アンデス・セロ・モラド (5060 m) (11 月 24 日) 等試登する。 **文献**：未刊
30	1968.2	アコンカグア峰 Aconcagua (6960 m) の単独登頂	**明治大学山岳部 OB の個人山行** **隊員**＝植村直己(28)

ヨーロッパ・アルプス

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
31	1968.2～4	チベッタ北西壁（ゾレーダーレッテンバウワールート）の冬季試登	**G.H.M.J.（グループ・ド・オート・モンターニュ・ジャパン）隊** **隊長**＝*芳野満彦(36)　**隊員**＝福田三男(24)手島正俊(22) **行動概要**：ミュンヘンから自動車で入り，3月1日最終ベースのアレゲー Allege 着。3月3日から 18 日までの 16 日間にわたってバッツォーラ小屋 Rib. Vazzoler から Torre Trieste アタックするも中退，またティシ小屋 Rif. Tissi から Civetta 北西壁（ゾレーダーレッテンバウワールート）にアタックしたが，降雪量多く，手島神経痛のため下山し，結局時間切れで中途下山した。 **文献**：未刊
32	1968.2～9	冬季グランド・ジョラス北壁ウォーカー稜の試登，エギーユ・ド・ブレチエール西壁の冬季登攀および氷壁ルートを中心とした夏季アルプス各ルートの登攀	**東京北稜山岳会ヨーロッパ・アルプス登攀隊** **隊員**＝南川和男(26)野口久義(23) **行動概要**：2月 25 日シャモニ着，準備に入り，3月4日～5 日グランド・ジョラス北壁の偵察。3月8日～17 日グラン・カピュサン東壁の試登を行なうが，降雪のため敗退。3月 26 日～31 日，快晴に恵まれ，エギユ・ド・ブレチエール西壁の冬季登攀に成功，3月 31 日にシャモニ帰着。夏季の行動は別行動。 〔南川〕6月 28 日，岩沢（府中岳嶺会），大曽根（霧峰山岳会）でエギーユ・ド・ミディ南壁コンタミヌルート 7月 13 日～15 日，南川，岩沢でグランド・ジョラス北壁ウォーカー稜，7月 20 日～22 日，南川，大曽根佐藤（無所属），小倉（ブッシュ山の会）でモンブラン登頂。7月 27 日～29 日，南川，岩沢，佐藤，武藤（グループ・ド・ボエーム）でツールロンド北壁～ダン・デュ・ジェアン～エギーユ・ド・ミディ（レビュファルート）の縦走。8月5日，南川，岩沢，佐藤，小倉でマッターホルン北壁試登，8月8日～10 日，南川，岩沢，佐藤，小倉，平賀（ドイツ留学生）でヘルンリ稜からマッターホルン登頂，8月 24 日～25 日，南川，岩沢，佐藤でエギーユ・ド・ビオナセイ北壁，9月2日，エギーユ・ド・ミディ～エギーユ・ド・ブランの縦走の各登攀を行なう。 〔野口〕6月 22 日，野口，手島（GHMJ），福田（GHMJ)でエギーユ・ド・ミディ南壁コンタミヌルート，6月 26 日同じメンバーでエギーユ・ド・レム北々東カンテ，7月1日，野口，手島でグラン・シャルモ北西稜試登，7月2日～3 日，野口，手島，福田，横尾（日本登

			山学校)，畠山（日本登山学校）でモンブラン登頂，7月10日～12日，野口，横尾，青木（日本登山学校），関野（日本登山学校）でエギーユ・ド・ドリュ西稜試登，7月26日～29日，野口および日本登山学校の横尾，田部井，吉村でアイガー北壁の偵察，8月4日～5日，横尾，田部井，吉村でアイガー北壁の偵察，8月16日～19日，野口，田部井，吉村，須田でマッターホルン北壁登攀の各登攀を行なう。 **文献**：「山と渓谷」361号（1968年10月）。
33	1968.5～6	モンブラン山頂からのスキー滑降	**日本・ヨーロッパ・アルプス・スキー隊** **隊員**＝奥山章(42)　**隊員**＝武藤昭(26)　ルイジ・マリオ(30，イタリー人)　植木毅(31)床野光雄(20) **行動概要**：5月中ユングフラウ・ヨッホ，テオドル・パスでトレーニング，6月12日，モンブラン入山，6月17日ボソン氷河を経て登頂し，植木，マリオの二名，モンブラン北斜面の滑降に成功した。奥山はイタリア山岳会主催のヨーロッパ・アジア・アルピニスト集会に参加，後武藤と共にドロミテ，ブレンタ山群を訪う，8月帰国。 **文献**：植木毅著「氷壁のシュプール」（1969年1月，あかね書房）。
34	1968.6～8	ヨーロッパ・アルプス三大北壁の試登および偵察	**清水山岳会ヨーロッパ・アルプス遠征隊** **隊長**＝滝田博之(26)　**隊員**＝八木豊(25)福木豊治(21)富田文男(23) **行動概要**＝7月5日モンタンベル着，7月6日～7月20日まで，エギーユ・ド・ミディ南壁登攀，ドリュ西壁（中退），グランド・ジョラス北壁（偵察）を行なう。7月21日～7月28日，ツェルマットを中心にマッターホルン登頂，同北壁（偵察）を行ない，7月29日～8月6日アルビグレンを中心にアイガー西壁登攀，同北壁を偵察，8月7日～14日シャモニに移り，モンブラン登頂。 **文献**：未刊
35	1968.6～9	アイガー北壁（試登グランド・ジョラス北壁ウォーカー稜，マッターホルン北壁登攀等	**日本登山学校遠征隊** **隊長**＝横尾康一(25)　**隊員**＝関野寿(20)須田義信(22)三浦峯生(28)青木嘉夫(20)畠山喜代子(26)田部井政信(27)吉村弘治(25) **行動概要**：7月26日～29日横尾，関野，須田，三浦，青木，田部井，吉村，野口（現地合流）でグランドジョラス北壁ウォーカー稜の登攀を行なう。8月1日～12日横尾，田部井，吉村，野口アイガー北壁を狙うも悪天候のため断念，8月16日～19日，田部井，吉村，須田，野口でマッターホルン北壁の登攀。その後，8月

			16 日から8月 20 日にかけて横尾，関野，青木，三浦，丸山でドロミテのチベッタ北西壁を新ルートから登攀。 **文献**：「岳人」261 号（1969 年4月）。
36	1968.6～9	グランド・ジョラス北壁，アイガー北壁（試登），マッターホルン北壁の登攀他	**大阪登攀倶楽部ヨーロッパ遠征隊** **隊員**＝大木誠(32)泉谷房義(27)米本敏雄(23) **行動概要**＝6月 16 日シャモニ入り，6月 22 日エギーユ・ド・ミディ南壁登攀，6月 28 日グラン・カピュサン東壁登攀，7月1日モンタンベールに移動，7月3日～4 日ドリュ南西岩稜登攀，7月 10 日～11 日グランド・ジョラス北壁登攀，7月 19 日グリンデルワルトに移動，7月 28 日アイガー北壁下部の試登，7月 30 日泉谷，米本の2名でアイガー北壁に向うが退却，8月 19 日ツェルマットに移り，8月 22 日～23 日マッターホルン北壁の登攀，9月2日ブラント・アルバータ西壁登攀を行なう。 **文献**：「岩と雪」13 号（1968 年 11 月）。
37	1968.6～7	マッターホルン北壁とグランド・ジョラス北壁ウォーカー稜の登攀	**東京雲稜会ヨーロッパ・アルプス登山隊** **隊長**＝吉川昭男(26)　**隊員**＝香取征雄(25)宮本一男(26) **行動概要**：6月19日ツェルマットに入り，7月1日～3日マッターホルン北壁の登攀，7月5日シャモニに移り，7月7日モンタンベールに入る。7月 10 日～7 月 11 日グランド・ジョラス北壁ウォーカー稜の登攀を行なう。 **文献**：未刊
38	1968.6～9	モンブラン山群での登攀	**個人山行** **隊員**＝近藤等(47)ガストン・レビュファ(47)アンドレ・コンタミヌ(47) **行動概要**＝6月 30 日，近藤，コンタミヌの名でペルセベランス針峰南稜の登攀，7月7日，近藤，レビュファの2名でエム針峰北北東稜，7月8日，同じメンバーでピラミッド・ド・タキュル東稜登攀。7月 15 日近藤，ガストン・レビュファ，ジョエル・レビュファの3名でプランプラのクロシェ・クロシュトン登攀，7月 25 日，近藤，レビュファでシャペル南稜，7月 26 日，近藤，レビュファでコスミク南壁，7月 29 日，近藤，レビュファでツール・ロンド北壁，8月 20 日，近藤，レビュファでモンブラン・プトレイ山稜，9月 10 日，近藤，コンタミヌでモンブラン・ド・タキュル北稜の各登攀を行なう。 **文献**：「岳人」265～266 号（1969 年7月～8 日）。
39	1968.6～9	グランド・ジョラス北壁他の登攀	**個人山行** **隊員**＝岩沢英太郎(28)(府中岳嶺会) 大曽根義一(24)(霧

			峰山岳会) **行動概要**：6月 10 日ドロミテ着，6月 14 日チマ・グランデ南壁登攀，6月20日シャモニに移り，6月 28 日，岩沢，大曽根，関川（東京北稜山岳会）の3名でエギーユ・ド・ミディ南壁コンタミヌルート登攀，7月13日～15 日岩沢，南川の2名でグランド・ジョラス北壁ウォーカー稜の登攀，7月 27 日～29 日，岩沢，南川，佐藤（無所属），武藤（グループ・ド・ボエーム）でツール・ロンド北壁 ダン・デュ・ジェアン エギーユ・ド・ミディの縦走。8月8日～10日，岩沢，南川，佐藤でヘルンリ稜からマッターホルン登頂。8月 24 日～25日，岩沢，南川，佐藤でエギーユ・ド・ビオナセイ北壁の登攀を行なう。 **文献**：未刊

グリーンランド

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
※40	1968.6～10	グリンランド内陸氷床の横断および東沿岸山岳部の登山と測量	**日本大学グリーンランド横断隊 1968** (Nihon University Greenland Crossing Expedition 1967) **横断隊長**＝池田錦重(29)　**犬ゾリ隊隊長**＝小栗孝康(27) **隊員**＝五月女次男(29)菅原省司(29)三好勝彦(24)長島宏(25)嵯峨野宏(23)小島一男(24)多和田忠(23)中村進(注) 春に3名が現地に飛び，10頭のエスキモー犬を買い，訓練をし，1台の犬ゾリチームをつくり，サポート隊が使う。 **行動概要**＝6月 19 日サンドレ・ストローム・フョール着。20 日東海岸のカンブダンに飛び，7月4日セルミリザック・フョールの近くの上陸地点から1台の犬ゾリ，2台の人曳きゾリで内陸氷床に向かう。7月 18 日池田以下5名でアバントガーデンの最高峰（3240 m）の登頂を行なう。7月 21 日フォーレル峰 Forel(3360 m) 小栗以下2名でパーフェクト峰 Perfekt (3000 m) の登頂。7月 26 日池田以下2名でジョムフルエン Jom Fruen (2850 m) に登頂。7月 27 日，横断隊は Mount Forel から Jakobshavu までの内陸氷床標高 2800 m を横断し，9月1日，西海岸の Jakobshavu に出る。犬ゾリ隊は Mount Forel 東にあるヌナタックを登ったあと，September 氷河に戻り，この周辺で7つのピークに登る。8月 27 日 Kungmiut に帰着。9月 13 日サンドレ・ストローム・フョールで全員合流したあとコペンハーゲンに帰着。 **文献**：「山岳」64 年 1 頁参照。「山と渓谷」364 号 (1969 年1月)。

モ ン ゴ ル

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
41	1968.7～8	ハルヒラー山群の各峰の登頂ならびに西モンゴル語などの調査	**日本モンゴル合同学術登山隊** **総隊長**＝ダシデンデブ（33，体操スポーツマスター）**日本側隊長**＝*小沢重男(43)　**副隊長**＝窪田清(35)　**マネジャー**＝川村光郎(31)　**隊員**＝佐藤正樹(33)　原沢恒夫(32)*三宅修(36)田中勝(26)　**報道**＝辻勇男　**モンゴル側隊長**＝ゾリック（37，スポーツマスター）**隊員**＝ザナバザル(24)ドルジ(30)ジャンツァン(34)バートル(30)ツェベン(22) **行動概要**：7月 27 日ウランバートル着。7月 31 日ウランバートル発（双発ジェット）ウランゴム着。8月1日ウランゴム発，3日 BC 建設（2700 m）。8月4日全員でウラン・ハルヒラー（第4峰，3550 m）の登頂。8月6日，窪田，三宅，原沢，ゾリック，ザナバザル，ツェベンの6名でオリンピア峰（3680 m）に登頂。8月7日，川村，田中，ジャンツァン，ドルジ，バートルの5名でハハヒラー第1峰（3950 m），第2峰（3990 m），第3峰（3850 m，日本モンゴル友好峰）に登頂。8月9日 BC を撤収，11 日ウランゴムに帰着。13 日ウランバートルに戻る。 **文献**：「岳人」256 号（1968 年 11 月），「山と渓谷」363 号（1968 年 12 月）。

カ フ カ ズ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
42	1968.7～8	ウシバ峰（4700 m）西壁の登攀	**第2次 RCC カフカズ登山隊**（日本労働者スポーツ協会） **団長**＝清水一行(35)　**隊長**＝*塚本珪一(37)　**副隊長**＝*小林年(35)*車義久(27)木村紅夫(27)福岡璋祐(26)中道孝則(25)京極紘一(24) BC までの**同行者**＝バリスミハロヴィッチ（スポーツマスター）アレキサンダー（インストラクター）イリアナ（初級アルピニスト） **行動概要**：7月 10 日エルブルース・キャンプ（2050 m）着，7月 12 日キャンプ発，ユセンギー河にそい，河原でキャンプ，13 日ベチョ峠(3378 m) からドウラ河を下ってブコワラロシア（ウシバ氷河末端）着。14 日，ウシバ氷河を遡って西壁下部からキャメルリッジ。7月 15 日～7 月 19 日小林，車，木村，京極の4名で西壁ピラーの登攀，7月 14 日～16 日福岡，中道の2名で西壁マルシュ・ルート登攀，20 日西壁隊の小林が下降

			中にスリップ。救援のため車，木村下山し，26 日救出。7月 28 日，エルブルース・キャンプに帰着。 **文献**：「岩と雪」13 号 (1968 年 11 月刊)，「山と渓谷」362 号 (1968 年 11 月)，JAC 会報「山」280 号 (1968 年 10 月)。

ボ ル ネ オ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
43	1968.4～5	キナバル山塊各峰の登頂	**八幡製鉱所山岳部 OB 会キナバル登山隊** **隊長**＝辻正臣(54)　**登攀隊長**＝永田久利(38)　**隊員**＝首藤守男(30)財井尚記(26)　**ガイド**＝Sumtongol　**ポーター**＝Chubo 以下２名 **行動概要**＝４月 27 日国立公園管理事務所発，バナラワン小屋に BC をおく。４月 28 日キナバル山塊最高峰ローズピーク登頂。４月 29 日偵察，４月 30 日キングエドワードおよびキング・ジョージの両峰に向かったが悪天候のため頂上直下から引きかえす。５月１日下山。 **文献**：八幡製鉄所山岳部 OB 会編「キナバル山登山報告書」(発行年月日なし)。
44	1968.8～9	キナバル山塊各峰の登頂	**関西学院大学キナバル登山隊 1968** (Kwansai Gakuin University Kinabalu Expedition 1968) **隊長**＝野村晃(31)　**隊員**＝古林誠也(21)鎌田千秋(22) **ガイド**＝Sideke (34)　**ポーター**＝７名 (氏名不詳) **行動概要**：８月 23 日管理事勝所発バナラワン小屋に入る。24 日サナサヤ小屋に入り，更にキナバル山塊の主峰ローズピークに登頂。25日セント・ジョーンズ・ピークに新ルートから登頂，東壁を初下降，キナバル南峰にも登頂。26日アレキサンダーピーク，ヴィクトリア・ピークに登頂。 **文献**：「関西学院山岳会報」20 号 (1968 年 12 月刊)

台　　湾

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
45	1968.1	玉山 (3997 m) 登頂ならびに玉山，南山のバリエーション・ルートからの登頂	**福岡登高会玉山冬山合宿** **隊長**＝新見勲(39)　**副隊長**＝大林胖(45)　**隊員**＝小田保義(28) 古賀久男(28) 大石義豊(27) 岡本敏(28) 水崎義則(26) 池辺勝利(26) 久間弘信(23) 財津茂美(21) 上野義宣 篠原千典(22)鬼木稔(25)　**案内人**＝蔡添文 **行動概要**＝１月１日台北着，３日まで入山申請および関係機関へあいさつ。４日台北発，汽車で阿里山着。食

			糧購入。6 日森林軌道により東埔着。タータカ・コルからBH 排雲山荘着。7 日全員玉山登頂。南山へ縦走。8 日玉山南壁正面3 ルンゼアタック（**A.** 水崎，久間，財津，**B.** 大石，上野，**C.** 岡本，鬼木），9 日南山北壁3 ルンゼアタック 南王山縦走。10 日全員で 玉山より北山への縦走。12 往路から東埔へ下山した。 **文献**：未刊
46	1968.2	玉山（3997 m）の登頂	**小川山の会創立 15 周年第 5 次日本国民間友好致敬訪問団** **隊長**＝加藤長市郎(34)　**隊員**＝*松崎中正(33)新井保太郎(33)他 5 名　**中国側隊員**＝劉茂源（中国青年登山協会）他 3 名 **行動概要**：2 月 10 日台北発，嘉義，阿里山を経て13 日玉山北峰（3920 m）登頂。14 日玉山（3997 m）登頂 15 日台北帰着。 **文献**：「岳人」249 号。
47	1968.3	雪山（3884 m）の登頂	***東京都立石神井高校山岳部 O.B. 会雪山登山隊** **隊長**＝黒崎峻(41)　**隊員**＝関恭一郎(25)坂梨保介(24)田中義和(23)今野浩一郎(22)　**ポーター**＝許朝山他 3 名 **行動概要**：3 月 5 日台北発，台中を経て還山部落着。6 日還よりスケラン渓を溯り，2500 m 地点の川原に幕営。7 日スケラン渓上部 3300 m 地点まで偵察。8 日西の枝尾根から 3500 m 地点に幕営。9 日次高嶺線まで偵察および 荷上げのため往復。10 日嶺線雪山西方の森林帯に幕営。11 日全員雪山（3884 m）に登頂。次高山荘跡に幕営。12 日に還山へ下山した。 **文献**：未刊
48	1968.2〜3	玉山（3997 m）の登頂	**千葉大学薬学部*あのはな山岳会第二次学術登山隊** **隊長**＝萩庭文寿(51)　**副隊長**＝村松敏夫(36)　**隊員**＝長谷川三郎(22) 村上幸康(22) 黒川はるみ(23) 樋口和(21) 深沢英雄(23)　**案内人**＝郭玉祥　**ポーター**＝丘 **行動概要**＝3 月 4 日嘉義発，阿里山着。阿里山から徒歩にて東埔着。5 日東埔より前山を越え排雲山荘着。6 日玉山主峰に登頂し，東埔へ下山。7 日往路から嘉義へ帰着。 **文献**：未刊
49	1968.3	玉山（3997 m）の登頂	**正則商業高等学校山岳部 O.B. 会正稜会訪華親善登山隊** **隊長**＝川久保克巳(23)　**副隊長**＝木下正幸(23)　**隊員**＝加藤元之(21)染谷晃(21)小早川勉(20)小屋野勝男(20)吉田東亜紅(23)　**案内人**＝周俊郷（台湾山岳協会会員）他 1 名 **ポーター**＝邱澄陽

			行動概要：3月 10 日嘉義から阿里山着。11日排雲山荘着。12 日全員玉山峰（3997 m）に登頂。13 日阿里山に下山。 **文献**：未刊
50	1968.3	玉山（3997 m）の登頂	**桜峰会台湾省親善登山隊** **隊長**＝樋口芳広(35)　**副隊長**＝安藤茂夫(33)　**隊員**＝小宮淳男(27)佐光隆之(21)　**案内人**＝林樹枝（台湾省体育会山岳協会員）**ポーター**＝邱潔賜 **行動概要**：3月 11 日東埔から排雲荘 BC 着。12 日安藤，小宮の2名，夏山風ロルートから玉山主峰登頂。13 日棚口，佐光，山頂直下冬山ルートから玉山主峰登頂。13 日 BC 撤収，東埔に下山。 **文献**：未刊
51	1968.3〜4	玉山（3997 m）の登頂	**京都大学ワンダーフォーゲル部中華民国台湾省親善登山隊**（Kioto Univ Wander Vogel A Goodwill Climbing Party to Formosa） **隊長**＝宮門正和(21)　**副隊長**＝南良隆(20)　**隊員**＝本久明(20)　**案内人**＝林樹枝，周俊卿　郷**ポーター**＝邱潔賜黄利光 **行動概要**：3月 11 日東埔から鹿林山，前山，西山を経て排雲山荘 BH 着。12日玉山登頂。14日嘉義へ帰着。 **文献**：未刊
52	1968.3〜4	玉山（3997 m）雪山（3884 m）の登頂	**東京都立大学山岳部中華民国親善学術調査隊** **隊長**＝川副南司(28)　**副隊長**＝*成田義宏(21)　**隊員**＝勝股政雄(23)今村良康(22)藤掛遵(20)山本千里(19) **行動概要**：3月10日嘉義発，阿里山鉄道を経て 11 日排雲山荘着。12 日全員玉山登頂。14 日嘉義に下山。17 日台中発還山着。18 日スケラン 渓から 尾根に取付きサイランチュウに BC 建設。21 日全員雪山登頂後，次高山荘跡にてビバーク。23 日往路にて還山に下山。 **文献**：未刊
53	1968.3	玉山（3997 m）の登頂と植物調査	**青森山岳会** **隊長**＝沢村和夫(22)　**隊員**＝斉藤穣治(21)　林義人(20)　**案内人**＝林樹枝，周俊卿（台湾山岳会会員）**ポーター**＝邱潔賜 **行動概要**＝3月 11 日阿里山から東埔を経て排雲山荘着。12 日玉山登頂。14 日往路から嘉義へ帰着。 **文献**：未刊
54	1968.3	玉山（3997 m）の登頂	**大嶽山岳会日華親善登山隊** **隊長**＝鈴木浩(24)　**隊員**＝平野喜和(22)小林文男(20)立島治憲(21)粕谷明(19)　**案内人**＝蔡礼文 **行動概要**：3月 21 日東埔を経て排雲荘着。BC 建設

			22 日全員玉山登頂。23 日 BC より南山を目指したが，南山と南玉山との分岐付近から退却，24 日 BC 撤収下山。 **文献**：大嶽山岳会編「中華民国台湾省親善登山隊報告書」1968 年 7 月 15 日発行。
55	1968.3	玉山（3997 m）の登頂	**東京農工大学ワンダーフォーゲル部中華民国親善調査隊** **隊長**＝小平哲夫(20)　**副隊長**＝豊福正己(20)　**撮影**＝隈本開男(22)　**隊員**＝鮫島和夫(30) 松本滋夫(20) 上山修(20)鎌田光久(19) 長谷川和良(19) 越前谷幸平（20 北大山岳部）**案内人**＝蔡添文 **行動概要**＝3 月 20 日嘉義より森林鉄道で阿里山に向い，同日，蔡添文氏と合流。21 日大岳山岳会，山形大地質調査隊と共に東埔に向い登山開始。22 日主峰（3997 m）に登頂。23 日下山。 **文献**：未刊
56	1968.3～4	玉山（3997 m）の登頂	**高松一高訪華術善登山隊** **隊長**＝*林巍(35)　**副隊長**＝矢野正三(31)　**隊員**＝稲葉伸夫(31)高田昌彦(28)佐藤芳幹(20)　**案内人**郭玉祥(36) **行動概要**：3 月 24 日排雲山荘。25 日全員玉山登頂。26 日下山，嘉義から高雄を経てガランビに到り，以後は 2 隊に分れて行動。4 月 5 日帰国。 **文献**：未刊
57	1968.4～5	玉山（3997 m）雪山（3884 m）の登頂	**九州産業大学中華民国台湾省親善登山隊** **隊長**＝*和田静雄(45)　**副隊長**＝*折元秀穂(54)　**隊員**＝安永豊(21)渡正行(21)佐々木勝彦(22)田中弘一(20)竹田紘(20)広渡達也(19)堅田三省(19)入江正雄(20)　**案内人**＝詹清波　**ポーター**＝2 名 **行動概要**：4 月 28 日環山発，スカイライン渓，雪山直下を経て 賽良酒に BC 建設。29 日賽良酒から 次高山荘を経て全員雪山に登頂。30 日全員 BC に集合。5 月 1 日環山へ下山。5 日阿里山，東埔を経て排雲山荘着。6 日全員にて玉山に登頂し東埔へ下山。 **文献**＝未刊。
58	1968.4～5	雪山（3884 m）の登頂	**塩之義製薬株式会社山岳部台湾遠征（第 3 回）** **隊長**＝橋本直也(42)　**隊員**＝大石淳(30)小島隆雄(27)吉野熙道(28) **行動概要**：5 月 1 日　環山雪山山荘跡 2 日　山荘跡雪山雪山北峰 5 月 3 日　七家湾渓 4 日　七家湾渓環山 **文献**：未刊

59	1968.4～5	玉山（3997 m）の登頂	**静岡頂会台湾遠征隊** **隊長**＝高橋弘(31)　**隊員**＝八木功(28)興津輝雄(25) **台湾側隊員**＝俊卿，郭玉祥，邱潔賜 **行動概要**：5月3日　阿里山—東埔—排雲荘 4日　排雲荘—玉山—北山観測所—北北山往復 5日　北山観測所—東埔招待所 6月　東埔招待所—阿里山—嘉義 **文献**：頂会会報 1968 年
60	1968.6～8	玉山（3997 m）と雪山（3884 m）の登頂および周辺の森林帯の調査	**東京農業大学中華民国台湾省高山植物研修隊** (The Botanical Expedition to Alpine region of Formosa by Tokyo University of Agricalture) **隊長**＝*中村武久(36)　**隊員**＝桝田保弥(26)井上賢治(19)呉鳳玉(24) **玉山案内人**＝蔡添文　**ポーター**＝黄利光，徐清松 **雪山案内人**＝詹清波　**ポーター**＝伍保成，司茂則他2名 **行動概要**：7月8日東埔発，多々加鞍部を経て排雲山荘着，9日森林限界（3300 m）まで山荘付近の森林帯の調査，10日玉山主峰正面の斜面の広域の調査をしながら主峰登頂。11 日隊を2分し，北山，南山に登頂。12 日東埔まで下山。20日環山よりスカラン渓を経てサイラン酒着。21 日志佳陽大山を経て新高山荘跡着。22 日山荘跡より植物調査を兼て雪山に正面ルートから登頂。往路を下りキイラン酒まで下山。24 日サイラン酒より環山部落に帰着。 **文献**：未刊。
61	1968.7	玉山（3997 m）の登頂	**四日市高校山岳部玉山登山隊** **隊長**＝徳井賢(34)　**隊員**＝伊藤昌弘(19)伊藤公義(19)大泉貞郎(20)　**案内人**＝蔡添文(35) **行動概要**：7月 18 日阿里山から森林鉄道で東埔に向い，東埔から徒歩にて排雲山荘着。19日排雲山荘から玉山登頂後，北山を経て排雲山荘に戻る。20日排雲山荘から南山往復。22日往路から東埔へ下山。 **文献**：未刊。
62	1968.7～8	玉山（3997 m）雪山（3884 m）の登頂	**広島大学中華民国台湾省学術調査隊**（Scientific Research to Taiwan, Republic of China. Hiroshima Univeosity) **隊長**＝田中正四　**副隊長**＝鈴木正将　**隊員**＝安藤久次，中野光雄，岡本和夫，角田幸信，根平邦人，大城久司，小林圭司，中村貞臣，藤井靖大，森川治記，小阪敏和，末田暁，森脇喜一，藤井功，石川演美，難波克雄，石瓶紘一，坪内隆佳，林朝河，石田邦夫，沢野邦彦，土石川勝司八幡浩，**報道**＝山中昭

			行動概要：7月 15 日嘉義発—阿里山—東埔林場招待所—玉山南山—玉山主山—玉山北山—八通関—秀姑巒山—東埔（20 日まで），21 日～25 日和社着—日月潭—埔里—合歓山—環山—南山村，26日環山発—悪源—桃山—新達—品田山—大覇尖山下—大覇尖山—小覇尖山—素密達—雪山—次高山荘跡（8月2日まで），8月3日環山帰着。 **文献**：未刊。
63	1968.8	玉山（3997 m）の登頂	**桑医山岳会中華民国台湾省玉山登山隊** **隊長**＝大橋重夫(36) **副隊長**＝佐藤雄寿(37) **隊員**＝嶋崎勲(30)田代忠(26) **台湾側隊員**＝林志廊（42，台湾省山岳協会員） **行動概要**：8月 13 日阿里山森林鉄路により東埔に至り，多々加鞍を経て排雲山荘着。14 日玉山主峰（3997 m），北峯（3850 m）および北北峯（3800 m）に登頂。15 日南山（3900 m）に登頂後，東埔に下山。 **文献**：桑野山岳会編「くわの，中華民国台湾省玉山登山報告号」1968 年8月発行。
64	1986.8	玉山（3997 m）の登頂	**千葉大学医学部*あのはな山岳会** **隊長**＝萩庭文寿(51) **隊員**＝坂井進一郎(38)原田正敏(38)久保陽徳(29)松村敏夫(36) **行動概要**＝8月 22 日阿里山発，トンボ部落を経て排雲山荘着。山荘から玉山往復。23 日阿里山に帰着。 **文献**：未刊
65	1968.12	玉山（3997 m）の登頂	**鹿児島経済大学学友会山岳部**（Kagoshima Economic College of Japan) **隊長**＝末広芳朗(33) **隊員**＝菱沼彰(26) 上間勝己(38)長沢武(25)池田宏(21) **案内人**＝高文慶 **行動概要**：12 月 20 日阿里発，東埔を経て排雲山荘着。21 山荘から全員にて玉山主峰および北山に登頂。22 日隊長を除く 5 名で南山往復後，東埔招待所まで下山。 **文献**：未刊

イストル・オ・ナールの山座同定

田　中　栄　蔵

1. ま え が き

本文はイストル・オ・ナールの山座同定論を述べようとは思わない。同定論については別の機会に発表をしたい。従って同定に必要な事項を少なくしたので，理解しにくい文になるかも知れぬが，御了承を乞う。

山座の視景をえて，これを観察し認識することは，山に関心をもっている者にとっては大切なことである。方法論は色々ある。

まず，地図によって山名とその座標と高度を知る。これは水平的な知識であり，地図が正確であれば，模型を作りまた立体化することも可能である。しかし山の姿の細部まで表現するには，相当科学的な作業を必要とする。

そこで山の姿の写真が強力な助けとなり，特に航空写真はより多くの情報を与えてくれるが，必ずしもお誂え向きに手に入るわけではない。こゝでは山塊を眺めた人や山に近づいた人，ならびに試登や登頂をした方々の文献・資料・私信を通じて，この山の姿を調査し山座同定の調査報告としたい。また問題は山座同定にあたり，当初は主峰の認知であったが，登山記の記述とその読み方にも不審な点があり，情報交換をしているうちに，オーストリアおよびスペインの方々から，その具体的な指摘を知った。この問題は重大なことであり，こゝでその結論を云々することはできない。疑問のままとなることを御海容願う次第である。

2. 地図について

旅行や登山にあたっては，地図を用いることは当然のことである。イストル・オ・ナールのあるチトラル地方が，パキスタン国になってから，新しい測量がどれほど行われているのか知らない。おそらく英国統治時代の Survey of India の地図のまゝであろう。現地に行った人に聞くと 37 P/SE & P/NE に示された国境のままであるという。こゝで，若干この山に関する地図を見てみよう。

2-1 Burn's Map. (Fig. 1 参照)

イストル・オ・ナールが測量されたのは，1928～29 年である。幸い当時の地図の一部が，Himalayan Journal (以下 HJ と略す) 第2巻 (1930 年) に出ている (文献1，以下文1と略す)。これを Fig. 1 に示す。範囲は 36°15′～36°25′ N, 71°45′～

72°00′ E。1″=2 mile, 等高線間隔 200 フィート。サイズ X 175×Y 146 mm（X=横軸 Y=縦軸)。

この図は北峯から主峯に山稜が続いているように描かれているが，これは誤りである。北峯に続いているのは西稜である。以下の試登や登攀の記事にあたっては，発表文や地図のままとしておくが，Lawder, Murphy 氏らの地図は，Burn's Map を用い報告に掲載しているが，カムカルテにしているので注意を要する。なお Burn 氏の報告は Records of Survey of India. Vol. xxv にのっているという。

2-2 Finch's Map

1938 年 J.R.G. Finch は北東ヒンズー・クシュの再測量におもむき Buni Zom 付近から測量を行なった。そのとき高度の改測があり，新高度を示した小カムカルテが発表された（文 2)。高度は総じて低い。例えば，Istor-o-Nal（以下 I-o-N と略す)=24,242 フィート（7,389 m)，Tirich Mir=25,230 フィート（7,690 m）である。上記 2-1 図と比較のこと。G. Gruber 氏に批評されたことは後述する。

2-3 Wala's Map

"Nordöstlicher(Hoher) Hindukusch" Karte 1 : 300,000 von Ing. Jerzy Wala, Krakau (Polen), 1967.

通常ワラ・マップ（カムカルテ）といわれ，付録の高山表（約 400 座）は毎年改訂されている。この図は 1960, 62, 63 年のワラの遠征の成果をとり入れてワハンの地図を作製した V. Sedivy 氏のものを基礎にしたという。範囲：北=ワハン・ダリヤ，東=Sarhad-Baroghil 線，南=ヤルフン河筋とリッヒ・ゴル以西の山脈，南端はチトラル，西=カジ・デー～アルカリ・ゴル～ルトコー河線の以東。ピーク名は番号で示され，高山表と照合し山名・標高を知る。使用者の言によれば，山水系はほゞ正確という。36°～37° N, 71°40′～73°25′ E。サイズ=X 570×Y 455 mm，単色，市販。

Finch 氏は AJ No. 316 (1968-1) p. 110 でこの地図をほめている。

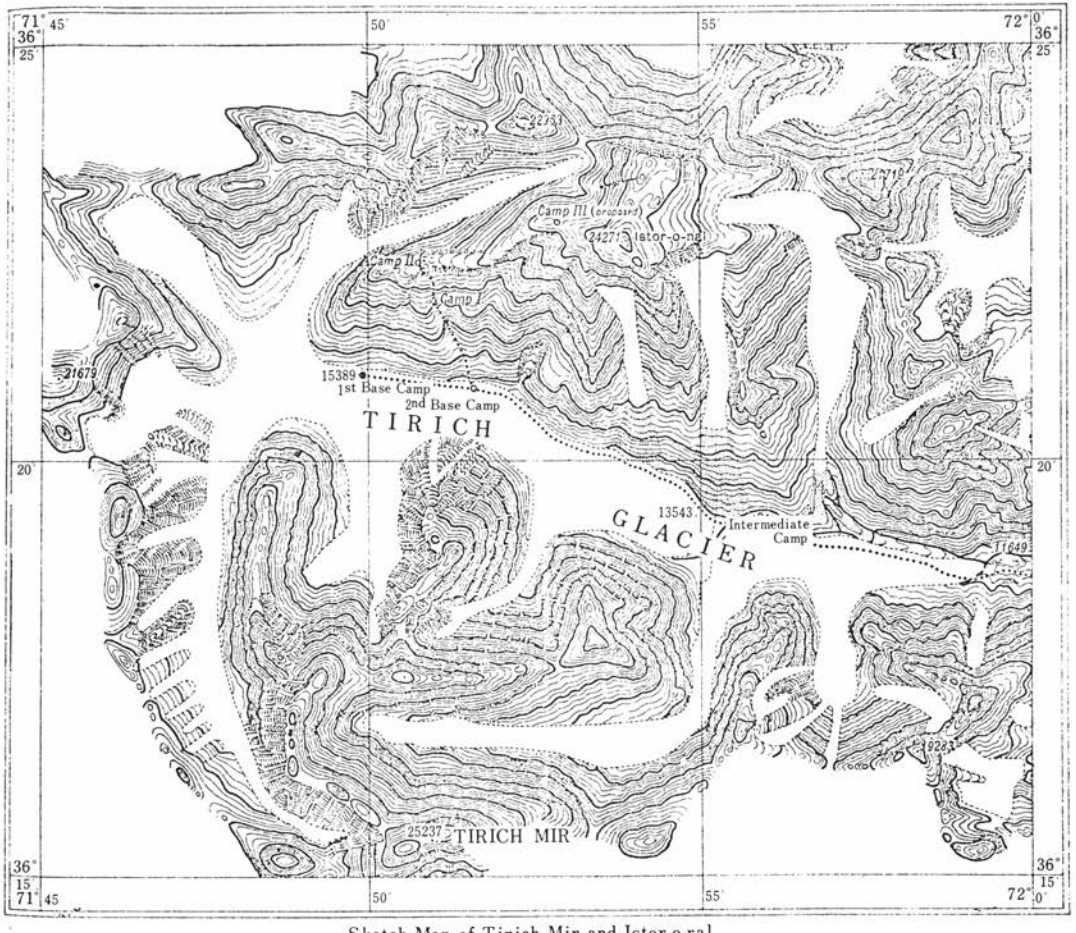
2-4 「全岳連図」(1967)

ティリチ氷河周辺図，1 : 50 000，作図：高橋定昌（1967 All Japan Hindu Kush Exp.). 範囲：36°10′～36°20′ N, 71°40′～72°05′ E. サイズ=X 600×Y 600 mm，単色。北=ノシャック，東=アタク・ゾム，南=オウィル峯，西=グール・ラシュト・ゾム，若干記載誤りがある。カムカルテ。

2-5 「福岡岳連」

Tirich Mir and its adjacent regions, Hindu Kush Range, compiled by Yukio MATSUMOTO(松本征夫)。1 : 50,000, 1969-Jan. Alpine Association of Fukuoka Himalayan Committee. 範囲：35°50′～36°25′ N, 71°40′～72°05′ E。サイズ=X 777×Y 1,500 mm。単色。2-4 を拡大改訂したものと思われる。1969 年隊に同行されたので改訂ぶりがうかがえよう。

2-6 Survey of India's Map (SI)



Sketch Map of Tirich Mir and Istor-o-ral

Furlongs 8 4 0 1 2 3 4 Miles

Contour Interval 200 feet

Fig. 1. Burn's Map. (extract from Himalayan Journal. Vol. II. 1930)

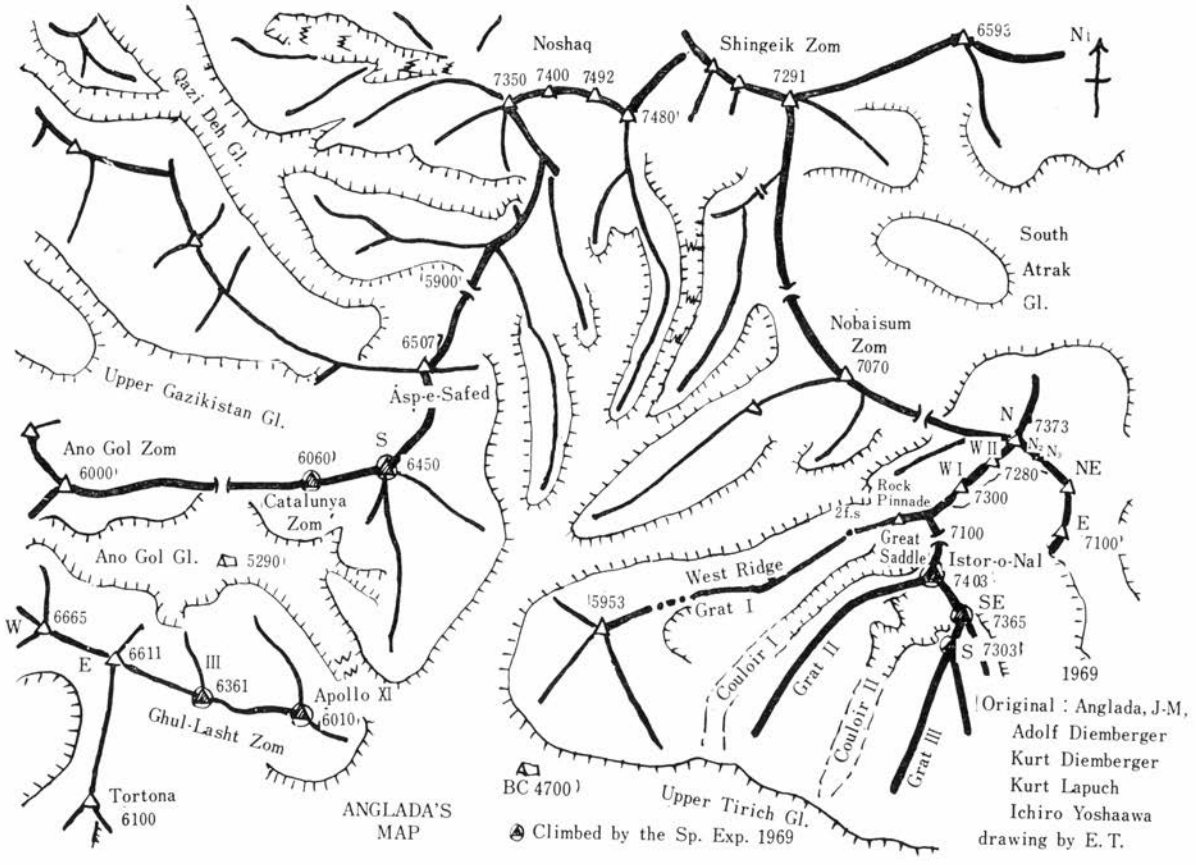


Fig. 2. Sr. Anglada's Exp '69 Map.

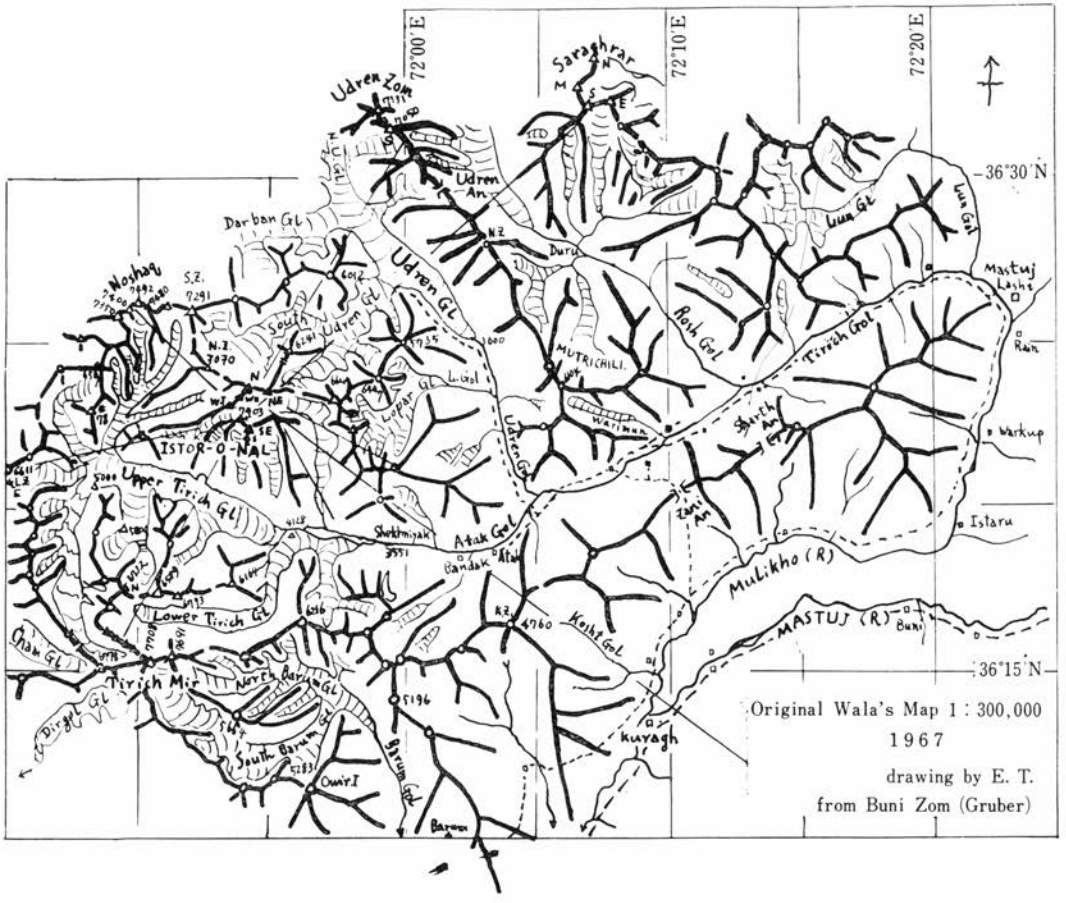


Fig. 3. Do concentrate your attention upon the Istor-o-Nal.

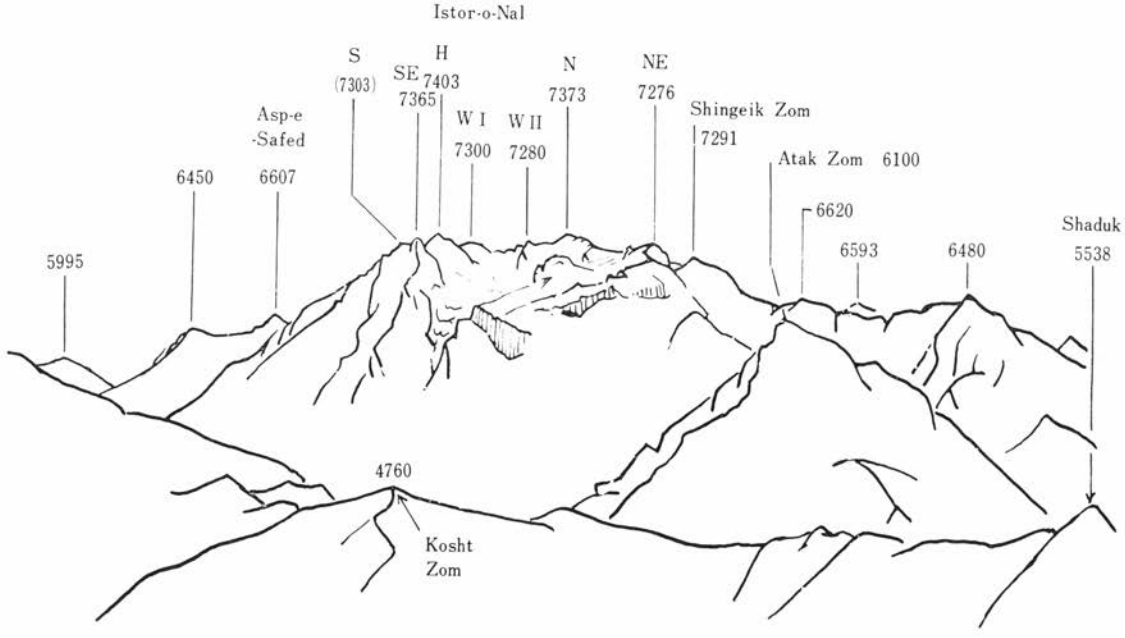


Fig. 4. Dr. G. Gruber's Panorama (Istor-o-Nal area)

Fig. 5 Istor-o-Nal, seen from Lopar Joz Zom 5750m. (by courtesy of Kurt Lapuch through I.Y.)

Fig. 6. Istor-o-Nal, seen from Istor-o-Nal, North Peak 7373m [N-1] (by courtesy of Kurt Lapuch through I.Y.)

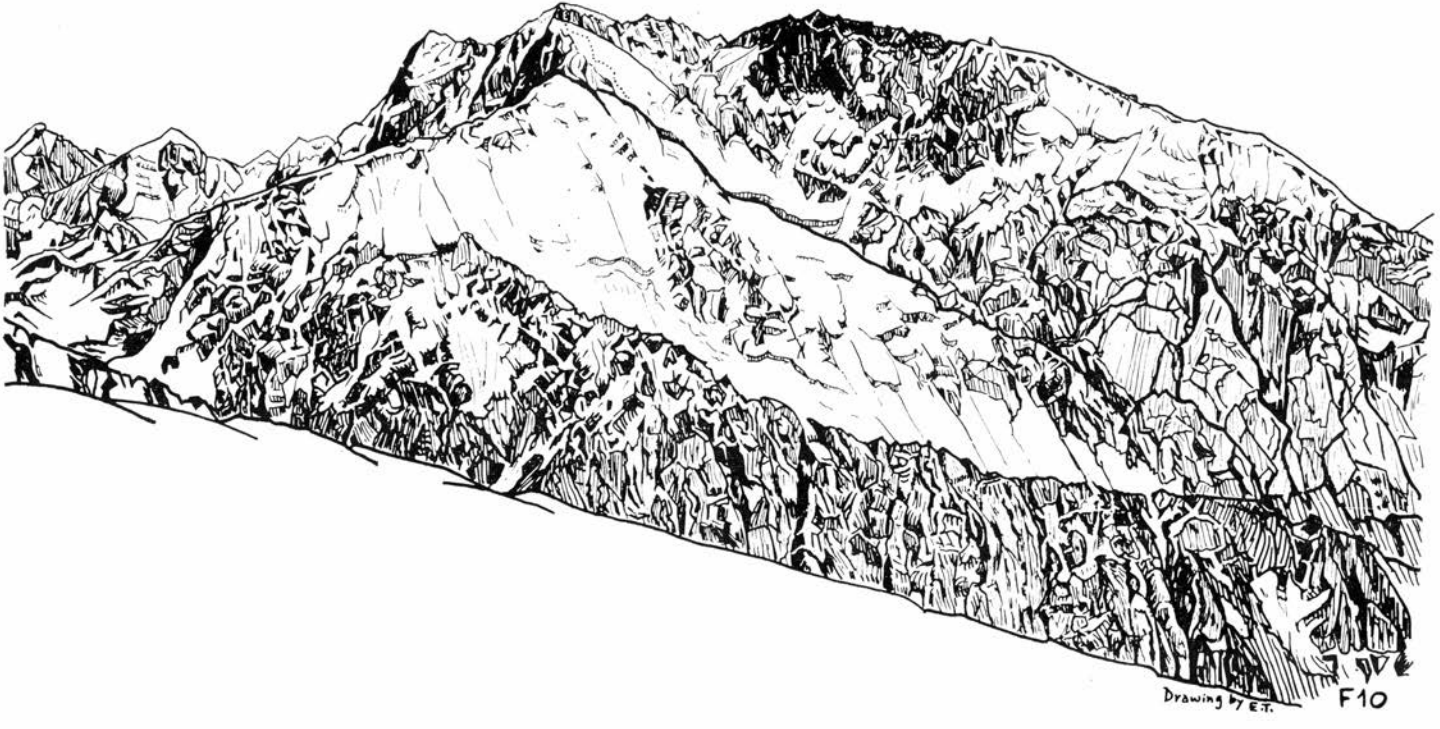


Fig. 7. Istor-o-Nal, seen from the way to Noshaq (AACK EXP. '60).

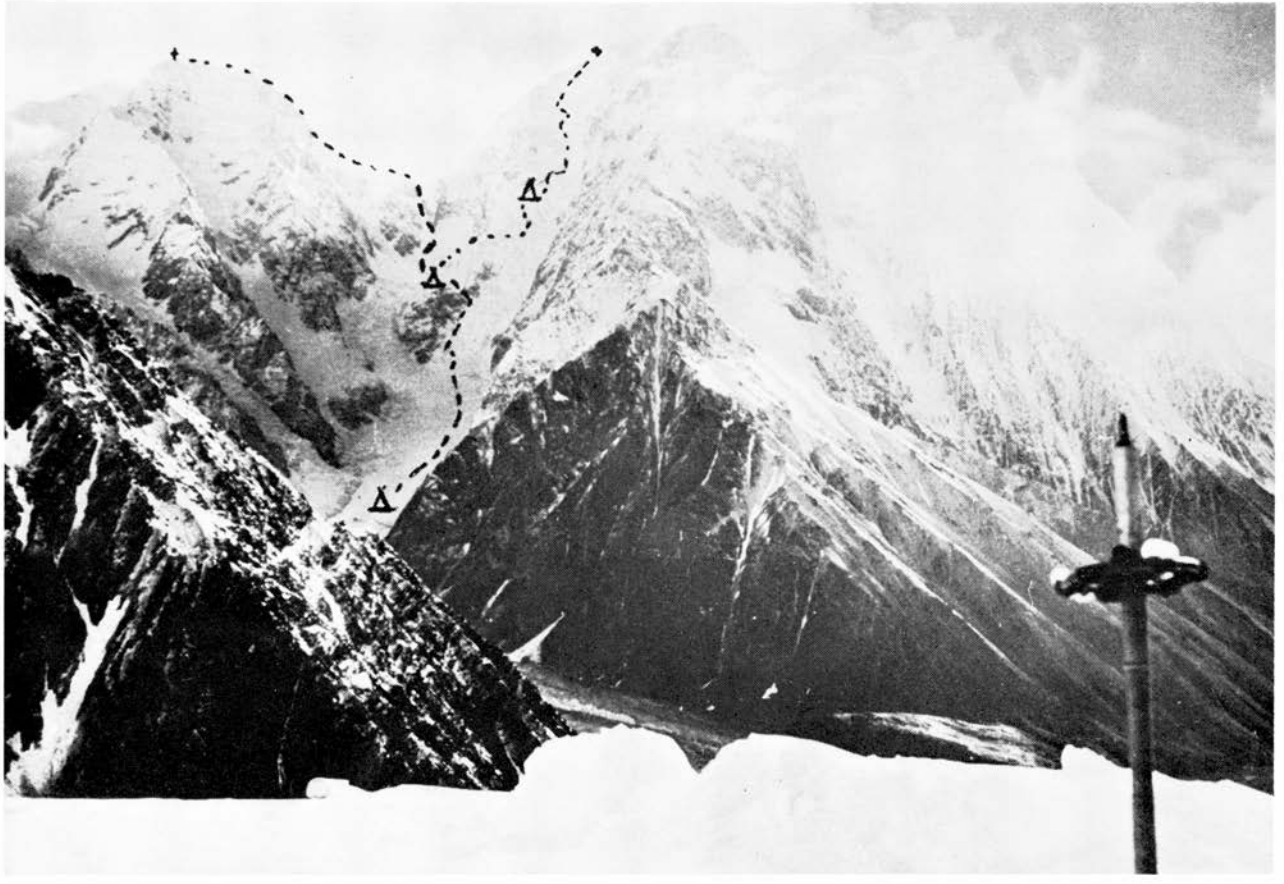


Fig. 8. Istor-o-Nal and Nobaisum Zom, seen from Ghul Lasht Zom, East 6611m [W-2] (by courtesy of Kurt Lapuch through I. Y.)

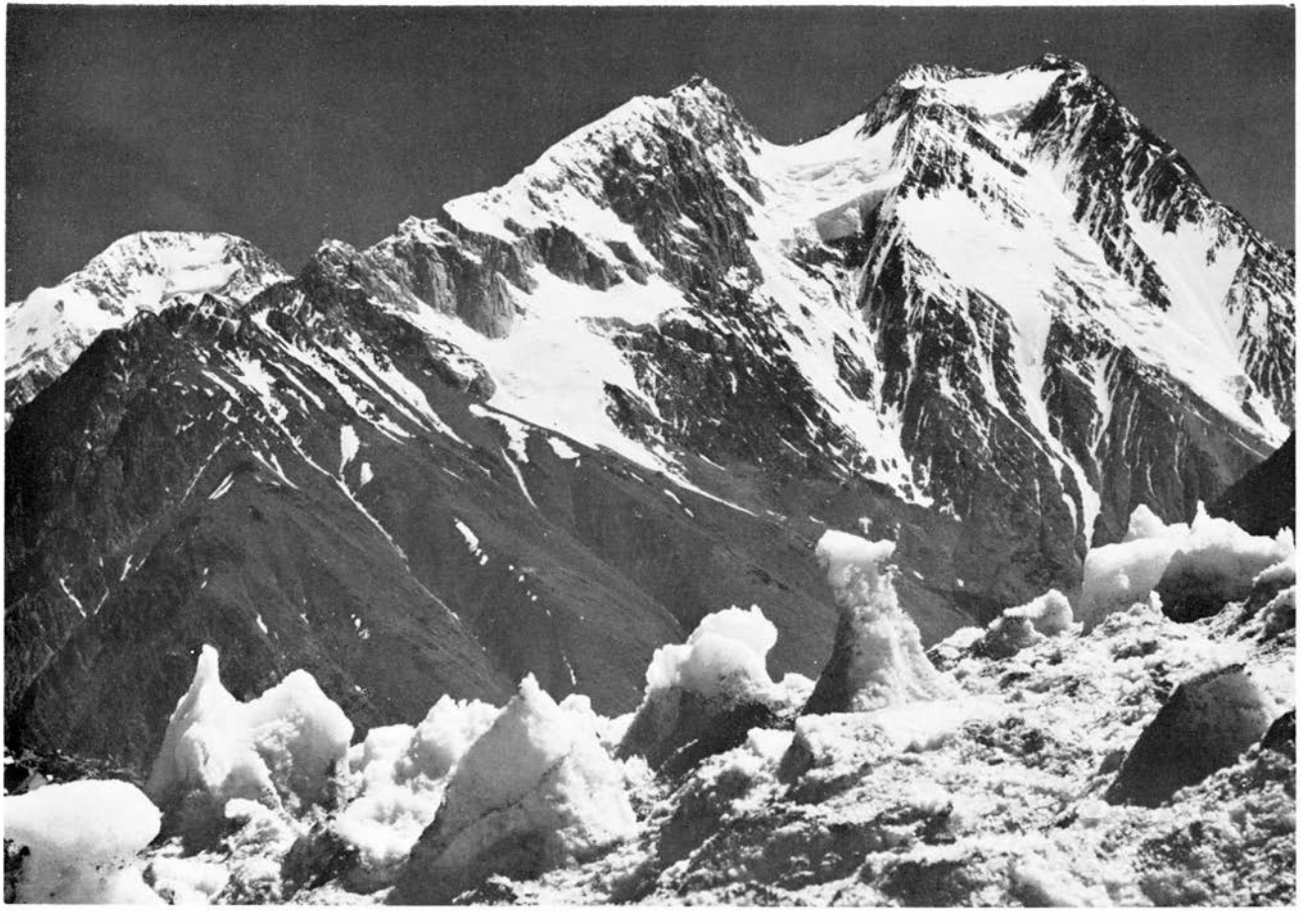


Fig. 9. Istor-o-Nal, South Face, seen from Tirich Mir side. [S-1] (by courtesy of T. Arioka, Chiba, Exp '67).

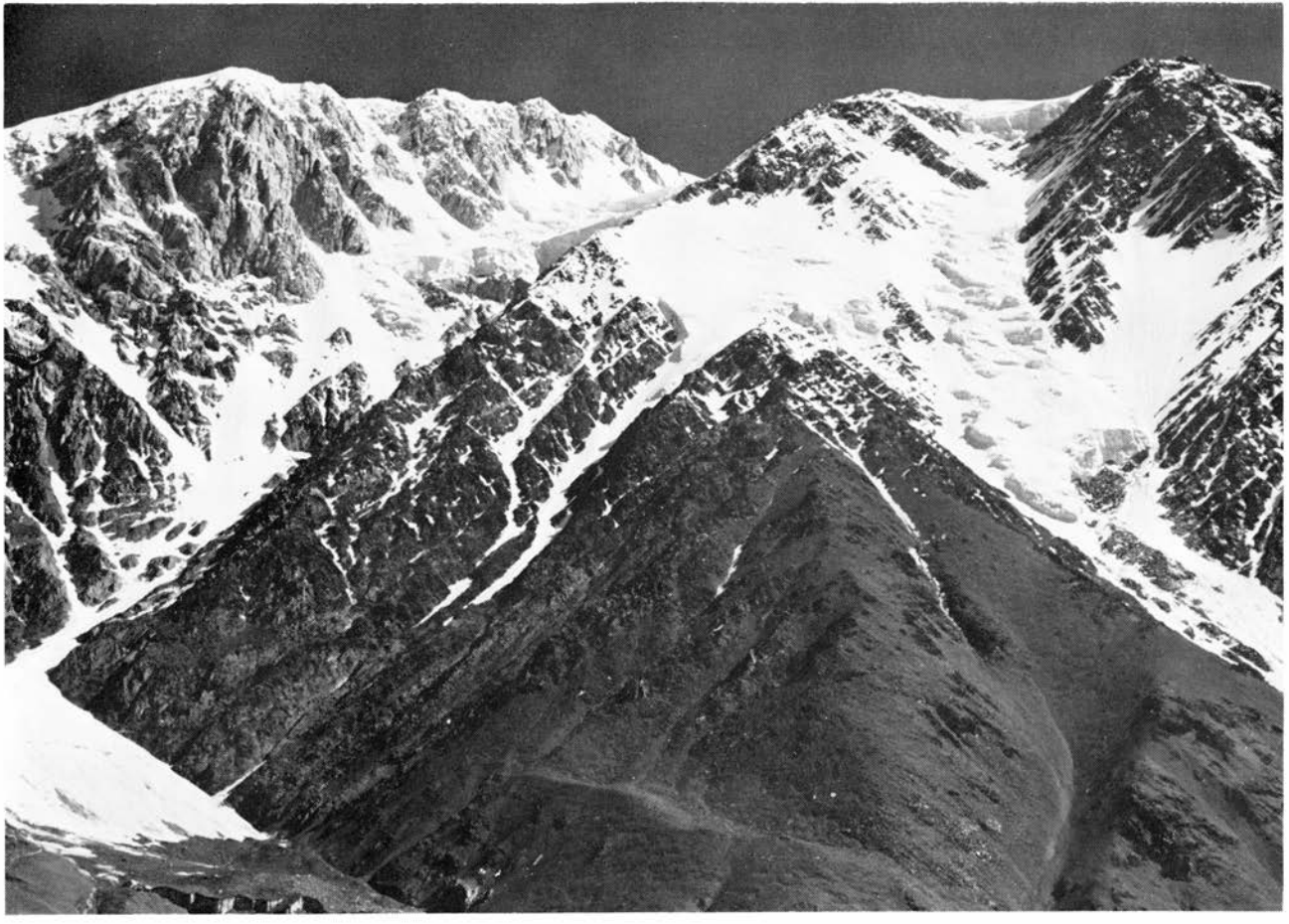


Fig. 10. Istor-o-Nal, South Face, seen from Upper Tirich GL. at C. 1. 4500m
〔S-2〕(by courtesy of T. Arioka, Chiba Exp '67)

Fig. 11. Istor-o-Nal, seen from the west ridge (7550m) of the Tirich Mir. (Fukuoka Exp. '69)

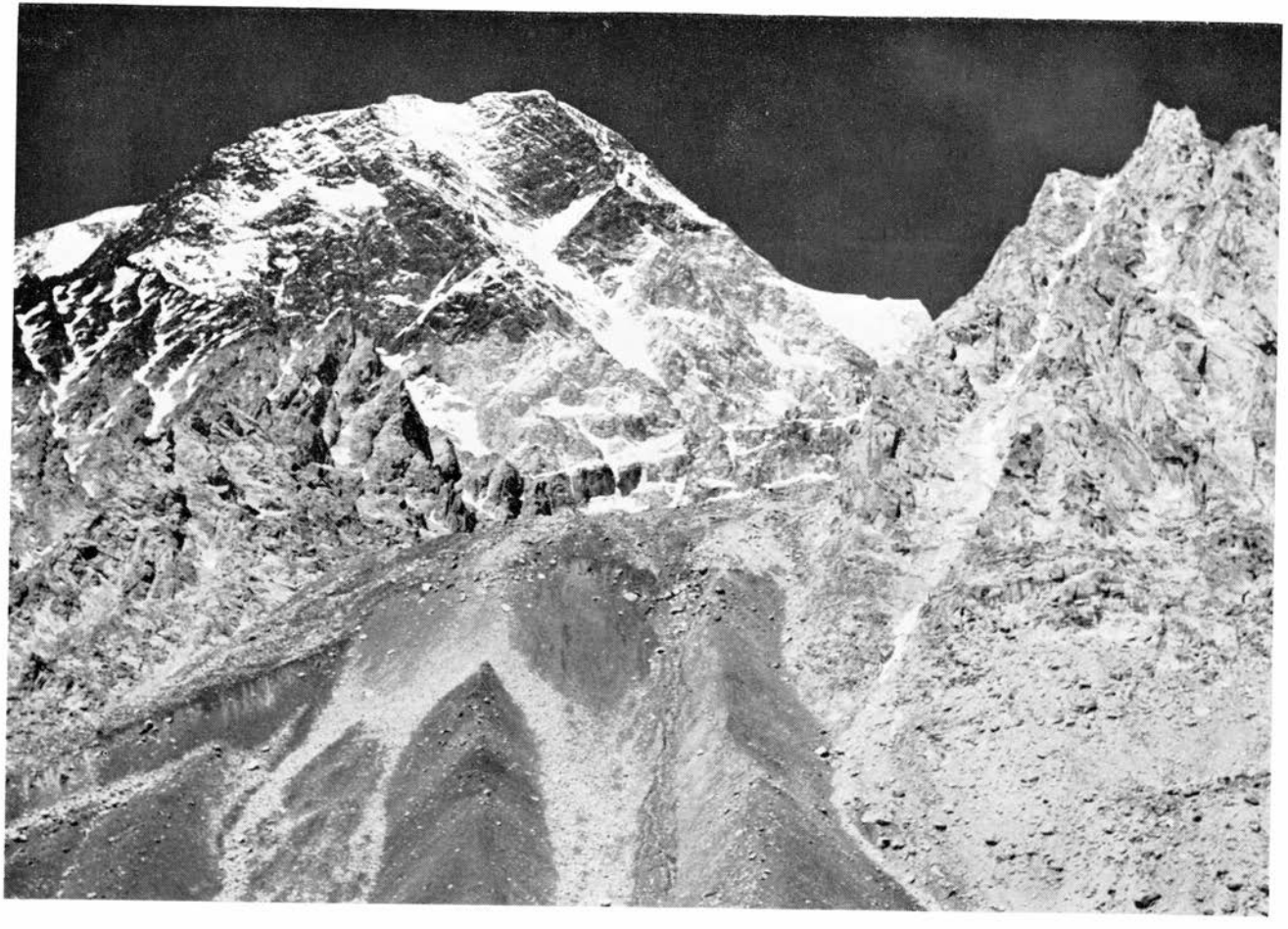


Fig. 12. Istor-o-Nal, SE face, seen from Chiba Exp. '67 B.C 4000m.〔S-12〕(by courtesy of T. Arioka)

Afghanistan & N.W. Frontier Province. No.37 P/SE & P/NE. 1 inch to 2 Miles, 1 : 126,720. Survey 1928 & 1929. Published 1931. 36°00′～36°35′ N, 71°30′～72° E, contour intervals=200 ft. N=North Atrak Gl. の原頭（P/NE はごく小部分を含む），E=Shekhniyak, S=Lutko River, Shghot, W=Agran An-Lutkho An。I-o-N は図の中央左手にある。地形は Burn's Map と同じ。本図の高度，I-o-N=7398 m, (24,271′)，Tirich Mir=7,700 m (25,263′) と表記されている。現在地図がどれほど修正されたのか未見である。なお国境線については本図を用いているときく。

2-7 Anglada's Map

Adolf Diemberger, Kurt Diemberger, Kurt Lapuch 氏とスペインの Jose-Manuel Anglada 氏から，吉沢一郎さんあての通信によって，四氏の地図から I-o-N のカムカルテを吉沢さんが整理されたものを Fig. 2 に示す。若干補正した。

2-8 I-o-N の座標・標高（第1表）

地図の利用で気をつけなければならないことは，測量は簡単には行えないから，まず既往の権威ある地図を用いる。登山者の再測量では起点座標，基線設定（座標が正確ならば2つの山でもよい），測地点数，天候，器具などで精度が異なる。試みにバッラードの本から抜萃すると第 1 表のようである。最近の数値は三角測量成果表を見ていないのでなんともいえない。

第1表 標 高 と 座 標

山　　名	SI sheet	標　高 ft / m	北　　緯	東　　経
Istor-o-Nal	No. 37 P/SE&P/NE	24,271 / 7 398	36° 22′ 38″	71° 53′ 52″
Tirich Mir I	〃	25,263 / 7,700	35° 15′ 21″	71° 56′ 32″
〃 II	〃	25,237 / 7,692	36 15 47	71 49 52
〃 III	〃	24,564 / 7,487	36 16 00	71 49 31
Noshaq I	〃	24,581 / 7,492	36° 26′ 06″	71° 05′ 08″

extracted from Burrard : The High Peaks of Asia.

標高は第1表に示したが，2-6 の数値の方が正しいと考えられる。改測が行われるごとに高度測定の数値は，精度をあげるものと考えられるが，地震や地殻，重力の変動によって，山が隆起したり陥没することもあろう。Dr. G. Gruber は測量機器を持参して，ブニ・ゾム山群の1峰（5,900 m）から，測量を行ない標高を改正している。その精度と信頼性はあることと思う。ドイツ，オーストリア，スペインでは Gruber の高度を用いている。こゝでは Gruber, Lapuch と Anglada 三氏の高度を用いる。

登山隊の使用する高度計は，7,000 m 級の山では 8,000 m 以上測定できるものがほしい。また保管取扱いについては規正・チェックが必要であり，絶対信用には至っていない。

以上の整理を第2表に示す。

第2表　Istor-o-Nal 各峯の高度（m）

峯の名称	S.I. 37 P/SE & P/NE	Wala's Map	Gruber or Lapuch	Anglada
Main Peak	7398	7398	7403	7403
North 〃	7248	7373	7373	7370
South-East 〃	—	—	7365	7365
North-East 〃	—	7276	7276	7150
South 〃	—	—	—	7303
West I 〃	—	—	7300	7300
West II 〃	—	—	7280	7280
Rock Pinnacle	—	—	6828 or 7200	7200
Nobaisum Zom	6999	7070	7070	7070
Tirich Mir I	7700	7706	7706	—
Noshaq I	7492	7492	7492	7492

3. Istor-o-Nal の観察と登山年譜

I-o-N の山座同定を行おうとすると，この山の周辺に登山したり，山裾を旅行した人々の報告や紀行を読まねばならない。ここで観察とは，周辺の山々から，I-o-N の山岳景観や山岳構造についての資料によることを意味している。もちろん，I-o-N への登山そのものは，直接の観察であるから重要である。幸いわが国の人々が，この地方にも数多く入山しているので，その方々から御教示をえた。一方，ヨーロッパのヒンズー・クシュニストの資料は，吉沢一郎さんを通じて頂くことができた。

ここでは，不本意ながら次の第3表および第4表に示すような分類にわけさせていただいた。表の文献の中で Pr.C. とあるのは，Private Communication の略。

以上が，I-o-N を眺め，試登，登頂の年譜である。ここで 1935 年 Lawder 隊および 1955 年 Murphy 隊は，主峯の頂上直下 60 m に達し，初登頂したといわれている。しかし報文を読むと，Great Saddle に下り登ったという記述は見当らない。オーストリアの人はこの点を指摘している。1969 年の野村隊にはこの点をよく見極めてほしいと，Attack Designation を作成して持参してもらった。日時の関係もあったろうが，隊員の高所順化と，時間に負担をかけたのでなければよいがと案じる。これらの詳細については，問題が別であるから詳しい比較分析は行なっていない。しかし報告の記述の仕方とその状況を文章に残すとなると，誤解をうけない書き方や表現をせねばなら

§3-1　　第3表　測量・他峯より Istor-o-Nal の観察表

年代	隊の人名	種別	内容	文献
1928-9	Burn, D.M.	測量	Tirich Mir, Istor-o-Nal 周辺の測量	文1
1935	Schomberg, R.	旅行	Rosh Gol などの谷に入る。I-o-N はその全容をつかみえず。地方誌，偵察は興味あり。	文3
1938	Finch, J.R.G.	測量	Buni Zom 山群の近くより西方の再測量をなす。パノラマ写真をとる。	文2
1960	岩坪五郎 酒井敏明	観察	AACK：Noshaq 登頂の途次，西方より I-o-N の西面写真をとる。	Pr.C.
	Zierhoffer, S.	—〃—	ポーランド隊，第2登頂の途次，上記と同じ写真をとる。	文4
1963	Gruber, G.	—〃—	オーストリア隊。R. Pischinger, Noshaq 主峯から同じ写真をとる。	文5
	Trüswetter	—〃—	Bandakâ の北の Koh-e-kâ-Safed 6,192 m の北の肩から東面の写真をとる。	文6
1965	Gruber, Gerald	測量	Buni Zom 山群の 5,900 m 峯から，Tirich Mir より北方 Lunkho までのパノラマ写真と測量を行う。I-o-N の部分は Fig.4 に示す。	文7
1966	雁部貞夫	観察	カゴ・レヒトの北端から，I-o-N の東面の写真をとる。	Pr.C.
1967	Lapuch, K.	—〃—	Udren Gol の1支氷河 Lopar Gol に入り，Lopar Joz Zom 5,730 m に初登頂し I-o-N 東面の写真をとる。（吉沢へ私信）	文13 Pr.C.
	宮森常雄ら	—〃—	Golen Gol の原頭 Isphel Zom ca 6,000 m 付近から，I-o-N 東面の写真をとる。（筆者への私信）	Pr.C.
	山本健一郎ら	—〃—	Udren Zom South Pk の 6,500 m から I-o-N の北東面の写真をとる（文8：対192頁カラー写真）。Saraghrar South Pk への 7,000 m 付近から，上記と似た写真をとる（同上）文9：Udren Zom の C3（6,300 m）からのパノラマ。	文8 文9
	市川岳連隊 高島一芳 有岡達郎 高橋定昌ほか	—〃—	Tirich Mir 攻撃の途上，右記両氏の I-o-N の南面のパノラマ写真をとる。（高橋氏のものは文14に2葉掲載されている）。	文10 Pr.C.
1969	福岡岳連隊 末松大助 新貝勲ほか	—〃—	Tirich Mir 攻撃の途上，その西稜の 7,550±100 m 付近から，Noshaq-Istor-o-Nal 東南面のパノラマ・スケッチを描く。これを借用させて頂いた（写真は検閲未済のため入手できず）。	Pr.C.

ぬことになる。その証明として写真が役立つが，Murphy 隊のように頂上荒天，しかもフィルムを盗まれ，また映画も現像失敗で，写真証明をかくとなるといささか困難な問題となる（文 12）。

§3-2　　第4表　Istor-o-Nal 南面登攀表　　〔試＝試登 登＝登頂〕

年代	隊の人名	種別	内容	文献
1929	Major Dutton Lt. Burn	試	Istor-o-Nal の南面《上部》ティリチ氷河から，minor couloir を登り，西稜の稜線に達した。	文1
1935	Capt. J. Lawder D. Hunt	試	同じルートをとり，西稜をつめ，I-o-N の頂上直下 60 m に達したという。	文11
1955	J. Murphy T. Mutch K. Bankwala	登	同じルートをとり，I-o-N の主峯 7,398 m に初登頂したという。	文12
1967	K. Lapuch M. Oberegger	登	I-o-N 西稜と Nobaisum Zom 7,070 m の間の北西の氷河をつめ C3 から I-o-N 北峯 7,373 m, NII c.a. 7,300 m に初登頂した。北峯より［N-1］の写真をとる。 （吉沢一郎さんへの私信）	文13 W-2
1968	山野井武夫ら	試	I-o-N 西稜に試登	文14
	佐藤京子 渡部節子 芦谷洋子	登	I-o-N 西稜を登り西稜上の1峯 ca. 7,200 m に登頂した。	
1967	チェコスロバキア隊	登	I-o-N 西稜をへて西峯群に達した。 （下記2隊の情報による）	Pr.C.
	野村晃ら	登	チェコ隊に続いて西稜 C4 より，西峰群に登った。主峯攻撃再挙のため下山中，C4 の手前で森本隆隊員が西側に転落死した。写真類はともに落ち回収不能。	Pr.C.
	Barcelona, Jose-Manuel Anglada ほか	登	上記隊が森本隊員を捜索中に西稜にとりつき Rock Pinnacle 上部より懸垂数回で Great Saddle に下降，C6. 8/12 主峯下部の Grat II をこし couloir II の上部雪田を横断して東進し，南峯 7,303 m，南東峯 7,365 m，南東稜下をへて Istor-o-Nal 主峯 7,403 m，それぞれに初登頂し C6 に戻る。 （吉沢一郎さんへの通信）	Pr.C.

4. 山岳写真景観より見た Istor-o-Nal の山座同定

掲題の解析方法は以下に詳述する。これらの資料は，いずれも踏査者の写真を主としたもので（写真をスケッチしたものを含む），科学的な成果をとり入れる以前のものが大半以上である《例えば Dr. Gruber's Panorama は科学的成果といえる。高度計による高度数値また採集岩石による地質学的考察，山頂からの標定や測量などのデータを吟味したものではないことをお断りしておく》。また記述の詳細においても，実地踏査者の報文を尊重することは勿論であるが，記述の不充分な点については説明を加え得ない点もある。

すでに§3 で述べたように，写真撮影場所の位置により，東西南北から I-o-N の山

頂や頂稜線に視線を集中すると，その山塊の最高峯（この場合 I-o-N の主峯，次高峯等）が明白になる。換言すれば最高峯の頂上から，これらの山々を地図と併用して確認し，放射状パノラマをとることは，登山者が登頂の記念として（初登頂などでは証明となる）行う。これらのトレースした方向を Fig. 3 に示す。よい写真をとるためには，早朝や好天にめぐまれる必要もあり，季節とも関係する。登頂時にこうした恵まれた場合はめずらしいであろうが，いついかなる時でも，自己位置の確認と地物等の観察も大切である。もし写真がとれない状態ならば，記述によらければならない。将来は航空機等からの登山確認や偵察や撮影が行われよう。いや，すでにその一部は行われている。

ここでは，方位的に次の方位による。

4-1　東方（南東・北東・北）から

4-2　西方（北西・南西・西）から

4-3　南方から

各項の記述は次の順序で配列した。

a)—遠方・高所から　　b)—隣接の山から

c)—山裾から　　d)—航空から

ただし，d）は注目しているが，資料は見ていない。

4-1　東方向（北東・南東）から

4-1-1　南東面（第 3,4 表，文 7a, 7b 参照）

a 1)　Gruber's Panorama

Dr.G. Gruber のパノラマは，Buni Zom 山群の Khorabohrt Dar の 5,690 m 峯からとられたもので，Fig. 4 にスケッチ[**E-1**] に I-o-N の部分を示す〔若干改訂した〕。

主峯 7,403 m の左は南東峯 7,365 m で，その左肩下にスペイン隊の登った南峯，7,303 m があろう。主峯の右はいわゆる Great Saddle の上限で，その右のピークは K. Lapuch のいう W I（西稜第 1 高峯）である。これは福岡岳連隊の写真のスケッチを見て判った（Fig. 11 [S-3] 参照）。即ち 7,300 m 峯である。北峯への凸起の高所が W II 7,280 m 峯である。北峯 7,373 m 峯は，I-o-N の次高点である。その右のコブは Lapuch のいう N II，III で後者は少し低い。北東峯 7,267 m (7,150 m Anglada) は顕著なピークである。これは東峰とも呼ばれたものであるが，Anglada のいう東峯 7,100 m は，Fig. 4 の NE 峯のクニーク稜線の下に示す点であるが，まだ資料不足で何んともいえない。

これらの頂稜線をつなぐと Istor-o-Nal，即ち馬蹄形となる。この写真はそれをよく示している。これは山頂の定高性（summit-level accordance）をもつ山塊と考えられる（Noshaq, Saraghrar もふくめて）。地形的には，東面は東へやや傾いた頂上雪田を抱き，図の Kosht Zom 4,760 m の上に見える上部の雪の流出が懸垂氷河となり，落下中に南に方向をかえて，上部ティリチ氷河へ落ちるクーロアール III に入るものと思われる。現今のように氷河後退期では，デブリは少ないであろう。

1938 年の Finch 氏（文2）のパノラマには，I-o-N の右に Noshaq が示されているが，Gruber 氏のいうように，Shingeik Zom 7,291 m で，Noshaq は完全に I-o-N の背後になり見えない。

a 2) そのほか

Gruber パノラマの頂上雪田の北峯の下には，雪をつけた Insel 状の岩塊が認められる。

Lapuch 氏はこれは北峯から発しているといわれるが，NIIIが南東峯寄りと考えられる。1966 年雁部貞夫さんが，カゴ・レヒト高原の北端から望んだ写真では相当な突起である。また 1967 年宮森常雄さんらが Golen Gol 原頭の Ishpel Zom ca. 6,000 m 付近からとった写真では NIII に近い。さらに Zani 峠から眺めた写真は，高橋定昌，佐藤京子さんらのものがある。

b) Lapuch : Lopar Joz Zom 5,730 m [**E-2**]

Zani 峠 3,886 m よりも近接した高所として，吉沢さんからおかりした，掲題の写真を Fig. 5 [**E-2**] に示す。この峯は Udren Gol 右岸の1支流 Lopar Gol から 1967 年6月 21 日に Lapuch と Manfred Oberegger 氏が初登頂した。Zani 峠よりよくわかるが，Insel とWIIとの重なりあいが写真では明瞭でない。Lapuch の図は地形的に Wala's Map と合致させていないが，検討を要する。東峯は黒三角形？

c) d) 写真入手せず。

4-1-2 北東面から

a) 一橋大学隊：Udren Zom South Peak 7,050 m への途上 6,500 m および Saraghrar South Peak 7,350 m への途上 7,000 m より。

この2つの写真は文8《ロシュ・ゴル氷河の山旅》の対 192 頁のカラー写真と，同書口絵の9葉目のものを併用して眺めていただきたい。

前者の画面の右端は Nobaisum Zom 7,070 m, Col, 最も高く見えるのは I-o-N 北峯 7,373 m, それから左（東）へ岩稜が続き，中央の三角形は北東峯 7,267 m, その背後のスカイラインを限るのが，主峯から南東峯への稜線であり，鈍い三角形は南東峯である。主峯は南東峯にかくされている。このことは，後者の画面にはっきりと示されている（なおお借りしたカラー写真では明白にトーンがついている）。またこの山が塊状を示し，高所からでないと山容がつかみにくいことを物語っている。

b) Lapuch : Shongo-Lasht Zom, 5820 m

これは§4-1-1 b) にのべた，Lopar Gol の詰めにある山で，1967 年6月 17 日，Lapuch, Oberegger, Max Friedwager と人夫 Neyab Khan が初登頂した。Lapuch の地図でみると，懸垂氷河のすぐ東のピークである。写真は未入手（Pr. C. および文13参照）。

c) d) 資料入手せず。

4-1-3 北面から

b) K. Lapuch : Itsor-o-Nal 北峯頂上から，主峯，Great Saddle, WI を望む [**N-1**]。

1967 年6月 29 日 K. Lapuch と M. Oberegger は，I-o-N の西稜と Nobaisum Zom 7,070 m との間に北西に食入る氷河に入り，これをつめ，壁の途中に C2, C3 をおき，C3 から北峯に初登頂した（文 13 参照）。北峯から主峯を望み上述の写真を撮影したのが Fig. 6 [**N-1**] である。

左のピークは南東峯，その右の雪のドームが主峯，頂上から岩稜（南稜）が上部ティリチ氷河へ下っている。また右下（西北）に雪稜が下降してきて，Great Saddle となり，西稜からの rib と結ばれる。西稜の高点は，Lapuch 氏のいう WI 7,300 m。Rock Pinnacle がどれかは判然としないが，おそらく背後である。スペイン隊は雪の状態のために，Rock Pinnacle 付近から懸垂数回で Great Saddle に下り C6 を設営したという。《この Great Saddle への下降は，本題の当初以来脳裡に去来した問題であり§5に述べる》。背後の山々は Tirich Mir 山群である。

a) c) d) 資料入手せず。

4-2 西面から（含 SW, NW 方向）

a) Iris Trüswetter 夫人（文6）が，Koh-e-Kâ-Safed 6,192 m の北の肩から写真をとった。この山から I-o-N は，約 85 km も離れているから，遠景にすぎる。だが，この写真は北東ヒンズー・クシュの山の特徴をよく示している（写真省略）。即ち Tirich Mir, I-o-N, Noshaq は塊状に聳立しているということである。このために氷河に入った R. Schomberg（文3）は，前山にさえぎられて山頂を望みえなかった。一橋隊が Saraghrar South Peak に登ったのは，Atrak Zom の支稜からの観察が有効であったときく。対岸からの（高所ならさらによい）偵察は，翼をもたない登山者に多くの情報を与えてくれる。同時に航空写真の領域が，もっと認識されて然るべきである。

b1) Noshaq から（AACK）[**W-1**]

1960 年 AACK の Noshaq 初登頂は，北東ヒンズー・クシュへの重要な第一歩であった。《ノシャック登頂》では，山頂や途上から周辺の景観写真の掲載は遠慮されていた。こゝには，カラー・スライドの一部をおかりして，スケッチにしたものを Fig. 7 [**W-1**] に示す。頂稜線などの重なり具合や，WI，WII については，スケッチを K. Lapuch 氏に送り，指示を得たことを感謝とともに記しておく。

左端高点は北東峯，次（右）は北峯，その直下（西面）の点線は Lapuch の登頂ルート。下の雪壁は Nobaisum Zom である。北峯の右（南）の高点は WII，ややコル状に凹み，WI峯となるが，この背後の高点が I-o-N 主峯である。Lapuch 氏によれば，黒色の頁岩（Shell）（泥板岩）で，西稜の岩質（Tirich Mir Granite）とは色が全然異なるという。なお文 13 の S. 145 によれば Dunkle, Vermutlich Paläzoische Schiefer と Diemberger 一家の作成した地図に記入されている。西稜と主峯との重なり具

合は，スライドからは覗き知れない。これによれば Lawder 氏のいう 2nd false summit（2 fs と略す）と 1 st false summit（1 fs と略す）が望まれる。

b 2） Noshaq から（ポーランド隊）

1960 年ポーランドの Klubu Wysokogórskiego は，AACK に続いて Noshaq の第 2 登に成功した。文 4 の "Taternik" によれば，6 人の登頂者がならび，右にI-o-N の北峯が写っている写真がある。また 59 ページには Noshaq の C 4（6,900 m)に 2 組のテントをはり，その背後に［W-1］と同景の写真が写されている。主峯は他と比較すると黒々とした岩峯である。これによれば，WI 7,300 m は，北峯と同じ高さであるが，写真の水平が少し傾いている感じがする。

b 3） Noshaq から（Steirischen H-K. Exp '63, Gruber）

Dr.G. Gruber の指揮する Steirischen H-K 遠征隊は，1963 年 Noshaq の第 3 登に成功した。隊員 Rudolf Pischinger（Graz）は，Noshaq の頂上から I-o-N の西面の写真をとった。写真は露出過剰であるが，主峯は西稜上に聳え明瞭になる。即ち主峯のすぐ右に南東峯があり，その右少し下に雪田に続いて南峯が写されている。1969 年スペイン隊が南峯に登ったというので，その山頂をさがしたが，南面からはわからず，すでに 1964 年の ÖAZ に発表されていた。文献といえども，真摯に見なければならないことを教えられた。また b 1）は Noshaq の頂上よりやや低い位置から撮影されたことを物語っている。

b 4） Ghul Lasht Zom, East 6,611 m Fig. 8［**W-2**］ (courtesy by Mr.K. Lapuch through Mr.I.Yoshizawa)

上部ティリチ氷河のどんずまりに聳えるこの峯から，Kurt Lapuch 氏の I-o-N の北峯へのルートがよく示されている。左は Nobaisum Zom 7,070 m で，Lapuch と Kurt Diemberger 氏が，1967 年 7 月 10 日に初登頂した。南面から見ると，あのなだらかと見える I-o-N の西稜が，ジャンダルム状に見え，WI が［N-1］の裏側として，その姿が合致する。主峯から南東峯にかけて，降雪直後であろうか，ひどい積雪が見られる。将来 Asp-e-Safed 6,507 m から，真正面からの視景が得られるならば，さらに明らかになるであろう。

a） c） d）資料入手せず。

4-3 南面から

I-o-N の登山は南面から行なわれてきた。上部ティリチ氷河が ordinary route とされ，近年の Tirich Mir 登山も同様である。

上部ティリチ氷河は，地図によれば，全長 16.5 km，幅 1～1.5 km。氷河の高度は入口で約 3,600 m，西端で約 5,000 m，比高 1,400 m。BC を 4,700 m とすれば，Rock Pinnacle までの比高は 2,600 m である。スペイン隊の BC は上記の高度で，野村隊長によれば，ここの方がすぐれているという。北には西稜があり，Adolf Diemberger はこれを Grat I，主峯から真南に下りているのを Grat II，南東峯から降下

しているのを Grat Ⅲ と称し，西稜と GⅠ との間の谷を couloir Ⅰ，GⅡ と GⅢの間のものを couloir Ⅱ と名付けている。

氷河上から，マッシーブな西稜の稜線のどこまでが視界に入るのか，どこからどう測量したのか知らないが，I-o-N の頂上が視界に入らないことは，高橋定昌さんから頂いた写真でわかる。換言すれば，西稜や主峯，couloir Ⅰ などをよく観察するならば，南へ後退して上部ティリチ氷河上流か，ティリチ前衛峯に登らねばならぬ。まずここらの模様からのべてゆく。（ここでは説明上 a, b, c の順をかえる。）

c 1) 千葉岳連隊

《ヒマラヤ 7403 メートル》の中の高橋定昌さんのカラー写真を見たときの驚きは，Lawder や Murphy の写真を見て以来，この山のヴェールがはがされた感じがした。というのは，筆者は深田久弥さんの《ヒマラヤの高峯》第3巻イストル・オ・ナールの挿画を描いたとき以来，頂上はどこかとさがし求めてきたからだ。Lawder の写真には右端のものと但書きがあったが，およそ判然とせぬものであった。Murphy のは HJ に雪の頂点がちょっと覗けるもので不充分。ほゞ同じ地点からとったパノラマ（3葉続き）が，文 14 の口絵にあり，これらは少なくとも 5,100 m 以上からでないと写せないものと思う。ここでは，同じ隊の副隊長有岡達郎さんの写真を借用して Fig. 9[**S-1**] にかかげる。

写真の右の高点は南東峯，その直下右の白い雪の弧の左の岩塊が南峯と考えられる。左の岩のカムは I-o-N の主峯である。ぐーっと凹んでいるのは Great Saddle，その左の岩峯から左へ続くのは長い西稜であり，最高点と見えるのは 2 fs から数えて3つ目の突起であろう。西稜の雪の稜線の高所でフラットになる地点は 2 fs である。画面左背後の山は Nobaisum Zom であり，その雪壁に三角形の頂を見せているのが，西稜の西端 5,953 m であろう。

c 2) 同上 Fig. 10 [**S-2**]

さて [S-1] では，2 fs から Great Saddle に至る西稜がパノラミックに見えない。そこで再び有岡さんが，千葉隊の C 1 4,500 m から撮影した写真 [S-2] を借用して説明しよう（高橋定昌さんのほぼ同じ画面もある）。

画面の右の高点は南東峯の頂上，その左肩の角の上部が南峯と思われる（後述）。左に雪田が弧を描いているのは，couloir Ⅱ の上部で崩壊断面が見られる。主峯は断面の中央背後にある筈である。左下に対角線を描く稜線は GⅡ，その左手(西)は couloir Ⅰで，上部が Great Saddle であるが見えない。左上から中央のスカイラインを画するのは，西稜である。この C 1 4,500 m から，西稜のどの高さまでが撮影されているというのが1つの問題点である。即ち，画面の左の高点は 2 fs で，西稜は右へ水平線のように写っているが，これはほぼ同じ傾斜で北へ延長しているが，西稜は S.I. の地図で右に描かれているが，これは誤りで，2 fs からやや北東に方向を向けているためである。画面の西稜の右端の雪面に小さい岩塔が見える。この岩塔は《ヒマラヤ 7403 メ

ートル》（文 14）の外箱の絵と口絵にあるカラー写真に示す Rock Pinnacle である。その背後に佐藤京子さんたちが登った雪峯がある。このピークには，関学隊によれば，つぶれたツェルトザックが捨てられていたという。また，スペイン隊によれば，さらにその奥のピーク？ には，アルミのポールが突きささっていたという。画面の岩塔から右の斜面は couloir I に続く rib の1部であると考える。

b) Tirich Mir 西稜（7,500±100 m）から Fig. 11 [**S-3**]

《1969 年福岡岳連隊のスケッチによる》

山座同定において，写真により判断するには，高所よりの視景が一番情報が多く有効であるとは，前述の通りである。筆者が第1に見たかったのは，Tirich Mir の頂上から望んだ I-o-N の写真である。つまり Kurt Diemberger 氏が《オーストリア山岳連盟年報》第 93 巻（1968）に発表していない I-o-N の写真である。吉沢さんにお願いしたが，Kurt 氏は旅行中でわからぬと父 Adolf 氏から返事があり，息子は登攀記を出すということで，それまで待たねばならぬようだが，I-o-N への関心は強く，前述の Grat I や couloir I などのスケッチを送られてきた。それによると Lawder, Murphy の登山には疑問がもたれていた。

1969 年福岡岳連隊の Tirich Mir 遠征は，RAF 隊とかち合ったため，大幅に遅延し，残念なことに頂上直下で落石のため引返したときく。Tirich Mir の西稜の 7,250 ±100 m（アネロイド）から，I-o-N 山塊の南面を写したスケッチを見ることができたので，Fig. 11 [**S-3**] として示す。

これによれば，I-o-N の南面の頂稜の全貌を見ることができる。やはり高所からの展望の素晴らしさに驚異を感ずるものである。

図の左上の高点は Noshaq，その右稜線端は Shingeik Zom。I-o-N の西稜は，末端から高度をあげてゆく様相がよくわかる。西稜の中央背後の山は，Nobaisum Zom である。その南東稜が西稜の影にかくれるが，西稜にややフラットをもつ左角が 2 fs である。この景については [S-2] [S-1] の岩の形をよく参照して頂きたい。西稜が背後の山のないスカイラインに出る地点の右の雪のピークの左手前に，C-2 で述べた Rock Pinnacle（小三角形）がのぞまれる。その峯が西稜上の1峯 7,200 m で，女性隊の登頂したピークであり，その北端に小ギヤップがあり，次に長大な雪のドームとなる。これが WI 7,300 m で，頂からは岩をまじえた下りとなり，稜線は小鞍部を形成し，右（東側）に降れば Great Saddle である。稜線は岩場をまじえ，WII 7,280 m となり，凹みをへて I-o-N 北峯 7,370 m に続く。西稜のつめは白い雪の峯，北峯である。ここでこれらの峯の高度を確認しておこう。Nobaisum Zom 7,070 m から水平に線を引くと，Rock Pinnacle の左肩下辺であり，Rock Pinnacle 7,200 m は妥当であろう。WII は 7,280 m とされている（Lapuch）。北峯は 7,373m で WII の 7,300 m は容認できる高度である。Great Saddle は Nobaisum Zom とほぼ同一，7,100 m か少し高いところであろう（Anglada による）。

さて，主峯は雪をとどめていない立派なピラミダルを見せている。今までの写真では，これほど整った三角形の絶嶺は望みえなかった。頂上から左斜め対角に下っているのが Grat II，その左の Great Saddle に達するのが couloir I，頂上直下は couloir II である。頂上の南東稜線が右下に下り，その末端隆起が南東峯 7,365 m である。この頂上の左下に，主峯と似た黒い斜面の頂上が南峯 7,303 m である。南東峯の右の背後の白い峯は北東峯 7,276 m（Anglada 7,150 m）である。

c 2) 千葉岳連隊の BC から

順序の配列が乱れて恐縮であるが，今までの観念からすると，I-o-N の南峯といわれると，いわゆる SE 峯をこう呼ぶこともあった。しかしスペイン隊によれば，SE 峯のほかに南峯 7,303 m を示されてみると，その頂上を確認しなければならない。そこで有岡さんからお借りした写真を Fig. 12[**S-4**]に示す。中央の頂上は南東峯 7,365 m である。その左への稜線を辿ると，雪のコルの左に小突起をもつピークがある。これを南峯と認知する。ここらの景観は余り見られない。なお〔アサヒ・カメラ〕44 年12月号，《神々の座》を撮影している白川義員氏が，ほぼ同じ頂上の図を得ている（カラー写真）。ただし，イストル・オ・ナールとしてあげるだけで，説明はない。

4-4 Spanish Exp. 1969.

すでに第4表にも記した通り，スペイン隊は，野村隊に次いで攻撃し，幸いにも主峯その他に初登頂した。隊長 Jose-Manuel Anglada 氏は吉沢一郎さんと既知の間柄であり，野村君も隊員とアンデスで知りあいであったので情報交換が行なわれ，交信があった。遠征の概要は次の通り（吉沢さんへの書簡より）。

正式名は Expedicion Barcelona al Hindu Kush, 主催は Club Montañes Barcelonas.

隊員：Juan Cerda, Emilio Civis, Jorge Pons, Gines Roca. Liaison Officer: Amir Hashmat. HAP. 4 名，Shagram から，皆優秀とのこと。

［I］ 登山活動

7/23 Ano Gol, 7/26 Apollo XI Zom (6,010 m), 7/28 Ghul-Lasht-Zom III (6,361 m)，後で High Camp を 5,850 m に移し，7/31 Catalunya Zom (6,060 m)，同日 Asp-e-Safed South (6,450 m 登頂)。

［II］ 主目標（通信文のまま）

われわれの主目標は Istor-o-Nal でありました。南東峯および南峯は未踏峯でした。主峯は 1955 年にアメリカ隊によって登られていたことになっていましたが，その資料を検討した結果，彼らの登ったのは，岩峯から北峯へ続く山稜上の一峯に登っていることがわかりました。

主峯へ登るためには前記の山稜〔西稜〕を下り，Istor-o-Nal 主峯群を分つコルに下る必要がありました。従って岩塔から以後の登攀はすべて初登攀となります。行動は次

の通り。

8/4. C 2 (5,460 m), 8/6. C 3 (6,280 m),

8/9. C 4 (6,610 m), 8/10. C 5 (7,050 m),

8/11. Rock Pinnacle (7,200 m), C 6 (7,100 m),

8/12. Istor S (7,303 m), Istor SE (7,365 m),
Istor Haupt (7,403 m or 7,398 m)。

〔注〕 写真未着につき説明ができないのが残念である。

5. Istor-o-Nal の登攀と山座同定をめぐって

紀行，測量，登攀史，地図，写真などの資料から，目指す山の地学的な山の姿を正しく認識し，その山への準備をするのは常識である。しかし未知の山域や資料の少ない山々では，山容や山頂が，希望通り得られるわけではない。入山前後のこうした作業をすることは，楽しいことといわれている。

ここではまだ山座同定論を述べるには至らぬが，その方法論の一端を示した。即ち遠景，高所の山々からの展望，隣接の山頂や尾根からの見え方などにより，山の全容をつかむことで，詳細については近景をうることにより，さらに正確になる。なお航空写真か同映画によれば，より確実性を増すことはもちろんである。幸い先駆者の資料を引用し，特にわが国の写真を見る機会が与えられたことは有難かった。

登攀史については，第3表，第4表に示した内容では充分ではない。これらの報告類については，地形・ルート・比高・方向・時間・天候・積雪などについて，充分記述してあるとはいいがたい。最近では Technical Notes が用いられているから便利である。これらのないものは，登攀比較分析が行われるべきであろう。

I-o-N の登攀には，§4-3 に述べた通り南面の上部ティリチ氷河側から行なわれ，西稜がルートとされている。しかし Lawder 隊の報告にも，Murphy 隊の報文にも，Great Saddle に下降している記事がない。地図の記載表現にも誤りがある。即ち，SI の地図に示されているように，西稜は主峯に通じ，主峯から北峯へ連結している。この地図の通りに登ったならば，Great Saddle への下降をどうしたのかが問題である。

ここで，Lawder 隊と Murphy 隊の試登と登頂記の関連記述の本文を原文のまま引用しよう。

(5-1) Lawder :

"On the 11th [Aug.], which quite by chance turned out to the great day of the expedition, we left Camp II at 7 a.m. The thermometer read 20°F. We reached Hunt's farthest point of the previous day at 9.10 and had a good rest. I was not feeling fit again, in spite of a rest the day before; and after we had been going for an hour in soft snow and reached a point at about 22,800 ft. I got cramp and was unable to go on. It was a beautiful day with

not a cloud in the sky, so, leaving me safely ensconced, Hunt with the two coolies went on.

About 100 yards farther on, the ridge narrowed down to a width of about 4 inches for a distance of 20 yards. I watched them cross this like three tight-rope walkers and reach the wide ridge leading almost direct to the summit. The going here was very exhausting and at 1.45, having been moving almost without a halt for three and a half hours, they were within 400 yards of the summit and not more than 200 feet lower. Greatly to my disappointment, after having nearly an hour's rest, they turned and started back. (文11. H.J. p.57)

(**5-2**) Murphy :

"A half mile beyond camp the narrow ridge expanded into a broad plateau which rose to what we thought might be the summit. Just below the highest visible point was where the English party had turned back in 1935. We inhaled five or six times after each step and climbing slowly, alternated the lead to share the task of breaking steps in the knee-deep snow.

It was a clear day, and we could see the twin peaks of Tirich Mir behind us and the mountains of Afghanistan to the west. To the north, the next ridge swept westward toward an unnamed 24,000 foot peak. Small gusts of snow and wind blew up from the ridge. We had hoped that Istor-o-Nal would not produce exasperating illusions in the form of false summits, but our wish was not fulfilled. The first high peak of snow proved to be a false summit. We continued climbing along the ridge. Beyond a second false summit we could see the ridge narrow and curve toward the right. Its south or inner face was precipitous, and its narrow crest rose gradually to a point and then descended. Now we were nearly certain that our goal was in sight.

Keeping below the crest of the ridge to avoid overhanging cornices, Tim moved forward slowly, breaking steps in the snow. Clouds began to drift in from the south, periodically limiting visibility. We struggled upward for some time until we finally reached three small mounds of snow. Fifty yards beyond, the ridge leveled and several hundred yards farther, it fell away. We had reached the summit, 24,242 feet above sea level. (文 12 pp. 71)

(**5-3**) Anglada 氏の見解（吉沢さんへの通信文より）

氏の見解を引用させていただく：

1) 彼らは C4（われわれのと同じ場所のように思えます《スペイン隊は野村隊の C4 を借用したと Anglada 氏より通信があった由》から，山稜がずっと頂上へ続いていると言っています。御承知のように，この山稜は花崗岩で出来ており，延々とのびて最後

に北峯へ達しておりますが，主峯へは続いておりません。

2) その上彼らは C4 を深雪の中に設け，それからコルに下らずに頂上へ行っています。そして同じ日に C4 へ戻って来ました。第1にコルへ下りずに最高峯へ行くことは不可能です。第2に悪条件の中では，1日で登降するには距離があり過ぎます。われわれは事実，それから C5 を設け，C6 をコルに設置して，そこに2晩泊まり，最後に C4 へ戻ってきました。つまり4日を要していることになります。しかもわれわれの場合には，天気も条件も良かったのに，彼らは深雪の中を歩いています。

3) 最後に，彼らの頂上の記述には，Istor-o-Nal の主峯ということが何も書いてありません。彼らのいうのは，岩峯から少し先の山稜のことを意味していることがわかります。

ホセ・マヌエル・アングラーダ
バルセロナにて
《吉沢一郎訳》

さて，スペインからの写真を待つが未着であり，締切日も過ぎて編集者に迷惑をおかけしているので，種々の問題は残ってしまったが，頂上 7,403 m の指示のちがいという問題は，アメリカ隊と同じように登ったということにはまちがいなかろうが，アメリカ隊の地図に示した点線とは異っている。筆者は，この山の最高点，即ち 7,403 m の山座が正しく認識されていないことを疑問としてきたが，その一端の解明には役立つことができた。しかしここで，まだ同定論的な未処理の問題が残されているので断言をはばかる。スペイン隊の正式報告が発表されたならば，改めてこの峯の山座同定を考えてみたい。

最後にこの問題について，多くの方々の御援助・御協力をいただいた。今は御尊名を記さないが，厚くお礼の言葉をのべさせていただく。またスペイン隊より早く，主峯登頂云々を検討され，吉沢さんを通じて通信・資料を送られた Adolf Diemberger,Kurt Lapuch, M. Anglada 氏には深く感謝の意を表したい。(未完)

参 考 文 献

1. Burn, Lt.D.M. : Istor-o-Nal and some Chitrali superstitions. H.J. Vol. 2, 1930, pp. 68–72. ills & map (以下 OX. と略す)。
2. Finch, J.R.G. : Hindu Kush, 1938, H.J. Vol. 17, 1952, pp. 115–117. OX.
3. Schomberg, R. : Mountains of N.W. Chitral. A.J. No. 314, 1967, pp. 1–14. OX.
4. Zierhoffer, Stanislaw : "Taternik" R. 38, Nr 2–4, 1962, pp. 59, Foto : Obóz IV (ok. 6,900 m) Polskiej Wyprawy na Noszaku; w glebi Istor-o-Nal (7,398 m).

5. Pischinger, Dr. Rudolf : Bergsteigerische Ziele im Osthindukusch. ÖAZ, Folge 1334, 1964, S. 26–29. OX.
6. Trüswetter, Iris : The Garmisch-Partenkirchen Hindu Kush Expedition, 1963, A.J. No. 309, 1964, pp. 249–252, ills No. 69.
7 a. Gruber, Gerald : A Panorama of the Hindu Kush, A.J. No. 314, 1967, pp. 1–14, OX.
7 b. Gruber, Gerald : Hinduraj-Hindukusch, 1965, J.d. ÖAV Bd 91, 1965, S. 115–127. OX.
8. 山本健一郎編：ロシュ・ゴル氷河の山旅：一橋大学東部ヒンズー・クシュ紀行(1967)，東京・あかね書房（1968）274 ページ。OX.
9. 一橋大学山岳会：ロシュ・ゴル 1967 年—サラグラール南峯ほかの登攀〔山岳〕第 63 年（1968)，32–49 ページ。OX.
10. 高島一芳：ティリチ・ミール，1967 年〔山岳〕第 63 年，169—176 ページ。
11. Lawder, R.J. : Istor-o-Nal : The 1935 Attempt. A.J. No. 252, 1936, pp. 118–123. OX., A climbs on Istor-o-Nal, 1935, H.J. Vol. 8, 1936, pp. 53–62. OX. イストル・オ・ナールに挑む：松本三郎訳〔ケルン〕41 号，昭和 11 年 10 月，5—11 ページ，OX（同文は宇野光一編〔ヒマラヤの山々〕I, 211–218 ページにあり）
12. Murphy, Joseph E. Jr. : The Ascent of Istor-o-Nal. AAJ. Issue 30(10 : 1) 1956, pp. 66–74. and p. 199. OX ;-do- H.J. Vol. 19, 1955–56, pp. 156–164. OX.
13. Lapuch, Kurt : Hindukusch-Expedition 1967 der Hochtouristengruppe Salzburg. J.d. ÖAV, Bd. 93, 1968, S. 137–141.
14. 佐藤京子編：ヒマラヤ 7403 メートル，東京・あかね書房，(1969.)
特に第 4 部 285—380 ページ OX.

（記・1969.11.23）

雄大で繊細。急変する山の光をニコマートが正確に測光します。

山の端からのぞいた光が，突然雲に隠され，霧雨が原始林をはふようにして降りてくる。ねらった光をそのままに，す早く測光するＴＴＬ機構とシャープなニッコールレンズを備えたニコマートは，山岳写真にも威力を発揮します。雄大な遠景を望遠で，繊細な高山植物を接写で……。ニコマートの豊富な交換レンズも活躍します。

明るくシャープなレンズ、常に的確な測光
Nikkor Lenses+TTL

Nikomat FTN

〈現金正価〉ニッコールオート50ミリF2付き　¥46,500より各種　皮ケース¥2,200より

Nikon 日本光学工業株式会社　東京都中央区日本橋通1　7・〒103（日本橋西川ビル）

●カタログ送呈！誌名と品名をお忘れなく

カメラはニコン　メガネもニコン

TOKYO TOP
東京トップ

いつも厳しい条件に挑むために！

安全性と機能性は
アイガー北壁直登隊で
立証されました。

- ピッケル　ローツェ
- 〃　R.C.C
- スーパー　カラビナ
- ロックハンマー初登
- アイスハンマー氷壁
- スクリューハーケン
- 普及8本爪アイゼン
- 登山ヘルメット滝谷
- 〃　谷川
- ホエーブス　No.625
- ひらりかん(下降器)
- クライマー　ベルト
- コッヘル　各種
- シルバー　コンパス
- ハリケンランプ各種
- クライマーゴーグル
- 特殊ハーケン　各種
- ザイル　各種

Ever New
EVER NEW TOKYO

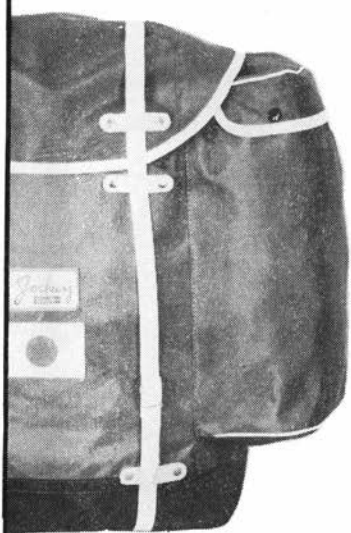
エバニュー

登山・ハイキング・スキー・一般体育・陸上用品の綜合メーカー

ザックのトップメーカー

Jockey

ジョッキー



#626

#627

東京　ジョッキー スポーツ KK　蔵前

登る楽しさに快適さをプラス
沢歩きから岩登りまで…
登山靴ならヒマラヤン!

登山靴ならオニツカのヒマラヤン印にお決めください。かずかずの海外遠征に参加して世界の屋根を征服した実績がきらめいています 沢歩きから岩登りまで あらゆる登山に最適。ヒマラヤン印なら もちろんネンザを防止して 足の疲れを防ぎ登山を楽しくします。

Onitsuka Tiger

ヒマラヤンSP ¥2,600 ヒマラヤンピーク ¥2,200 ヒマラヤンライト ¥1,800

ヒマラヤンA ¥2,400 登山靴

オニツカ株式会社 神戸市須磨区寺田町3－1 支店／神戸・大阪・東京

頼れる手造りの足ごしらえ ミナミ登山靴

ALL SPORTING GOODS

MINAMI

ミナミスポーツ

● 本　店＝
東京神田小川町大通り角　TEL(294)3731～5

● 赤坂店＝
東京千代田区赤坂東急ビルプラーザ　TEL(581)9054～5

● 横浜店＝
横浜市中区元町通り　TEL045(641)5271

● 世界の山々をきわめた靴造り60年の経験と技術を誇るミナミオリジナル登山靴

コメット…… 5,800円

ヒット（ビブラム底 ロカン）…… 7,000円

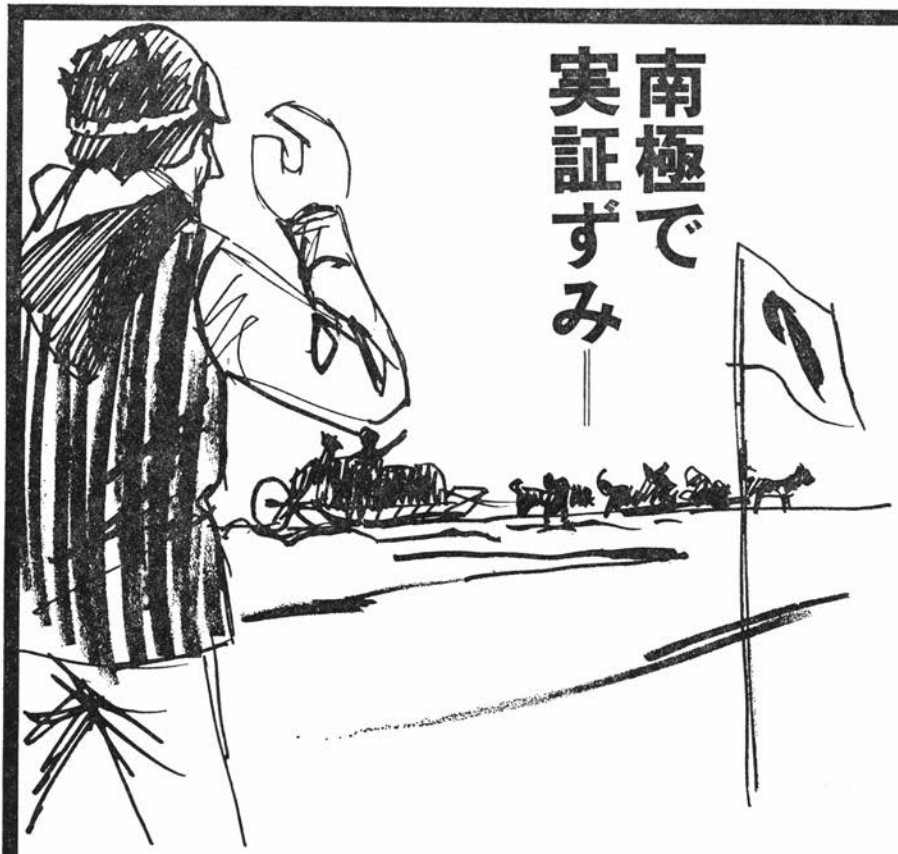
スーパー（最高級クローム皮）… 8,800円

ジェット（裏皮）……10,000円

チロリアンシューズ‥4,000円より

ベテランの方には特別注文も受たまわります。

● その他登山用品・用具等豊富に取揃ました。



南極で実証ずみ——

ご存じでしょうか。日本南極観測隊の装備をお引き受けしたのは、わたしたちです。防寒服も、防寒靴も、わたしたちがデザインし、制作指導しました。テストにテストを重ね、厳密な低温試験をくりかえし、その努力がみのって、隊員の方々から折紙をつけていただきました。米、英、ベルギー、南ア、オーストラリアにも防寒装備を納入し、優秀な性能は世界的に認められています。冬の装備なら、ぜひ当研究所にお問い合せください。

日本極地装備研究所

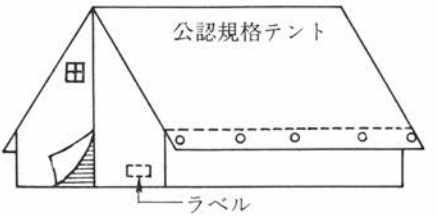
東京都千代田区霞ケ関3-4-2（商工会館内）
TEL　東京　581—1078

ハガスキー
F72シリーズ
エポキシグラススキー

1 ポリウレタン塗装
2 F72強化プラスチック
3 FRPシート（グラス板）
4 補助板（イタヤ材）
5 空胴板
6 補助板（イタヤ材）
7 FRPシート（グラス板）
8 F72強化プラスチック
9 ポリソール

登山用キャンプテント

キャンプ用テントは安心して御客様におすすめ出来る日本山岳協会公認サイズ・ラベルの付いた品を御指定下さい。



登山用テント部会会員の製作したテントは総て入口下部にラベルが縫付けてあります

日本帆布製品工業会連合会
登山用テント部
東京都中央区銀座4の6の1　三和銀行ビル
電話（561）0231・1820

山友社 たかはし

登山・スキー靴

四谷本店
新宿区三栄町3
TEL(351)1912,7432

八重洲口
中央区八重洲2の5
TEL(271)1560,8575

新宿ステーションビル4階
サービスショップ
TEL (352) 6564

登山とスキーの
日本最古の専門店

好日山荘

東京店
〒104 東京都中央区銀座西2の5
電話 (561) 3600・0966
スキー用品部 電話 (561)0966
振替 東京 113657

大阪店
〒530 大阪市北区曽根崎上1-47
日新ビル1階
電話 (364) 0933(代表)
振替 大阪 68763

神戸店
本店 〒650 神戸市生田区北長狭通り3-8-19
電話 (39)4126・(33)9250
支店 〒650 神戸市生田区三宮町1−32−1
電話 (33)5251

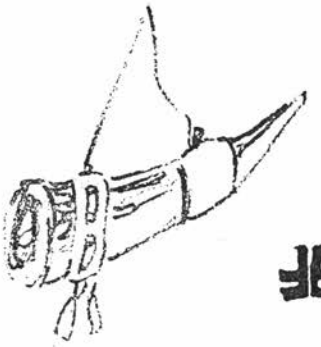
福岡店
〒812 福岡市須崎町1−4
電話 (28) 3440

山とスキーの専門店

キスリング
門田ピッケル
〃 アイゼン
夏冬用テント

片桐

東京都文京区湯島3−38−9
片桐盛之助
電話 東京 (831) { 1794番 / 6680番



北海道の山の店

秀岳荘

札幌市北13条西4丁目
TEL (71) 2346・8739

40年の前進史

マナスル型高所用天幕考案

1952年日本山岳会マナスル偵察隊
全装備納入以来高所用天幕専門
製作・海外遠征隊には各方面より
御使用頂き御高評頂いて居ります

吉田テント　吉田喜義商店

東京都杉並区桃井1丁目3番3号
電話 東京 (399) 2548　(398) 8469 (夜間)

山を愛する君に贈る
3大好読物！

きたぐにの動物たち

本多勝一著

写真・永田洋平ほか

■北海道の野生動物と人間との交流を謳う！
ベトナム戦記などのルポで知られる朝日新聞の俊英記者が、定評ある才筆と取材で北方動物57種の生態と、人間とのかかわりを興味深く描いた異色の北海道風土記。
A5変型／690円

山を考える

本多勝一著

精緻な論理と深い思考で山と登山者を論じた好評のエッセイ
B6判／450円

上高地の大将

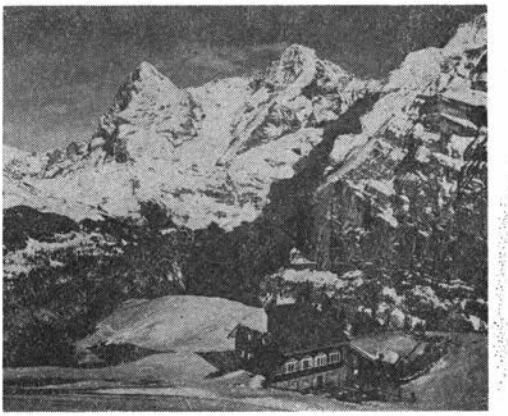
木村 殖著

―アルプス暮し四十年の記録―
上高地の主として山に生きつづけてきた著者が語る山の夜話
B6判／560円

東京銀座1 実業之日本社 振替東京326

山と溪谷社
創立40周年記念出版

世界山岳百科事典



B5判・本文八〇〇ページ
図版写真豊富・超豪華事典
9月上旬発売予定
予価 三、二〇〇円
※予約募集中・詳細は本社営業部宛御照会ください。

※海外・国内の山岳に関するすべてを網羅した世界で最初の豪華な百科事典！
※各専門分野の権威により執筆された正確な内容と適切な記述。
※豊富な写真・図版と、多色刷地図を多く収録した完璧な編集。
※独立した部門は巻頭に一括して説明され、読み物としても興味深いように構成。
※登山史年表をはじめ、各項の資料は巻末に付録として添付。
※家庭・会社・図書館に一冊備えれば山岳に関することなら、これだけですべてOK。

山溪カラーデラックス第2弾！

美しき日本

4月中旬刊　予価 2,800円

世界に誇る日本の自然美を中心に、建造物、行事、民芸品など日本の美しさがすべて網羅された画期的な写真集。森と湖の国が、日本アルプスが、美しい全国の海岸が、古都のゆかしいたたずまいが、あなたを魅了いたします。

大好評の山溪カラーデラックス

日本の山

好評発売中　定価 2,800円

北海道から九州まで四季おりおりに美しい日本の山々約200座をはじめ、高山植物、溪流、高原、動物、山小屋、山の雲など400点のカラーでつづる豪華絵巻。〝日本の山のなりたち〟〝登山史〟写真データなど本文記事も豊富掲載

図書目録「窓」最新号呈／乞誌名記　山と溪谷社　〒102 東京都千代田区平河町1の2

あかね書房の好評シリーズ！

大島亮吉全集

日本登山史上に不滅の光芒を放つ大島亮吉の全著作を網羅した全岳人待望の決定版！

●全5巻　編集＝安川茂雄・本郷常幸　協力＝登高会

1紀行　2随想・詩・訳詩他　3先蹤者
4研究・論叢他（5月刊）　5大島亮吉研究（6月刊）

＊四六版箱入上製・口絵つき＝各価八五〇円（3巻のみ一二〇〇円）

ヒマラヤ名著全集

大ヒマラヤの名著古典を網羅した豪華決定版！

全12巻＝刊行中・既刊10巻〈4月現在〉
菊判箱入価一〇〇〇～一二〇〇円

アルピニズム講座

最新登山技術を科学的に解明した待望編！

全6巻別巻1全巻完成！
四六判各四八〇円（揃三三六〇円）

世界山岳名著全集

世界アルピニストの意志と情熱の記録！

全12巻別巻1全巻完成！
フールス判各七八〇円（揃一〇、一四〇円）

日本山岳名著全集

全岳人におくる古典名著の決定版！

全12巻完成！
フールス判各六八〇円（揃八一六〇円）

あかね書房

山のPR誌「アルピニスト」刊行中（〒25・一年百円）
101東京都千代田区西神田3-2-1 TEL(263)0641〈代〉

登山・ハイキングシリーズ

定評あるコースタイム入精密地図と案内書

①奥武蔵・武甲山・三峰・坂倉登喜子
②奥多摩・大菩薩嶺・梶玲樹・他
③奥秩父・金峰～甲武信～雲取・乾徳・横山厚夫・他
④陣馬高原・高尾山・秋川渓谷・馬場圭二・他
⑤丹沢山塊・羽賀正太郎他
⑥富士と五湖・三ツ峠・渡辺正臣
⑦箱根・湯河原・熱海・渡辺正臣
⑧奥日光・奥鬼怒・川崎隆章
⑨尾瀬と銀山湖・会津駒・白籏史朗
⑩軽井沢・神津牧場・妙義・掛川昭正
⑪伊豆半島・大島・渡辺正臣
⑫三浦半島・江ノ島・鎌倉・本保雄
⑬美ケ原・霧ケ峰・高ボッチ・坂倉登喜子
⑭谷川岳と上越温泉郷・川崎隆章
⑮八ケ岳・北八ツ・蓼科山・山口見義久男
⑯那須・塩原・鬼怒川・人見達治
⑰磐梯・吾妻・安達太良・深沢達也
⑱志賀高原・草津白根・下達也
⑲上高地・乗鞍・早乙女緩次他
⑳黒部・白馬・鹿島槍・川口邦雄
㉑房総半島・本保雄
㉒浅間高原・鹿沢・菅平・掛川昭一
㉓蔵王連峰・衣袋賢二
㉔八幡平・岩手山・秋田駒・村井正衛
㉕霧ケ峰・白樺湖・蓼科・坂倉登喜子
㉖雲ノ平・黒部源流・槍穂高・伊藤正一
㉗妙高・戸隠・野尻湖・黒姫・グループ・ド・モレーヌ
㉘南アルプス・夜叉神峠・入笠山・白籏史朗
㉙中央アルプス・木曽駒・木曽御岳・塩沢一郎
㉚南アルプス南部・井川湖・白籏史朗
㉛北アルプスの全貌・山下喜一郎他
㉜加賀白山・白川郷・医王山・出村健治他
㉝飯豊・朝日連峰・衣袋賢二
㉞大雪山・層雲峡・然別湖・中条良作他
㉟槍・穂高・アルプス銀座・小林俊樹他
㊱立山・剣・黒部渓谷・大塚大

㊶金剛・岩湯山・葛城山系・宮川良彦他
㊷六甲・摩耶・中村勲
㊸比良・京都北山・角倉太郎
㊹大峰の山と吉野・御勢久右ヱ門
㊺大台ケ原・大杉谷・高見山・栄田信雄他
㊻奥高野・龍神温泉・湯の峰温泉・仲西政一郎
㊼赤目・青山・室生付近・水町進他
㊽鈴鹿連峰・御在所・伊吹・尾崎源一他
㊾大山・蒜山・佐野勇一
㊿帝釈峡・三瓶山・備北山群・加藤武三
(51)秋吉台・三段峡・芸北山群・加藤武三
(52)九重・飯田・久住・万年山・加藤数功・梅木薫平・加藤英彦他
(53)英彦山登山と耶馬渓探勝・仰木政次郎
(54)阿蘇登山と周遊・熊本県岳連
(55)平尾台・福智山塊・月原俊二

定価 150円～200円

ニッチ
地図専門の
日地出版

本社〒101 東京都千代田区西神田2－2－15
振替 東京195917 TEL(261)5126～8
支店〒542 大阪市南区安堂寺橋通3－60
振替 大阪 28570 TEL(252)7421

初めての山

本多勝一著

●四六判美装 ￥800

著者の青春へ決定的な影響を与えた初めての山！ 殆んど無名に近い故郷の山での体験を格調高く描いた力作！

●山岳名著シリーズ誕生！

雪白き山
深田久弥
限りなく山を愛する作家の想いをこの一冊に凝集 ￥500

青春の山想
岡田喜秋
若き日の山行と青春遍歴を語る美しい山への讃歌 ￥500

単独登攀
瓜生卓造
ヘルマン・フールの情熱的な生涯を描いた傑作！ ￥500

霧の山
安川茂雄
情熱のすべてを岩壁に賭ける青春を描いた名作！ ￥500

●続刊多数

東京千代田区三崎町二ノ一八
二見書房

わが国登山の二千余年の歩みをここに収録

日本登山史

山崎安治著

名峰富士山の出現から
中世の信仰登山　近世の山林検分登山
日本山岳会の設立を経て
マナスル登頂にいたる登山二千年の歩みを
豊富な資料をもとに数々のエピソードを織りこみ
ながら　興味深く綴る
わが国唯一の本格的登山史

A5判　写真十二頁　三二四頁　一三〇〇円——

世界探検史

長沢和俊著

本書は古代　中世の探検家　地理的探検時代
アメリカ　太平洋　アジア　アフリカ　極地の探検など
世界の探検に関する正確な資料に基づき
今世紀初頭までの多くの探検家の足跡を追跡した
ものである　あくまで探検そのものに基準をおき
国家的に賞讃された探検家だけでなく
知られざる探検家をも紹介したユニークな探検史

合判　写真四頁　三八四頁　一三〇〇円——

白水社
101東京都千代田区神田小川町三ノ二四
振替口座東京三三二二八番

古本の買入と販売

山岳書
国文学・漢文
全集・叢書
錦絵・和本
名士の書簡
色紙・短冊

地方も出張いたします

〒101
東京都千代田区神田神保町一ノ三
㈲悠久堂書店
電話（二九一）〇七七三番
〇九二〇番

山岳人のためのハンドブック　〈好評発売中〉

World Atlas of Mountaineering

Edited by Wilfrid Noyce & Ian McMorrin

1969. 22×29 cm., 276 p. 260 black and white illustrations.
16 p. color illustrations. 32 p. two-color maps, 18 line maps.
(*Thomas Nelson & Sons, London*)　定価 ¥4,900

本書は世界中の山を広範囲に収録するガイド・ブックで，今まで，あまり紹介されていなかった，日本，中国，朝鮮，台湾さらに東アフリカの山岳地帯をも収録しています。執筆には豊かな経験を持つ国際的に有名な登山家が多数参加し，豊富な写真，詳細な山岳地図を使って，わかりやすく解説しています。

古書買入　山岳関係和・洋書のご整理は，ぜひ弊社にご用命願います。

Ⓜ丸善
〔103〕東京・日本橋
電話 272-7211／振替東京5番

相模書房は
30数年にわたり
建築関係図書を
刊行してまいり
ました

工匠談 ある町場大工の手記
山下元靖著　B6判　定価 480円

建築行政三十年
大河原春雄著　B6判　定価 750円

住居学
吉阪隆正著　A5判　定価 950円

建築学入門
原沢東吾著　B6判　定価 460円

家相真法秘要
田中昌穂著　B6判　定価 780円

作庭記
田村　剛著　A5判　定価1,800円

北方自然民族民話集成
山本祐弘著　A5判　定価1,800円

相模書房
東京都中央区入船町2丁目1番地
電話 (03)551-0017・振替東京130480

第21巻　山岳記録の古典的三名著を収録する　650円

アイガー北壁の初登攀　ハラー

氷と岩の魔の岩壁の登攀を通して人間の生き方を描く、珠玉の名篇！

エヴェレスト　ノイス

世界最高峰への登頂に賭ける不屈の人間劇を描いた感動の古典的名著

ジャヌーへのたたかい　フランコ, テレー

マカルーの名隊長フランコ．超人テレーの描く怪峰ジャヌーとの闘い

解説・深田久弥

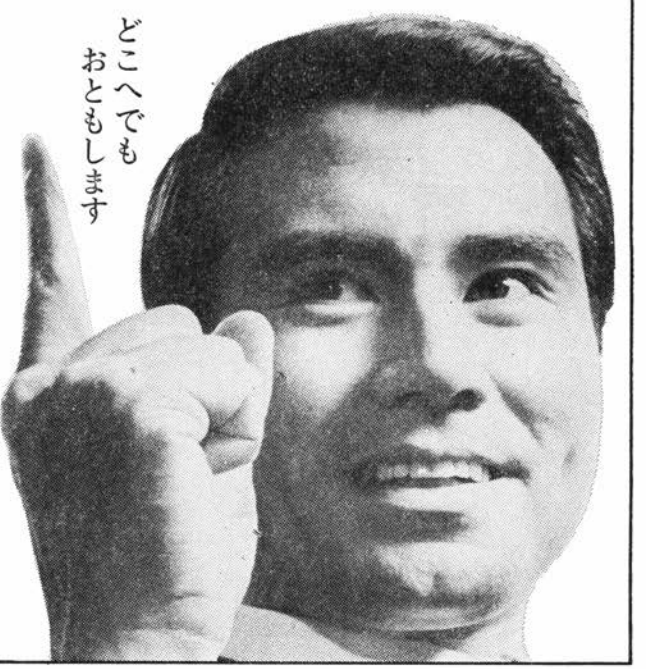
筑摩書房 東京神田小川町2

全24巻

監修　井上靖・今西錦司・桑原武夫・中野好夫・吉川幸次郎

現代世界ノンフィクション全集

どこへでも
おともします



飲みすぎ・二日酔い・肝障害
食欲不振・全身がだるい
肩がこる・腰がいたむ
その他——
妊娠悪阻(つわり)・脚気・じんま疹・小児ストロフルス・薬物中毒・食中毒・自家中毒・耳鳴り難聴・夜尿症などに……

肝臓障害 神経痛 疲労回復に

新クロンサン錠

中外

痛みだしたら
ハイグレラン錠

早めにどうぞ。のめば間もなく痛みはおさまります。主力成分セコピラピタールに活性ビタミンB_1などを配合。ハイグレランは鎮痛効力が高いのです。　なおピリン系の薬剤に過敏な体質の方は、薬局・薬店でご相談のうえ非ピリン系のチプロン錠をどうぞ

頭痛・歯痛・生理痛・神経痛

製造　グレラン製薬　　販売　武田薬品　武田販売

山の情報をすばやくキャッチ！

ナショナルトランシーバが、突然の気候変化やその他情報交換に威力を発揮します。

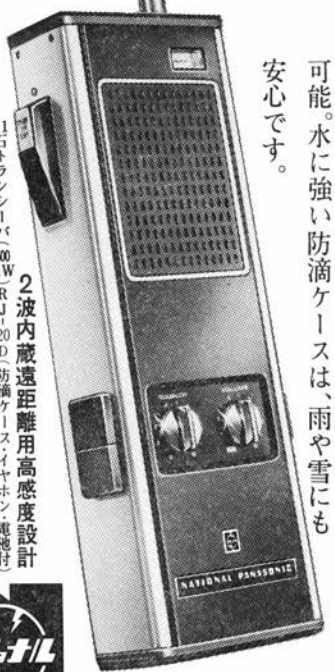
●混信がさけられる2チャンネル……

2波内蔵型のため、混信の少ないチャンネルを選べ、明りょうな通話ができます。

●雑音を消すスケルチ装置……

待ち時間のイライラの原因——雑音を解消して、静かに受信待ちができます。

しかも……500mWの強力電波と送・受信回路へのシリコントランジスタ採用で、確実な長距離通話が可能。水に強い防滴ケースは、雨や雪にも安心です。



2波内蔵遠距離用高感度設計

11石トランシーバ（500mW）RJ-20D（防滴ケース・イヤホン・電池付）

現金正価28,000円　月賦定価（12回）**29,700円**

（2台1セット）**現金正価56,000円**

ナショナル
松下電器

ナショナル　スーパー　トランシーバ

●お気軽な海外旅行を

どんなに旅慣れたお方でも海外旅行はなにかとめんどうなもの。まして視察研究留学の旅はなおさらです。煩雑な手続や日程作成、手配などはすべて専門家におまかせください。

海外一流業者と提携した日通観光のサービス網は、団体はもちろん、あらゆる旅行のお世話をいたします。

お問合せはお近くの日通支店観光係または左記の日通東京航空支店へどうぞ。

東京都港区新橋一―五―二

(電) 五七一・八四八一

日本通運

奥様の腕が光ります！

主原料にエスビーの純カレー
あの有名な赤カン。
世界各地から集めた三十数種もの香辛料が、ぜいたくに使われています。
これをベースにしました。

まろやかな味を加えるクロレラ入り
健康の緑藻類・クロレラを入れました。カレーの辛味と酸味を整えて、だんぜんおいしくしました。

油くささのない純良ラードを使用
即席カレーに共通の、あの油くさいにおいがなくなりました。
高価な純良ラードを使ったので、溶けるのも早く理想的です。

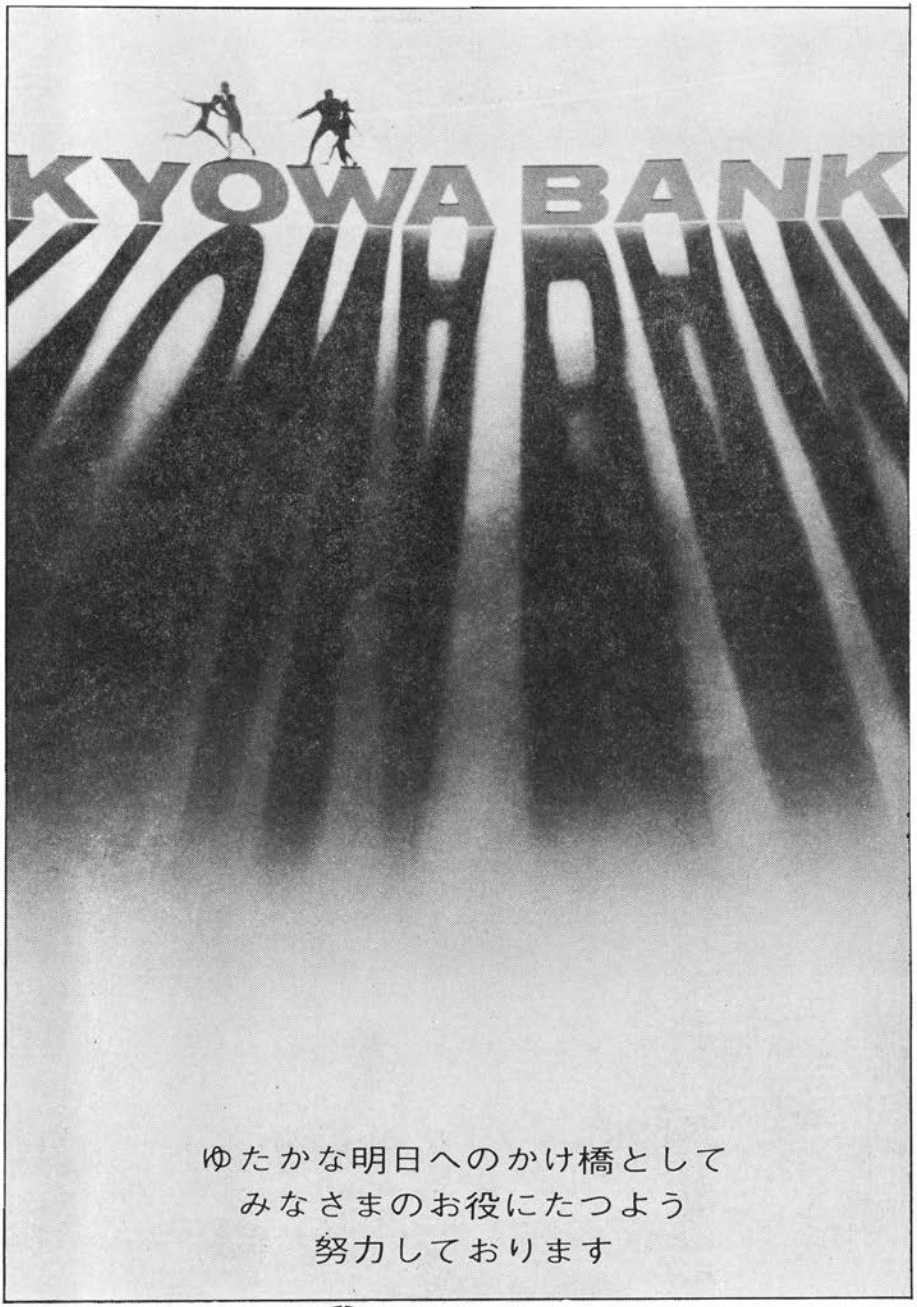
一流レストランとおなじ
いままでドロッとしたカレーをお作りになっていた奥さまも、おためしください。ゴールデンカレーならではの味を、お楽しみいただけます。

ジャガイモを入れないのがコツ
香りを逃がさず、シャープな味を作るためです。すばらしい味と香りで、奥さまの腕が光ります。

S&B GOLDEN ゴールデンカレー

●クロレラ入り……7皿分 ¥100円

エスビー食品株式会社



協和銀行

本店／東京・丸の内／全国220余店

日本団体生命はわが国における
グループ保険の開祖です。
個人保険も
登山保険も行なっております。

本店・東京都千代田区丸の内２－１
電 話（281）3211（代表）
小伝馬町別館（役員室，総務部他）
電 話（662）3311（代表）
・東京都中央区日本橋小伝馬町3－2
支店（大阪・名古屋・福岡・札幌）
支社（東京他 25）

昭和生れのホープ

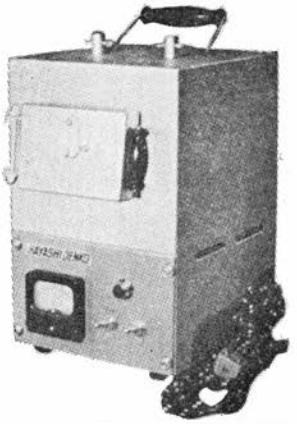
日本団体生命

七宝焼

電気炉・絵具・材料

各種豊富

林電工が電気炉と材料を売り出してから
七宝焼が家庭で手軽に出来る手工芸とし
て日本中に広まったのです。
一度お気軽に御来店下さい。



カタログ送呈

七宝焼手びき（1部 100円）

東京都文京区小石川篭町238　TEL(294)5486

林電工株式会社　工芸部

代表取締役　林　和夫

Electric

Cable & Wire

藤倉電線・西日本電線代理店

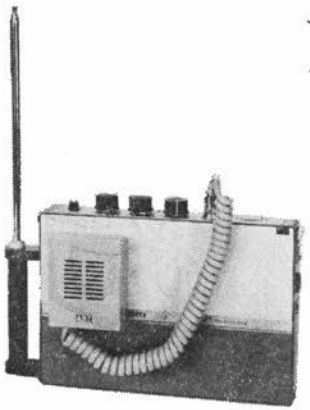
播州電機株式会社

大阪・東京・名古屋・札幌・姫路・広島・福岡

➡ ヒマラヤ ➡ 南　極 ➡ エベレスト ➡

エニートランシーバーの通信連絡なら

〈信頼されています〉



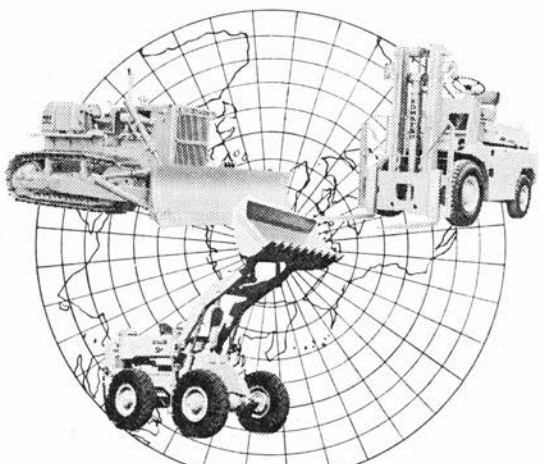
〔FB－600　0.5W
強力トランシーバー〕

通信機専門メーカー

株式会社 エニー

本社工場　東京都世田谷区烏山町1801
東京営業所　東京都世田谷区世田谷2－25－15
関西営業所　大阪府豊中市柴原町2－8
柴原ハイツ205号

世界に躍進する小松



"日本のトップ世界のコマツ"——
小松は大正10年会社創立以来，製鋼より造機にいたる一貫生産方式のもとに鋭意，技術の開発につとめ，いまでは生産機種250余種，輸出は世界80数ヶ国に及んでいます．ブルドーザ等の建設機械，フォークリフト等の産業車輌，それにダンプトラック，雪上車，プレス機械などすべてが"世界のトップ・ブランド"．世界の各地で，あらゆる産業の現場で，社会の繁栄に貢献しています．

日本のトップ　世界のコマツ

小松製作所

東京都港区赤坂2-3-6 ☎(584)7111〒107
カタログは本社宣伝部宛ご請求ください．

●北海道支店☎札幌(66)8111　●東北支店☎仙台(56)7111　●北陸支店☎新　潟(66)9511　●東京支店☎東京(584)7111　●東海支店☎横浜(311)1531
●中部支店☎一宮(77)1131　●大阪支店☎豊中(64)2121　●中国支店☎五日市(21)3111　●四国支店☎高松(41)1181　●九州支店☎福岡(64)3111

ヤッホー

交通公社の

周遊券は

べんりでおとくです

ご出発の安心感　お帰りの満足感

日本交通公社

本格的山賊料理

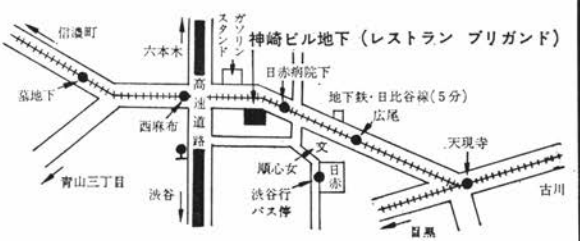
アルプスの香りと味をどうぞ

ブリガンドの意味は山賊―自然を愛する勇者です

山岳部員の皆様一度お越し下さい。
お待ちしております。

＊交　通

地下鉄　日比谷線広尾下車
バス　渋谷→日赤産院下車
〃　〃→西麻布下車
都電　西麻布下車
〃　日赤病院下下車



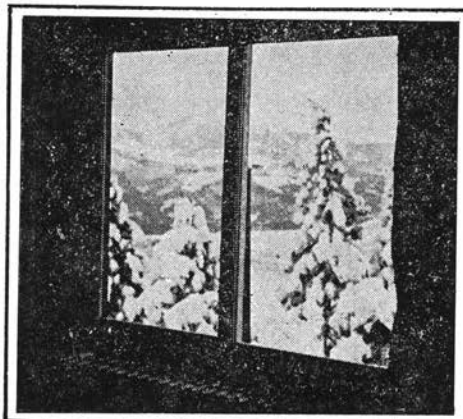
Brigand
レストラン ブリガンド

港区西麻布4・5・2　TEL(407)3009・3006

《サンワ》で
しっかり
貯めましょう

みなさまの お役に立つ

三和銀行



山小屋の窓も**アルミ**でお化粧
木造建築用**サッシ**の決定版
不二のホームサッシDFK
防犯用電子ロック附

● お問合せはお気軽にどうぞ

ガラスと**サッシ**
池田ガラス建材株式会社
代表取締役　池田光二(会員)
東京都練馬区氷川台4－35－9（176）
TEL. 03－934－3201(代)

のどのかわきが
ピタリととまる！

下痢・腹痛
食あたり
水あたり
全国の薬局・デパートにあり

佐藤ライトの
梅肉エキス

トロフィーならおまかせ下さい

■たえず外国のデザインを直輸入しそれをアレンジして製作

《営業品目》

バッジ・メダル・バックル・名札・キーホルダー・トロフィー・優勝旗・金属看板・ネームプレート・プラスチックマーク・カップ・七宝焼・マーク・ワッペン・ペナント・タイ止・其他記念品・ステッカー・ワッペンマーク・織物ネーム

株式会社 アジア

東京都千代田区飯田橋2丁目8番5号
〒102 ☎ 263－4741(代) シナヨイ
☎ 261－4095(夜)

オートメーションの完全体制を推進する

横河の電気計測器と
本山のコントロールバルブの御用は

SUN

横河電機製作所
本山製作所(仙台)
代理店

有信計器株式会社へ

取締役社長 神谷 恭 (JAC－744)

横浜市西区高島2丁目1番の50 TEL(045)441-2681㈹ 〒220

G&G呼び名の高さが語る品質

ニッカウヰスキー

ゴールド&ゴールド
特級(760㎖)1900円

新野地温泉

相模屋旅館

スキーと登山の基地、岳人の宿

福島市土湯温泉町野地1
相模八郎

石油 TONEN 精製

東亞燃料工業

本社／東京都千代田区竹平町1
TEL 213－2211(大代表)

スキーに良し、登山に良し、皆様のおいでをお待ちしております。

吾妻連峰の東麓 標高750メートルにある高湯温泉は福島盆地の広がりを前に硫黄の匂いがたゞよう高原のいで湯でございます。

収容人員　170名様　客室45室

宿泊料金	1200～3000円	朝　食	250～500円
半　泊	800～1200円	中　食	250～500円

吾妻スカイラインの入口
高湯温泉

HOTEL
ADACHIYA

安達屋

TEL庭坂(024594)170～2
東京案内所（561）1245～6

吾妻山荘

年中無休

連絡先　安達屋

スキー、ゴルフに信夫高湯温泉へ

吾妻スカイラインの表玄関

福島よりバス50分、ハイヤー25分

日観連
日本交通公社 協定

吾妻高原ホテル

登山に、湯治に、保養に

吾妻連峰920mの高原

福島 ——バス— 水保 ——サービスカー— ぬる湯

福島県観光連盟・協定

ぬる湯温泉

表吾妻唯一の山小屋

電燈、風呂、寝具、完備

夏期スカイライン浄土平駅より7分

冬期ぬる湯♨より100分、信夫高湯♨より200分

吾妻小屋

問合わせ　ぬる湯温泉

ガストンの山岳書店

店　主：L.C.ボーム

（英国山岳会員）

登山，極地に関する各国の新刊，旧刊，絶版ものの取次ぎ販売。各国山岳会年報，月報，登山ガイド，特殊地図，版画なども取扱っております。

型録，その他の御照会，お申込みをお待ちしております。

宛名 "Gaston's Alpine Books",
134 Kenton Road, Harrow, Middlesex,
HA3-8AL, England.

（尚，JAC, AC, AAC, ACCの会員のMr. Ichiro Yoshizawaは，私の親しい友人です。）

森林・草原・氷河
加藤泰安著——定価一五〇〇円

すこし昔の話—千島・樺太・札幌・信濃—
初見一雄著——定価一二〇〇円

遠い山・近い山
望月達夫著——定価九六〇円

山の古典と共に
大島堅造著——定価一五〇〇円

雪山・藪山
川崎精雄著——定価一二〇〇円

雪原の足あと
坂本直行著——定価二八〇〇円

アンナプルナ日記
京都大学学士山岳会編——定価一二〇〇円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋　進編——定価九〇〇円

キンヤンキッシュ一九六五
東京大学カラコルム遠征隊編定価三〇〇〇円

南極新聞（一九五六～七年）
南極研究会編——定価六〇〇円

茗渓堂＝山の本

株式会社 茗渓堂　東京都千代田区神田駿河台2の1Tel(03)291-9442振替口座・東京24723
●ご希望の方に既刊解説総目録送呈します。

屋久島—美しい豊かな自然—
赤星　昌編——定価三八〇円

山で唄う歌1集・2集
戸野昭・朝倉宏編—集二四〇円2集二八〇円

山　岳
日本山岳会編——46～47年合併版四〇〇円／60年版一五〇〇円／61年版一八〇〇円／62年版二〇〇〇円／63年版二二〇〇円——●64年版二〇〇〇円

山日記（一九七〇年版）
日本山岳会編——定価五三〇円

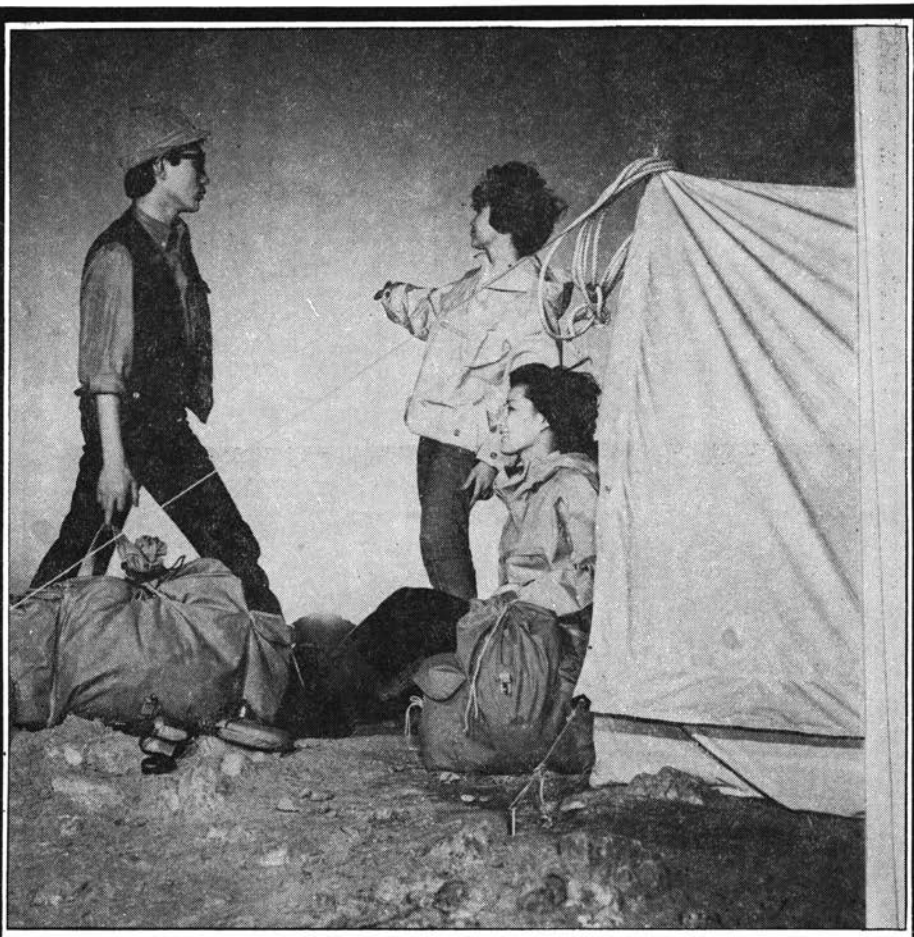
山に忘れたパイプ（新刊）
藤島敏男著——定価二五〇〇円

日本の山旅（近刊）
足立源一郎スケッチ帖——予価三六〇〇円

国立公園カレンダー一九七〇年版
国立公園協会編——定価九六〇円

山（日本山岳会会報）——一部一〇〇円

山日記の栞——無料



未知に挑戦するとき

クレモナの良さが集結する。強い扱いやすい！風雨、紫外線にビクともせず、黙々とその威力を発揮します。あらゆる試練に耐え抜く山男の根性をそのまま受けついだクレモナ。ヒマラヤから南極まで広く各地で信頼をあつめています

ビクラレビニロン
クレモナ®

登山用品

テント・シート・ルックザック・アノラックなど

倉敷レイヨン株式会社

大阪市北区梅田8・東京都中央区日本橋通3の1

□権威ある執筆陣！豊富な内容！

無機化学ハンドブック
無機化学ハンドブック編委員会編　定価 5,500円

有機化学ハンドブック
有機合成化学協会編　定価 9,500円

機器分析ハンドブック
機器分析ハンドブック編集委員会編　定価 5,000円

窯業工学ハンドブック
窯業協会編　定価 8,500円

石膏石灰便覧
石膏石灰研究会編　定価 1,800円

粘土ハンドブック
日本粘土学会編　定価 5,500円

都市ガス便覧
田中義高編　定価 750円

気象学ハンドブック
気象学ハンドブック編集委員会編　改訂中

生物化学ハンドブック
生物化学ハンドブック編集委員会　定価 3,000円

微生物学ハンドブック
微生物学ハンドブック編集委員会編　改訂中

栄養学ハンドブック
栄養学ハンドブック編集委員会編　改訂中

公衆衛生活動ハンドブック
公衆衛生活動ハンドブック編集委員会編　定価 2,500円

騒音対策ハンドブック
日本音響材料協会編　定価 4,000円

土木工学ハンドブック（B5判）
土木学会編　上巻・下巻 各 定価 7,000円

土木工学ハンドブック（A5判）
土木学会編　定価 布－8,000円 皮－10,000円

土質工学ハンドブック
土質工学会編　定価 7,000円

防災ハンドブック
防災ハンドブック編集委員会編　定価 5,500円

建築音響工学ハンドブック
日本音響材料協会編　定価 4,000円

化学用語辞典
同編集委員会編　定価 900円

化学実験ハンドブック
同編集委員会編　定価 800円

建築用語辞典
同編集委員会編　定価 2,500円

機械工学用語辞典
同編集委員会編　定価 1,200円

電気工学用語辞典
同編集委員会編　定価 1,800円

■ 図書目録請求下さい。■

技報堂　東京都港区赤坂1-3-6　〒107
販売課　赤坂1-9-4

「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。
一、原稿は返却しない。
一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
一、紀行にはなるべく概念図を添付すること。
一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。
一、地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。
一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。
一、校正は編集者に一任されたい。

送り先　東京都千代田神田錦町三ノ二三（向井ビル内）
日本山岳会「山岳」編集部

編集委員　望月達夫　松田雄一　中島寛

一九七〇年三月三十一日発行
山岳　第六十四年
（通巻一二三号）
定価　二〇〇〇円

東京都千代田区神田錦町三ノ二三（向井ビル内）
発行所　社団法人　日本山岳会
電話東京二九三局七四四一
振替口座　東京　四八二九番

日本山岳会内
編集兼発行者　望月達夫
印刷　株式会社　技報堂
写真版　光村原色版印刷所
製本　株式会社　三水舎

東京都千代田区神田駿河台二ノ一
発売所　株式会社　茗渓堂
電話東京二九一局二八八一番
振替東京二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁ずる。

超高層ビルから住宅まで

カーテンウォール
アルミサッシ
ＮＫウォール
クールサッシ

レディメードサッシ
ＰＡ－60Ａ（アルミ）
ＰＳ－80Ａ（スチール）
ハッピーサッシ（住宅用）
ＮＫオートドア
ハッピーオート

日本建鉄株式会社

本　店　東京都千代田区大手町２－６－２
ＴＥＬ．270－６５１１
取締役会長　早川種三

登頂に
観測に

このマークが
お伴いたしました

(1)	1936年	立教大学	ナンタコート登山隊
(2)	1952年	日本山岳会	マナスル踏査隊
(3)	1953年	〃	〃登山隊
(4)	1954年	〃	第二次マナスル登山隊
(5)	1954年	京都大学	アンナプルナ登山隊
(6)	1955年	〃	カラコムル学術調査隊
(7)	1956年	日本山岳会	第三次マナスル登山隊
(8)	1957年	文部省学術会議	南極予備・本観測隊
(9)	1958年	神戸大学	パタゴニア登山隊
(10)	1958年	深田隊長	ジュガールヒマール探査隊
(11)	1959年	日本山岳会	ヒマールチュリー登山隊
(12)	1959年	日本教育テレビ・毎日新聞	雪男学術探検隊
(13)	1960年	明治大学	アラスカ学術調査隊
(14)	1960年	同志社大学	アピ遠征隊
(15)	1960年	早稲田大学	アジア・ヨーロッパ大陸横断
(16)	1961年	大阪大学	ピーク29遠征隊
(17)	1961年	全日本山岳連盟	ビックホワイトピーク遠征隊
(18)	1961年	早稲田大学	エクアドル・アンデス遠征隊
(19)	1961年	上智大学	南米事情調査隊
(20)	1962年	全日本山岳連盟	ビックホワイトピーク第2次遠征隊
(21)	1962年	京都大学	サルトロカンリ遠征隊
(22)	1962年	ビルマ国山岳会	シッキム・ヒマラヤ登山隊
(23)	1963年	電電九州	ヒムルン・ヒマール登山隊
(24)	1963年	日本鱒particle学会	ヒマラヤ蝶蛾調査隊
(25)	1963年	同志社大学	サイバル遠征隊
(26)	1963年	都立大学・大阪府立大学	合同東部ネパール学術調査隊
(27)	1964年	北海道大学	アンデス・アマゾン探検隊
(28)	1964年	北海道大学	アラスカ学術探検隊
(29)	1964年	早稲田大学	エクアドル・アンデス遠征隊
(30)	1965年	早稲田大学	ローシェ・シャール遠征隊
(31)	1965年	明治大学	ゴジュンバ・カン遠征隊
(32)	1965年	防衛大学	ロー・ガン登山隊
(33)	1965年	富山泊山岳会	中部ネパール遠征隊
(34)	1965年	亜細亜大学	ヨーロッパ走破隊
(35)	1966年	エーデルワイスクラブ	ペルー・アンデス遠征隊
(36)	1966年	日本グルジア友好登山協会	カフカズ遠征隊
(37)	1966年	RCCII	ヒンズー・クシュ登山隊
(38)	1966年	文部省学術会議	南極観測隊
(39)	1967年	中央大学	ヒンズークシュ登山隊
(40)	1967年	千葉岳連	ヒンズークシュヒマラヤ登山隊
(41)	1967年	静岡大学	コロンビアアンデス学術調査隊
(42)	1967年	信州大学	ネパール王国ワンタリンク隊
(43)	1967年	武蔵野美術大学	西部ネパール民族文化調査隊
(44)	1968年	東京歯科大学	ペルーアンデス遠征隊
(45)	1968年	六甲学院山岳会	パタゴニア登山隊
(46)	1968年	徒歩渓流会	バンジャブヒマール登山隊
(47)	1968年	防衛大学	中部アンデス登山隊
(48)	1968年	東海大学	中央アジア探隊隊
(49)	1969年	日本山岳会東海支部	ヒマラヤ学術遠征隊
(50)	1969年	富山泊山岳会	グルジャヒマール遠征隊
(51)	1969年	岐阜大学	アフガニスタン学術調査隊
(52)	1969年	日本山岳会	エベレスト登山踏査隊
(53)	1969年	福岡峯連	ヒンズークシュ登山隊
(54)	1970年	日本山岳会	エベレスト登山隊
(55)	1970年	日本山岳会東海支部	マカルー登山隊
(56)	1970年	関東登高会	ダウラギリ登山隊

ビニロン・ナイロン・テント製造元

千代田区神田須田町2-23　株式会社 細野テント　Tel.(252)4426-7

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXIV 1969